

令和 7 年度
ファカルティ・ディベロップメント活動報告書

玉 川 大 学

大学 FD 委員会

大学院 FD 委員会

は じ め に

—FD の組織的推進をめざして—

玉川大学は、ファカルティ・ディベロップメント（FD）をミクロ、ミドル、マクロの三層の立場から推進しています。ミクロ・レベルの FD の目的は、教員個々の授業と教授法の開発にあります。通常、多くの大学で FD の名のもとに行われるのがこうした活動です。本学でも、大学 FD 委員会および大学院 FD 委員会が中心になって行う FD 活動はミクロ・レベルが中心です。一方、ミドル・レベルは教務主任等によるカリキュラム・プログラムの開発が目的です。教務委員会や大学院教務委員会における全学カリキュラムの見直しや各学部・研究科の教務担当者会における専門分野のカリキュラム改善のための作業がこれに該当します。さらに、マクロ・レベルは、管理者による大学組織の教育環境および教育制度の開発が目的です。こちらもミドル・レベルと同様に、そのための具体的な FD 研修会等が開催されるわけではありません。現行の大学部長会や大学院研究科長会の一環として定期的に行われる教育研究活動等点検調査委員会などの作業が FD 活動に相当します。

ミドル・レベルとマクロ・レベルの FD 活動は、その性格上、全学的な視点と学部・研究科的な視点が要求されますが、ミクロ・レベルの FD は、長いあいだ各教員の努力義務のように理解されてきました。したがって、ワークショップや講演会の参加についても教員の自主性に委ねられ、学部・研究科や全学が一体となって授業や教授法の開発に取り組んできたとは言い難い状況にありました。令和 7 年度は大学 FD 委員会、大学院 FD 委員会が組織的かつ体系的に関わり、教員の教育研究活動の向上、能力開発を恒常的に推進してきました。今回もそういった事例を報告いたします。

今後も引き続き、個々の教員がファカルティの一員として有機的に FD にかかわれる体制を堅持していきたいと考えています。

大学 FD 委員会・大学院 FD 委員会委員長
教 学 部 長 伊 従 記 章

「求める教員像」

玉川学園の建学の精神を体し、その使命を自覚し互いに人格を尊重し、常に能力の開発・向上を目指し一致協力して本学の発展に寄与できる教員であること

1. 玉川大学学則第 1 条に定めるとおり、玉川学園建学の理想にかんがみ、「全人教育」をもって教育精神とし、広い教養と深い専門の学術の理論及び応用を教授すること
2. 学校法人玉川学園コンプライアンス方針に従い、3 つのポリシー（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー）を理解し、教育研究活動を推進すること

目 次

I 大学 FD 活動状況と今後の計画

1. 大学 FD 委員会・大学院 FD 委員会	
(1) 委員会の目的	1
(2) 委員構成	1
(3) 今年度の活動計画	2
(4) 活動状況	3
(5) 活動の成果	5
(6) 今後に向けて	6
2. 学部の活動	8
3. 教師教育リサーチセンターの活動	59
4. ELF センターの活動	63
5. 授業アンケート	78

II 大学院 FD 活動報告

各研究科の活動	116
---------------	-----

III 教員研修

新任教員研修会	
(1) 研修プログラム内容	139
(2) 配付資料・参考資料	140
(3) 実施の成果	141

参考資料

1. 大学 FD 委員会の議事内容	144
2. 大学院 FD 委員会の議事内容	146
3. ユニバーシティ・スタンダード科目「授業アンケート」様式	147
4. 玉川大学 FD 委員会規程	149
5. 玉川大学大学院 FD 委員会規程	151

※本文中の記載内容について

・役職名称は、令和 7 年度当時の記載とした。

I 大学 FD 活動状況と今後の計画

1. 大学 FD 委員会・大学院 FD 委員会

(1) 委員会の目的

本委員会は、本学教員の教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的としている。また、FD 活動を行う目的を、以下のとおり明確にしている。

- ① 玉川大学の教育理念を実現するため。
- ② 21 世紀の玉川教育を支える教員を育成するため。
- ③ 大学大衆化時代に対応するため。
- ④ 競争優位性（受験生の大学選択等）を確保するため。

(2) 委員構成

<大学 FD 委員会>

委員等	所属・職名	氏名
委員長	教 学 部 長	伊 従 記 章
委 員	文 学 部	鈴 木 彩 子
委 員	農 学 部	肥 塚 信 也
委 員	工 学 部	山 田 義 照
委 員	経 営 学 部	矢 野 尚 幸
委 員	教 育 学 部	濱 田 英 毅
委 員	芸 術 学 部	長 裕 二
委 員	リベラルアーツ学部	渡 邊 正 彦
委 員	観 光 学 部	三 木 日 出 男
委 員	E L F セ ン タ ー	祐 乗 坊 由 利 ジョディー
アドバイザー	学術研究所高等教育開発センター	小 島 佐 恵 子
事務担当	教 学 部 事 務 部 長	光 森 多 佳 子
事務担当	教 学 部 教 務 課 長	横 松 健 二
事務担当	教学部授業運営課長	中 山 靖 浩

<大学院 FD 委員会>

委員等	所属・職名	氏名
委員長	教 学 部 長	伊 従 記 章
委 員	文学研究科人間学専攻／ 英語教育専攻	宇 井 美 代 子
委 員	農学研究科資源生物学専攻	南 佳 典
委 員	工学研究科システム科学専攻	加 藤 研 太 郎
委 員	工学研究科機械工学専攻	黒 田 潔

委 員	工学研究科電子情報工学専攻	大 竹 敢
委 員	マネジメント研究科マネジメント専攻	菊 池 史 光
委 員	教育学研究科教育学専攻	鈴木 美 枝 子
委 員	教育学研究科教職専攻	伊 藤 美 紀
委 員	脳科学研究科脳科学専攻 /心の科学専攻	高 岸 治 人
アドバイザー	学術研究所高等教育開発センター	小 島 佐 恵 子
事務担当	教 学 部 事 務 部 長	光 森 多 佳 子
事務担当	教 学 部 教 務 課 長	横 松 健 二
事務担当	教学部授業運営課長	中 山 靖 浩

(3) 今年度の活動計画

レ ベ ル	研 修 名	目 的	内 容	開 催 時 期
全 学	大学教育力研修 (SD・FD)	授業の内容及び方法の改善を図り教員個々の教育研究活動等のより一層の充実を目指す(FD)とともに、本学の運営に必要な知識・技能を身に付け、能力・資質を向上させる(SD)ことを目指す	■基調講演(SD 研修) ■分科会(FD 研修) ・授業手法に関するワークショップ ・現況の教育的課題に関するワークショップ ・全人教育の実践に関するワークショップ ・教職課程ワークショップ ・各学部事例報告 等	2 月 20 日
	授業手法に関する ワークショップ	学生の主体的な学びを促進する様々な授業手法の修得	・授業時間内の学修を充実させる授業計画 ・授業時間外の学修を充実させる授業計画 ・授業改善につながるリフレクションの方法 ・教学 IR と授業改善の接続 ・生成 AI の活用 等	年 1 回
	ルーブリック指標による成績評価に関するワークショップ	授業を通して修得した能力を評価する体制を構築するため、ルーブリック指標による成績評価手法を修得する	・ルーブリック指標による成績評価に関するワークショップ ・*専任の新任教員対象 (令和 6 年度・7 年度採用者及び未受講者)	年 1 回 (隔年) ※令和 7 年度開催 9 月
	授業参観(公開) ※学部対象	授業内容(手法)の共有と授業改善	・授業参観 ・授業参観にかわる研修会	随時

職位別	新任教員研修	玉川学園の建学の精神、玉川大学の教育理念・教育方針を理解し、専任教員としての業務に必要な情報を修得する	・玉川大学の教育理念 ・大学教員の勤務 ・ICT 教育の活用 ・教学システム ・教学事項 ・学生支援 等	3 月中旬
	非常勤教員対象研修 (オンデマンド)	・本学の授業を担当するにあたり、これからの高等教育改革を理解し、本学の教育が目指すものを確認する ・授業評価の高い授業内容(手法)の共有と授業改善	・玉川大学の教育理念 ・授業内容(手法)の紹介 ＊オンデマンド	9 月～1 月
学部・研究科	学部 FD 研修 研究科 FD 研修	教員個々の授業と教授法の開発	講演会、研修会、ワークショップ、調査、研究、学外セミナー等への教員派遣 等	随時
その他	FDer 養成研修 ※学部対象	実質的 FD 活動の推進のため各学部 1 名配置することを目的に養成講座を開催	FD 活動の振り返り 等	要調整
	人事部 ハラスメント防止研修	教職員がハラスメントについて正しい知識及び適切な防止・対処方法を身につけ、適切な行動がとれるようになること	ハラスメント防止研修	7 月下旬～9 月

(4) 活動状況

<令和 7 年度>

5 月 8 日	第 1 回 大学 FD 委員会 開催
5 月 21 日	第 1 回 大学院 FD 委員会 開催
7 月 15 日	第 2 回 大学 FD 委員会 開催
7 月 2 日	第 2 回 大学院 FD 委員会 開催
9 月 10 日	ループリック指標による成績評価のワークショップ (講師) 高知大学 准教授 俣野秀典氏
9 月 17 日	第 3 回 大学 FD 委員会 開催
11 月 26 日	第 4 回 大学 FD 委員会 開催
12 月 3 日～ 2 月 6 日	ハラスメント防止研修 開催 (動画視聴) (講師) 桑島 英美 本学園顧問弁護士

12月15日 ～1月30日	令和7年度 非常勤教員対象研修会（動画配信）
12月12日	第3回 大学院FD委員会 開催
1月28日	第5回 大学FD委員会 開催
2月20日	令和7年度 大学教育力研修 開催 基調講演「ハラスメントや不適切な距離の問題 ―安心できる大学を作っていくために自分ができること―」 （講師）広島大学ハラスメント相談室 准教授 山内 宏美 氏 分科会 ① 「玉川の丘をめぐる：教育資源としての価値を問い直す」 （講師）全人教育研究センター長・教育学部教育学科 教授 今尾 佳生 ② 「教職課程のマネジメント力向上へ向けて」 （講師）宮城教育大学教職大学院 教授・教師教育リサーチセンター 客員教授 本図 愛実 氏 ③ ～⑤「授業における生成 AI の活用・実践等を中心とした事例報告（3 グループ）」【ハイブリッド】 1. オンデマンド型授業の作成例と授業支援について （講師）ICT 教育研究センター長 倉見 昇一 2. 各学部等の事例報告（各グループ 3 名） （分科会③講師） 文学部英語教育学科 講師 藤田 典子 工学部ソフトウェアサイエンス学科 講師 柴田 健一 ELF センター 講師 スティーブンソン, ロバート アン ドル （分科会④講師） 農学部環境農学科 教授 小林 祥子 経営学部国際経営学科 教授 木内 正光 教育学部教育学科 教授 樋口 雅夫 （分科会⑤講師） 芸術学部演劇・舞踊学科 講師 赤羽 佳奈 リベラルアーツ学部リベラルアーツ学科 准教授 田島 知之 観光学部観光学科 教授 鎌田 伸尚
3月23日	第6回 大学FD委員会 開催
3月16日	令和8年度 新任教員研修会 開催
3月17日	第4回 大学院FD委員会 開催

その他、学生による授業アンケートを、教学システム（UNITAMA）のアンケート機能を利用し、Web にて計画通り実施した。一部の集中科目を除いた全科目を対象として、春学期

および秋学期の学期末に合計 2 回実施した。アンケートの結果については、各教員が UNITAMA にて確認できるほか、科目群や学科・学部全体の平均値と比較できる授業別レポートを Notes データベースに掲載し、結果のフィードバックを行っている。また、大学 FD 委員会にてユニバーシティ・スタンダード（以下 US）科目および学科専門科目の学部比較を資料にまとめて報告し、各学部での授業改善の取組に活用できるようにした。なお、各学部および US 科目のアンケート結果は本学のホームページにて公開している。

また、授業方法を共有し、自らの授業の改善につなげることを目的として、全学部および ELF センターにて、授業公開とそれに代わる取組を実施した。参加者数等の詳細は 2. 学部の活動に記述する。

（５）活動の成果

今年度の活動計画に基づき、教員と職員が同じスタンスに立って、教職協働のもと活発な FD 活動を行うことができた。

9 月には高知大学地域協働学部学び創造センター准教授の俣野 秀典氏をお招きし、採用 1～2 年目の教授・准教授・講師・助教および本研修の受講経験がない教員を対象として、「ループリック指標による成績評価のワークショップ」を開催した。34 名が受講し、受講アンケートにおける研修の充実度は肯定回答が 97.1%であった。受講者からは、「ループリックについて、内容や作成の仕方、運用の仕方など理解が深まった。また、学生に作成させる取り組みなどが大変興味深かった」、「授業内で学生と一緒にループリックを確認することで、評価の透明性と納得感を高められると考えている。また、『何を重視して評価するのか』をあらためて整理でき、自分の指導方針を明確にする機会になった。」などの感想が寄せられた。

12 月から 2 月にかけては、人事部が主管となり、本学園顧問弁護士の桑島 英美氏を講師としてハラスメント防止研修（動画視聴）を、全教職員を対象として実施し、ハラスメント防止に関する理解を深める機会を作ることができた。

12 月 15 日～1 月 30 日にかけて実施した非常勤教員対象研修会は、昨年度に引き続きオンデマンド形式とした。この研修では、本学の授業を担当するにあたり、これからの高等教育改革を理解し、本学の教育が目指すものを確認することを目的として、教学部長による「本学が取り組む教育改革について」の講演を実施した。また、授業内容（手法）を共有し授業改善の参考とすることを目的として、リベラルアーツ学部リベラルアーツ学科 加茂 フミヨシ講師の「EdTech を活用した STEAM フィールドの学び」と題した授業紹介の動画を掲出し、授業構成や授業方法、学生の課題への取り組みについて紹介した。受講者数は、過去最多の 241 名であった。受講者からは「学校の教育理念及び学生の現状について大変よく理解することができた。」「教育方針を知った上で授業をすることができるため、非常勤講師向けのこのような情報は有益だと思う。」「ディプロマ・ポリシーと各授業の関連性を可視化し、カリキュラム全体で学生を育てるという方針に感銘を受けた。」「学生の表現活動を促すために、さまざまな機器を活用することが効果的であることを実感できた。」「授業における ICT の積極的な利用の方向性について改めて考えていく必要があると感じた。」「AI を利用しながら、学生も楽しみながら授業を進める方法が勉強になった。」「学生が主体的に活動に参加できる様々となりくみ、工夫が、大変参考になった。」といった感想が寄せられた。

2 月 20 日開催の大学教育力研修では、広島大学ハラスメント相談室准教授の山内 浩美氏をお招きし、基調講演として「ハラスメントや不適切な距離の問題 ー安心できる大学を作っ

ていくために自分ができること―」についてご講演いただいた。基調講演には 287 名が参加し、参加者からは「ハラスメントの実例をもとに、場面場面での対応を学ぶことができた。」「学生との対話方法についてしっかりと考える機会となった」「ハラスメントの基本的な構造、その原因や状況について、改めて確認することができ、非常に有益だった」といった感想が多く寄せられた。なお、基調講演について「とても充実していた」が 35.9%、「充実していた」が 50.5%であり、肯定回答は 86.4%であった。午後は、5つの分科会を開催し、全人教育の実践のためのキャンパスの再発見を目的としたワークショップや、教職課程をより深く理解するためのワークショップ、オンデマンド型授業の作成例と授業支援についての情報提供、各学部の生成 AI の活用・実践等を中心とした授業事例等の情報を提供することができた。分科会では「学内の教育資源や自然環境、史跡などに関する理解を深めることができた」「教職課程の見直しに関する今後の方向性、とくに教師に求められるコンピテンシーについて最新の知見が得られたのは大きな成果だった」、「オンデマンド型授業の作成例と授業支援を拝見して、授業作成の具体的な色々な方法を知ることができ、大変参考となった」、「さまざまな学部の授業における生成 AI の活用法について具体的に知ることができ、大いに勉強になった」、「AI の誤りを示して活用の仕方を伝えたり、自分たちの意見と AI の意見を基に討論をしたりと、活用できそうな方法を学ぶことができた」、「AI をバーチャルなところだけで完結させるのではなく、フィールドの体験とつなげた指導は、実に、玉川的であると感じた」といった感想が寄せられた。今後の授業実践等において活用されることが期待される。

授業参観については、令和 4 年度より各学部および ELF センターごとに「教員相互の『授業方法の共有』と『授業改善につながる取組み』」を目的とし、それを達成するための授業参観または授業参観に代わる研修へと変更し、今年度も計画通り実施した。

3 月に実施した令和 8 年度採用者向けの新任教員研修会の内容及び成果については、Ⅲ章の「教員研修」にて詳細を後述する。

（6）今後に向けて

令和 8 年度からの授業アンケートは、より教育改善や学修状況・学修成果の把握に資する調査になるよう、学部等の意見を踏まえ、大学 FD 委員会にて見直しについて検討を重ねた。中教審の答申等にて示されている「学修者本位の教育」に対応して、学修状況、学修成果を把握し教育改善につなげる視点をもって検討し、調査項目の見直しを行った。また、回答率の低さに伴うアンケート結果の信頼性が課題となっており、回答への負担軽減（設問数の削減）を図り、実施期間等も一部変更する。加えてアンケート結果の活用、教育改善の取り組みについても一部見直し、各学部の教育改善の取り組みについては、FD 委員会にて共有のうえ、FD 活動報告書にも記載することとした。

生成 AI の分野については、今後の高等教育や教職課程での教育に不可欠であり、教員からの要望も多いため、大学教育力研修等、多くの教職員が参加できる研修で引き続き取り上げていく。また、令和 8 年度より年間授業計画と授業方法を一部見直し、全 15 回の授業のうち 1 回を原則オンデマンド型としたため、オンデマンド型授業の作成方法や実践例等についても FD 活動のテーマとして取り組んでいく予定である。

非常勤教員対象研修においては、令和 7 年度もオンデマンド形式を採用し、多くの先生方に研修を受けていただくことができ、満足度も高かった。引き続き、より多くの先生方に受講いただける方法を探っていきたい。

最後に FDer については、各学部配置することで各学部の FD 活動が一層活発になることも期待できる一方、大学として、FDer にどのような役割を担ってもらい、今後 FD をどのように進めていくのかを明確にする必要がある。FDer のガイドラインなどを示しながら、大学 FD 委員の役割と、これまでの各学部の FD 担当、新たな FDer の役割について、引き続き大学 FD 委員会を中心に検討していく。

2. 学部の活動

令和7年度における各学部FD活動状況一覧

学部	各学部 FD委員会 の構成人数	各学部 FD委員会 の開催回数	学部研修会	学生による授業アンケート※の実施	
				実施時期	公表
文 学 部	6 名	12 回	学内実施	春学期（期末） 秋学期（期末） （通信教育課程は スクーリングの都度）	学内外 （本学 HP）
農 学 部	8 名	2 回	学内実施		
工 学 部	7 名	2 回	学内実施		
経営学部	5 名	2 回	学内実施		
教育学部 （通信教育課程含）	7 名	2 回	学内外実施		
芸術学部	8 名	2 回	学内実施		
リハビリーツ学部	5 名	3 回	学内実施		
観光学部	5 名	2 回	学内実施		

※授業アンケートは Web にて実施。

§ 文学部

1 FD 活動への取組理念・目標

大学生の学力低下や多様化、大学に対する期待とニーズの多様化、および技術革新を含む社会の急速な変化に対応すべく、普遍性と柔軟性を兼ね備えた大学教育を実現できるよう努めることを文学部のファカルティ・ディベロプメント（以下 FD）活動の取組理念とする。その理念のもと、ディプロマ・ポリシー（以下 DP）を意識しながら教員一人ひとりが主体的に各担当授業において改善に取り組むとともに、学部・学科としても組織的かつ継続的に FD 活動を実施することにより教育の改善を推進することを目標とする。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

文学部主任会（文学部長、文学部教務主任、文学部学生主任、国語教育学科主任、英語教育学科主任）、文学部 FD 担当、国語教育学科・英語教育学科の各学科 FD 担当代表（両学科ともに学科主任が兼務）の合計 6 名により、文学部長を委員長とした文学部 FD 委員会を組織している。文学部長が文学部 FD 委員会を開催し、文学部 FD 担当はそれを支援するとともに、大学 FD 委員会等で出された情報を文学部内で共有すること、文学部 FD 研修会等を企画・運営すること等により、文学部 FD 活動の実務的な取り纏めを行う。その他の委員は審議事項を審議するとともに、報告・確認事項を各学科で共有する。なお、文学部 FD 委員会は教学部授業運営課文学部担当とも文学部 FD 活動に関連する情報を共有する。

3 令和 7 年度の活動内容

以下、実施内容について項目別に記載する。

■研修会

（1）文学部 FD 研修会「メンタルヘルス研修：神経系の視点で学ぶセルフケア」

①概要

近年、要配慮学生や保証人対応の増加に伴い、教職員のメンタルヘルスの維持・向上は、教育・研究活動や学内業務を円滑に進める上でますます重要となっている。実際に、問題を抱えた学生への対応を通して、教員自身が精神的・身体的な負担を感じる場合も少なくない。そこで本研修では、教職員のメンタルヘルスの維持・向上の重要性について理解を深めるとともに、日常的に実践できるセルフケアを学ぶ機会として、文学部専任教員を対象とした FD 研修会を開催した。

②到達目標

教育・研究活動や学内業務を円滑に進めるため、メンタルヘルスの維持・向上の重要性について教職員間で共有し、その理解を深める。

③活動内容

上記の概要・目標のもと、令和 7 年 12 月 18 日（木）16:00～17:00 に大学教育棟 2014・793 会議室において研修会を開催した。講師には、保健センター健康院において学生のカウンセリングも担当している佐藤紀代子先生を迎えた。研修ではまず、怒りや不安などの感情は神経状態と深く関係していることが説明され、自身の自律神経の状態を理解

することの重要性が示された。後半では、呼吸法など自分自身で神経の状態を整えるための簡単なボディワークが紹介され、参加者が実際に体験した。最後の質疑応答では、精神的に不安定な学生への対応に関する助言も共有された。

④評価

文学部専任教員 21 名中 18 名が参加した（参加率 86%。欠席者は公務重複 1 名、私事都合 2 名の計 3 名）。終了後に実施したアンケートでは参加者 18 名全員から回答があり、研修内容に関して有益なフィードバックが得られた。主な意見・感想は以下の通りである。

【主な意見／感想】

- 具体的で実践的な内容が多く、大変参考になった。
- 今日から実践できるセルフケアが紹介され、実際に取り入れてみたいと感じた。
- 忙しい業務の中でもセルフケアが重要であることを改めて認識できた。
- 体を動かす時間を含むなど、普段とは異なる形式の研修であり、充実した時間となった。

（2）研修会「GPS-Academic 結果報告」

①概要

1 年生および 3 年生が受験した GPS-Academic の結果を共有し、文学部学生の学修状況や特徴を把握するとともに、今後の学部・学科運営および教育改善の参考とする。

②到達目標

GPS-Academic の結果（1 年生・3 年生）を分析し、文学部生の学修傾向や課題の特性を教員間で共有する。その上で、今後の学部・学科におけるカリキュラムや授業内容の改善に向けた意見交換を行う。

③活動内容

上記の概要・目標のもと、令和 7 年 10 月 30 日（木）15:45～16:05 に大学教育棟 2014・793 会議室において、株式会社ベネッセ i-キャリアの担当者より GPS-Academic の結果について解説を受けた。報告では、2025 年度入学生は高等学校における教育課程の変更の影響を受け、大学での学びに対する意識に変化が見られ、幅広い分野を体系的に学びたいと考える傾向があることが示された。また、3 年生については、1 年次と比較して思考力に関する全ての指標でスコアが向上しており、学生自身が成長を実感している割合も高いことが明らかとなった。これらの結果を踏まえ、データをどのように教育改善に活用するかについて、他大学の事例も交えながら提案がなされた。

④評価

文学部専任教員 21 名の全員が参加した（参加率 100%）。教授会前の 20 分という短時間の研修であり、意見交換の時間は十分にとることはできなかったが、文学部学生の学修傾向を具体的なデータに基づいて理解する機会となり、おおむね好評であった。結果から、文学部では思考力や他者との協働力の向上が顕著である一方、「経験」に関する指標の伸びが比較的低いことが示され、今後の教育改善に向けた課題として認識された。

(3) 研修会「国語教育学科 カリキュラム改訂に向けた検討」

①概要

令和3年度以降、国語教育学科で行っている現行カリキュラムの検討を継続し、DPの達成を更に強化するCPの構築という目標を軸に、カリキュラム改訂案の策定を行う。具体的には、文学、日本語学、哲学系の深い教養や論理的・批判的思考力の育成をさらに強化すること等による、より質の高い教員養成を含む、学生の将来のキャリア形成を見据えた新カリキュラムの構想について、複数のプロジェクトチームに分かれて検討を重ね、全体会での発表・意見交換を行う。

②到達目標

カリキュラム改訂の方向性や枠組みを学科で共有しつつ検討を重ねることで、令和8年度入学生以降に資する新カリキュラムを構築する。

③活動内容

カリキュラム改編を視野に入れた学科専任教員全員参加で以下の活動を行った。

学科専任教員によるカリキュラム改訂ワーキンググループ検討会を、5月(1回)、6月(1回)、7月(3回)、8月(2回)と、計7回開催し、文学・日本語学・哲学系学科科目の整理・体系化、新設科目の検討、開講時期の見直し等を通じた学科カリキュラム全体の位置づけの検討を重ね、学科会にて随時共有を行い、令和8年度の新カリキュラムを構築した。

④評価

検討を重ねた結果、令和8年度の新カリキュラムを構築することができた。令和8年度以降は新カリキュラムの運用を進めながら更なる改善点などを精査することが課題となる。

次に、調査については以下のとおりである。

■調査

(1) 調査テーマ：留学を必修とした英語系学科カリキュラムの多角的検証－混合研究法を用いて－（実施期間：令和7年4月～令和8年3月〔3カ年計画・1年目〕）

- ・調査目的：留学を必修とするカリキュラムが学生の資質・能力に与える影響を、英語力や異文化理解力にとどまらず、学修態度やキャリア観の変容も含めて長期的・多面的に明らかにする。
- ・概要と結果：令和7年度に主に実施した調査は、英語教育学科3年生を対象とした留学後調査、および留学中の2年生を対象としたインタビュー調査である。留学後調査では、3年生49名を対象とした量的調査と、3名に対するインタビュー調査を6月から7月にかけて実施し、留学中の心理的適応や動機付けの変化が英語力の向上にどのように影響するかについて検証を行った。結果の一次報告については、文学部紀要『論叢』を参照された。また、留学中の2年生に対するインタビュー調査は計24名（リムリック大学4名、ダブリンシティ大学4名、オレゴン大学13名、ハワイ大学3名）を対象に2月から3月にかけて実施した。現在、分析に向けたデータ整理を進めている段階である。

研修および調査に続いて、学外セミナー等への教員派遣については以下のとおりである。

■学外セミナー等への教員派遣

(1) 大学コンソーシアム京都 2025 年度第 31 回 FD・SD フォーラム

開催場所：同志社大学 今出川キャンパス

開催日：令和 8 年 2 月 28 日（土）・3 月 1 日（日）

上記のフォーラムに英語教育学科から 4 名の教員が参加した。本フォーラムでは、生成 AI の普及や少子化社会を背景とした大学教育の在り方を主題として、EdTech を活用した教育実践や AI 時代における授業設計などについて講演・シンポジウムが行われた。参加教員からの報告によれば、フォーラムへの参加を通して、生成 AI の普及を前提とした大学教育の再設計の必要性について多くの示唆を得ることができた。特に、AI は学習を支援する有効なツールである一方で、学生には判断力・編集力・対話力、批判的思考力やメタ認知力といった「人間側の能力」を育成することが重要であるとの指摘が印象的であった。また、AI 教材や学習データを活用した個別最適化学習の実践例からは、学習者の理解度に応じた教育の可能性とともに、大学教育における授業設計の在り方を見直す必要性について理解を深めることができた。さらに、地域社会と連携した教育活動や、多様性に配慮した障害学生支援に関する議論を通して、学生の多様な背景や社会的課題を踏まえた教育実践の重要性についても認識を深めることができた。これらの知見は、今後の授業改善や FD 活動を検討する上で有益な示唆となるものであった。

■授業参観

授業参観については、例年通り、文学部専任教員の担当する秋学期開講の文学部専任教員の担当する学科専門科目を、全学（玉川大学・玉川学園教職員）に対して公開とした。なお、公開条件としては、授業担当教員に授業参観の 1 週間前までに連絡を課した。

昨年度に続き、今年度も最終的に授業参観の希望はなく実施はなかった。告知の仕方の点に問題が無いとは言えないものの、教員は授業や学生指導といった様々な教育活動が授業時間外にあり、職員は通常業務が授業時間帯にある。公開に際して科目に適／不適があるというよりは、実施に際して参加しづらい状況的な難しさが存在する。この状況は文学部に限ったことではなく、他学部や他部署も同様の状況があると考えられるため、授業参加の仕組み作りについては、上記の事情もふまえた上で、今後は全学組織による体系的な調整が必要な課題の一つであると言えるだろう。

4 昨年度（令和 6 年度）に提案された予定・課題の達成度について

昨年度提案された 2 点の予定・課題の達成度は以下のとおりである。

(1) 各学科のカリキュラム検討・調査等を通して出てきた文学部の課題を文学部全体で共有し、改めて検討することで、各学科のカリキュラム改善を推進する。

上記については、令和 8 年度からの新カリキュラム実施に向けて、両学科において個別に、また必要に応じて合同で検討を行い、課題の共有を進めてきた。その結果、現行カリキュラムにおいて課題とされていた点については、新カリキュラムの設計に反映され、一定の改善を図ることができたと考えられる。今後は、令和 8 年度の新カリキュラム開始後

に、学生の学修状況や教育成果を踏まえながら継続的に検証を行い、必要に応じてさらなる改善を検討していく。

- (2) 授業参観実施の可能性と、それに代わりうる FD 活動の可能性について引き続き検討する。

上記については、本年度は FD 研修会の実施や学外 FD フォーラムへの教員派遣を通して、授業改善や教育実践に関する知見の共有を進めることができた。また、FD 活動を通じて、教員が互いの授業内容や教育実践について情報交換することの重要性についても認識が共有された。一方で、授業参観については、授業時間や教員の業務状況等の関係から実施の難しさも指摘されている。今後は、全学的な FD 体制との連携を図りながら、より参加しやすい形での授業参観の在り方を検討するとともに、授業実践や教育上の工夫を教員間で共有する機会の充実についても検討していく必要がある。

5 今後（令和 8 年度以降）の予定・課題について

文学部ではこれまでも FD 活動の継続と活性化に努めてきたが、令和 8 年度は新カリキュラムの導入という大きな節目を迎えることから、今年度課題として挙げた 2 点は次年度においても重要な位置づけにあると考えられる。したがって、令和 8 年度においては、以下の 2 点を継続的な主要課題として位置づけ、取り組みを検討・実施していく。

- (1) 各学科のカリキュラム検討・調査等を通して明らかになった文学部の課題を文学部全体で共有し、改めて検討することで、各学科のカリキュラム改善を推進する。
- (2) 授業参観の実施可能性を含め、教員が互いの専門性や授業実践について日常的に情報交換できる FD 活動の在り方を検討する。具体的には、授業見学の機会の確保や、授業内容・教育上の工夫を共有する場の設定などを通じて、教員間の相互理解を促進することを目指す。さらに、こうした取り組みを通じて、構成教員それぞれの専門性を学部全体の教育力の向上につなげる可能性についても検討していく。将来的には、教員の専門性を生かしたテーマ別オムニバス授業など、文学部としての教育の特色を生かした授業設計の可能性についても視野に入れる。

§ 農学部

1 FD 活動への取組理念・目標

玉川大学の教育理念に基づいた教育を円滑に進め、かつ、改善を試みるために、学生の大学の学修及び生活状況を農学部教員が理解し、授業の内容および方法の改善を促している。農学部では実験実習科目が多いことから、講義科目との連携によって、学生が主体的に学修できる教育環境の充実を進めるとともに、新型コロナウイルス感染症対策で培ったハイブリッド授業、ハイフレックス授業、オンデマンド授業などの多様な形態の授業手法を、継続的に向上する必要性を意識している。このことは、今後、遠隔地を使った実験実習や卒業研究などの科目の教育力アップにつながり、魅力ある農学部教育の新たな部分に成長すると思われる。また、例年進めている授業アンケートの実施と授業改善への意識を高めることや、授業作成ツールとしての動画撮影などの支援体制の共有化やその利用をさらに図るとともに、新しいツールとしての生成 AI の教育利用の可能性の意識付けを続けている。これらのことについて、主任会メンバーを中心に各教員との情報交換を昨年度と同様に進め、引き続き、学生の学修環境の向上に努める。これらを通して、教員は自らの教育力向上に対する意識を高めるとともに、社会情勢に臨機応変かつ適切に対応可能なファカルティ形成を目指す。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

農学部長、生産農学科主任、環境農学科主任、先端食農学科主任、学生主任、教務主任、農産研究センター長および農学部 FD 担当の計 8 名が中心となり、農学部全教職員が目標達成にあたる。

3 令和 7 年度の活動内容

(1) 研修会

① 概要

- 1) 令和 7 月 17 日「農学部の今後入試広報戦略」（講師：入試広報部長 金子氏）というタイトルで現在の入試広報の進め方を紹介。
- 2) 令和 8 月 18 日「これからの農学部の初年次教育の進め方」（講師：安田学園中学校・高等学校、先生、本学卒業生の中高校教員）の講演会を行った。理科教育で定評のある高等学校の現状を紹介。

全ての研修は農学部専任教員を対象とし、また、事前質問アンケートや配付資料を配信や Microsoft Teams にアップロードし、受講者の理解が深まるように工夫を加えた。また、一部の講義は、講師の方々の許可を頂いた上で、ハイブリッド形式で配信し、学外校地の教職員も参加可能な状況を作った。また、やむを得ず欠席した教職員については、期間限定の事後配信も設定し、教員間の知識の共有化を試みた。このことで、研修会の欠席者が、研修会の内容を閲覧できるようになった。

② 到達目標

- 1) 農学部入試広報戦略が所属教員内と共有出来る。
- 2) 農学部初年次教育の見直しの端緒が所属教員内と共有出来る。

③ 活動内容

- 1) 多くの学部教員は、普段入試広報部との連絡が限られているので、全体の考え方を共有する上では、非常に有用であった。次年度も、本企画の継続も検討している。
- 2) 入学者の選抜形態の変化が進み、学力や提出物の質の低下が懸念されており、そこで、高等学校に進学してくる生徒でもそのような傾向があるのか？高等学校では、どのような対応をしているのか？などを紹介いただいた。安田学園では、丁寧な教科担当制を取っていることで実績の確実な上昇があるように感じた。

④ 評価

いずれの講習会についても、開催後のアンケート調査などから各研修会の到達目標設定について好意的な意見が多く、本研修会の目的がファカルティ内で理解されていると評価できる。

(2) 学生による授業アンケート

① 概要（目的を含む）

授業改善のために、農学部開講科目の担当教員（専任および非常勤講師）に協力を求め、すべての講義科目と実験・実習科目について授業アンケートを実施した。

② 到達目標

授業の状況把握により講義技法や情報伝達の仕方、教育設備の向上に活用し、授業改善を達成する。また、大学 HP 上に結果を公開する。

③ 活動内容

授業アンケートを集計後、結果の確認を各教員に依頼した。さらに、大学 HP に学部、学科単位での集計結果を公開した。

⑤ 評価

令和 7 年度の授業アンケートも、UNITAMA を用いて Web ベースでアンケートを行った。総合評価値は、昨年度とほぼ同様であった。このことは、農学部の教育活動が安定していると評価することが可能であると思われる。ただ、アンケート回収率が、この数年連続して低下傾向が続いている。この傾向は、多くの学部で見られることから、授業アンケートの実施法や設問内容、フィードバックについて教学的な見地での検討が検証された次年度の結果を注視したい。

なお、農学部の授業アンケート結果は、下記の URL で閲覧可能である。

https://www.tamagawa.jp/university/introduction/outline/u-fd/questionary/report_agr

(3) 教職員を対象とした公開授業

2 つの科目を秋学期に申請したが、いずれも参加者はいなかった。

4 昨年度（令和 6 年度）に提案された予定・課題の達成度について

令和 7 年度の FD 活動についても、農学部主任会・FD 委員と逐次検証を行うことで、専任教員間の議論が促進され、提案された課題が十分達成された。

5 今後（令和 8 年度以降）の予定・課題について

- ・入試広報関連の FD を継続することを課題としたい。

§ 工学部

1 FD 活動への取組理念・目標

「全人教育の下、人間力を備えたモノづくりの実践的技術者を育成する」という学部の理念・目標に向けて教育内容・教育環境の向上をはかる。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

教授会、主任会、教務担当者会、学科会の他に、FD 活動に特化した運営組織として、工学部 FD 研修会、授業評価検討会、授業評価総合検討会、MR (マネジメントレビュー) がある。これらの組織は平成 29 年まで認証継続していた ISO9001 の教育クオリティマネジメントシステムで運用していたものであり、ISO9001 の更新を停止した後も継続的に運用している。

工学部 FD 研修会は全教員で構成される組織である。各学期の終了後に新入生の成績動向や専門科目の受講者動向などの検証を行う。

授業評価検討会は学科ごとに全教員で構成される組織である。各学期の終了後に授業アンケートの結果などをもとに授業改善の検証を行う。

授業評価総合検討会は、教務主任、教務担当、FD 担当で構成される組織である。各学科で実施された授業評価検討会の結果をもとに今年度の検証および次学期以降の方針について検討を行う。

MR は学科ごとに全教員で構成される組織と工学部長、教務主任、学生主任、学科主任で構成される組織である。各学科で実施された MR の結果をもとに今年度の学部の教育活動全般の検証および次学期以降の方針について検討を行う。

3 令和 7 年度の活動内容

(1) 工学部 FD 研修会

① 概要

各学期の終了後に全教員を対象に実施される研修会である。教務主任、学科主任、教務担当が学期ごとに GPA や単位修得率をもとに成績動向について報告を行う。春学期は数学と物理の教員が入学時に実施するテスト（プレースメントテスト）の結果について報告を行う。秋学期は各学科の教員 1 名が事例報告を行う。

② 到達目標

全教員が全学科の学生成績および学生への対応方針を共有し、各学科の今後の組織的展開と学生への教科指導に効果的に反映できるようになること、そして教員の自己省察に資する内容となることを目標とする。

③ 活動内容

■ 第 1 回工学部 FD 研修会

実施日：令和 7 年 9 月 18 日（木）9：00～9：58

場所：Zoom による遠隔会議方式

プログラム：

春学期学習状況分析結果報告

- | | |
|--------------------------------|----------------------------|
| (1) 情報通信工学科 | 教務担当 政田元太 教授 |
| (2) ソフトウェアサイエンス学科 | 教務担当 佐藤雅俊 教授 |
| (3) マネジメントサイエンス学科 | 学科主任 成川康男 教授 |
| (4) デザインサイエンス学科・エンジニアリングデザイン学科 | 教務担当 斉藤純 教授 |
| (5) 数学系 | マネジメントサイエンス学科 朝山芳弘 講師 |
| (6) 物理系 | デザインサイエンス学科 水野貴敏 准教授 |
| (7) 情報系 | ソフトウェアサイエンス学科・教務主任 佐々木寛 教授 |
| (8) 学部全体の状況 | ソフトウェアサイエンス学科・教務主任 佐々木寛 教授 |

■ 第2回工学部 FD 研修会

実施日：令和8年3月26日（木）9：00～10：15

場所：STREAM Hall 2019 313AB 教室

プログラム：

学習状況分析結果報告

- | | |
|--------------------------------|---------------|
| (1) 情報通信工学科 | 教務担当 政田元太 教授 |
| (2) ソフトウェアサイエンス学科 | 教務担当 佐藤雅俊 教授 |
| (3) マネジメントサイエンス学科 | 教務担当 高橋宗良 准教授 |
| (4) デザインサイエンス学科・エンジニアリングデザイン学科 | 教務担当 斉藤純 教授 |
| (5) 学部全体の状況 | 教務主任 佐々木寛 教授 |

事例報告

- | | |
|--------------------------------|-------------------------|
| (6) 情報通信工学科 | 「チャンピオンシップ」 西野順二 准教授 |
| (7) ソフトウェアサイエンス学科 | 「ソフトウェアサイエンス実験」 佐藤雅俊 教授 |
| (8) マネジメントサイエンス学科 | 「オペレーションズリサーチ」 三木秀夫 准教授 |
| (9) デザインサイエンス学科・エンジニアリングデザイン学科 | 「機構デザイン」 引地力男 教授 |

④ 評価

第1回工学部 FD 研修会は36名、第2回工学部 FD 研修会は37名の教員が参加した。報告者が使用するスライドおよび報告内容をまとめた解説は配付資料としてまとめられ、事前にメールにて全教員に配付された。

(2) 学部で取り組む教育成果等の広報活動に関する FD 研修会

① 概要（目的を含む）

大学を取り巻く環境は厳しく、定員を充足させることも難しくなってきた。その対策の一つとして、入学者増に向けて教育成果を広報活動に利用することの重要性を再認識し、工学部で取り組むことができる具体的な方法や事例を共有することを目的として研修会を実施した。学部で広報活動に取り込む場合、以下が有効である。

- ・学部独自の広報イベントの企画・実施
- ・学部の活動を積極的かつ継続的に学外に発信することの重要性
- ・データに基づいたターゲットを明確にした学生募集
- ・連携可能な学内外のリソースの有効利用

② 到達目標

学部レベルで実施可能な広報活動についての理解を深め、広報に活用できる教育活動(授業等)へと展開する。

③ 活動内容

実施日：令和7年6月26日(木) 17:00～18:00

場所：STREAM Hall 2019 313AB 教室

内容：PR クエスト欄 菊池泰功氏「学部で取り組む教育成果等の広報活動」

1. 大学における広報活動の現状
2. 玉川大学および工学部の広報活動の考察
3. 工学部として取り組むべき具体的な広報活動
4. 他大学で実施されている効果的な事例

④ 評価

工学部の教員 34 名が参加した。

(3) 工学部全体の改善に向けた共通認識の構築に関する FD 研修会

① 概要(目的を含む)

工学部が抱える喫緊の課題(入学者数減など)に対し、個人の意識改革にとどまらない、組織として継続的に行動を起こす基盤をつくり、教育活動の改善に活かすことを目的として研修会を実施した。

玉川大学のホームページや、講師自身が体験した東日本大震災における災害派遣の経験を題材として、まずは自分のこととして考え、自分の考えを持ち、それを皆(工学全体)で議論し、認識を共有することが重要であると主張していた。

② 到達目標

入学者減少などの危機を「他人事」ではなく「自分事」として捉え、教育活動を含む継続的改善のための仕組み(ルール、体制、情報共有方法)づくりの方向性を見出す。

③ 活動内容

実施日：令和7年10月30日(木) 17:00～18:00

場所：STREAM Hall 2019 313AB 教室

内容：三波工業株式会社 土志田実氏(前職：防衛装備庁 次世代装備研究所長)「変わる
ことへの第一歩～工学部全体の改善に向けた共通認識をつくる」

④ 評価

工学部の教員 33 名が参加した。

(4) Teams の効果的な利用法に関する FD 研修会

① 概要(目的を含む)

工学部教員が普段利用している遠隔システムは Zoom であることが多いため、Teams の利用法についてはあまり詳しくないのが実状である。来年度よりオンデマンド動画や、工学部独自で実施を予定している講義動画(各教員が任意の 1 科目を選び、全 15 回分を録画する試み)の掲載先として、Teams が想定されている。そこで、Teams の使い方を習得する目的で研修会を実施した。

② 到達目標

Teams を利用できるようになる。

③ 活動内容

実施日：令和 7 年 12 月 18 日（木）17：00～17：30

場所：Zoom 等による web 会議方式

内容：本学 ICT 教育センター 磯田裕美氏「Teams の効果的な利用法」

④ 評価

工学部の教員 35 名が参加した。

(5) Teams を使った講義動画の録画・トリミングおよび WebClass への URL 掲載に関するハンズオン

① 概要（目的を含む）

来年度より工学部独自で実施を予定している講義動画(各教員が任意の 1 科目を選び、全 15 回分を録画する試み)の掲載に関して、Teams と WebClass の使い方を習得する目的で研修会を実施した。受講者が手を動かして、一通りの操作を体験した。

② 到達目標

高度な動画編集や配信設定は行わず、「まず一連の流れを一度やってみる」ことを目的とした。セミナー終了時点で、以下ができていることがゴールである。

1. Zoom で授業を録画できる
2. 録画ファイルを保存できる
3. その動画を Teams に登録して、ごく簡単な編集ができる
4. WebClass に動画 URL を貼り付けられる

③ 活動内容

実施日：令和 8 年 3 月 26 日（木）14：00～15：00

場所：STREAM Hall 2019 313A/B 教室

内容：本学工学部 小酒井正和教授

1. Zoom で授業を録画
2. 録画した動画を Microsoft Teams へ登録
3. WebClass に動画 URL を貼り付けて学生へ公開

④ 評価

工学部の教員 9 名が参加した。

(6) 授業評価検討会・授業評価総合検討会・MR（マネジメントレビュー）

① 概要（目的を含む）

授業評価検討会は、各学期の終了後に学科ごとに「授業実施チェックシート」（様式は

平成 30 年度の活動報告書を参照) や授業アンケートの集計結果などをもとに授業改善を検討する。

授業評価総合検討会は、各学科の授業評価検討会の集計結果や議事録などをもとに今年度の検証および次学期以降の方針について検討を行う。

MR は、各学科で実施された会議の議事録をもとに今年度の学部の教育活動全般の検証および次学期以降の方針について検討を行う。

② 到達目標

授業実施チェックシートや授業アンケートの集計結果などをもとに授業改善を検討する。

③ 活動内容

■ 授業評価検討会

実施日：

春学期

情報通信工学科	令和 7 年 10 月 10 日 (金) 17 : 00～17 : 30
ソフトウェアサイエンス学科	令和 7 年 9 月 11 日 (木) 12 : 00～13 : 30
マネジメントサイエンス学科	令和 7 年 9 月 4 日 (木) 15 : 30～16 : 00
デザインサイエンス学科・エンジニアリングデザイン学科	令和 7 年 9 月 4 日 (木) 16 : 15～16 : 45

秋学期

情報通信工学科	令和 8 年 3 月 12 日 (木) 15 : 00～16 : 00
ソフトウェアサイエンス学科	令和 8 年 3 月 16 日 (月) 10 : 55～12 : 00
マネジメントサイエンス学科	令和 8 年 3 月 5 日 (木) 13 : 30～14 : 00
デザインサイエンス学科・エンジニアリングデザイン学科	令和 8 年 2 月 26 日 (木) 10 : 00～10 : 30

■ 授業評価総合検討会

実施日：

春学期 令和 7 年 10 月 16 日 (木) 17 : 00～18 : 05

秋学期 令和 8 年 3 月 19 日 (木) 10 : 30～11 : 55

■ MR

実施日：

情報通信工学科	令和 8 年 3 月 12 日 (木) 実施
ソフトウェアサイエンス学科	令和 8 年 3 月 16 日 (月) 実施
マネジメントサイエンス学科	令和 8 年 3 月 5 日 (木) 実施
デザインサイエンス学科・エンジニアリングデザイン学科	令和 8 年 3 月 19 日 (木) 実施
全体	令和 8 年 3 月 24 日 (火) 実施

④ 評価

授業評価検討会では、「授業実施チェックシート」や授業アンケートの集計結果などを用いて議論された。

授業評価総合検討会では、各学科の授業評価検討会の集計結果や議事録を用いて議論された。春学期と秋学期の議事録をそれぞれ図 1 と図 2 に示す。

令和 7 年度の MR は、令和 5 年度に修正された「人材養成等教育研究に係る目的」および 3 つのポリシーの妥当性を検証する形で実施した。全体 MR では、アセスメント結果に基づき各学科で実施された MR の結果が報告され、人材養成等教育研究に係る目的および 3 つのポリシーを変更しないことが確認された。

2025 年度春セメスター工学部授業評価総合検討会議事録

日時：2025 年 10 月 16 日、17:00～18:05

場所：Zoom ミーティング

(以下、ICT…情報通信工学科、SS…ソフトウェアサイエンス学科、MS…マネジメントサイエンス学科、ED…エンジニアリングデザイン学科、DS…デザインサイエンス学科)

出席者：政田 (ICT 教務担当)、佐藤 (SS 教務担当)、高橋 (MS 教務担当)、三林 (ED 教務担当)、斉藤 (DS 教務担当)、山田 (工学部 FD 担当)、佐々木 (教務主任)

議事録作成：佐々木

資料：2025 年度春学期 授業評価検討会議事録 (ICT, SS, MS, ED, DS)

2025 年度春学期 授業評価集計結果 (ICT, SS, MS, ED, DS)

各学科で実施した授業評価検討会における検討結果に基づき、本セメスターにおける各学科の取組みについて報告が行われた。全学科、不満足授業はなかった。

各学科からの報告内容を以下に記す。

- ・ICT：授業アンケートの「理解度」で 3.0 未満となった科目はなかった。「授業外学修」で 2.0 未満の科目は 5 科目あったが、授業中に演習が終わってしまう、理解できてしまうなどの理由が考えられた。実験科目で、授業外学修時間がしっかり確保できている特徴もみられた。「成績 B 以上」で 60%未満となった科目は「物理学 I」(29%)、「応用電子物性」(50%)、「センサ工学」(57%) であった。成績がもともと悪くノートを取らない学生が多かったり、授業内容が抽象的で理解しにくかったりなどの理由が考えられた。学科で検討の結果、いずれも不満足授業にはあたらないと結論された。
- ・SS：授業アンケートの「理解度」で 3.0 未満となった科目に「データベース」があった。科目担当教員が新しい非常勤教員であり、学科主任より指導について改善依頼をしている。「授業外学修」で 2.0 未満の科目は「ネットワーク入門」、「確率統計学 I」があった。「ネットワーク入門」では、十分な時間がかけられる課題を提示したが、生成 AI の利用等で時間をかけずに行う学生がいる可能性があるとのことであった。授業外学修が確保されている科目では、課題を出題し、その内容を明示しているなどの特徴があった。「成績 B 以上」が 60%未満となった科目は「プログラミング I」(2 クラス、33%, 24%)、「プログラミング II」(31%) であった。いずれも学力不足の学生が多いクラスであった。入学時の「情報」プレイスメントテストによる上位クラスは 71%であった。学力不足の学生に向けた「プログラミング入門」等を引き続き検討する予定である。以上について学科で検討した結果、不満足授業はなかった。
- ・MS：授業アンケートの「理解度」で 3.0 未満となった科目はなかった。「授業外学修」で 2.0 未満の科目は 5 科目あった一方、逆に 3.5 と高かった「マーケティング論」では授業外学修の方法を明示し、教員が時間をかけてフィードバックをしていた。「成績 B 以上」が 60%未満となった科目は「解析学 I」(25%)、「代数学 I」(0%) であったが、いずれも再履修クラスで C 評価が多かった。学科での検討の結果、不満足授業にはあたらないと結論された。
- ・ED, DS：授業アンケートの「理解度」で 3.0 未満となった科目はなかった。「授業外学修」については、今回は詳細に検討していないが継続的に進めていく。「成績 B 以上」が 60%に満たない科目は、「解析学 I」(18%)、「代数学 I」(40%) などの数学系科目で 6 科目あった。学力不足が考えられ、入試段階も含めて総合的検討する必要があるかもしれない。学科での検討の結果、不満足授業はなかった。
- ・全体：今回「授業外学修」について基準を 2.0 として初めて検討したが、この基準に大きな問題はないとして、今後も引き続き検討項目としていくこととなった。 以上

図 1 令和 7 年度春学期工学部授業評価総合検討会議事録

2025 年度秋セメスター工学部授業評価総合検討会議事録

日時：2026 年 3 月 19 日、10:30～11:55

場所：Zoom ミーティング

(以下、ICT…情報通信工学科、SS…ソフトウェアサイエンス学科、MS…マネジメントサイエンス学科、ED…エンジニアリングデザイン学科、DS…デザインサイエンス学科)

出席者：政田 (ICT 教務担当)、佐藤 (SS 教務担当)、高橋 (MS 教務担当)、三林 (ED 教務担当)、斉藤 (DS 教務担当)、山田 (工学部 FD 担当)、佐々木 (教務主任)

議事録作成：佐々木

資料：2025 年度秋学期 授業評価検討会議事録 (ICT, SS, MS, ED, DS)

2025 年度秋学期 授業評価集計結果 (ICT, SS, MS, ED, DS)

各学科で実施した授業評価検討会における検討結果に基づき、本セメスターにおける各学科の取組みについて報告が行われた。全学科、不満足授業はなかった。

各学科からの報告内容を以下に記す。

- ・ICT：授業アンケートの「理解度」で 3.0 未満となった科目はなかった。「授業外学修」で 2.0 未満の科目は「デジタルシチズンシップ」があったが、課題を提示するタイミングが適切でなかったことが理由と考えられた。「成績 B 以上」で 60%未満となった科目は「プログラミング I」(48%)、「電磁気学」(46%)であった。予習、復習が不足している可能性が考えられた。学科で検討の結果、いずれも不満足授業にはあたらないと結論された。
- ・SS：授業アンケートの「理解度」で 3.0 未満となった科目はなかった。「授業外学修」で 2.0 未満の科目は「ソフトウェア工学」があったが、回答率が低く引き続き観察となる。「成績 B 以上」が 60%未満となった科目は「プログラミング I」(2 クラス、45%, 28%)、「プログラミング II」(15%)、「離散数学」(43%)、「モバイルシステム総合研究」(57%)であった。プログラミング関連科目はいずれも再履修クラスであり、学力不足が考えられ、次年度からの講義動画などを活用したい。以上について学科で検討した結果、不満足授業はなかった。
- ・MS：授業アンケートの「理解度」で 3.0 未満となった科目はなかった。「授業外学修」で 2.0 未満の科目は「キャリアデザイン」(1.9)、「人間工学」(1.9)であったが、問題の指摘はなかった。予習復習の指示を具体的にすると学修時間が多くなる傾向があると考えられた。「成績 B 以上」が 60%未満となった科目は「解析学 II」(50%)、「微分方程式 II」(35%)であったが、前者は教職に関係する再履修クラスであり履修者が少なかった。必修の「解析学 I」で 3 年生になっても修得できない学生もいるので、チューター利用等の指導を検討していく。学科での検討の結果、不満足授業にはあたらないと結論された。
- ・ED, DS：授業アンケートの「理解度」で 3.0 未満となった科目はなかった。「授業外学修」について、今回は検討しないかったが今後検討していく。「成績 B 以上」が 60%に満たない科目は、「電気回路基礎」(59%)、「原価計算」(57%)、「解析学 II」(0%)であった。解析学 II は履修者 1 名のみであった。学科での検討の結果、不満足授業はなかった。
- ・全体：各学科の授業評価検討会議事録は今後電子版を基本とし、作成者、学科主任の印は省略する。ゆとりある学年歴により次年度より授業の一回が原則オンデマンドとなるが、チェックシートはこれまでのものをそのまま利用する。プログラミング I でテスト成績が悪い傾向もあり、生成 AI の利用方法等について指導を工夫していく必要がある。US「歴史 (日本)」では最終課題で厳格な基準が設けられ、それにより単位修得ができない学生 (1 名は卒業延期) が出ている。次年度認定予定の数理データサイエンス AI 教育プログラム (応用基礎レベル) でも自己点検が必須となるため、該当科目は検討会の対象とする。授業アンケート回答率の上昇に向けできる範囲で努力していく。以上

図 2 令和 7 年度秋学期工学部授業評価総合検討会議事録

(7) 研究授業

① 概要（目的を含む）

春学期と秋学期に各学科 1 名の教員が各自の担当科目に関して参観授業（研究授業）を実施する。科目は学科専門科目でなくてもよい。各学科の教員数は 9～10 名であるため、全教員が 4～5 年に 1 回担当することになる。学生による授業アンケートとは別の視点である参観者からの評価を授業改善につなげることが目的である。

② 到達目標

参観者の評価をもとにした授業改善を検討する。

③ 活動内容

今年度の実施概要を表 1 に示す。

参観者は授業を参観して「工学部研究授業チェックシート」（様式は平成 29 年度の活動報告書を参照）を参観後に授業担当者に提出する。授業担当者は参観者の評価をもとに「研究授業科目担当者票」（様式は平成 29 年度の活動報告書を参照）を作成して、学部長、教務主任、学科主任、教務担当、FD 担当に提出する。

④ 評価

提出された「研究授業科目担当者票」の「今後の対処計画」には下記のようなコメント（原文そのまま）があり、今後の授業改善が期待される。

- 復習テストの解説は Bb に提示し質問があれば回答する
- 発声はクセのようなものなので、はっきり喋るように心がけて注意する
- 板書の図の追加説明が小さくなりがちなので、図の段階で一回り大きく描くよう心がける
- スライドの文字サイズが小さいもの（特に添え字のあるもの）については文字サイズを大きくする。
- 暗号化用のメッセージを文字列から数値にすることは今後取り入れたい。
- Zoom の共有メニューを小さくする。
- ピンマイクは現在修理中なのででき次第着用
- スライドは配布するが情報量が多い時は自習するように伝える
- できるだけ学生の方を見るように心がける
- 机間巡視はすることもあり、その時の状況による
- スライドに含めるスクリーンショットの文字が小さくなって認識しづらいものとなっている箇所を修正し、今後も気をつけるようにする。
- マイクを使用して、情報伝達をきちんとできるように改善する。
- 説明不足と重られるスライドを分割して、なにをしようとしているかをしっかりと伝わるように工夫をする。
- 今後の授業ではロボットを学生に触らせる機会も増えるため、はっきりと、注意点など重要な部分は特に注意を払って伝えるように気を配りたい。

	学科	授業担当者	科目	開催日時	教室
春学期	情報通信工学科	西野 順二	プログラミングⅡ	4月29日(火) 5・6時限	ELF Study Hall 2015 327 教室
	ソフトウェアサイエンス学科	山崎 浩一	情報セキュリティ	5月7日(水) 1・2時限	STREAM Hall 2019 313AB 教室
	マネジメントサイエンス学科	小酒井 正和	データサイエンス基礎演習	7月4日(金) 3・4時限	Consilience Hall 2020 313 教室
	デザインサイエンス学科	黒田 潔	知的財産権の基礎	5月28日(水) 1・2時限	Consilience Hall 2020 403 教室
秋学期	情報通信工学科	堀 三晟	ロボット入門	10月2日(木) 6時限	STREAM Hall 2019 220 教室(ロボットラボ)
	ソフトウェアサイエンス学科	大竹 敢	プログラミングⅡ	10月21日(火) 5・6時限	STREAM Hall 2019 212 教室
	マネジメントサイエンス学科	佐藤 健治	幾何学Ⅲ	10月9日(木) 3・4限	ELF Study Hall 2015 416 教室
	デザインサイエンス学科	三林 洋介	人間工学	11月19日(水) 1・2時限	University Concert Hall 2016 106 教室

(8) 学生による授業アンケート

① 概要(目的を含む)

授業内容・方法・スキルの向上などの授業改善を具体化することを目的として、平成12年度秋学期より学生による授業アンケートを春学期と秋学期の期中および学期末に実施している。

② 到達目標

すべての学科専門科目について継続的な授業改善およびカリキュラム改善の検討に役立てる。

③ 活動内容

他学部と同様に UNITAMA でアンケートを実施した。学期末のアンケート結果を集計した授業別レポート(PDF ファイル)は Web Notes の「授業アンケート結果一覧」に掲載される。科目担当者は授業別レポートを確認にして「授業アンケート結果一覧」のコメント欄にコメントを記入する。記入されたコメントは授業別レポートに設けられた「今期の総括と今後に向けて」の欄に転載される。授業別レポートを含むすべてのレポートは「玉川大学 工学部『学生による授業評価』報告書 48」、「玉川大学 工学部『学生による授業評価』報告書 49」と題した冊子としてまとめられ、STREAM Hall 2019 の2階にて閲覧公開した。また、これらは Blackboard@Tamagawa のコミュニティ「工学部 FD」を通じて全教員に配付された。

④ 評価

学期末のアンケートの回答率(回答者数/履修者数)は、春学期が 53.7% (2,370 名/4,410 名)、秋学期が 55.2% (2,273 名/4,120 名)であった。

4 昨年度（令和6年度）に提案された予定・課題の達成度について

工学部 FD 研修会、授業評価検討会、授業評価総合検討会、研究授業、学生による授業アンケート、MR を予定通り実施した。

学生による授業アンケートは、例年通り全科目担当者に実施のお願いをしたが、回答率は昨年度より少し増加した。

研究授業は、教務主任、教務担当、FD 担当、新任教員が積極的に参加した。

FD 活動の在り方に関する課題については改善されてない。

5 今後（令和8年度以降）の予定・課題について

工学部 FD 研修会、授業評価検討会、授業評価総合検討会、MR、研究授業、学生による授業アンケートは次年度以降も継続的に実施する。ただし、それぞれの実施方法については再検証を行う必要がある。

学生による授業アンケートは、より学生の意見を反映させるためにアンケートの回答率を上げることが望まれる。

研究授業は、より多くの視点から改善案を得るためには参観者数を増やす必要がある。

§ 経営学部

1 FD 活動への取組理念・目標

- (1) 質の高い卒業生（経営学部のミッション・ステートメントを体現し得る卒業生）を輩出する。
- (2) 玉川の教育理念を基盤とした経営学教育を実現する。
- (3) 21 世紀社会に生き残ることのできる経営学部一少子化時代・大学全入時代にあって、運営を維持しうる体力をもった学部を形成する。
- (4) 玉川学園および玉川大学全体の評価を高める学部を構築する。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

経営学部長、国際経営学科主任、教務主任、学生主任、FD 担当が中心となって FD 活動を実施する。教務主任と FD 担当は連携して活動計画を取りまとめ、主として研修会の運営にあたる。

3 令和 7 年度の活動内容

(1) ワークショップ（令和 7 年 7 月 3 日（木））

① 概要（目的を含む）

個々の教員が断片的にしか理解できていない学生の状況を、共通して認識する情報共有の機会を設ける。部活を 4 年間頑張った学生間、警告を受けたもののその後成績が回復した学生間、TOEIC のスコアが上昇した学生間で共通する傾向などを教員同士で把握し、今後の学生指導につなげる。

② 到達目標

- ・各教員が、似たようなスタイルを持つ学生の指導を理解する
- ・警告を受けてしまった学生において、その後成績が回復した学生の特徴、そのまま回復しなかった学生の特徴を理解し、授業における指導につなげる

③ 活動内容

- ・キャリアセンター、教務課、入試課等のデータを統合させ、一人ひとりの学生の高校、入試形態、GPA 推移（科目）、GPS、警告の有無、課外活動、就職先などをまとめた資料を事前に配布
- ・各教員間で、特徴があり且つ面識のある学生について話し、共有する

④ 評価

今年度は新たな取り組みということもあり、各ゼミ担当卒業学生の 1 名の概要を共有するにとどまった。しかし、課題を克服し、GPA を回復させる学生にはいくつか特徴があることが確認できた。今後、さらに共有することで、成績の課題が生じた場合の対応方法などを学部全体で検討したい。

(2) ワークショップ（令和 7 年 10 月 2 日（木））

① 概要（目的を含む）

1 年生、3 年生が受験した GPS-Academic の結果から、今後の授業のあり方やカリキュラム改訂の参考とする

② 到達目標

結果を基に今後の授業のあり方やカリキュラム改訂の道筋を整える

③ 活動内容

- ・ GPS-Academic の結果報告（1 年生、3 年生）
- ・ 経営学部生の優れている点、課題の共有
- ・ 今後の授業への反映

④ 評価

経営学部 1 年生の GPS-Academic の結果によると、思考力総合は前年から大きく上昇し、一定の改善が見られた。一方で全国平均と比較するとやや低い水準にとどまっている。

3 年生については、1 年次からの変化として思考力の伸長が確認される一方で、上位層と下位層の差が拡大する傾向がみられ、思考力の二極化が進行していることが示唆された。これらの結果を踏まえ、今後は基礎力の底上げと上位層のさらなる伸長の両面から指導の充実を図る必要がある。

(3) 学生による授業アンケート

① 概要（目的を含む）

例年、各科目の継続的な授業改善に役立てることを目的として授業アンケートを実施している。今年度も春学期、秋学期ともに実施した。

② 到達目標

学生の講義に対する要望等を把握するとともに、各教員のさらなる指導方法の充実を図る。

③ 活動内容

今回の授業アンケートは、UNITAMA を活用した Web 形式である。経営学部で開講している全科目で実施した。

④ 評価

すべての開講科目で授業アンケートが実施できている。アンケート結果のまとめを Web 上で公開している。回答率は約 30%であったため、より回答数を増やすために、科目を担当している教員を通して学生へのアナウンスを周知していく。

(4) 学外セミナー等への教員派遣

大学コンソーシアム京都主催の FD フォーラムに教員を 1 名派遣した。次年度の FD において、内容を共有する予定である。

(5) 授業参観

下記 2 科目で実施した。

- 「経営塾」 令和 7 年 7 月 8 日（火）7・8 限

教員 4 名参加。教員の講義のほか、学生のプレゼンテーションが多く行われた。学生の報告への指導方法など、今後自身の授業運営への参考になったとの報告を得た。

● 「マーケティング戦略」 令和 8 年 1 月 14 日（水）

教員 3 名参加。教員の講義のほか、学生のプレゼンテーションが多く行われた。経営塾同様、学生の報告への指導方法など、今後自身の授業運営への参考になったとの報告を得た。

4 昨年度（令和 6 年度）に提案された予定・課題の達成度について

昨年度に予定した活動は、概ね実施できた。また、外部有識者を招いて経営学部生の GPS・Academic 受検状況を把握することができた。昨年度は 4 年生でも実施したため、1 年次から 4 年次にどのように成長したのかを把握することで、授業内でも思考力を養える授業体制を整えていきたい。

カリキュラム改訂に関しては、来年度より改訂を実施することができた。実施してから起こりうる問題、不明点に関して、検証していきたい。

5 今後（令和 8 年度以降）の予定・課題について

これまでの FD 活動を地道に継続するとともに、カリキュラム改訂後の状況を明らかにしていく。また、GPS・Academic 受検結果に関して、検証する機会を設ける予定である。

授業参観に関しては、講義のみでの参観では教員の参加が難しいため、今後も各コースで産学連携の授業での参観を通して、課題抽出、授業改善に努めていきたい。また、英語力に課題のある学生が増加傾向であるため、授業参観を検討するほか、自学自習に努める機会を設けていきたい。

§ 教育学部

1 FD 活動への取組理念・目標

本年度の FD 活動への取組理念・目標は、これまで通りの内容を踏襲した。以下の通りである。

「本学部では学校教育はもとより生涯教育、社会教育の諸分野で貢献できる教育プロフェッショナルの育成を目指し、指導に当たる教員が自らの資質と能力を向上させることにある。」

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

教育学部長、教育学科・乳幼児発達学科の両主任、教務主任、学生主任、及び FD 担当、通信教育課程主任の 7 名で構成する。

教育学部長を委員長とし、FD 担当が学部における FD 活動計画（企画・運営）の策定、FD 活動の年度総括などを審議する役割を担っている。また委員会決定事項については教授会で議案提起を行い、FD 活動の推進に努めている。

3 令和 7 年度の活動内容

（1）研修会等

① 概要（目的を含む）

従来の FD 活動に引き続き、教員養成における課題や展望を再認識した上で、日常の指導、教育実践に取り組むことを目的とし、オンラインと対面による研修会を実施した。

なお、令和 6 年度から FD 活動への取組理念・目標のさらなる実質化を目指して、FD の実施目的を、学科間の課題共有と協働体制の強化を図る『組織開発』に置いた。教育学部専任教員が自らの専門分野のみならず、広く教育関係全般の動向を理解し、他の教育学部専任教員がどのような社会的文脈のもとで教育研究を実践しているのか相互理解を深める。同時に、研修会への参加を通して、自らの専門分野を追究する機会を持つ。

以上の目的を両立しながら実現するための手段として、教育系の答申等の動向を理解する研修会（情報共有・個別最適型の研修会）の実施等、日常の教育研究活動により直結するような研修の提供を心がけた。

② 到達目標

今日の教育実践における先進的な取り組みや課題に触れ、研究活動および日々の授業実践に活かす。また、日本の教育の課題と展望について学び、教員養成における指導や教育実践に活かし、参加者同士のネットワークを築くことを目標とする。

③ 活動内容

令和 7 年度は、きたる教職課程の再課程申請に備え、教育学部専任教員の組織開発と情報共有を目的とした、オンデマンド形式の情報共有・個別最適型の研修会を中心に実施した。

本年度の計画はおおむね予定通り進んだ。なお、以下 5) の研修は、当初は対面での実施にむけて計画したが、研修会の目的を情報共有・個別最適型の研修会にあらためる過

程でオンデマンド形式での提供にあらためた。また、学内の LMS (Learning Management System) が次年度よりあらたまることが決まったため、6)の研修を急遽設け、実施した。

なお、昨年度より千葉工業大学の FD にオンライン参加できるようになり、他学部が実施する公開型の FD 研修が増える等、自分で受講内容を選択できる機会が増えたことは FD の充実を目指す上で望ましい改革である。全体として、FD 研修は充実しつつあるといえる。

- 1) 研修名 : 「オンライン授業における複製・公衆送信・伝達に関する『やってはいけないこと』と『授業の中でやってよいこと』パンフレットの配付」
実施日 : 令和 7 年 4 月 23 日 (水)
方 法 : 新任教員メールボックスへの配付及び学内便による配付
- 2) 研修名 : 大学におけるハラスメント防止に向けて (パワーハラスメント/アカデミックハラスメント編)
講 師 : ※YouTube チャンネル文部科学省/mextchannel の提供する公式動画を活用
実施日 : 令和 7 年 5 月 28 日 (水) ～6 月 25 日 (水)
場 所 : オンライン
時 間 : 上記の期間中で任意 (感想は Google スプレッドシートにて全体共有)
- 3) 研修名 : 「こども家庭庁を中心とした乳幼児期の育ちの政策についてー『はじめの 100 か月の育ちビジョン』を通してー」
講 師 : 教育学部乳幼児発達学科 大豆生田啓友 教授
実施日 : 令和 7 年 7 月 23 日 (水)
場 所 : 大学研究室棟 B104 会議室
時 間 : 13 : 30～14 : 30
- 4) 研修名 : 「教育学部の教員養成系の授業に関連した最新の教育答申に関する情報共有」
講 師 : 教育学部教育学科 濱田英毅 教授
実施日 : 令和 7 年 9 月 17 日 (水)
場 所 : 大学研究室棟 B104 会議室
時 間 : 10 : 30～11 : 00
- 5) 研修名 : 「令和 7 年度の教育政策の動向と答申等のまとめ」
講 師 : 文部科学省初等中等局教育課程課長 武藤久慶 氏
実施日 : 令和 8 年 2 月 17 日 (火) ～3 月 25 日 (水)
場 所 : オンライン
時 間 : 上記の期間内で任意 (感想は Google スプレッドシートにて全体共有)

6) 研修名 : 「WebClass の操作を一から学ぶためのハンズオン講座」

講 師 : ICT 教育研究センター課長 磯田裕美 氏

実施日 : 令和 8 年 3 月 25 日 (水)

場 所 : 大学研究室棟 B104 会議室

時 間 : 14 : 15 ~ 15 : 30

④ 評価

「オンライン授業における複製・公衆送信・伝達に関する『やってはいけないこと』と『授業の中でやってよいこと』パンフレットの配付」については、例年通り新任教員への配付を実施した。オンラインで扱う資料が多い現状に照らせば、著作権に関する基本的な留意事項を確認する資料として、一定の意義があったものと考えられる。「オンライン学修支援の動画」については、教員用 Bb 上に掲載しており、必要に応じて教員が参照できるようにした。

本年度は、教育学科の教員と乳幼児発達学科の教員が、相互の教育課程上の課題を認識し合うことを一つの目標とした。教育学科側の話題提供として文部科学省初等中等教育局教育課程課長武藤久慶先生による講演を、乳幼児発達学科側の話題提供として大豆生田啓友教授による講演を位置づけ、両学科それぞれの関心と課題を共有する機会とした。昨年度以降、初等中等教育における学習指導要領をめぐる議論は本格化しており、こうした社会的な動向を踏まえつつ、本学教育学部における教育の展開についても検討を進める必要がある。その意味で、教育学部として、社会の動向に広く目を向けた FD 研修を継続的に企画・提供していくことが求められる。

また、LMS の導入に伴うハンズオン形式の講習については、参加した教員からおおむね肯定的な反応が見られた。次年度当初からの運用開始が予定されている一方で、現時点では教員間で操作の習熟度に差があることもうかがえる。こうした喫緊の実務的課題に応えることも、FD 研修の重要な役割の一つである。今後も、教育学部教員のニーズをくみ取りつつ、実際の授業運営に資する効果的な FD 研修を企画し、提供していくことが求められる。

(2) 学生による授業アンケート

【通学課程】

① 概要 (目的を含む)

学生による授業評価 (教育学部では「リフレクションシート」と称す) を全授業で実施する。集計結果は学部全体の平均と比較できる形として各授業担当者にフィードバックされ、新学期に向けて授業改善につなげるものとする。また学部・学科・学年別の集計結果の傾向や課題を学部全体で共有することを目的とする。

② 到達目標

専任教員、非常勤講師が担当するすべての授業において学生によるリフレクションシートを実施する。実施した授業評価の集計はデータ分析と集積を行い、教員の授業改善

および学生の傾向や課題の共有につなげる。

③ 活動内容

専任教員、非常勤講師が担当する教育学部すべての授業において、授業アンケート（リフレクションシート）を実施した。

④ 評価

令和 7 年度の授業アンケート結果については、数値結果と自由記述を FD 委員会で共有し、学部全体として把握すべき傾向と課題を確認した。設問別では、前年度に引き続き予習・復習時間に関する項目が相対的に低い傾向にあったが、授業形態の違い、授業特性、学生の学習時間に対する意識差に加え、回答率の影響も考えられるため、数値のみで一律に評価すべきではない。特に、授業アンケートの回収率が十分とはいえず、結果が一部の回答傾向に左右される可能性があることから、数値の独り歩きを避け、自由記述や授業の実情と併せて多面的に解釈する必要がある。回答率が向上すれば、結果はより適正化され、現在よりも授業の実態を反映したものになると考えられる。

自由記述では、授業の進行や説明が学生にとって分かりにくい、あるいは授業時間の延長が移動時間等に影響するといった、授業運営上の課題が指摘された。学生は授業内容そのものに加え、授業の見通しの示し方や時間管理などの運営面にも関心を寄せていることが確認された。一方で、自由記述は課題指摘に偏りやすく、肯定的な意見は記載されにくい傾向がある。また、学術的負荷の高い授業では評価が相対的に伸びにくい面がある一方、その専門性を積極的に評価する学生もいることから、上記で指摘したように数値の独り歩きを避け、授業の性質や到達目標を踏まえて解釈することが重要である。授業アンケート結果のみで対応するというよりも、授業運営課や学生支援センターに寄せられた相談に対して対応することが肝要である。

個別の自由記述において改善の必要性が認められた授業については、例年、教務主任が関係教員と面談を行い、改善に向けた意見交換を実施している。また、学部全体で共有すべき課題については、FD 委員会で確認の上、学部全体にフィードバックすることになっている。

今後は、授業アンケート回収率向上のための周知・実施方法の改善について、教育学部内で呼びかけを行う。

【通信教育課程】

① 概要（目的を含む）

スクーリング授業において、学生による授業評価を全科目において実施し、集計結果は各授業担当者にフィードバックする。目的は、各授業担当者が授業改善につなげることにある。

② 到達目標

- ・ 専任教員、非常勤講師を問わず、すべてのスクーリング授業において学生による授業アンケートを実施する。
- ・ 実施した授業評価のデータ分析と集積を試み、教員の授業改善、また学生の傾向や課題を共有する。

③ 活動内容

- ・開講されたスクーリングにおいて、専任教員、非常勤講師の全教員が、担当する全ての授業（科目）について、オンラインでの授業アンケートを実施した。
- ・質問内容は、昨年と同一のものを使用し、自由記述欄も設けた。

④ 評価

授業評価の結果としては、各設問とも概ね高い評価を得た。各授業の評価結果は、担当教員本人に配付し、結果と課題を共有した。

通信教育課程では、対面、オンライン、ブレンディッド（オンライン＋対面）と複数の形態でのスクーリングを提供している。そのような複数の形態を設けている通信教育課程だからこそ、今後、それぞれの形態によるメリット・デメリットについても整理していきたいと考える。

また、生成 AI の普及により、以前とは異なる状況が生じてきた。通信教育課程において、学修を深めるための生成 AI の活用は認めているが、試験における使用は認めていない。この点、学生に方針を周知するため、ICT 教育研究センターと共同で対策を進めているところである。

（3）教職員相互の授業公開と参観

【通学課程】

令和 7 年度は、全学 FD においてすでに授業実践に関する報告が盛んに行われていること、授業参観よりも授業デザインに関する情報提供の方がニーズの高いことから、授業参観に代えて教育系答申の情報共有を行った。「教育学部の教員養成系の授業に関連した最新の教育答申に関する情報共有」で最新の教育系答申に関するデータの共有を行い、教員各自が授業デザインに最新の知見を反映させる仕組みを整えた。

【通信教育課程】

通信教育課程においても同様に授業参観の実施は見送ったが、代わりに上記の授業公開に変わる FD を通学課程と共同実施し、教員各自の授業に最新の教育動向を反映させるよう努めた。

（4）FD 研修

【通学課程】

1) 「全人教育鹿児島研修」

① 概要

全人教育研究センターが主催する研修旅行として実施。まとめ役は全人教育研究センター長の今尾佳生教授。本学建学の理念であり、また設定される教育課程の根拠でもある全人教育成立の背景を、創立者小原國芳の生涯の軌跡を探訪する。本年度は特に創立者の幼少年期から青年前期を過ごした鹿児島の地を实地踏査する。

② 到達目標

1. 小原國芳の生まれ育った地の歴史・地理的特徴を実際に見聞することを通して、創設者の生涯、及び全人教育の理念の成り立ちに関する理解を深める。

2. 目標1の過程で、全人教育に関する学びと研究のための新たな課題を見出す。

③ 活動内容

令和8年2月26・27日に実施。26日は鹿児島到着後、昼食を済ませてからチャーターしたジャンボタクシーにて鹿児島市内へ。昨年と同じ運転手であったため、効率的に視察を行うことができた。例年通り、西南戦争の旧跡、鹿児島郵便局や鹿児島師範学校跡である現鹿児島市立名山小学校を見学し、校長の話を伺った後、甲南の日本基督教団鹿児島教会へ。小原國芳の宗教観についての意見交換ができた。

27日は最初に枕崎市の桜山小学校を訪問。校長と教頭に挨拶の後、校内廊下に掲示されている小原國芳の書を見学。久志へ向かう途中で坊津歴史資料センター輝津館に立ち寄り、坊津町の歴史民族的背景について学ぶ。久志到着後、玉川学園通りを通して生誕地公園へ。創立者の墓参を実施。今回は小原家の菩提寺である浄土真宗本願寺派廣泉寺に参拝し、小原國芳の寺号と「慧眼見眞」の掲額や、そして晩年に寄贈されたチャイム付き時計を実見することが出来た。この時計が寄贈された経緯については詳細が分かっていなかったが、今回会うことができた坊守氏の話から、この件に関して新たな情報を得ることができた。その後、昼食を挟んで加世田に向かい、國芳養家の旧鰻坂邸跡を見学し、帰路に着く。基本的に、昨年度の順路を踏襲した。

④ 評価

1. 理解の進化に関して：

*小原國芳の宗教観への洞察：

日本基督教団鹿児島教会にて、特に楽器等の講話を聴くことができ、國芳の宗教観について新たな視点や理解を得ることができた。

*菩提寺における実証的確認：

小原家の菩提寺である廣泉寺において、國芳の寺号や「慧眼見眞」の掲額、さらに晩年に寄贈されたチャイム付き時計を実際に確認することができた。

*時計寄贈経緯の解明：

これまで詳細が不明であった廣泉寺への「チャイム付き時計」寄贈の経緯について、坊守氏の証言により、その背景に関わる重大な情報を入手することができた。

2. 新たな研究課題に関して：

*時計寄贈に関する重大情報の精査：

廣泉寺の坊守氏から得られた「時計寄贈の経緯」に関する情報の事実確認、および関連資料の探索。

*宗教観の更なる体系化：

鹿児島教会での知見を踏まえた、小原國芳のキリスト教と仏教（浄土真宗）が交差する独自の宗教観についての深化。

*桜山小学校等に遺る書画の文脈調査：

今回見学した桜山小学校の書など、各地に掲示されている國芳の筆跡や記念物の設置背景に関する詳細な調査。

3. その他：

新任教員などは初めての鹿児島探訪が多かったが、全員大変充実した研修旅行であっ

た旨を事後感想とされていた。

【通信教育課程】

① 概要（目的を含む）

本課程では、教員数が少なく独自の FD 研修を実施するのが難しいため、随時各種の学外 FD 研修に関わる情報を提供する。

② 到達目標

本学の全学で行われる FD 研修のほかに、専任教員の各自の問題意識にあった学外 FD 研修に参加したり、関連する情報を得たりすることで、日々の教育活動の向上を図ることを目的とする。

③ 活動内容

例年の取り組み「夏スク対面授業において工夫していること」を通信教員全員で相互共有することで、通信教員の授業向上に役立てた。また、生成 AI の普及に関連して、レポートの作成や試験の解答で生成 AI が利用されないよう、テキスト内容と紐づけた出題をする等の工夫を取ることが共有された。

③ 評価

今年度の夏スクーリングの授業アンケート結果も、引き続き高い評価を得ることができた。これは各教員の授業向上のための努力の成果であると考えられる。

4 昨年度（令和 6 年度）に提案された予定・課題の達成度について

【通学課程】

学部で予定された研修内容は、おおむね予定通り実施された。2 月に実施した FD 研修が、対面からオンライン対応に切り替わった（※その可能性は事前に告知済み）ことと、学内の LMS 切り替えに伴う臨時の FD 研修を、3 月に差し込んだのみである。

オンデマンド型という研修実施の方式については、令和 6 年度からの継続実施をする中で、教員間に好評であった。対面で全員集めて聞かせる方式よりも、個々人の課題に応じてじっくり聞くことができるオンライン方式の方が、より充実した研修となり得ることを示した。次年度以降も、オンライン実施による研修の方法を踏襲し、学部の課題に応じた FD 研修を実施していく。

【通信教育課程】

スクーリングの授業アンケートは、例年通りに実施しており、おおむね高い授業評価を維持することができた。ただし、テキスト学修科目については、学生のニーズを汲み上げる方法をまだ模索することができておらず、今後の検討課題となる。

次年度以降、オンデマンド動画の提供による授業形式が増加するため、授業アンケート等を利用した学生の満足度のモニタリングは、継続的に実施する必要がある。

5 今後（令和 8 年度以降）の予定・課題について

【通学課程】

前年度に引き続き、日常の教授内容や方法の更なる検討と研鑽を重ね、本学の建学の理念に基づき、今日の社会の要求に応じることのできる人材育成に取り組むことが重要である。授業アンケートにおいては、項目内容の改善として全授業に当てはまる項目の設定は困難ではあるものの、実習や演習、アクティブ・ラーニング、少人数の授業など授業体系に応じた項目を加えるなども今後の課題の一つである。また、近年の生成 AI の活用に適応できるように、ChatGPT などの利用や制限等についての研修も必要となるが、そうした教育技術的な内容は全学の FD で実施できるよう働きかけていきたい。

また、全人教育研究センターにおける FD 研修は、引き続き新任教員に優先的に鹿児島研修等を実施していきたい。

最後に、次年度は研修内容をより精査し、教員の負担が少なくニーズに沿った研修を行ってきたい。具体的には、従来の一斉教授型から情報共有・個別最適型の研修会への転換を進めていく。

【通信教育課程】

スクーリング科目については引き続き授業アンケートを実施する。令和 8 年度も対面でのスクーリングとオンラインでのスクーリングの双方が予定されていることから、それぞれのスクーリングにおける課題を明らかにするために、スクーリングの形態による比較や同一科目・同一教員の経年経過の分析などを試みたい。また、テキスト学修科目についても、学生のニーズをすくい上げることができ、なおかつ教員の指導方法や授業の改善にもつなげられる何らかの方法を検討したい。

一方で、生成 AI の普及に伴う学習課題の出し方やテストの出し方といった対応と、テキスト履修を無理なく実施するためのオンデマンド教材の制作、そのための研修が課題である。生成 AI の普及に伴う学修指導については、ICT 教育研究センターと合同で対策を検討中である。また、令和 6～7 年度にかけて多くのオンデマンド教材を制作することができた。引き続き、教育効果を高めることを目的としたオンデマンド教材の制作に取り組んでいくことが求められる。

§ 芸術学部

1 FD 活動への取組理念・目標

先を見通せない VUCA 社会は産業・就業構造などの変化が常に進行する。「芸術による社会貢献の実践力を育成する」をミッションとする芸術学部として、変化する社会の捉え方と貢献の仕方を常に検討して柔軟に対応していくことが望まれている。政府が掲げる Society5.0 社会は「経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会」と定義されており、芸術分野は新産業分野でも期待される感性や創造力などの育成と深く関わっている。今後、社会の発展や改善に不可欠なニーズとしての芸術学部の人材養成はますます重要となることが予想される。

学部ミッションを達成するためには、常に芸術と産業分野や地域社会との関わりを意識しながら、ESTEAM 教育の推進をはじめ教員養成課程の充実など、カリキュラムや教授法の改善・開発を行う必要がある。また、入学生の資質や能力などの動向も踏まえた学修支援体制の構築や、学生を主体とした授業方法の研究および総合的な学修環境を形成するプロジェクト型授業や外部機関との連携授業を推進することも重要である。そのためには柔軟性や機動性をもった組織として教員構成を編成しなければならない。教員たちが目標や課題を共有し、協働して教育活動を推進・改善できるチーム力形成が重要である。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

芸術学部長を中心とした主任会の構成員及び芸術学部 FD 担当が FD 活動の中核メンバーである。定期開催の主任会と主任研修会が中心となり教育課題の共有や分析を行い、目標や課題の設定および改善方策などの基本方針を検討する。そして、中核メンバーはもとより、課題ごとの担当教員が報告や成果及び方策等を拡大教授会で報告することなどを通じて、学部全教員が目標や課題を共有し、組織的な取組とする仕組みを構築している。また、各学科の主任は学部 FD の中核メンバーであるので、学科内の取組をまとめることや推進する役割を担い、教授会と学科会が連動して FD 活動を推進させている。主任会構成員および大学 FD 委員会委員は、全学的な課題や情報の収集と伝達及び他学部・他大学における FD 活動の情報収集を行うと共に、学部内の情報共有を図り、FD の組織的活動が円滑に行われる役割を担っている。

3 令和 7 年度の活動報告

(1) 授業アンケートの実施と授業成果報告書の作成

① 概要・活動内容（目的を含む）

令和 7 年度は、芸術学部で開講されている授業（卒業研究など複数のゼミを同じ授業名でまとめられた科目を除く）について春学期、秋学期それぞれ学期末にアンケートが UNITAMA による調査方法にて実施された。今後の授業改善および教育方法の改善に役立てる。

調査対象とした期末段階での対象者数（延べ数）およびアンケート回答率は、春学期

履修者数 4,307 人、回答者数 2,012 人 46.7%、秋学期履修者数 3,917 人、回答者数 1,398 人 35.7%であった。

アンケートの全体概要結果および各科目担当教員の個別アンケート結果詳細の閲覧方法を学部拡大教授会等によって専任教員に周知した。また、総合的な内容については大学のポータルサイトにて公開される。

教員の教育活動の振り返りと成果共有を目的に、学部専任教員・技術指導員（31 名）と非常勤教員（3 名）が令和 6 年度の授業成果を文書化し、芸術学部紀要別冊（授業報告書）としてまとめた。2,000 部作成し、令和 8 年 2 月中旬に学部全専任教員、全非常勤教員、および教育学術情報図書館に配布した。また、芸術学部を受験対象となる高等学校にも次年度発送予定である。授業改善と成果を文書として記録化することで長期的かつ広範に活用することが期待できる。令和 7 年度も引き続き授業成果報告書を作成する。なお、本授業報告者は、教員間の授業参観と同等の効果があるものとして、令和 7 年度授業参観に替える。

② 到達目標

芸術学部 FD 委員会においては、授業アンケートのデータを分析し、学部運営に活かすと共に今後の FD 活動の方向性および学部教育を考える手がかりとする。また、各科目担当者はそれぞれのアンケート結果を参照し、授業の内容と養成人材像との妥当性について点検する。授業成果報告書は各学科の専任・非常勤教員に配付し、全ての教員が専門科目の概要を把握することによって、より緊密な連携を可能とする。

③ 評価

UNITAMA による授業アンケートは個別に結果を確認でき、教員自身が自分の担当する科目を客観的に評価することができるようになった。問題点としてはアンケートに対する回答率の低さがある（春学期 46.7%、秋学期 35.7%）。2 年、3 年、4 年と上級生になるほど、すべての科目でアンケートに回答する意識が低下してくることが原因である。今年度から学生の負担を減らして回答率を上げるため、アンケート調査を学期中、学期末 2 回から学期末だけに変更した。結果、数パーセント数値が上がった。来年度からは設問数を減らして学生の負担をさらに軽減して回答率を増やしていく。

（2）講演会・研修会・ワークショップなど

1)

① 概要

競争的資金獲得に向けた支援体制について（令和 7 年 5 月 29 日（木））

② 到達目標

競争的資金の基本的情報を理解し、資金獲得に向けた学内支援体制を知る。

③ 活動内容

本学研究推進事業部が取り組んでいる競争的資金獲得に向けた支援活動を周知するとともに、芸術分野における競争的資金獲得の事例を紹介する。

④ 評価

芸術学部教授会前の 30 分という限られた時間の中で、本学研究推進事業部の持田さ

ん、本田さんが講師役としてわかりやすく解説をしてくれた。外部資金に関する基本情報、資金獲得に向けた支援体制について、また、芸術学部教員に向けて、他大学の採択事例をジャンル別（音楽・美術・演劇）に教示してくれた。申請および採択経験の有無に関わらず、学部教員全体での研究活動に関する知識獲得と意識向上を達成できたと判断する。

2)

① 概要

玉川の学校劇黎明期のアーカイブ化に向けたヒアリングの実施

令和 7 年 6 月 10 日（火）13：00～15：00

② 到達目標

玉川における学校劇の黎明期の実態把握と資料のアーカイブ化、および岡田陽先生を中心とした玉川の演劇・舞踊教育、および表現教育の総合的な知見をまとめる。

③ 活動内容

令和 7 年 6 月 10 日（火）13：00～15：00 に方勝名誉教授を招聘。おやじさんの書斎にてヒアリングを行った。

④ 評価

ヒアリングの内容は大別すると、小原國芳の理念と「総合学園劇」として、初期の玉川では「学校劇」という狭義の枠組みではなく、幼稚部から大学生までがスタッフワークも含めて協働する「総合学園劇」として実践されていた。小原國芳が掲げた全人教育における芸術教育（美の教育）の理念を、実践として生涯をかけて具体化したのが岡田陽先生であったということが証言された。

また、ドラマ教育への昇華と今後の展望として、岡田先生は海外での視察や実践を経て、従来の学校劇から「クリエイティブ・ドラマ」や児童館における遊びの指導など、児童福祉の観点を取り入れた表現教育へと視座を広げていった。

今回のヒアリングにより、玉川の学校劇は「消滅・衰退」したと考えるのではなく、授業や課題にしなかったことによって、人間の内面を育む本質的な表現教育へと形を変えて発展したことが実証された。今回の証言は、今後の玉川の演劇教育研究において極めて重要な基盤となる。次年度以降の発展的な共同研究およびアーカイブ事業の継続、さらには全人教育センターとの連携などへと結びつく可能性のある重要な取り組みであると評価できる。

3)

① 概要

芸術学部安全対策研修「安全な教育・研究環境のための実践的防災・救命スキルの習得」

芸術学部では、教育・研究活動を安全に遂行するため、教職員の防災意識および初期対応力の向上を目的として安全対策研修を実施した。本研修では、学内の自営消防組織（地区隊）の体制や各教職員の役割について理解を深めるとともに、心肺蘇生法や AED の使用方法など初期救命対応に関する基本技能の習得を目的とした。これによ

り、有事の際に教職員が迅速かつ適切に行動できる体制づくりを進めるとともに、学内全体の安全意識の向上と安心して教育・研究活動に取り組める環境づくりにつなげることを目指した。

② 到達目標

本研修では、①自営消防組織の構成や自身の役割を正しく理解し、有事の際に適切な行動がとれること、②心肺蘇生法や AED の使用法を身につけ、初期救命対応を自信を持って実践できること、の二点を到達目標として設定した。

③ 活動内容

本研修は「芸術学部安全対策研修―安全な教育・研究環境のための実践的防災・救命スキルの習得―」をテーマに実施した。講師には総務部総務課（セキュリティ担当）の坂田招彦氏ほかを迎え、令和 7 年 6 月 26 日（木）15:15～15:45、および 9 月 25 日（木）15:15～15:45 の 2 回、玉川大学大学研究棟 B104 にて実施した。研修では、第一回では、自営消防組織（地区隊）の体制や教職員の役割について講習を行い、学内の防災体制や災害時の行動指針について理解を深めた。続いて、第二回では、初期救命訓練として、心肺蘇生法（胸骨圧迫）の実技や AED の使用方法について実践的な指導を行い、救命対応の基本的手順を確認した。講義と実技を組み合わせた形式により、緊急時の対応を具体的に想定しながら学ぶ機会となった。

④ 評価

本研修は、教職員が災害や緊急事態に備えるための基礎知識と技能を確認、習得する機会として有効であった。特に、心肺蘇生法および AED の使用方法については実技形式で実施したことにより、具体的な対応手順への理解を深めることができた。

参加人数は、令和 7 年 6 月 26 日（木）実施が 43 名、9 月 25 日（木）実施が 41 名であった。今後も継続的に安全対策研修を実施し、教職員の防災意識および初期対応力の向上を図るとともに、学内の安全管理体制の強化につなげていく。

4)

① 概要（目的を含む）

本 FD は、「受験者数日本一を引き出すために大学のなにを変えたか」をテーマに、千葉工業大学における入試改革および大学改革の事例を共有し、本学における募集力向上や教育改善に資する知見を得ることを目的として開催した。千葉工業大学では、かつて募集力の弱さや留年・退学率の高さといった課題を抱えていたが、コロナ禍を契機として入試 DX を推進し、「受験生ファースト」を掲げた入試制度改革、広報戦略の強化、大学ブランディング、教職協働による教育改善などを進めた結果、受験者数の大幅増加や退学率の改善などの成果を上げ、受験者数日本一を達成した。

本 FD では、これらの取り組みについて講演を通して共有し、大学組織運営や教育改善に関する示唆を得る機会とした。

② 到達目標

本 FD の到達目標は以下の通りとした。

- ・上演実習 入試改革、広報戦略、教職協働による大学改革の具体的事例を理解する。

- ・募集力向上や大学ブランディングに関する視点を獲得する。
- ・留年・退学率の改善に向けた教育改善および授業設計の取り組みを学ぶ。
- ・教職員が大学の課題解決に向けた視点や意識を共有する。

③ 活動内容

令和7年9月17日（水）にFD講演会を開催した。講師として、千葉工業大学入試広報部グループ長 出水雄祐氏および同大学学長補佐・先進工学部教授安藤真也先生を招き、入試改革、受験生ファーストの入試制度、大学ブランディングおよび広報戦略、教職協働による教育改善等について講演が行われた。講演後には質疑応答および情報交換会を実施し、参加者同士で意見交換を行った。参加者は芸術学部教員に加え、他学部教員や事務職員など学内の多様な部局から参加があり、学内横断的なFDとして実施された。会場参加者は72名、オンデマンド視聴者は91名で、延べ163名が参加した。

④ 評価（要データ）

講演内容が各参加者の課題解決の糸口として役立ったかについて、5段階評価によるアンケートを実施した。回答者は36名であり、平均評価は4.6と高い評価であった。属性別平均は、技術職員5.0、事務職員4.9、芸術学部以外の教員4.7、アート・デザイン学科教員4.6、演劇舞踊学科教員4.5、音楽学科教員3.7であった。

自由記述では、退学率・留年率改善の取り組みや広報戦略のスピード感、「できない理由ではなく、どうすればできるか」を考える組織文化などに関する示唆が得られたとの意見が多く見られ、本FDが大学改革や教育改善に関する理解を深める機会となったことが確認された。

5)

① 概要

再課程認定に向けての活字業績作成のポイント

② 到達目標

教職科目を担当している教員および担当する見込みのある教員を対象とし、再課程認定の活字業績作成（研究ノートや実践報告の執筆）の要点を把握し、執筆につなげられる。

③ 活動内容

1. 教師教育リサーチセンターの職員より再課程認定のおおよその流れについて説明する。（10分程度）
2. 再課程認定の審査に耐えうる活字業績作成に結びつけるための要点について説明する。（30～40分程度）

④ 評価

前年度に実施した「芸術系教員のためのアカデミックスキル Vol.2」を継続実施する計画を立てていたが、教職担当の業績見直しについて、文部科学省から新しい動きが出てきたため、上記計画を次のとおり急遽変更した。

参加対象者は、音楽学科およびアート・デザイン学科の教職科目担当者と、担当候補

者である。当日の参加者は 19 名である。その内訳は、音楽学科 9 名（専任教員のみ）、アート・デザイン学科 10 名（専任教員 8 名、非常勤教員 2 名）である。

研修実施日は、多くの教員が参加しやすい拡大教授会の日（令和 8 年 3 月 19 日（木）10:00-11:00）に設定した。実施時間は、1 時間である。

今回の研修は、文科省より見直しに関する具体的な方針が示されていない中での実施であったため、暫定的な話となった。しかし、活字業績は 1 年で簡単に執筆できるものではない、実技教員の中には執筆を得意としない教員もいる、通常業務の時間的調整の厳しい教員がいる等の担当教員の現状を踏まえ、早期に業績作成を意識してもらうために今回の研修を実施した。

教師教育リサーチセンター職員の後石原環氏に文科省への書類提出の流れや求められていること等、現時点で判明していることを説明いただき、参加者には大体の概括を把握してもらった。その後、高橋愛教授より執筆していく上での基本的な要点を説明し、質疑応答を行なった。

質疑応答では、具体性のない中で執筆していく難しさや、実技教員が執筆していくハードルの高さ、カリキュラム再編成に関わる担当教員の変更、退職間近の教員の問題等についての発言があった。

事後出欠確認アンケートにおいては、教職 FD として今後取り組んでほしいことを質問した。回答には次のものがあつた。（転記）

- 授業での実践のまとめかた、複合的な科目のまとめかた など？
- 学習指導要領、教職シラバス作成についてのポイントをおさらいしておきたいと思いました。
- 学科別での教職課程勉強会
- 具体的な申請手続きが決まったら、またお願いします。
- 学習指導要領の勉強会や実践演習

（3）調査・研究など

① 概要

学校劇復活上演に向けた資料発掘作業 令和 7 年 9 月 16 日（水）～20 日（日）

② 到達目標

広島高等師範学校附属小学校『天の岩戸』の上演資料収集

③ 活動内容

原爆被害などによって多くの一次資料は失われている。実際に関係施設に赴き、これ以上はない、というところまで資料収集を行う。

期間：令和 7 年 9 月 16 日（火）～令和 7 年 9 月 20 日（土）

行先：広島県広島市、東広島市

詳細

（1 日目）東京―広島へ移動（新幹線）

・ 広島大学千田キャンパス（東千田公園）：広島高等師範学校附属小学校の所在地
確認、周辺情報の共有

- ・広島県立図書館＝県所有文献の調査、資料所在の聞き取り

- ・意見交換と調査日程の確認と更新

(2日目)

- ・広島大学西条キャンパス（東広島市）での調査研究（終日）

- ・広島大学文書館での文献調査

- ・広島大学文学部小林英起子教授、溝渕園子教授と面会、ヒアリング

- ・意見交換と調査日程の確認と更新

(3日目)

- ・広島市公文書館（広島市中区）での文献調査

- ・広島大学千田キャンパス（東千田公園）の再調査：今回判明した位置情報などの

現地確認

- ・広島大学附属小学校訪問、『学校教育』編纂室、校長室にて文献調査

- ・資料整理

(4日目)

- ・資料整理とディスカッション

(5日目) 広島―東京へ移動

④ 評価

本調査では、広島高等師範学校附属小学校において 1919 年に上演された学校劇『天の岩戸』に関する資料の所在調査および収集を実施し、現存する関連資料の状況を把握することができた。広島期の資料は原爆被害等により散逸しているものが多いが、学校要覧、学芸大会関連資料、写真資料、関連文献など、上演の実態を示す資料を確認・収集することができた。

これらの資料により、当時の上演形態や舞台構成、教育的意図を検討するための基礎資料を整理することができ、学校劇成立期の実践の具体像を再検討するための研究基盤を整えることができた点は、本調査の重要な成果である。本研究で収集した資料は、学校劇資料のアーカイブ化および『天の岩戸』復元上演の検討における基礎資料として活用されたとともに、学校劇成立史研究の深化に寄与することが期待される。今後は資料の整理・分析を進め、学校劇成立の思想的背景および舞台実践の構造について、研究成果として発表していく予定である。

なお、本調査で得られた資料の詳細については、今後の研究の進展およびアーカイブ化作業との関係から、本報告では概要の記述にとどめる。

(4) 学外セミナー等への教員派遣

1)

①概要

日本演劇学会 全国大会（広島大学）

②到達目標

本大会の中核テーマである「演技者の役割と創造性」について教育・地域社会・観光との連関を含めて多角的な視点を得ること。

③活動内容

初日午前の開催校企画パネル「演技者の『市民性』を育成する演劇とその可能性」では、地域課題に向き合う市民参加型プロジェクトの実践例が報告され、俳優教育プログラムが持つ包摂力とコミュニティ形成の効果が具体的に示された。午後の特別講演「演劇が想起する——文化的記憶としての『あの夏の絵』と劇中証言」では、原爆体験の証言を舞台上で再構築する方法論が提示され、演劇が文化的記憶の継承媒体となる意義を再確認した。

2日目午前のパネル「観光演劇学の創出に向けて」では、観光資源としての上演芸術を理論化し、来訪者体験と地域経済への波及効果を測定する枠組みが議論された。続くパネル「ドキュメンタリー演劇を／で学ぶ演技者」では、取材や証言の演劇化を通じて俳優が「リサーチャー＝表現者」として育成されるプロセスが検討され、演技教育の新たな指針が示唆された。さらに総会では、戦後八十年の節目を迎えるにあたり、核兵器廃絶に関する声明を学会として発出すべきかどうか提案され、活発な議論が行われた。

④評価

今回の参加により、市民参加・ドキュメンタリー手法を取り入れた俳優教育の実践例、ならびに観光演劇学の理論枠組みを詳細に把握できた。これらは本学科で進める応用演劇ゼミの授業設計や、地域連携プロジェクトの評価指標として直ちに活用可能である。また、広島県内で神楽や市民劇団が世代を超えて演技・音楽を継承し、原爆の記憶を次世代へ伝える創作活動を行っている事実は、演劇が平和教育と文化的記憶の継承装置として果たし得る役割を改めて実感させた。

得られた知見を授業および研究に反映し、学内外の演劇実践と平和教育の発展に寄与したい。

2)

①概要

日本演劇学会 秋の研究集会 参加（芸術観光専門職大学）

②到達目標

テーマ「演劇とその社会的応用」に則した教育、心理臨床、地域文化、観光、福祉など、多様な領域における応用演劇の実践と理論について、社会の中でどのように位置づけるかという多角的な視点を得ること。

③活動内容

1日目の研究発表では、地域資源を生かした文化事業の可能性、当事者演劇が福祉・教育にもたらす影響、若年層の文化実践における演劇的活動の役割、ギリシア悲劇の社会的効用など、社会課題と演劇を接続する研究が複数報告された。また、純粹芸術と応用演劇の境界を問い直す視点や、芸術性と参加型実践の両立に関する問題提起も行われ、応用演劇の概念的整理の必要性が再確認された。

パネルセッションでは、地域の素人演劇が新たな芸能として発展する可能性、ABR（Arts-Based Research）の国内での展開など、学際的なアプローチが共有され、演

劇を研究手法として用いる意義について理解が深まった。さらに、初日の開催校企画として上演された青年団作品の鑑賞では、地域に根ざす劇場文化の実践例が提示され、演劇がコミュニティの文化形成に果たす役割を具体的に把握することができた。2日目は、演劇祭が地域にもたらす価値を扱う企画や、コミュニケーション教育と演劇の接続を扱うパネルを聴講した。特に、教育行政・大学・地域が連携した事例報告から、演劇を活用した教育プログラムの設計や、自治体との協働による文化政策のあり方について重要な示唆を得た。

④評価

今回の参加を通じて、応用演劇の理論的枠組みから地域文化への具体的応用に至るまで、最新の研究動向と実践例を体系的に把握することができた。これらの知見は、今後の教育・研究活動、ならびに地域連携事業や演劇教育プログラムの構築において有益な参考となる。

3)

①概要

大学の音楽科教育に関わる情報交換会

令和7年10月22日（水）全国理事会、23日（木）大学部会開催

②到達目標

他校種との教育連携などについて、他大学の教員と意見交換を行い、現状の問題点を把握し、今後の大学に於ける音楽教育授業の実施に活かす方向性を見出す手立てとする。本年度は佐賀県で小中高の研究会と同時に行われた。

③活動内容

本年度の大学部会大会は大学教員による研究発表が行われた。東京藝術大学教授、愛知教育大学教授、国立音楽大学教授、東京福祉大学准教授、以上4名 玉川大学からは、常任理事の中村岩城が参加した。

④評価

今年の大学部会研究発表会はクラブ活動の地域連携における提案（昨年からの継続）、音楽科ジストニア研究、邦楽器（篠笛）の音楽教育における活用について、口伝としてのわらべ歌標準語化、令和の時代に取り組まなければならない分野の内容と、また日本の伝統音楽の継承という内容で大変有意義なものであった。次年度は大学のみの開催。

東京音楽大学で行われる次年度の大学部会大会に期待したい。

4)

①概要（目的を含む）

本FDは、本学芸術学部の学生が進学可能な大学院の教育内容や環境を確認し、今後の進学指導および教育改善に資する知見を得ることを目的として実施した。本学芸術学部は学際的・実践的な学びを特徴としているが、学内に大学院が設置されていないため、大学院進学を希望する学生は他大学へ進学する必要がある。そのため、本学の教育内容と親和性の高い大学院を把握し、進学先としての適合性を検討することが重要となつて

いる。そこで、本学卒業生が進学している秋田公立美術大学大学院を訪問し、修了作品展の視察、教員および学生からの聞き取り、施設環境の確認を行い、本学学生に適した進学先としての可能性を調査した。

② 到達目標

本 FD の到達目標は以下の通りとした。

- ・ 本学学生の学びと親和性の高い大学院教育の内容を把握する。
- ・ 大学院の制作・研究環境や教育体制を確認する。
- ・ 卒業生の修学状況を把握し、今後の進学指導に活用する。
- ・ 本学学生の大学院進学支援に資する情報を収集する。

③ 活動内容

令和 7 年度 FD 活動として、秋田公立美術大学大学院および修了作品展の視察を実施した。視察では、秋田県立美術館など複数会場で開催されていた卒業・修了作品展を見学し、作品内容や展示方法、教育方針等を確認した。また、大学院施設（研究棟、アトリエ棟等）の視察を行い、制作環境や教育体制について調査した。さらに、本学卒業生の修学状況について、教員および当該学生から聞き取りを行った。加えて、秋田市および角館における美術館や文化施設等の芸術・文化資源を確認し、学生が学びを深める環境についても調査した。

④ 評価（要データ）

秋田公立美術大学の卒業・修了作品展では、4 会場において計 124 名の学生の研究・制作が展示されており、学生が広い展示空間を活用して作品発表を行っていることが確認された。また、大学院には専用校舎が設けられ、制作スペース、デスクワークスペース、会議室等が整備されており、制作と研究を両立できる環境が整っていた。さらに、助手による技術支援体制や地域文化施設との連携も確認された。

これらの調査結果から、秋田公立美術大学大学院は、本学の教育方針である領域横断的・実践的な学びとの親和性が高く、本学学生の進学先として適した教育環境を備えていることが確認された。また、本学卒業生の研究および作品も高い評価を得ており、本 FD 活動は今後の進学支援および教育改善に有益な知見を得る機会となった。

4 昨年度（令和 6 年度）に提案された予定・課題の達成度について

昨年度に提案した令和 7 年度 FD 活動計画はほぼ達成することができた。次年度に向けて新たに、講演会・研修会・ワークショップや学外セミナー等への教員派遣など FD の取り組みの方法を再度検討することとしたい。

実施された各 FD 活動に関しては逐次、芸術学部拡大教授会により報告された。

5 今後（令和 8 年度以降）の予定・課題について

学部改組から 5 年が過ぎて新学科も落ち着つき、対面活動の正常化により大学生活も充実してきた。これからも、新学科での教育活動の成果、課題をもとに、よりよい学部教育をおこなっていくことが重要である。

今後も、専任、非常勤教員全体の意識向上や各学科・各プロジェクトの横断的な連携はもとより、社会との連携を図り、理論と実践の往還による教育体制を推進し、現代ニーズに適合した人材養成機関と研究機関としての機能を高めるためにも、積極的かつ継続的に教員の資質能力やチーム力の向上努力を一層推進する。

§ リベラルアーツ学部

1 FD 活動への取組理念・目標

本学部では、①学士課程教育の質保証、②学部・学科設置の趣旨と教育目標、③実効的なリベラルアーツ教育の実現、という観点から日頃の教育研究活動の改善へ向けた FD 活動を展開することを目標としている。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

本学部における FD 活動の組織構成・役割は以下の通りである。

学部長・各主任…学部における FD 活動の方針について提案・助言する。

FD 担当…学部における FD 活動全般をコーディネートする。また大学 FD 委員会で審議・報告された内容を教授会にて報告する。

学部専任教員対象の FD 研修会をコーディネートする。

※この他、所属教員全員が主体的に FD 活動に取り組む体制がとられており、教育内容・方法に関する情報交換は教員間で日常的に行われている。

3 令和 7 年度の活動内容

(1) 初年次教育の方向性に関する研修

① 概要（目的を含む）

リベラルアーツ学部の人材育成に資する、より効果的な 1 年次研修・初年次教育を実践するために、今年度の実施結果を共有し、その振り返りをもとに次年度以降の 1 年次研修の具体的プランを検討する。また、研修と連動した初年次教育のあり方についても意見交換を行う。

② 到達目標

次年度以降の 1 年次研修および初年次教育カリキュラムを改善することができる。

③ 活動内容

4 月～翌 3 月に実施した。参加者は 1 年生担任教員で、必要な回には各主任が参加した。具体的には以下の各項目について検討を行った。

- ・「一年次セミナー」のクラス運営と学修・生活に関する早い段階での教育および指導・支援方法
- ・新入生研修箱根・小田原プロジェクトの内容と指導方法
- ・次年度以降の新入生研修の内容と実施方法
- ・秋学期「一年次セミナー102」の内容と指導方法

④ 評価

入学もない 1 年生が大学での学修に慣れ、自発的な個々の学びを着実に計画・実践していくために、「一年次セミナー」で提供すべき内容について担任教員を中心として丁寧な議論を重ね、1 年生の指導とサポートをきめ細かく行うことができた。箱根・小田原プロジェクトやコスモス祭学部展などの発表の場を「一年次セミナー」で活用し、学部内の教員と学生のコミュニケーションを促進し、本学部の多様な学問分野についての知

識を得、それを学内外へ発信することによって、大学での対面機会が限られていた 1 年生の学部所属意識を高めることにもつながった。以上のように、今年度においても、効果的な初年次教育カリキュラムを整えることができた。

(2) 「二年次セミナー」の教育内容と方法の改善に関する研修

① 概要（目的を含む）

本学部 2 年生必修科目「二年次セミナー201」および「二年次セミナー202」の教育内容と教育方法を検討し、望ましい 2 年次教育のあり方を考える。

② 到達目標

この科目の教育内容・方法を具体的に改善することができる。

③ 活動内容

春・秋学期中に 2 年生クラス担任会を開催し、「二年次セミナー」の教育内容・方法を改善するためディスカッションを行った。今年度は以下の点を中心に検討を行った。

- ・アカデミックリーディングおよびアカデミックライティング、ディスカッションのさらなるスキルアップの方法
- ・学部での 3 年生以降のより専門的な学びに向けた指導方法
- ・学内にとどまらない多様な学びや経験に触れるための情報提供のあり方、特に海外留学やキャリアプランニングについて

④ 評価

2 年次教育のあり方に関して教員間で問題意識を共有し、実際の教育内容と方法の改善を進めることができた。「二年次セミナー」春学期でのアカデミックリーディングを、秋学期のアカデミックライティングに接続させ、プレゼンテーションをグループワークで実施し、学修をさらに発展することができた。

(3) 令和 7 年度リベラルアーツ学部 FD 研修会

① 概要（目的を含む）

リベラルアーツ学部教育活動の点検、本学部共同研究報告、新年度教育計画、学部教育の今後の展望に関する意見交換等を行う。学部教育目標や教育内容・方法、研究活動のあり方について教職員間で認識を共有することができる。

② 活動内容

令和 8 年 2 月 18 日（水）に大学教育棟 2014 620・621 教室にて専任教員による研修会を実施し、以下の項目について集中的に検討した。

（ア）生成 AI を用いた授業事例報告

（立野先生、加茂先生 20 分×2 + 質疑応答 10 分）

（イ）海外オフキャンパス科目視察報告

（ダグラス先生、下村先生 20 分×2 + 質疑応答 10 分）

（ウ）Web Class& Teams の講習（それぞれの特性の比較を含めて）

（ICT 教育研究センター・磯田氏、事前に質問収集）

（エ）学部英語科目に関する検討

(オ) フィールドごとの検討会

(カ) 「一年次セミナー」「二年次セミナー」「学際アカデミックスキルズ（リーディング）」の検討

③ 評価

(ア) 「生成 AI を用いた授業事例報告」では導入例が具体的に示され、それを踏まえて各教員が今後どのように生成 AI と付き合っていくか議論が行われた。中では、生成 AI をものを考える際の壁打ちにたとえ、導入を促す意見も見られたが、それに対して、本来壁打ちの相手は授業の内容そのものであるべきではないかという意見も出た。今後各自がさらに意見を深めていくことが必要であろう。

(イ) 台湾と韓国の視察について報告が行われ、両国とも近い将来科目を設定することが実現可能であるという点、先生方に了解された。一方、学部全体でオフキャンパス科目を活性化していくための手段として、選択必修化していったらどうかなどの提言が出された。

(ウ) 「Web Class& Teams の講習」は ICT 教育研究センターより 3 名おいでいただき、懇切に説明が行われた。先生方の導入に対する不安な点がかなり解消した。

(エ) ヒューマンフィールド、カルチャーフィールド、ソサイエティフィールド、STEAM フィールドの 4 つのフィールドごとにグループ分けを行い、グループごとに本年度のフィールドの運営と次年度の方針とについて討議がなされ、有意義な意見交換の場となった。

(オ) 「一年次セミナー」「二年次セミナー」「学際アカデミックスキルズ(リーディング)」に関して、今年度の運営について振り返りを行い、使用する教材やスケジュールだけでなく、授業内容及び方法について忌憚なく話し合うことで、次年度に向けた授業改善の具体的なイメージを得ることができた。

以上の点から、きわめて意義深い研修会であったと評価できる。

(4) 令和 7 年度リベラルアーツ学部臨時 FD 研修会

① 概要（目的を含む）

リベラルアーツ学部では 2023 年度より全面的なカリキュラム改正を行った。今年度 3 年生として受験をした学生たちが、新カリキュラム第一期生となる。

新カリキュラムでは、旧カリキュラムが 7 つのメジャーの内から 1 つのメジャーを選択する形であったのに対して、新カリキュラムでは 7 つのメジャーを 4 つの「フィールド」(human society culture STEAM) に再編成し、しかもその内から二つを **must** で選択する分野横断的な学修によって、物事を複眼的な視野でとらえ、それらを客観化していく力を身につけさせていくことが一つの眼目となっている。

なお、ディプロマポリシーでは、次のように書かれている。

A ユニバーシティ・スタンダード科目を中心に幅広い履修を通して基礎的な学修力を高め、批判的な思考を通して問題を探求する能力を身に付け、自身の将来について明

確な展望を持つ。

B 自身が選択した2つのフィールドにおける体系的な学修を軸に、4年間の講義・演習・実習や『リベラルアーツプロジェクト』を通して、自ら課題を設定し、分析し、解決する力を身に付ける。

C 他フィールド、他学部の科目履修を含めた分野横断的な学修により、複眼的な視野を高め、多様な価値観を認識し、自らの価値観を形成し、自分の考えを相手に理解してもらえるコミュニケーション力を身に付ける。

D 現代に生きる地球市民のひとりとして、多様な人や文化と共生でき、課題解決のために、知識を現場に活用する力、行動する力を身に付ける。

そこで現在3年次の学生が、1年次に比べて上にあるようなポリシーにうたわれた部分の力を伸ばすことができているかどうかを検証するために、次の2点について1年次から3年次の間で伸長があったかどうか、今回のご報告の中で見解をお聞かせいただけるよう依頼した。

- ・複眼的な視野を高め、多様な価値観を認識できる力が育まれたか。
- ・論理的・批判的思考力が育まれたか。

② 活動内容

今年度は以下の要領で実施した。

令和7年11月27日(木)16:00~16:50 大学研究室棟B101会議室にてベネッセの講師により、GPS-Academicの結果報告とその解説についてのレクチャーが行われ、それに基づいて専任教員から質疑応答がなされた。

③ 評価

1年次と3年次の結果を比較すると、「思考力」全項目と「レジリエンス」スコアが新カリキュラムの下、3年次になって上昇していることが確認された。具体的には、「思考力総合」+6.3(内訳は批判的思考力+6.7、協働的思考力+6.2、創造的思考力+6.3)、「レジリエンス」は+2.1ポイント、1年次に比べてそれぞれ上昇した。

この研修により、リベラルアーツ学部におけるGPS-Academicの結果の現状とその傾向についての認識が深まると同時に、活発な意見交換を通じて、今後の方向性についての検討を進めることができた。

(5) リベラルアーツ学部防災訓練

① 概要(目的を含む)

大学教育棟2014等の防火施設、避難誘導方法等について、実践的に学ぶ。

② 到達目標

教育・研究現場において、災害発生時の迅速かつ的確な対処ができるようになる。

③ 活動内容

令和7年12月18日(木)16:00~17:00 大学研究室棟B101会議室にて、防災講座が実施された。

④ 評価

キャンパス内で大規模地震が発生した際の対応方法等についての認識が深まった。

(6) リベラルアーツ学部主任研修会（主任会教員のみ参加）

①概要（目的を含む）

安達一寿先生（十文字学園女子大学学長 ご専門：教育学）をお招きし、「学生プロジェクトの成果と運営上の課題」というテーマでご講演いただき、現在十文字学園女子大学で実践されている PBL 型プロジェクトの活動内容や、それを大学広報へどのように活用しているか、さらに受講学生の成長についてお話をうかがう。

② 到達目標

お話を伺うことにより、今後のカリキュラム検討、授業運営に資する。

③ 活動内容

令和 8 年 2 月 4 日（水）14:00-16:00 ※講演 60 分、質疑・討議 60 分 場所 大学教育棟 793 会議室

参加者 永井悦子（学部長）、宇井美代子（学科主任）、梶川祥世（教務主任）、立野貴之（学生主任）

④ 評価

安達先生より、リベラルアーツ学部で実施しているオフキャンパス・スタディーズの授業運営やその成果の活用方法について、さまざまな示唆をいただいた。なかでも、成果を可視化することが学生の成長につながるという点、また一度きりの取り組みで終わらず、PDCA サイクルを継続的に回していくことが重要であるという点に感銘を受けた。

4 昨年度（令和 6 年度）に提案された予定・課題の達成度について

- (1) 昨年度 FD 研修会で検討された新カリキュラムの実施計画に基づき、新カリキュラム実施における具体的運用の結果として明らかになる諸問題について議論を積み重ねる。初年次教育・2 年次教育に関する研修（一年・二年次セミナー担当者会議）も、この点を踏まえて展開する。

そのための場を FD 活動で提供することができ、課題については全体として効果的に達成することができた。

- (2) 講習会は、防災訓練、学部内で共通する問題意識にかかわる内容についての開催を検討する。

上記の予定・課題については、防災訓練を行ったことも含めて、全体として効果的に達成することができた。

5 今後（令和 8 年度以降）の予定・課題について

今年度 FD 研修会で検討された授業改善計画等に基づき、新カリキュラム実施における具体的運用の結果として明らかになる諸問題について議論を積み重ねる。そのための場を FD 活動で提供する。初年次教育・2 年次教育に関する研修（一年・二年次セミナー担当者会議）も、この点を踏まえて展開する。

また、多くの教員の「救命技能認定」の有効期限が満了することを受け、防災訓練の他、学部内で共通する問題意識にかかわる内容について、講習会の開催を検討する。

§ 観光学部

1 FD 活動への取組理念・目標

観光の意義と役割、現状と課題を的確に理解し、適切な情報収集とその分析および異文化に対する理解を基礎に、高度な英語運用力を駆使してグローバル時代の観光ビジネス、地域活性化に貢献できる人材養成の達成を目標に FD 活動に取り組むこととする。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

観光学部長、観光学科主任、教務主任、学生主任、FD 担当教員が中心となって FD 活動を実施する。学部の担当教員と大学 FD 委員は連携して活動計画を取りまとめ、研修会などのプログラムの実施にあたる。

3 令和 7 年度の活動内容

(1) ワークショップ

「学生主体の授業運営方法」

実施日 : 令和 7 年 8 月 16 日 (土) 9:30~11:00

講 師 : ダイナミックヒューマンキャピタル株式会社 社長 中村文子氏

場 所 : オンラインにて

① 概要 (目的を含む)

学生の主体的な学びを促進する授業設計・運営の考え方と具体的手法を学ぶ。

② 到達目標

- ・学生主体の授業運営の考え方と重要性を理解する。
- ・授業デザインの基本手法を習得する。

③ 活動内容

本研修では、学生主体の授業運営を実現するため、CORE (導入・展開・振り返り・まとめ) を意識した授業構成についてワークショップで具体的な実践の手法について理解を深めた。

④ 評価

本研修を通じて、各教員が授業構成を見直し、CORE を意識した学生主体の授業設計の重要性を再認識した。学習効果を高める具体的手法への理解が深まった。

(2) 講演会

「大学 (学部) ブランド力向上に向けた教育上の強みづくり」

実施日 : 令和 8 年 2 月 17 日 (火) 13:00~14:30

講 師 : 高崎商科大学、事務局次長 鈴木洋文氏

場 所 : オンラインにて

① 概要（目的を含む）

本講演では、地域・企業・高校との連携を通じた大学ブランディングの実践について解説がなされた。大学を社会との接点となるハブとして位置づけ、教育活動や連携の在り方を通じてブランド形成のあり方を理解することを目的とし、広報の役割を長期的視点で再考する契機となった。

② 到達目標

大学ブランディングの基本的な考え方と、地域・企業・高校との連携を通じた継続的な関係構築の意義を理解し、教育・広報活動の改善に活かす視点を獲得する。

③ 評価

本講演を通じて、大学ブランディングを単なる広報活動ではなく、教育・地域連携を基盤としたファン形成の取り組みとして捉える重要性を理解することができた。特に、相手のベネフィットを重視した連携の視点や、組織内での共通認識の形成が実践の鍵であることが示され、今後の大学運営や教育活動に有益な示唆を得た。

（３） 学外セミナーへの教員派遣

派遣先：芝浦工業大学 教育イノベーション推進センター

令和 7 年 5 月 24 日（土） 13:00～16:00

「反転授業入門」1 名参加

① 概要

反転授業の基本概念と授業設計の考え方、事前学習教材作成の留意点を学ぶとともに、自身の担当授業を題材に反転授業の導入方法を検討することを目的とした研修。

② 目標

反転授業の基本概念と有効に機能する条件を理解し説明できるとともに、自身の授業において反転授業の設計・導入ができる能力を身につける。

（４） 学生による授業アンケート

① 概要（目的を含む）

観光学部観光学科の科目において、授業改善を目的とした授業アンケートを実施した。

② 到達目標

学生の学修達成度を測り、改善点を踏まえて今後の授業運営に活かす。

③ 活動内容

Web アンケート機能を活用して、学生を対象とした観光学部開講科目の授業アンケートを実施。データの集計結果は UNITAMA で科目担当教員が参照できる。

④ 評価

■回答率

令和 7 年度春学期：38.8%（対象者数：1,174 名	回答数：456 名	※延べ数）
令和 7 年度秋学期：25.6%（対象者数：1,249 名	回答数：320 名	※延べ数）
令和 6 年度春学期：19.7%（対象者数：1,550 名	回答数：305 名	※延べ数）
令和 6 年度秋学期：20.3%（対象者数：1,213 名	回答数：367 名	※延べ数）

※回答率前年比：春・秋学期とも回答率が改善した。

■スコア

令和 7 年度 春学期：4.3 秋学期：4.2

令和 6 年度 春学期：4.2 秋学期：4.2

※令和 7 年度春学期が前年度（令和 6 年度）よりも、0.1 ポイント改善した。

4 昨年度（令和 6 年度）に提案された予定・課題の達成度について

令和 6 年度に計画した FD 活動については、ワークショップや反転授業の展開を通じて、学生主体の学びの推進という点で概ね達成することができた。また、授業アンケートに関しても、学部内での啓発により回答率および評価の改善が見られ、当初の課題に対して一定の成果が得られた。

更に、学部募集につながる教育の在り方や学部ブランド向上に関する取り組みについても意識付けを行うことができた。

これらの成果を一過性の取り組みにとどめることなく、今後も継続的に実践するとともに、アンケートの回答率および評価の更なる改善に取り組み、組織的な定着を図ることが必要であると考えます。

5 今後（令和 8 年度以降）の予定・課題について

令和 8 年度の FD 活動においては、令和 7 年度の取り組みを基盤としつつ、引き続き学生主体の学びの推進に向けた活動を継続していく。特に、学生の主体的な学びに寄与する研修や講演会等を実施し、授業改善や教育力向上に資する機会の充実を図る。

また、授業アンケートについては、回答率および評価のさらなる改善に向けた啓蒙を継続し、教育改善に資するデータの活用を一層推進する。

これらの取り組みを通じて、FD 活動の理念および目標の達成に向けて着実に取り組んでいく予定である。

3. 教師教育リサーチセンターの活動

1 教職課程 FD・SD 活動への取組理念・目標

本センターは、大学における教職課程の運営を目的とし、大学附置機関として設置された。主な業務内容には、「教職課程における学生支援」と「教職に関する研究活動支援」がある。研究活動支援のひとつとして教員養成における教職課程 FD・SD 研修があり、教員養成の質を向上させることを理念・目標としている。

2 教師教育リサーチセンターにおける教職課程 FD・SD 活動の組織構成と役割

センター長、課長及びリサーチフェローを中心に教職課程 FD・SD 活動を計画し、課長補佐以下職員で研修会開催の実務を担当している。

3 令和7年度の活動内容

(1) 教師教育フォーラム

①概要（目的を含む）

今回の教師教育フォーラムは『教職課程・教員免許制度・初等中等教育における教育課程の一体的改革方策 ～2040 年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成～』をメインテーマとして取り扱った。

少子化に伴う生産年齢人口の減少が進む中、教師には子どもの主体的な学びを支援し、伴走する役割への転換が求められている。

また、教育課程の多様化・複雑化が進む学校現場の状況を踏まえると、学習指導要領の改訂を見据えた教職課程の学修内容や方法の見直しが重要な課題となっている。加えて、教員免許制度の在り方についても、総合的な検討の必要性が指摘されている。

こうした背景を踏まえ、今回の教師教育フォーラムでは、今後本格的な議論が進むと見込まれている「教職課程・教員免許制度」および「初等中等教育における教育課程の基準」の見直しを主題として取り上げた。フォーラムでは、文部科学省、教員養成に携わる国立大学・私立大学、そして学校現場という多様な立場から現状と課題が示され、それぞれの視点を共有する機会となった。また、教員養成大学が抱える課題を教職課程の改善に反映させることを目的として、講演者と参加者がともに検討を深める協働的な場として計画・実施した。

②到達目標

学内外より 150 名以上の出席者を集客することを目標に掲げた。

③活動内容

日時：令和7年10月18日（土）13：00～15：50

於：大学教育棟 2014 よりオンライン（Zoom）配信

テーマ： 教職課程・教員免許制度・初等中等教育における教育課程の一体的改革方策～2040 年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成～

【プログラム】

○講演（50 分）

多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成を加速するための方策に関する検討状況と大学の教員養成への期待

文部科学省初等中等教育局教育職員政策課長 大江 耕太郎 氏

○ショートレクチャー（10 分）

全国私立大学教職課程協会会長・玉川学園理事長 小原 芳明 氏

○シンポジウム（100 分）

・開放制教職課程から考える教員養成の課題と未来（15 分）

岡山大学教師教育開発センター教授・玉川大学教師教育リサーチセンター客員教授
高旗 浩志 氏

・これからの学校と教員はどこへ向かうのか（15 分）

町田市教育委員会教育長 小池 慎一郎 氏

・学校現場の教育課程の現状と課題（15 分）

神奈川県公立中学校校長会長・三浦市南下浦中学校長 市川 昌樹 氏

・私立大学の教員養成改革の課題（15 分）

玉川大学大学院教育学研究科教授・教師教育リサーチセンター リサーチフェロー
森山 賢一 氏

【コーディネーター】玉川大学教師教育リサーチセンター客員教授 笠原 陽子 氏

④評価

遠方からの参加者の利便性を鑑み、開催方法はオンライン形式とした。その結果、近隣地域に限らず、幅広い地域の現職教員等の学校関係者、教員養成に携わる大学教職員、教員志望学生、教育研究者、教育委員会関係者など、教育に携わる多様な立場の方々に参加いただくことができた。

参加者アンケートの結果からは、「教員養成の改革・構造化」「大学と学校現場の連携強化」「教職志願者の減少・なり手不足」への関心が高いことがうかがえた。また、「多様な立場からの知見共有」や「最新動向の把握と新たな示唆」について評価する意見も多く寄せられた。

本会には延べ 100 名の参加があり、盛会のうちに終了した。

（２）令和 7 年度教職課程 FD・SD 研修会（大学教育力研修分科会）

①概要（目的を含む）

中央教育審議会教員養成部会では、教職カリキュラムの新たな方向性が審議され、再課程認定の実施が必至となっている。こうした状況のもと、教職課程のマネジメント強化は重要な課題となっている。さらに、免許法や文部科学省施策に基づく制度要件への対応に加え、本学では改組や免許追加申請の検討も進んでおり、教職課程を取り巻く環

境は一層複雑化している。

こうした背景のもと、今年度の「大学教育力研修（教学部教務課主催）」分科会は、教職課程 FD・SD 研修として、課程認定委員の経験を有する教員からカリキュラム編成や教員業績の観点について示唆を得るとともに、長年教職課程の事務を担ってきた職員から実務の具体例を共有することで、教職課程認定申請に備える知識や視点を再確認する機会とした。本取り組みは、従来の部署単独開催から運用を変更した昨年度に続く 2 回目の実施となる。

②到達目標

教職課程のマネジメント力向上に向け、教職課程認定における基準や審査の観点の理解、教員業績・教育活動の整理方法の確認、手続き上の留意点の共有を図り、申請業務に対応できる体制づくりを促進することを目標とした。

③活動内容

日 時：令和 8 年 2 月 20 日（金）13：30～15：30

場 所：大学教育棟 2014 602 教室

テーマ：教職課程のマネジメント力向上へ向けて

対 象：教職課程をもつ学科所属の教職担当教員等、本学専任教員・客員教授等

内 容（目的）：課程認定委員としての経験を踏まえた講演により、教職課程のマネジメントや教員業績の考え方について学んだ。また、教職課程事務の実務に関する説明を通して、申請書類作成や手続きに必要なポイントを具体的に共有した。

当日スケジュール：

13:30～13:35 司会 大川 なつか 教師教育リサーチセンター准教授

13:35～14:35 講演 本岡 愛実 氏 宮城教育大学教職大学院教授・本学客員教授

14:35～15:00 事務手続きに関する説明

岡田 陽平 教師教育リサーチセンター教職支援室課長（改革推進担当）

15:00～15:20 質疑応答

④評価

教職課程認定基準や教職課程編成の要点について理解を深める機会となった。制度的視点と実務的視点が統合されたことで、学内の共通理解が高まり、来年度以降の申請準備にも資する研修となった。

4 昨年度（令和 6 年度）に提案された予定・課題の達成度について

昨年度は「教師教育フォーラム」および「大学教育力研修（教職課程 FD・SD 研修会）」を各 1 回開催し、計画どおり実施した。今年度も同様に分科会を実施し、課程運営に関する知識共有体制を強化するという目標を達成した。

5 今後（令和8年度以降）の予定・課題について

次年度以降も「大学教育力研修分科会（教職課程FD・SD研修会）」を継続して実施し、教職課程のマネジメント力向上に資する研修機会を確保する。

4. ELF センターの活動

1 FD・SD 活動への取組理念・目標

ELF センター (CELf) は、異文化間コミュニケーションにおけるグローバル言語としての英語の活用を推進し、ELF (English as a Lingua Franca) に配慮した教育法および超文化的英語使用の促進に取り組んでいる。令和 7 年度には 25 の異なる科目が開講され、春学期には 2,184 名 (176 クラス)、秋学期には 2,593 名 (152 クラス) が履修したほか、夏期休暇および春期休暇中に特別学期も一部開講している。こうした取り組みを支えるのは 38 名の非常勤教員 12 名の専任教員であり、各教員が拡充されたカリキュラムに対応できるよう、適切な指導スキルと戦略を習得することを重視している。現代のグローバル社会では、ネイティブスピーカーモデルの英語を目標とすることが必ずしも実践的とはいえない。ELF プログラムでは、特定の地域における理想化された英語を真似することに多くの時間を費やす教授法ではなく、相手や状況に合わせて臨機応変に言葉や伝達方法を活用して、様々な文化的概念を文脈や相手に配慮した表現で説明できるようになるなど、グローバルに役立つコミュニケーション力の修得を重視している。令和 7 年度には 18 ヶ国出身 (アイルランド、イタリア、イラン、英国、オーストラリア、カナダ、スリランカ、スロバキア、タイ、ドイツ、日本、中国、フィリピン、ブラジル、米国、ベトナム、ペルー、ロシア) の教員が在籍し、話される第一言語も多岐にわたる。ELF センターでは、教員が多様な言語的・文化的背景を有していることを踏まえ、共通語としての英語の理解と運用を重視した言語学習環境を協働的に形成している。

ELF センターの FD 活動では、教員のニーズに応じながら、遠隔授業に関する能力向上を支援するため、ワークショップや講演、特別セミナー、意見交換の場などを幅広く実施している。これらの研修は、教員同士が知見や実践経験を共有し、相互に学び合う機会として重要な役割を果たしている。FD の取り組みは、質の高い学習環境の整備と、共通語としての英語の理解・活用の促進を主たる目的としている。ELF センターでは、教員の専門性向上および遠隔教育スキルの強化を重視し、継続的な研修活動を通してその実現を図っている。専任教員のみならず、非常勤教員の能力開発にも積極的に取り組み、プログラム全体の質保証を目指している。本報告では、ELF の理念に基づく教育実践の成果と、教員育成に関する継続的な取り組みについて報告する。

2 ELF センターにおける FD・SD 活動の組織構成と役割

ELF センターの FD 活動は、ELF センター会において内容・予算・支援体制が審議・決定され、その後、大学 FD 担当を中心に作業部会の専任教員が分野別グループ体制のもとで企画・実施 (CELf Forum Journal, EIP International Journal, CELf フォーラム、オリエンテーション、ELF ワークショップ等) を担う。

3 令和 7 年度の活動内容

(1) 講演会・ワークショップ開催

1. 令和7年度「CELF フォーラム 2025: World Englishes, ELF, and Intercultural Citizenship in ELT」

① 概要

開催：令和8年1月10日（土）10：00～16：45

開催場所：ELF Study Hall 2015 教室 331、302、303、321、322、他

② 達成目標

- ・ World Englishes および ELF の視点から英語教育を再考し、教員が多様な英語観を授業実践に取り入れるための論理的・実践的知見を共有する。
- ・ 異文化市民性の概念を踏まえ、学習者の批判的思考力およびグローバル社会における主体性を育成する指導の在り方を検討する。
- ・ 第二言語習得における感情・アイデンティティ・イデオロギーの観点から、学習者理解を深める機会とする。
- ・ 専任教員・非常勤教員双方の参加を促し、World Englishes、ELF、異文化理解教育に関する実践事例や研究成果を共有する。
- ・ K-16 学園内外の英語教育関係者が集い、理論と実践を結びつける対話の場を提供する。
- ・ 外部講師による基調講演を通して、最新の研究動向と英語教育における今後の方向性を展望する。

③ 活動内容

- ・ フォーラムテーマは「World Englishes, ELF, and Intercultural Citizenship in ELT」
- ・ 基調講演にはミシガン州立大学応用言語学部教授 ピーター・デコスタ氏を迎え2件の基調講演の発表と CELF センター専任教員および非常勤教員等による発表が行われた。
- ・ 開会挨拶： 小原 一仁 玉川大学学長
- ・ 開会講演： 鈴木 彩子 教授（文学部英語教育学科、元 ELF 副センター長）
「ELF Pedagogy for Intercultural Citizenship: Challenges and Possibilities（異文化市民性のための ELF 教育：課題と可能性）」
- ・ 基調講演者紹介：小田 眞幸高等教育担当常任理事（元 ELF センター長）
- ・ 第一基調講演：ピーター・デコスタ氏（ミシガン州立大学応用言語学部教授）
「Critical Approaches to World Englishes」では、World Englishes 研究の発展を踏まえ、英語のイデオロギー的性質およびグローバル化・多言語主義の文脈における英語教育の社会的・政治的側面が論じられた。
- ・ 第二基調講演：ピーター・デコスタ氏（ミシガン州立大学応用言語学部教授）
「Identity work and the symbolic power of language in the ELT classroom: Advancing the intercultural citizenship and ELF agenda」では、ELT 教室におけ

る言語の象徴的権力とアイデンティティ形成の問題を取り上げ、高等教育における ELF を用いた異文化市民育成の可能性が示された。

- ・発表①「Perception of Gender Balance and Inclusion in EFL Settings」 ハンズブロ
ヴスカー・ヴラディミール (ELF センター非常勤講師)
- ・発表②「Structured Warmers and Groupings for Building Confidence and
Fluency」 トラバーズ・ウィリアム (ELF センター非常勤講師)
- ・発表③「How and Why American English Became the “Standard” in Japan」 ジョ
ン・ピーター (ELF センター非常勤講師)
- ・発表④「Learning to teach over time: Identity, tensions, and agency in an early-
career part-time university EFL teacher in Japan」 茂木 悠太 (ELF センター専
任講師)
- ・発表⑤「Classroom Smartphone Use: Tool for Learning or Source of
Distraction?」 ライ・ホア (ELF センター非常勤講師)
- ・発表⑥「Exploring the Effects of Reading Comprehension Activities Using
Collaborative Learning」 笠谷 景子 (ELF センター非常勤講師)

④ 講演会・ワークショップ開催の評価

- ・来場者は 27 名の学内の K-16 の教職員、8 名の他大学の教員で、ELF 視点を活かし
た英語教育の実践的アプローチについて具体的な事例が紹介され、実践指導を再考
する機会を得た。
- ・ELF センター所属教員が研究・教育の成果を発表し、情報共有ができた。
- ・非常勤講師の参加を増やし、発表機会を提供できた。
- ・K-12 英語教育関係者、他学部の参加を促し、K-16 全体の連携を強化できた。
- ・基調講演を通して、ネイティブ英語話者中心主義からの転換と、World Englishes
および ELF の視点に基づく多様性を尊重した英語教育の重要性を共有することがで
きた。
- ・異文化市民性ならびに第二言語習得における感情・アイデンティティ・イデオロギ
ーの観点から学習者理解を深め、批判的思考力および主体性を育成する指導の在り
方について具体的な示唆を得る機会となった。
- ・学内外の参加者を増やすため、広報を強化した。大学ホームページや JACET SIG
のサイト、メーリングリストを通じて、更なる参加を目指して広報を積極的に行っ
た。
- ・改善点としては、参加者の意見を次年度の企画に反映し、次年度のテーマやプログ
ラムを確実に行うこと。
- ・他大学研究者および非常勤教員のさらなる参加促進を図る。

2. 特別ワークショップ開催「How can CELF teachers support students with special needs: ELF センター教員による特別支援学生への対応」

① 概要

開催：令和 7 年 6 月 20 日（金）15：15～16：15

開催場所・実施形態：ELF Study Hall 301 教室、ハイブリッド

外部講師：学生支援センター障害学生支援コーディネーター 安藤 正紀氏

② 達成目標

- ・特別な支援を必要とする学生への合理的配慮に関する理解を深め、日本における歴史的・政策的背景と結び付けながら、大学教育におけるインクルーシブな実践の重要性を再確認した。
- ・外部講師の専門的知見を通して最新の研究動向および実践事例を共有し、教員の実践的対応力向上に資する具体的示唆と授業で活用可能なリソースを得た。
- ・指導経験を共有するとともに、非常勤教員の参加を促進し、組織全体としての理解と支援体制の強化を図った。
- ・歴史的・政策的背景と具体的実践事例を結び付ける構成により、教員の理解促進と対応力向上に資する実践的示唆が得られた。

③ 活動内容

- ・特別な教育的ニーズを有する学生への合理的配慮の提供が求められる現代の大学教育において、教員の理解と対応力の強化は重要な課題となっている。特別支援教育の歴史的背景および政策的動向を概観し、教室における実践的対応に必要な基礎知識を整理した。
- ・安藤正紀氏による講演および具体的な実践事例の紹介を通して、特別な支援を必要とする学生に対する教育的配慮の在り方について多面的に検討した。

④ 講演会・ワークショップ開催の評価

- ・特別支援に関する基礎的知識を共有するとともに、多様な学生に対する合理的配慮の在り方や具体的実践方法について理解を深める機会となった。
- ・参加者は対面 8 名、オンライン 2 名の計 10 名であり、対面とオンラインを併用したハイブリッド形式においても円滑な運営が実現できた。
- ・歴史的・政策的背景と具体的実践事例を結び付ける構成により、教員の理解促進と対応力向上に資する実践的示唆が得られた。

3. 特別ワークショップ開催「Using current technology in English Language

Teaching: Generative AI and Machine Translation. (最新技術を活用した英語教育：生成 AI と機械翻訳)」

① 概要

実施日時：令和 7 年 10 月 17 日（金）17：00～18：00

場所・実施形態：ELF Study Hall 210 教室、ハイブリッド

外部講師：東京外国語大学院総合国際学研究院 工藤 洋路教授

② 達成目標

- ・最新技術と実際に英語教育で活用した事例から知識を深める。
- ・中学・高校・大学での英語教育の生成 AI と機械翻訳の英語教育への影響と使用する際の注意点を学ぶ。
- ・生成 AI および機械翻訳の活用に関する重要な注意点を学ぶ。

- ・テクノロジーの使用目的や使用環境を理解し、学びの向上につなげる。
- ・適切な使用と過度な依存を区別する視点を身につける。
- ・生成 AI や機械翻訳の特性や限界についての理解を深める。

③ 活動内容

- ・教室内外における生成 AI および機械翻訳の使用状況について共有する。
- ・テクノロジーの使用を完全に禁止・統制することの難しさを理解する。
- ・AI 生成文や機械翻訳文を読み、その特徴や課題について考察する。
- ・「禁止する」のではなく、「適切な活用を指導する」という視点への転換について検討する。

④ 講演会・ワークショップ開催の評価

- ・生成 AI や機械翻訳の普及により、教育環境が大きく変化していることへの理解が深まった。
- ・教室外でのテクノロジー使用を明確に区別することが難しいという認識が共有された。
- ・テクノロジーを一律に禁止するのではなく、適切かつ責任ある活用を指導する重要性がより明確になった。
- ・参加者が自身の授業におけるテクノロジーとの向き合い方を見直す契機となった。

(2) 研究会・研修会・ワークショップ

① 概要

CELF は、ELF 科目および理念に基づく教授法の質的向上を目的に、定期・特別ワークショップを実施し、研究動向と実践事例の共有機会を継続的に確保している。非常勤教員の勤務体制変更に伴う参加機会減少への対応として、令和7年度も Zoom によるハイブリッド形式を継続し、全セッションを録画の上、学内 LMS でオンデマンド配信している。あわせて録画視聴者のフィードバックを収集・反映し、FD 活動の実効性と持続可能性の向上を図っている。

② 達成目標

- ・ELF に関する教授法・研究動向の共有を通じて、教育実践の高度化と相互学習の促進を図る。
- ・新任非常勤を含む教員への指導・評価支援体制を整備し、専任・非常勤間の協働と FD 参加を促進する。
- ・LMS (Blackboard、UNITAMA、Microsoft Teams) および各種 IT ツールの活用に関する研修とフォローアップを強化し、授業改善に資する実践的知識を深化させる。

- ・ ELF 関連科目担当者を対象に、シラバス設計、独自ルーブリック評価、異文化コミュニケーション論、アクティブ・ラーニング等の教授アプローチに関する情報提供と支援を行う。

③ 活動内容

1. 研究会・研修会・ワークショップを開催

- ・ 研修 1：「新任教員対象「Blackboard, UNITAMA, MS Teams」 春学期」

実施日：令和 7 年 4 月 11 日（金）17:00～17:45

場所：ELF Study Hall 301 教室、ハイブリッド

担当講師：チャイクル・ラサミ（ELF センター准教授）、黒嶋 智美（ELF センター准教授）、祐乗坊 由利 ジョディー（ELF センター教授）

- ・ 研修 2：「Sharing Ideas for Collaborative Learning in ELF Intro & ELF Foundations（ENG101, 102, 103, ENG201, 202, 203）」

実施日：令和 7 年 4 月 23 日（水）13:15～14:00、

場所：ELF Study Hall 301 教室、ハイブリッド

担当講師：ノーヴィコヴァ・ナターリア（ELF センター講師）

- ・ 研修 3：「ESTEAM（ZENJIN&IB infused） Project Ideas for Classes with multiple departments & ELF Communication for Teachers（ENG105, BELF104, 204, 304, 404）」

実施日：令和 7 年 5 月 14 日（水）13:15～14:00

場所：ELF Study Hall 301 教室、ハイブリッド

担当講師：黒嶋 智美（ELF センター准教授）、祐乗坊 由利 ジョディー（ELF センター教授）

- ・ 研修 4：「Pen and Paper Teaching Idea: A Traditional Writing-Oriented Activity Assessment with Authentic Writing and AI Writing Tools in Mind」

実施日：令和 7 年 5 月 23 日（金）15:15～16:00

場所：ELF Study Hall 210 教室、ハイブリッド

担当講師：レイクセンリング・アンドリュー（ELF センター准教授）

- ・ 研修 5：「令和 7 年度 ELF センター新任教員の秋次年度オリエンテーション」

実施日：中止

中止の理由：秋学期から勤務開始の専任・非常勤教員を採用しなかったことにより実施を見送った。

- ・ 研修 6：「ELF 教員用ヘルプデスク：春学期成績入力・成績関連の問い合わせ」

実施日：令和 7 年 7 月 25 日（金）15:00～16:00 と 7 月 28 日（月）13:00～14:00

場所：オンラインのみ

担当講師：中村 幸子（ELF センター講師）、ミリナー・ブレット（ELF センター准教授）、ディモスキ・ブラゴヤ（ELF 副センター長、教授）、黒嶋 智美（ELF センター准教授）

・研修 7：「Practicing Mindfulness and Improvisation」

実施日：令和 7 年 10 月 28 日（火）13:15~14:00

場所：ELF Study Hall 210 教室、ハイブリッド

担当講師：岡田 トリシャ（ELF センター教授）

・研修 8：「Understanding the learning attributes of Tamagawa Academy

（Middle, Upper Division） and Sharing K-16 ELF Framework for ELF Teaching learning attributes」

第 1 回目：令和 8 年 1 月 30 日（金）中学部（ミドルディビジョン）13:30~14:15

第 2 回目：令和 8 年 2 月 5 日（木）高等部（アッパーディビジョン）16:50~17:30

担当者：マクブライド・ポール（ELF センター長、教授）、ディモスキ・ブラゴヤ（ELF 副センター長、教授）、祐乗坊 由利 ジョディー（ELF センター教授）

・研修 9：「An introduction to the ELFJ-Corpus and ideas for applying it in the classroom」

実施日：令和 7 年 11 月 21 日（金）13:15~14:00

場所：ELF Study Hall 301 教室、ハイブリッド

担当講師：ディモスキ・ブラゴヤ（ELF 副センター長、教授）

・研修 10：「Enhance your well-being as an educator」

実施日：令和 7 年 12 月 8 日（月）13:15~14:00

場所：ELF Study Hall 301 教室、ハイブリッド

担当講師：中村 幸子（ELF センター講師）

・研修 11：「Using Word Lists to support your teaching」

実施日：令和 8 年 1 月 13 日（火）13:15~14:00

場所：ELF Study Hall 301 教室、ハイブリッド

担当講師：ミリナー・ブレット（ELF センター准教授）

・研修 12：「ELF 教員用ヘルプデスク：秋学期成績入力・成績関連の問い合わせ」

実施日：令和 8 年 1 月 26 日（月）11:00~12:00 と 1 月 27 日（火）11:00~12:00

場所：オンラインのみ

担当講師：中村 幸子（ELF センター講師）、ミリナー・ブレット（ELF センター准教授）、ディモスキ・ブラゴヤ（ELF 副センター長、教授）、黒嶋 智美（ELF センター准教授）

・研修 13：「令和 8 年度に向け ELF 教員全員次年度春学期オリエンテーション」
実施日：令和 8 年 3 月 23 日（月） 新任非常勤 10:00～11:30、全員 13:00～15:30
場所：ELF Study Hall 311、301、302、303、321、322 教室、他
担当講師：ELF センター専任教員全員

2. 調査・研究の実施

・調査・研究 1：「Teaching advanced level classes (400) through EME Format: curricula and syllabi」

調査期間：令和 7 年 5 月～令和 8 年 3 月

研究発表：令和 7 年 11 月 4 日（火）13:15～14:00、ELF Study Hall 301 教室

担当者：マクブライド・ポール（ELF センター長、教授）、ELF センター専任教員
全員

・調査・研究 2：「Contributing ELF-aware pedagogy (online resource website on Bb)」

実施時期：令和 7 年 5 月～令和 8 年 3 月

研究発表：令和 7 年 12 月 22 日（月）13:15～14:00、ELF Study Hall 301 教室

担当者：スティーブンソン・ロバート アンドル（ELF センター講師）、ELF センター専任教員全員

④ 講演会・ワークショップ開催の評価

- ・年間を通じて多様なテーマ（ELF 実践、EME、SLA、評価、AI 活用、コーパス活用、教員ウェルビーイング等）を扱うことで、ELF 視点に基づく授業改善の具体的方策が共有され、教育実践の質的向上につながった。
- ・ハイブリッド形式およびオンデマンド配信を併用したことで参加機会が拡大し、専任・非常勤教員双方の継続的な専門性向上（FD）の場として機能した。
- ・ELF センター所属教員が研究成果および実践事例を発表する機会を確保し、センター内の知見の可視化と情報共有が促進された。
- ・ESTEAM プロジェクトや EME 形式授業、ELF コーパス活用など、学部横断的・発展的内容を扱うことで、K-16 教育における連携強化およびカリキュラム改善への示唆が得られた。
- ・教員のウェルビーイングやマインドフルネス等のテーマも取り上げることで、教育実践のみならず教員自身の持続可能な教育活動を支える視点が共有された。

- ・秋学期において新規採用教員がいなかったため、当初予定していた秋学期教員オリエンテーションは実施しなかった。これに代えて、成績評価および成績入力に関する質問対応を目的としたオンラインセッションを2回実施した。
- ・「秋の新任教員オリエンテーション」については、新たに専任・非常勤教員を採用しなかったことにより実施を見送った。

(3) 学生による授業アンケート

① 概要

令和7年度春学期および秋学期の期末に、ELF センター独自のオンライン授業アンケートを実施した。学生には授業内で、スマートフォンまたはパソコンを用いて回答するよう指示した。調査項目は、教科書、教授方法、Blackboard の活用、TOEIC 関連学習、ELF 教育への認識、チューター制度、マルチリンガルカフェ等である。結果は教育プログラム改善の基礎資料とし、各教員にも共有した。

② 達成目標

本調査の目的は、ELF プログラム全体、教材、および授業実践に対する学生の評価を把握することである。あわせて、教員に対するフィードバックを通じ、授業改善を促進することを目的とした。

③ 活動内容

春学期の授業アンケートは、合計2,184名（176クラス）を対象に実施し、1,876名（回答率86%）から評価回答を得た。秋学期の授業アンケートは、2,593名（152クラス）を対象に実施し、1,637名（回答率63%）から評価回答を得た。

本調査結果は、ELF プログラムの実施状況の検証および次年度の教育課程編成の検討資料として活用する。分析の結果、全体として授業満足度は概ね高い傾向が確認された。アンケートは年2回実施しており、継続的な検証体制を維持するとともに、結果を各教員へフィードバックすることで授業改善に役立てている。

④ 評価

春学期および秋学期に実施した授業アンケートでは、いずれも比較的高い回答率が得られ、多くの学生から意見を収集することができた。これにより、授業運営やカリキュラム改善に向けた基礎資料を得ることができた。

(4) 教員による授業内容アンケート

① 概要

令和7年度春学期および秋学期の期末に、ELF センター独自のオンラインアンケートを実施した。対象は専任・非常勤教員とし、教科書、指導方法、新カリキュラム、Blackboard の活用状況、TOEIC 関連指導、ELF に対する認識、ならびにセンター支援体制について意見を収集した。結果は教育課程の改善および研究活動の基礎資料として活用している。

② 達成目標

教員の多様なニーズを把握し、支援体制の充実およびカリキュラム改善に資する情報を得ることを目的とした。

③ 活動内容

春学期アンケートを 49 名に実施し、23 名の回答を得た。(回答率は 47%)

秋学期アンケートは 49 名に実施し、25 名の回答を得た。(回答率は 51%)

④ 評価

新カリキュラム導入 3 年目として、内容構成、教材難易度、授業形態等に関する教員の意見を収集した。回答率は春学期 47%、秋学期 51%であり、一定数の回答を得ることができ、授業運営および教員支援の現状を把握する基礎資料を得ることができた。一方で、回答率については今後さらに向上させる余地があると考えられる。今後は周知方法の工夫等を通じて回答率の向上を図り、より多角的な意見収集に努める。

(5) ELF センターの出版物

ジャーナルの刊行は、本学の教育・研究の取り組みを国際的な学術媒体を通じて発信し、より広範な読者層に届けるための重要な基盤となるものである。特に、ELF 研究およびその教育実践に関する本センターの成果を国内外に広く紹介し、その意義を可視化するための有効なプラットフォームとして位置付けられる。*Englishes In Practice* (EIP) と *The Center for ELF Forum* オンラインジャーナルの 2 冊を発行している。

・ *Englishes In Practice* (EIP) (図 1.)

① 概要

本誌 *Englishes in Practice* は、2014 年にサウサンプトン大学グローバル・イングリッシュ研究センターにより創刊されたオープンアクセス・ジャーナル (Paradigm/ De Gruyter Poland)] である。現在は、ELF センターのワーキングペーパーとして位置付けられている。本誌は、ELF センター所属研究者のみならず、広く国内外の研究者に対し、ELF を含むグローバル・コミュニケーションに関する先駆的研究および最新の研究課題を発表する場を提供するものである。

② 達成目標

- ・ 先駆的研究論文をスピーディーに発信する。
- ・ 全教員に高い学識を探究し、ダブルブラインドピアレビューを行う。
- ・ ELF に対する学識を共有する。
- ・ ELF センター所属の教員に効果的な研究発表の場を設ける。

③ 活動内容

- ・ *Englishes In Practice* 第 7 巻は令和 7 年 4 月に 2 本の論文を掲載しました。

- ・ *Englises In Practice* 第 8 巻は令和 8 年 4 月に向けて CELF 教員から 2 本の論文を出版に向けて準備している。
 - ・ *Englises In Practice* は ELF センターのホームページにも掲載する。
- ④ 評価
- ・ *Englises in Practice* は今後も世界各地の研究者に読まれることが期待される。

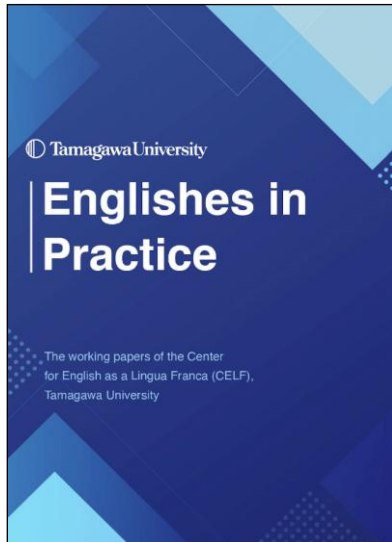


図 1. *Englises In Practice* (EIP) 第 7 巻

・ The Center for ELF Forum (図 2.)

① 概要

本誌は、2015 年度（平成 27 年度）に The Center for English as a Lingua Franca Journal として創刊され、現在は玉川大学学術リポジトリ上で公開されている The Center for ELF Forum として、CELF における研究および教育実践を広く発信している。掲載論文は簡潔かつ実践志向型であり、英語教育専門家の批判的思考を促進する査読付き学術誌として位置付けられる。本誌では、研究論文、教育実践論文、フォーラム論文、書評、ELF 授業実践報告等を幅広く募集している。投稿論文は編集委員会による初審査および複数査読者によるブラインドレビューを経て掲載の可否を決定する。編集長はミリナー・ブレット准教授、編集は中村幸子講師が担当している。<http://www.tamagawa.ac.jp/celf/research/>

② 達成目標

- ・ 言語教育の批判的意識と省察的思考を促進する。
- ・ 実践と理論の統合を推進する。
- ・ 授業のベストプラクティスを紹介し、授業改善につなげる。
- ・ 教員自身の専門性向上を支援し、学習者のエンパワーメントにつなげる。
- ・ CELF 教員間の ELF 教育手法の共有を促進する。
- ・ ELF センター教員の専門的成長を FD として支援する。

③ 活動内容

- ・ *The Center for ELF Forum* 第 5 号は ELF センターのホームページにも PDF 版を掲載している。さらに、教員のアカデミックポータル (academia.edu, REAP, Google Scholar, Research Gate など) にも掲載している。
- ・ ELF センターのホームページにも掲載する。
- ・ *The Center for ELF Forum* は玉川大学学術リポジトリに掲載されている。
<https://doi.org/10.15045/0002000486>

④ 評価

The Center for ELF Forum は各教員に配付され、執筆者からも高い評価を得た。さらに、本誌をオンライン上で公開することにより、国内外の研究者によるアクセスが拡大し、本誌掲載論文の認知度向上および学術的引用の促進が期待される。CELFF の研究者は、多様なテーマに関して個人および共同研究に多くの時間を費やしている。以下の表は、研究発表、学術論文の出版数、および JSPS 研究助成金受給者数を示している。これらの数値は、CELFF の研究活動に対する強い取り組みを示すとともに、教員の高い専門性と献身性を裏付けるものである。表 1 は令和 7 年度 4 月～令和 8 年 3 月の CELFF 専任教員の研究活動をまとめたものである。表 2 は令和 7 年度の CELFF 専任教員の著書・論文や本の出版内容である。

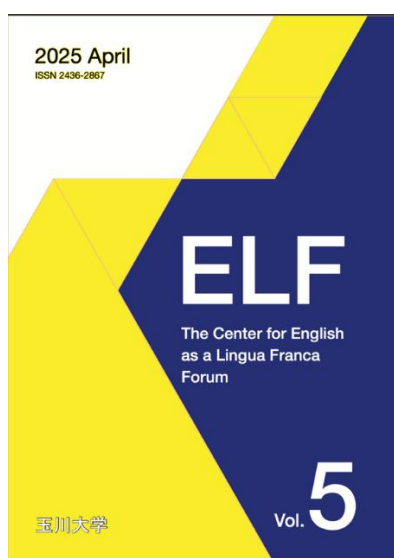


図 2. *The Center for ELF Forum* 第 5 号

表 1. 令和 7 年度 4 月～令和 8 年 3 月の CELFF 専任教員の研究活動

発表・出版	数
国外学会発表	14
国内学会発表	11
論文を投稿・出版	18
科学研究費助成事業 (JSPS)	3 (新)、3 (継続)

表 2. 令和 7 年度の CELF 専任教員の論文を投稿・出版

査読 の有無	論文・著書	著者
有	<i>Journal article</i> Milliner, B., & Pinchbeck, G. (2025). Challenging lexical coverage conventions: Evaluating the vocabulary demands of family-genre film and television. <i>Research Methods in Applied Linguistics</i> , 4(3), 1-12. https://doi.org/10.1016/j.rmal.2025.100230	Brett Milliner, Geoffrey Pinchbeck
有	<i>Journal article</i> Stevenson, R. (2025). What Bollywood can teach about English as a lingua franca. <i>Englishes in Practice</i> , 7(1), 25-47. https://doi.org/10.2478/eip-2024-0002	Robert Stevenson
無	<i>Book Chapter</i> Kuroshima, S. (2025). Reading medical records aloud: Enhancing the validity of informing laboratory results. In K. Tsuchiya (Ed.), <i>Exploring health and well-being in Japanese context</i> (pp. 115-139). Springer. https://doi.org/10.1007/978-981-97-9338-9_6	Satomi Kuroshima
無	<i>Conference Proceeding</i> Leichsenring, A. (2025). Learner perceptions of effective L2 English tertiary teachers: Qualities and skills. <i>Proceedings of the International Conference of Advanced Research in Education</i> , 2(1), 63-74. https://doi.org/10.33422/educationconf.v2i1.1075	Andrew Leichsenring
有	<i>Journal article</i> Suzuki, Y., Nozawa, T., Uchihara, T., Nakamura, S., Miyazaki, A., & Jeong, H. (2025). Timing matters for interactive task-based learning: Effects of vocabulary practice on learning multiword expressions and neural synchronization. <i>Studies in Second Language Acquisition</i> , 1-26. https://doi.org/10.1017/s0272263125101290	Yuichi Suzuki, Takayuki Nozawa, Takumi Uchihara, Sachiko Nakamura, Atsuko Miyazaki, Hyeonjeong Jeong
有	<i>Book Chapter</i> Okada, T., Fermin, T.A.S. (2025). A Road Less Traveled? A Duoethnography of Two Filipino Scholars in Japan During the COVID-19 Pandemic. In: Zulueta, J.O. (eds) <i>Disrupted Mobilities</i> . Palgrave Macmillan, Singapore. https://doi.org/10.1007/978-981-95-0257-8_11	Tricia Okada, Tricia Abigal Santos Fermin
無	<i>Book Chapter</i> Toh, G. & McBride, P. (2025). Chapter 4 Post-textbook pedagogy. In T. Ishikawa, P. McBride & A. Suzuki (Eds.), <i>Developing ELF Programmes for Language Teaching: Innovation, Resistance, and Applications</i> (pp. 49-64). De Gruyter Mouton.	Glenn Toh, Paul McBride
無	<i>Book Chapter</i> McBride, P. (2025). Chapter 7: ELF-aware pedagogical change: Resisting structural inertia. In T. Ishikawa, P. McBride, & A. Suzuki (Eds.), <i>Developing ELF programmes for language teaching: Innovation, resistance, and applications</i> (pp. 99-114). De Gruyter Mouton. https://doi.org/10.1515/9783111295411-007	Paul McBride
無	<i>Book Chapter</i> Nakamura, S. (2025). Chapter 12 Designing ELF-oriented tasks to optimize learner engagement. In T. Ishikawa, P. McBride & A. Suzuki (Ed.), <i>Developing ELF programmes for language teaching: Innovation, resistance, and applications</i> (pp. 189-204). De Gruyter Mouton.	Sachiko Nakamura

	https://doi.org/10.1515/9783111295411-012	
無	<i>Book Chapter</i> Kuroshima, S., Dimoski, B., Yujobo, Y.J, Chaikul, R. & Okada, T. (2025). Chapter 14 Disfluency in ELF encounters. In T. Ishikawa, P. McBride & A. Suzuki (Ed.), <i>Developing ELF Programmes for Language Teaching: Innovation, Resistance, and Applications</i> (pp. 221-244). De Gruyter Mouton. https://doi.org/10.1515/9783111295411-014	Satomi Kuroshima, Blagoja Dimoski, Yuri Jody Yujobo, Rasami Chaikul, Tricia Okada
無	<i>Book Chapter</i> Dimoski, B., Kuroshima, S., Yujobo, Y.J, Chaikul, R. & Okada, T. (2025). Chapter 15 Preparing low-proficiency English learners for future ELF encounters through informed communication strategy instruction. In T. Ishikawa, P. McBride & A. Suzuki (Ed.), <i>Developing ELF Programmes for Language Teaching: Innovation, Resistance, and Applications</i> (pp. 245-272). De Gruyter Mouton. https://doi.org/10.1515/9783111295411-015	Blagoja Dimoski, Satomi Kuroshima, Yuri Jody Yujobo, Rasami Chaikul, Tricia Okada
無	<i>Book Chapter</i> Kim, M., & Chaikul, R. (2025). Chapter 11 Principle and philosophy of professional development in an ELF program. In T. Ishikawa, P. McBride & A. Suzuki (Ed.), <i>Developing ELF Programmes for Language Teaching: Innovation, Resistance, and Applications</i> (pp. 173-188). De Gruyter Mouton.	Miso Kim, Rasami Chaikul
有	<i>Journal</i> Mishina-Mori, S. & Yujobo, Y.J. Yujobo, (2025). Referring Expressions in Dual Language Development: A Longitudinal Analysis of Narratives in a Japanese–English School-Age Bilingual Child. <i>Japan Journal of Multilingualism and Multiculturalism</i> , 31(1), 1–25	Satomi Mishina-Mori, Yuri Jody Yujobo
有	<i>Journal (Book Review)</i> Mogi, Y. (2025). [Review of the book <i>Plurilingual education in a monolingualised nation: Exploring new frontiers in language teaching in Japan</i> , by D. R. Pearce]. <i>Japan Journal of Multilingualism and Multiculturalism</i> , 31(1), 129–134.	Yuta Mogi
有	<i>Journal</i> Suzuki, Y., & Nakamura, S. (2026). Pre-task vocabulary support enhances lexical learning but dampens positive emotions: interactive task implementation in English-as-a-Foreign-Language classroom. <i>TESOL Quarterly</i> . https://doi.org/10.1002/tesq.70054	Yuichi Suzuki, Sachiko Nakamura
有	<i>Journal</i> Milliner, B., Matthews, J., & McLean, S. (In press). Exploring the capacity of three item formats for an aural vocabulary levels test (VLT) to predict L2 listening comprehension. <i>Language Testing</i> .	Brett Milliner, Joshua Matthews, Stuart McLean
無	JALT Listening SIG (March, 2026). Interview with Brett Milliner (episode 22) [audio podcast episode]. In <i>Hear Us Out</i> . JALT. https://jaltlistening.wordpress.com/category/podcasts/hear-us-out/	Brett Milliner
有	<i>Journal</i> Leichsenring, A. (2026). L2 English learner perceptions on using educational technologies for language learning at the tertiary level. <i>Englishes in Practice</i> , 7(1), 1–30. https://doi.org/10.2478/eip-2026-0001	Andrew Leichsenring

4 昨年度（令和6年度）に提案された予定・課題の達成度について

令和6年度末に提案されたFD活動は、計3回の「講演会・ワークショップ」、13回の「研究会・研修会・ワークショップ」および2回の調査研究をすべて達成した。

前年度（令和6年度）は新カリキュラム改革への対応を中心に、授業運営、評価方法、教材等の大幅な変更点に関する集中的な研修を行い、その内容は Blackboard LMS 上にオンデマンド動画として保存した。これにより、新任・現任教員が必要に応じて視聴できる体制を整備した。

令和7年度は、実践的指導法の継続的支援に加え、教員のウェルビーイングおよび省察的実践の促進、特別な配慮を要する学生への理解と支援体制の強化、ならびに生成AIの教育的活用に関する指導法の検討を含む、より包括的なFD内容へと発展させた。とりわけ、英語力の向上を前提としつつ、技術への過度な依存を避けるための適切なAI活用指導について議論を深め、学習過程を重視した教育実践の共有を図った。

これらのFD活動は、新プログラムの定着を支援するとともに、本学の教育理念であるELFおよびESTEAMへの理解を一層深化させることを目的として実施された。オンデマンド形式は参加機会の拡充に寄与した一方で、動画活用をさらに促進するための周知方法の改善が今後の課題である。今後もオンデマンドFDを継続・発展させ、教員支援体制の強化を図る。

5 今後（令和8年度以降）の予定・課題について

令和8年度においては、教員の専門性向上および教育実践の質的充実を目的として、計画的にFD活動を実施する。具体的には、批判的思考科目における授業相互観察を行い、授業改善に向けた実践的知見の共有を図る。また、交換留学生との協働課題を授業内に導入し、国際的視点を取り入れた学修機会の充実を目指す。

さらに、CELfホームページにおける活動報告を充実させ、教育・研究活動の可視化と情報発信の強化を進める。加えて、EMI関連科目の授業観察を通じて指導法の向上を図るとともに、学内他部局との教員交流を促進する。あわせて、ESTEAMに関するFDワークショップを実施し、分野横断的視点に基づく教育実践の深化を目指す。

5. 授業アンケート

1. アンケート実施概要

(1) 概要

FD活動の一環として授業の改善に資するため、令和7年度の各学期末において、学内ポータルサイト「UNITAMA」にて学生に対し授業アンケートを実施した。対象科目は、全科目（ユニバーシティ・スタンダード科目（US科目）、学部学科専門科目）である（ただし、一部の集中講義科目を除く）。

回答者数・履修者数（いずれも延べ数）及び回答率は次のとおりであった。

	春学期	秋学期
回答者数	22,348 名	17,701 名
履修者数	48,505 名	46,904 名
回答率	46.1%	37.7%

(2) 実施時期

春学期…7月 9 日（水）～ 8 月 5 日（火）

秋学期…1 月 13 日（火）～ 2 月 6 日（金）

※上記期間中であれば学生は回答を修正し、再提出することができる。

(3) 実施方法

「UNITAMA」の Web アンケートにて実施した。学生には事前に「UNITAMA」掲示板において周知を行った。

(4) アンケート様式

US 科目の授業アンケート様式は、参考資料 3 のとおりである。学部学科専門科目の設問は、大学ホームページ内で公開されているレポートに掲載している。

2. 集計結果及び公表

集計は前年度及び今後のデータの比較分析を考慮し、授業別及び次の分類別に行った。

US 科目：US 科目全体、玉川教育・FYE 科目群、人文科学科目群、社会科学科目群、自然科学科目群、学際科目群、言語表現科目群、教職関連科目群、資格関連科目群
学部学科科目*：学部全体、学科別

*一部、分類が異なる学部がある。詳細は各学部のレポートを参照のこと。

集計結果は授業担当者および各学部フィードバックしている。アンケート期間中、授業担当者は UNITAMA 上で途中集計を確認することができる。最終集計は授業別および分類別にレポートにまとめ、授業担当者および各学部提供しており、授業担当者が次学期以降の授業改善に活用するほか、各学部で結果の分析が行われたり、次年

度以降のカリキュラム改善のための資料として用いられたりするなど、各学部の FD 活動のなかでも活用されている。

なお、分類別レポートは大学ホームページ内で公表している。

<https://www.tamagawa.jp/university/introduction/outline/u-fd/questionary/>

US科目全体

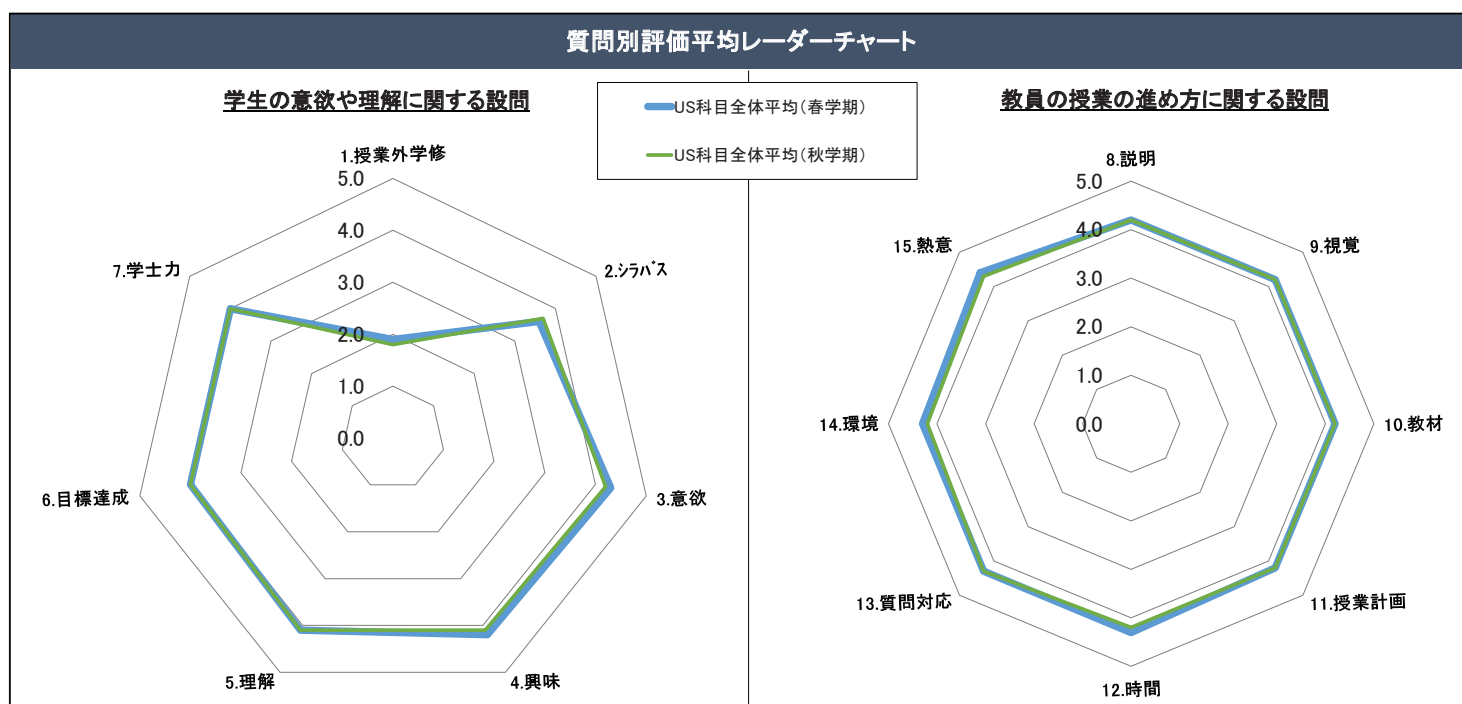
履修者数：20,331名

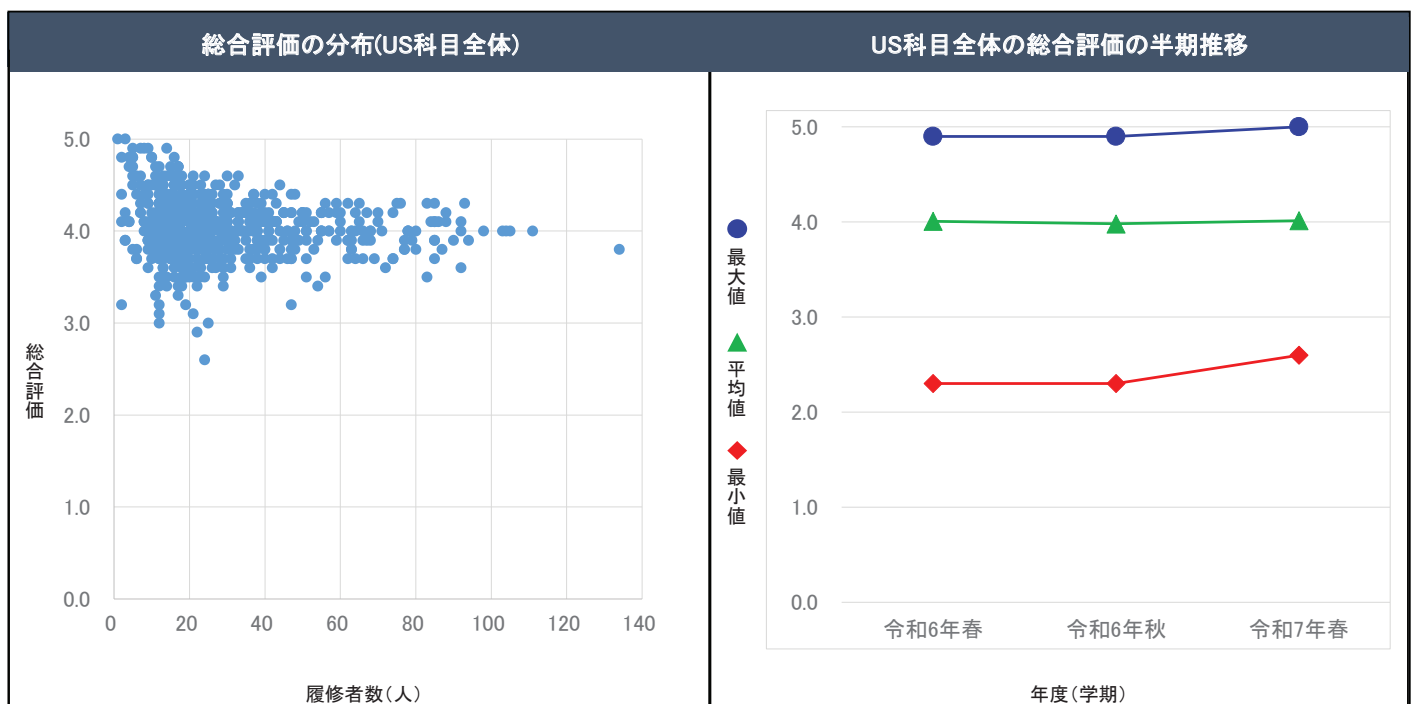
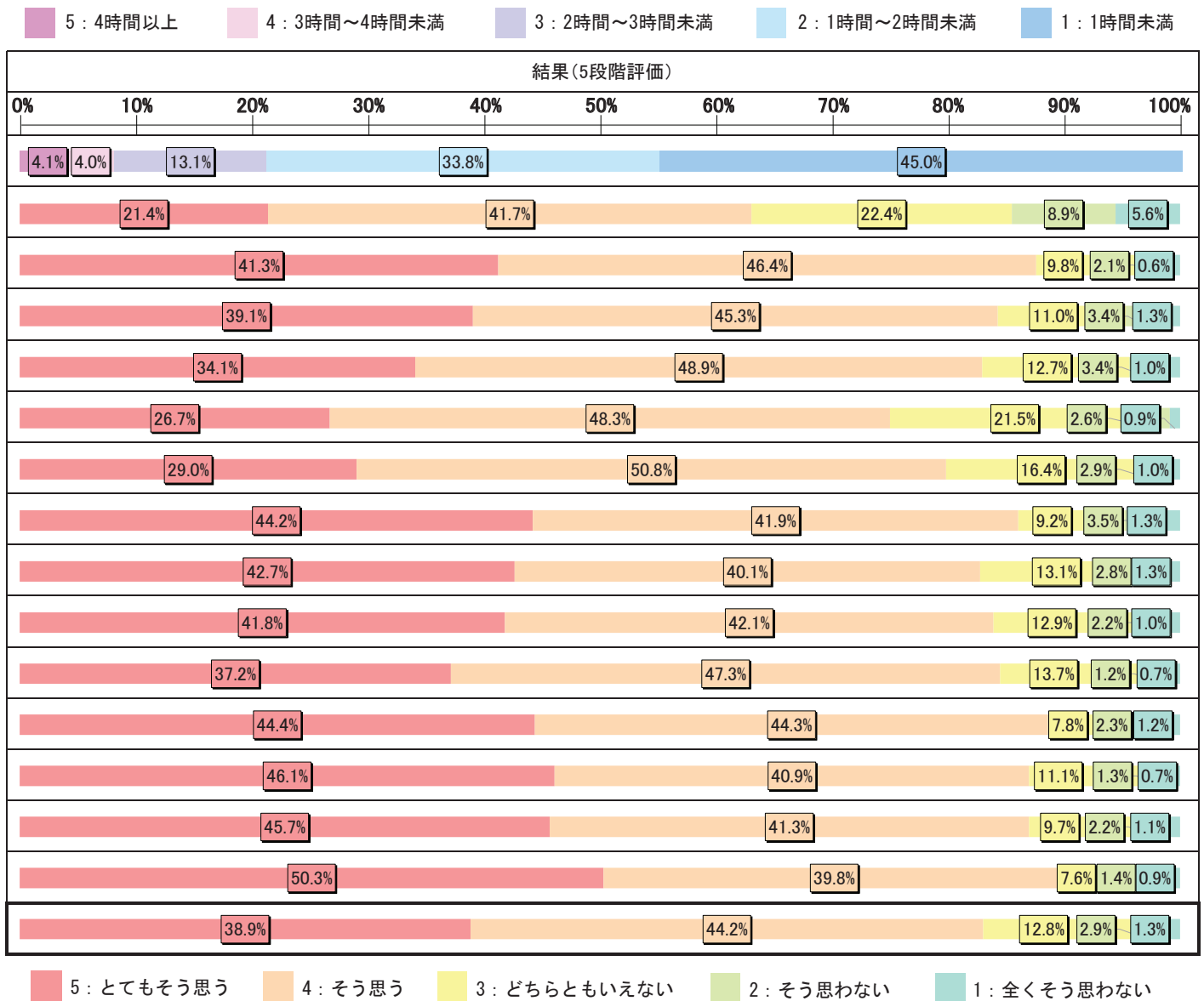
回答者数：10,917名

回答率：53.7%

設問				US科目 全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	1.9
	2	シラバス	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.6
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.3
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.2
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.0
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.2
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.2
	10	教材	教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.2
	11	授業計画	授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.2
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.3
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.3
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.3
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.4
総合評価				4.0

平均値＝（「5」回答数×5＋「4」回答数×4＋「3」回答数×3＋「2」回答数×2＋「1」回答数×1）／回答数(小数点第2位を四捨五入)





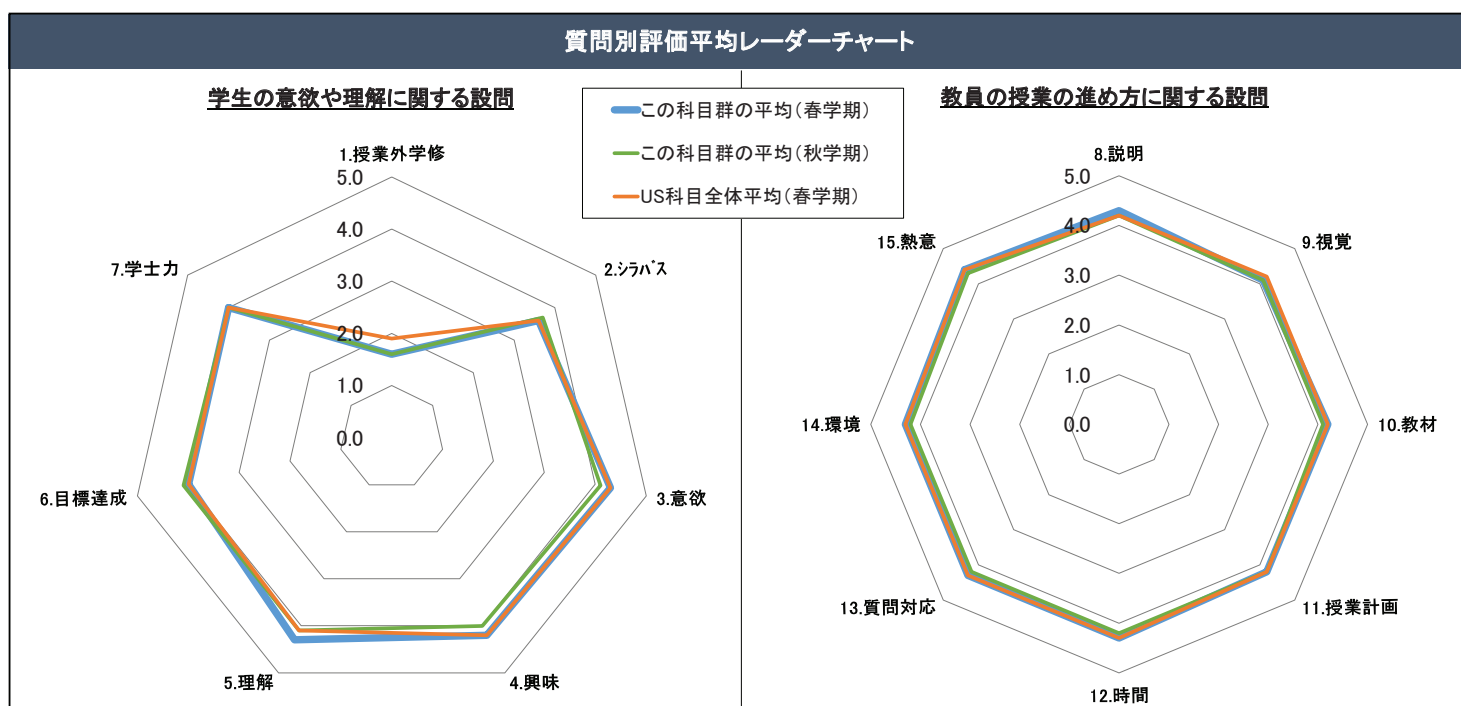
US科目 玉川教育・FYE科目群

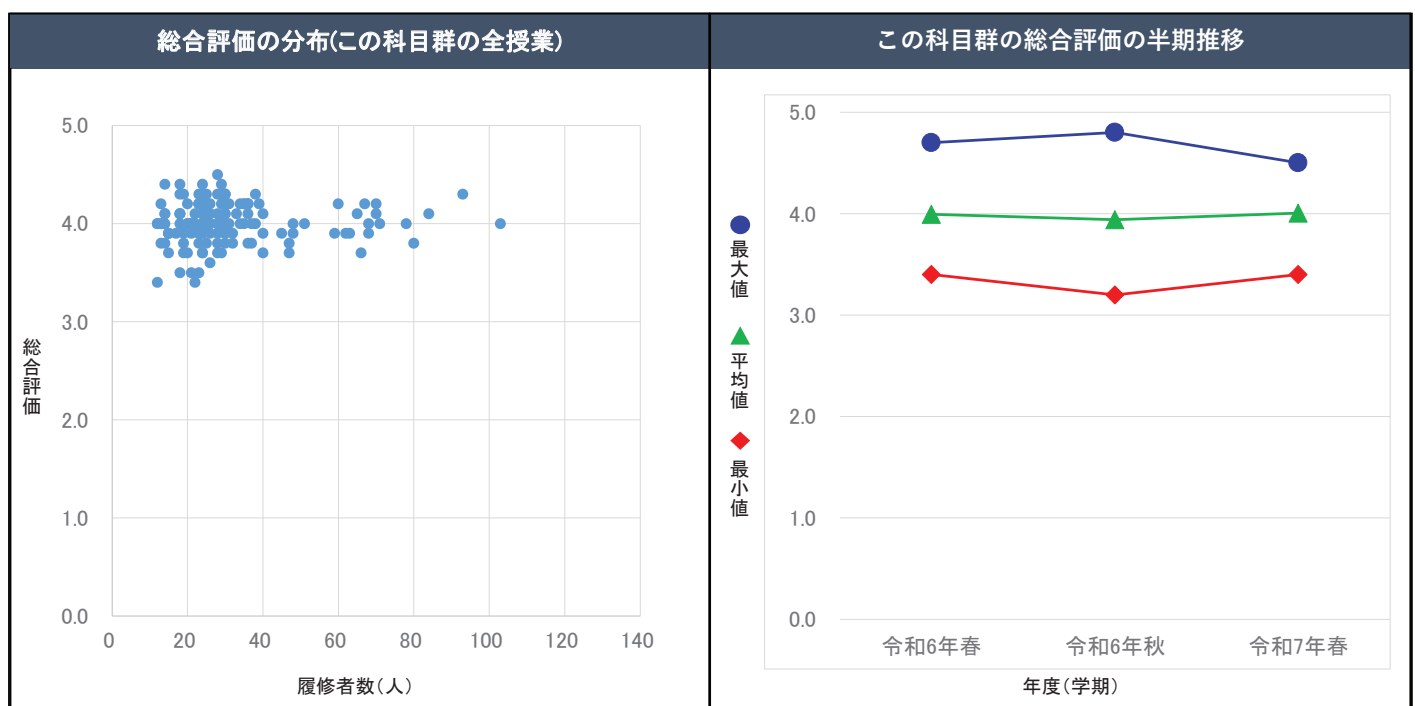
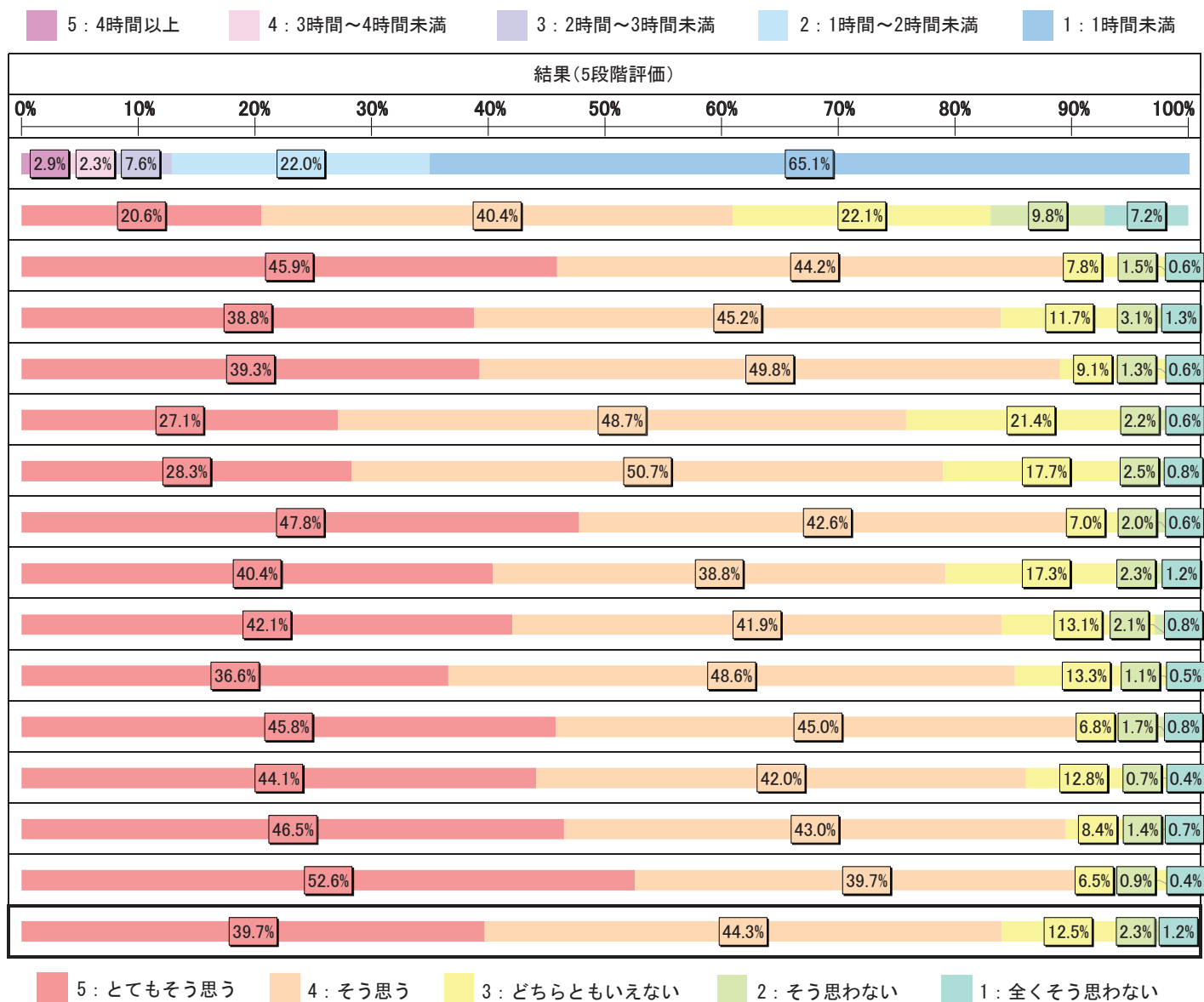
履修者数：4,708名

回答者数：3,337名

回答率：70.9%

設問				科目群 平均	US科目 全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	1.6	1.9
	2	シラバス	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.6	3.6
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.3	4.3
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.2	4.2
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.3	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.0	4.0
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.3	4.2
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.1	4.2
	10	教材	教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.2	4.2
	11	授業計画	授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.2	4.2
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.3	4.3
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.3	4.3
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.3	4.3
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.4	4.4
総合評価				4.0	4.0

$$\text{平均値} = (「5」\text{回答数} \times 5 + 「4」\text{回答数} \times 4 + 「3」\text{回答数} \times 3 + 「2」\text{回答数} \times 2 + 「1」\text{回答数} \times 1) / \text{回答数 (小数点第2位を四捨五入)}$$




US科目 人文科学科目群

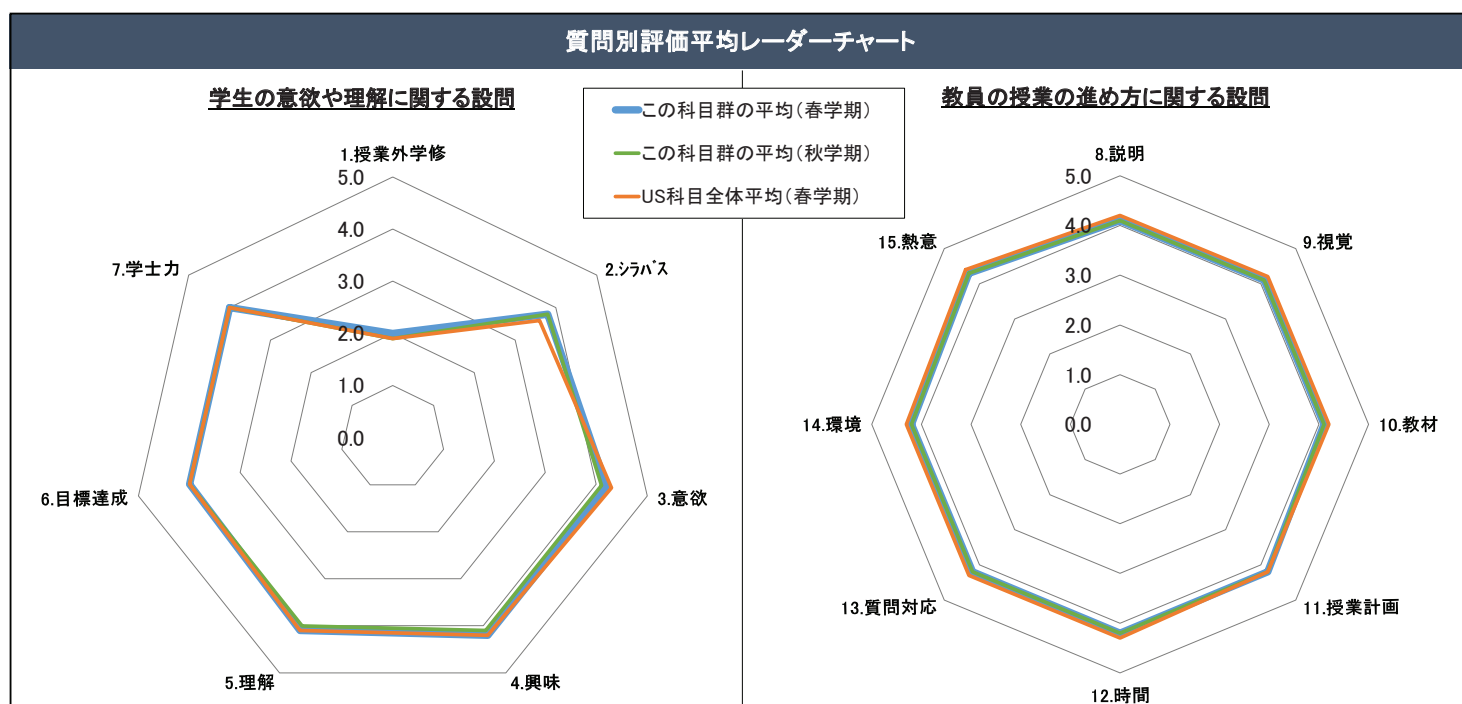
履修者数：2,519名

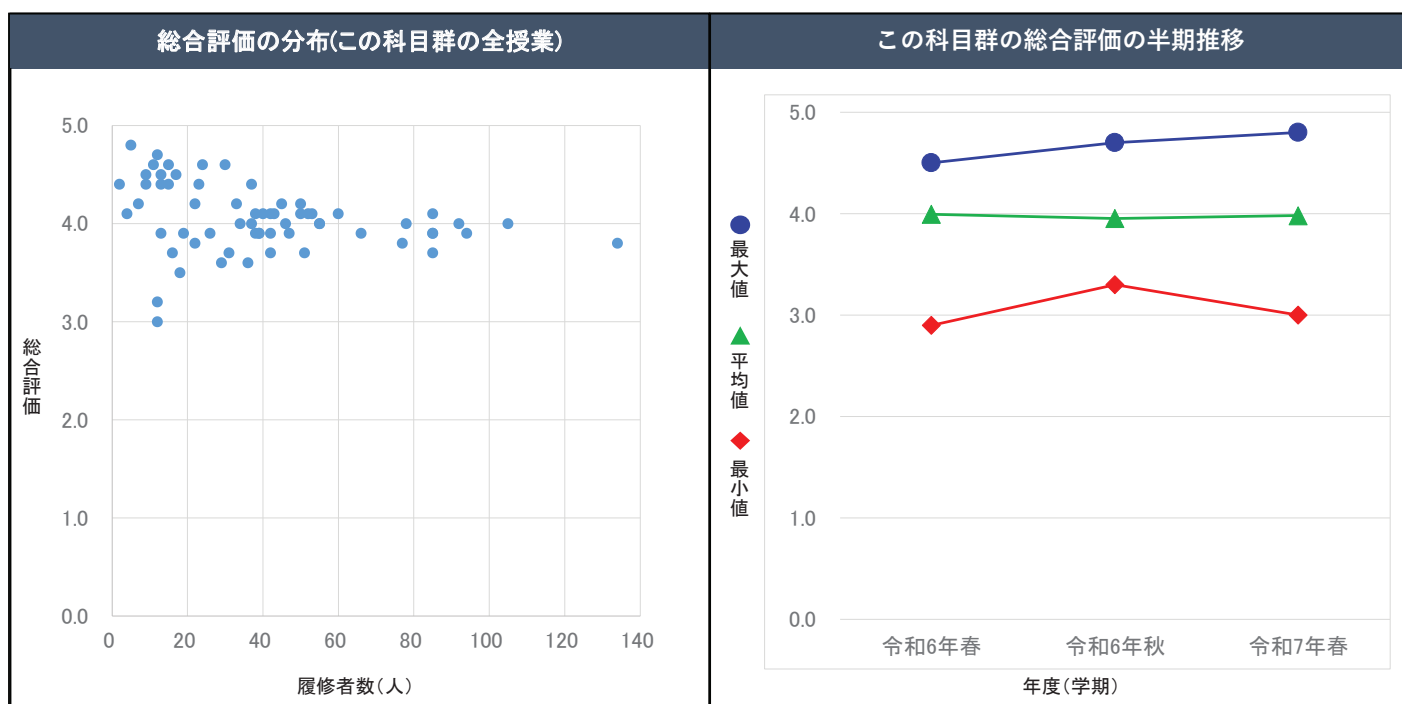
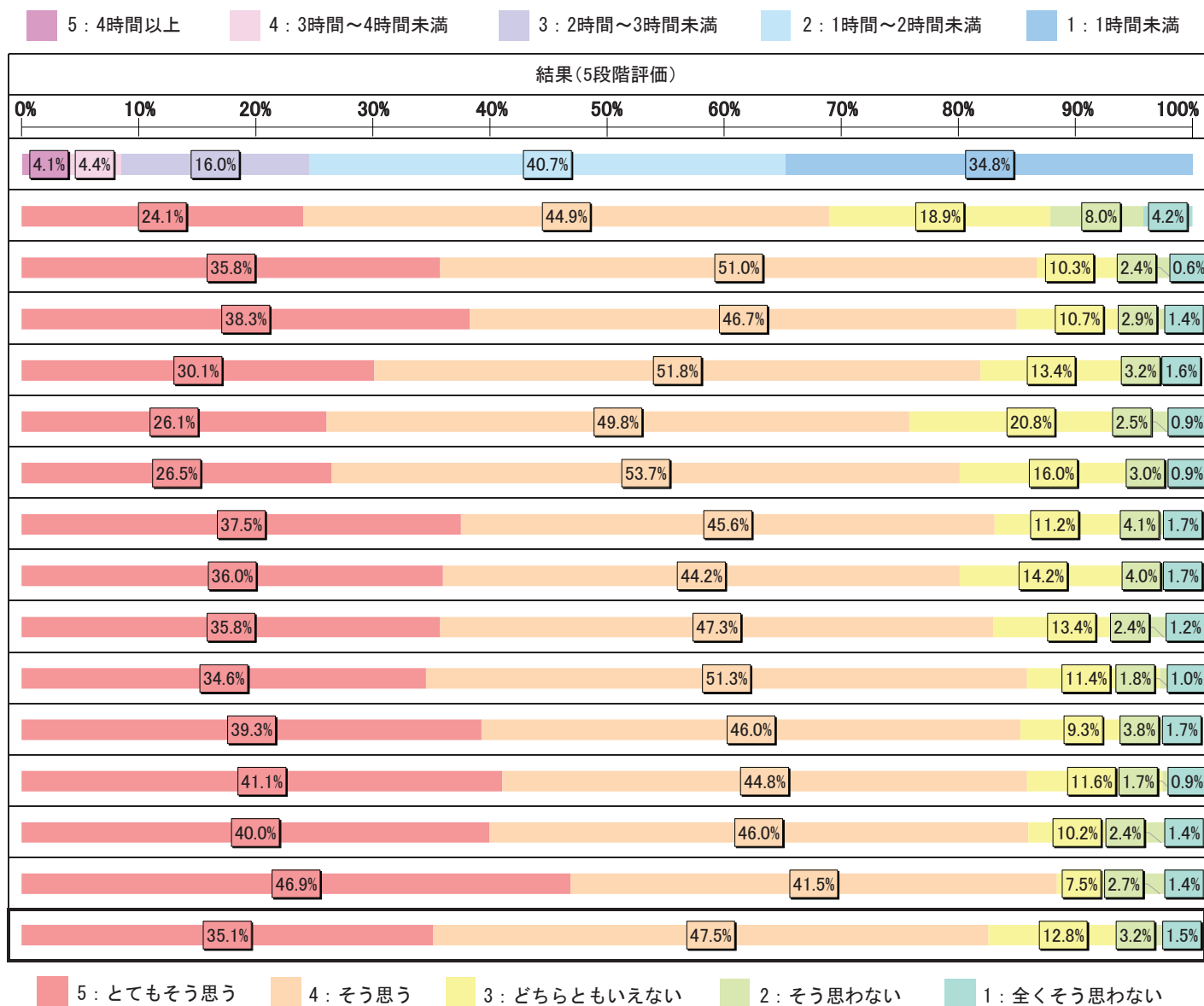
回答者数：906名

回答率：36.0%

設問				科目群 平均	US科目 全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	2.0	1.9
	2	シラバス	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.8	3.6
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.2	4.3
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.2	4.2
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.1	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.0	4.0
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.1	4.2
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.1	4.2
	10	教材	教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.1	4.2
	11	授業計画	授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.2	4.2
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.2	4.3
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.2	4.3
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.2	4.3
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.3	4.4
総合評価				4.0	4.0

平均値＝（「5」回答数×5＋「4」回答数×4＋「3」回答数×3＋「2」回答数×2＋「1」回答数×1）／回答数(小数点第2位を四捨五入)





US科目 社会科学科目群

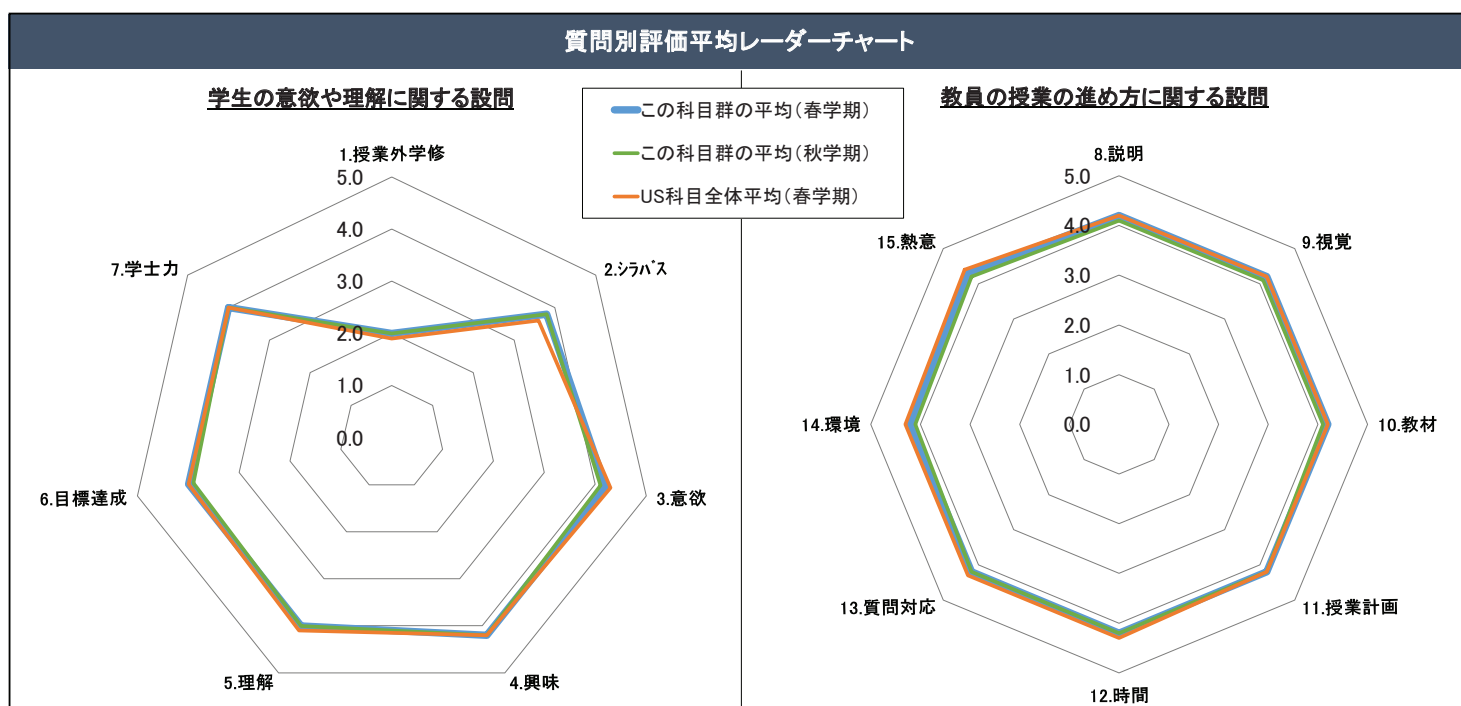
履修者数：2,091名

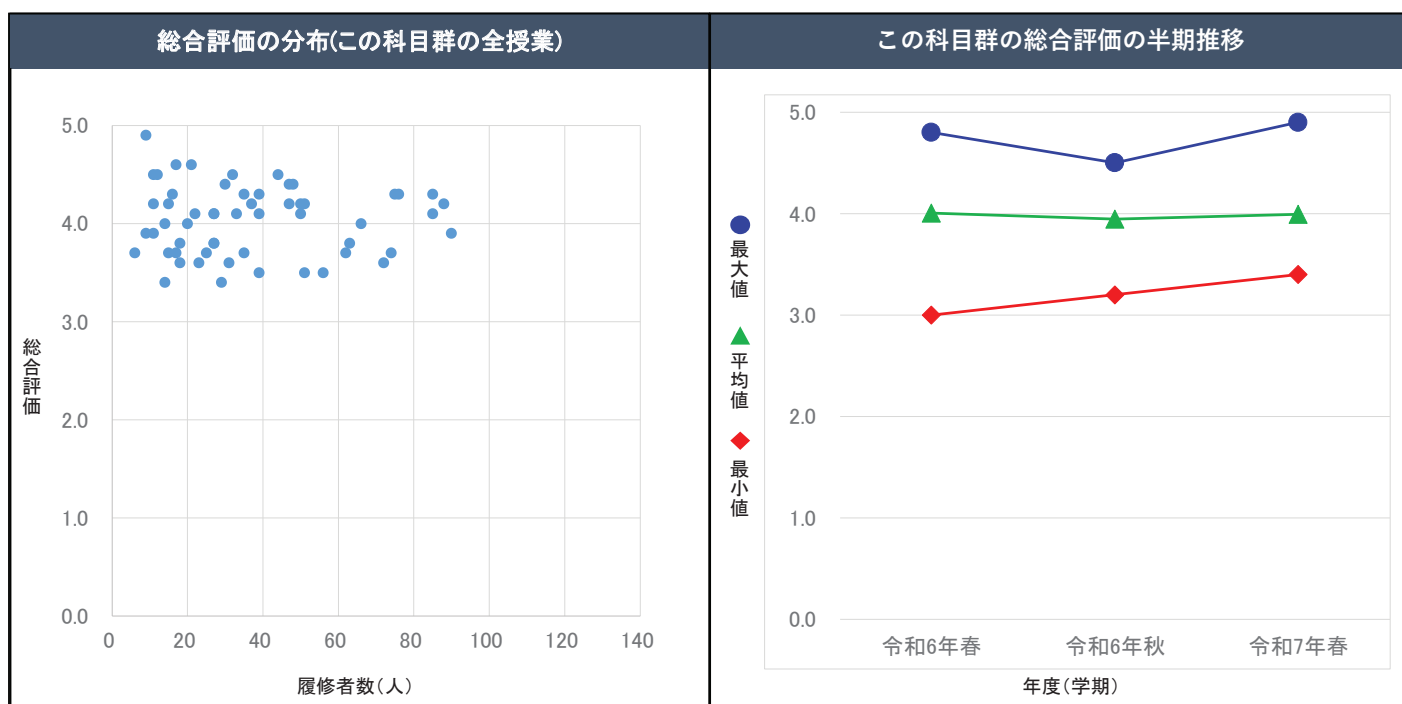
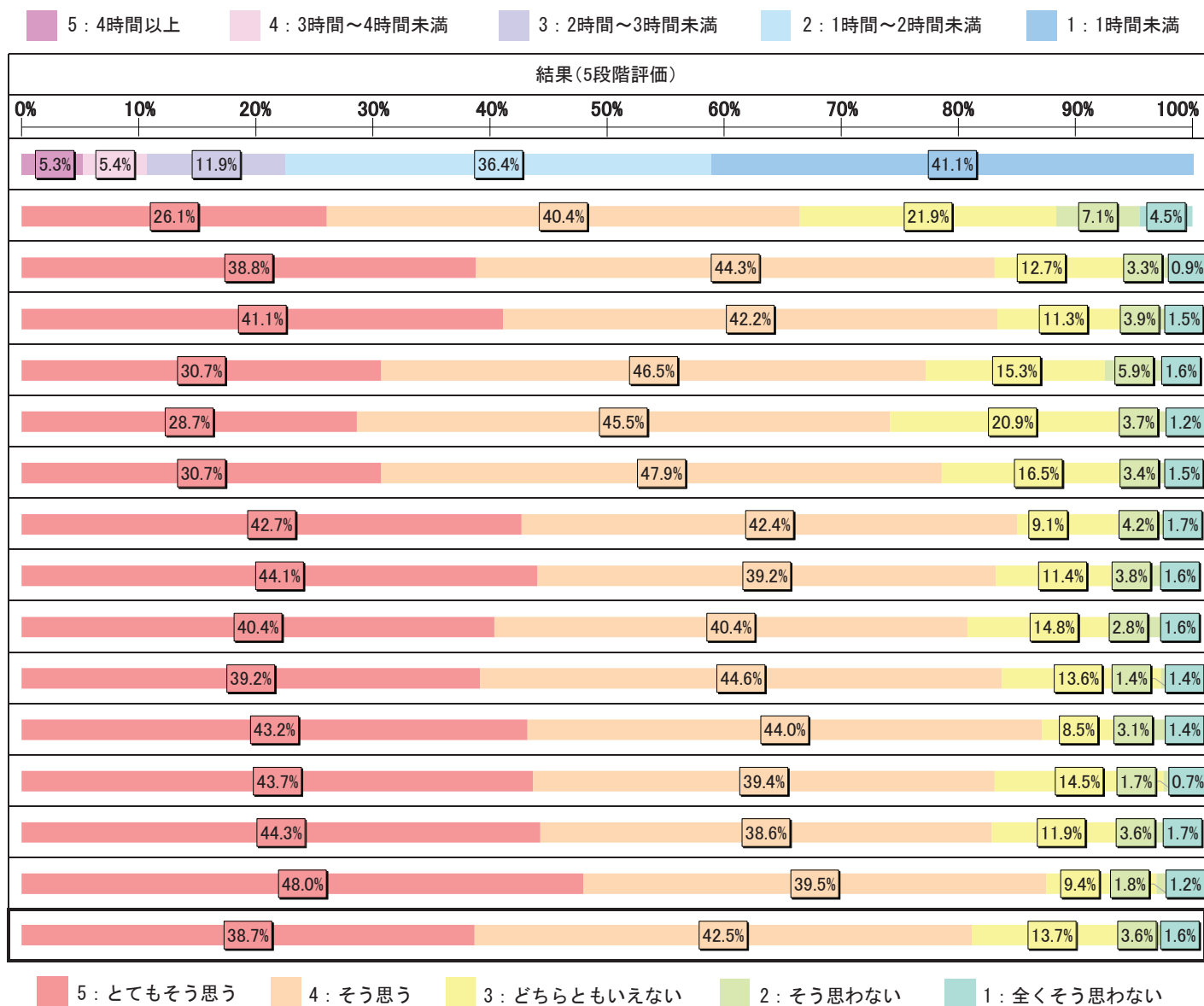
回答者数：817名

回答率：39.1%

設問				科目群 平均	US科目 全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	2.0	1.9
	2	シラバス	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.8	3.6
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.2	4.3
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.2	4.2
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.0	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.0	4.0
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.2	4.2
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.2	4.2
	10	教材	教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.2	4.2
	11	授業計画	授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.2	4.2
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.2	4.3
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.2	4.3
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.2	4.3
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.3	4.4
総合評価				4.0	4.0

平均値＝（「5」回答数×5＋「4」回答数×4＋「3」回答数×3＋「2」回答数×2＋「1」回答数×1）／回答数(小数点第2位を四捨五入)





US科目 自然科学科目群

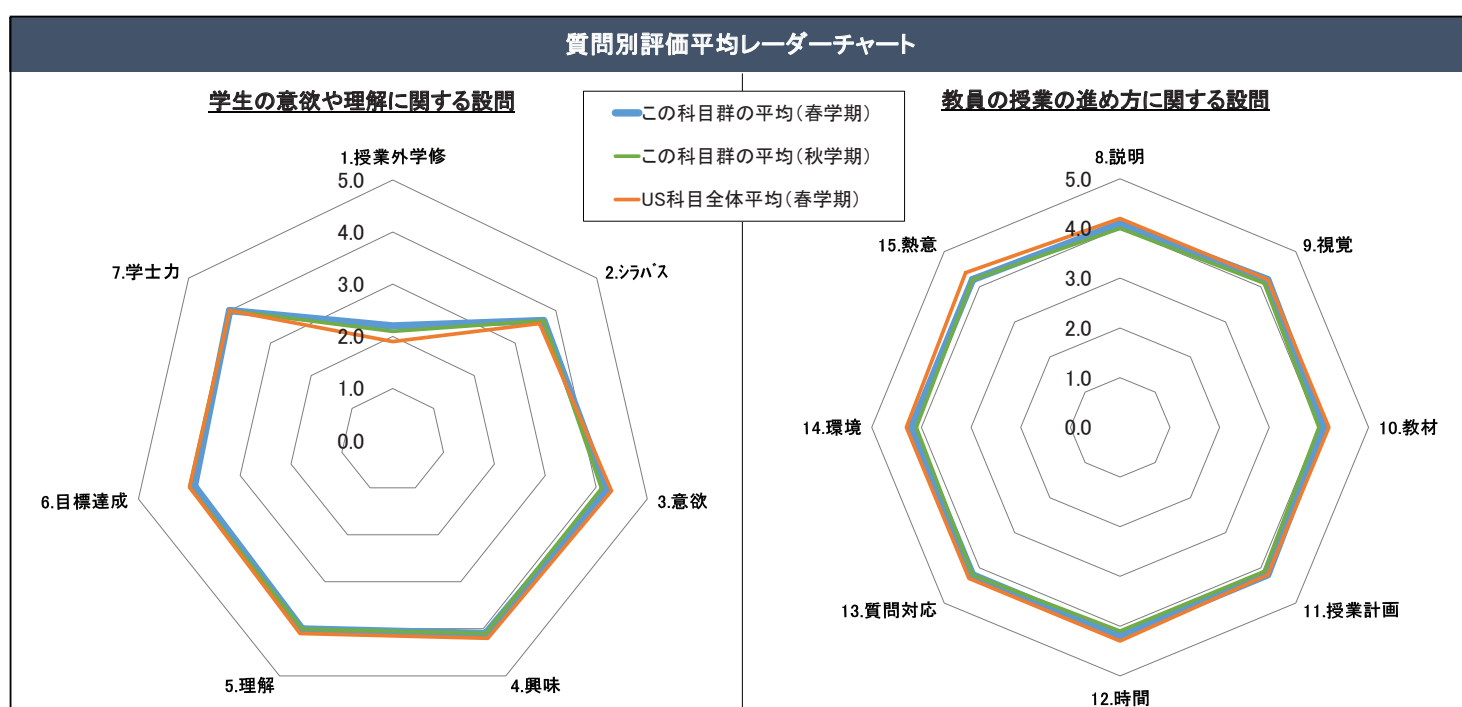
履修者数：2,852名

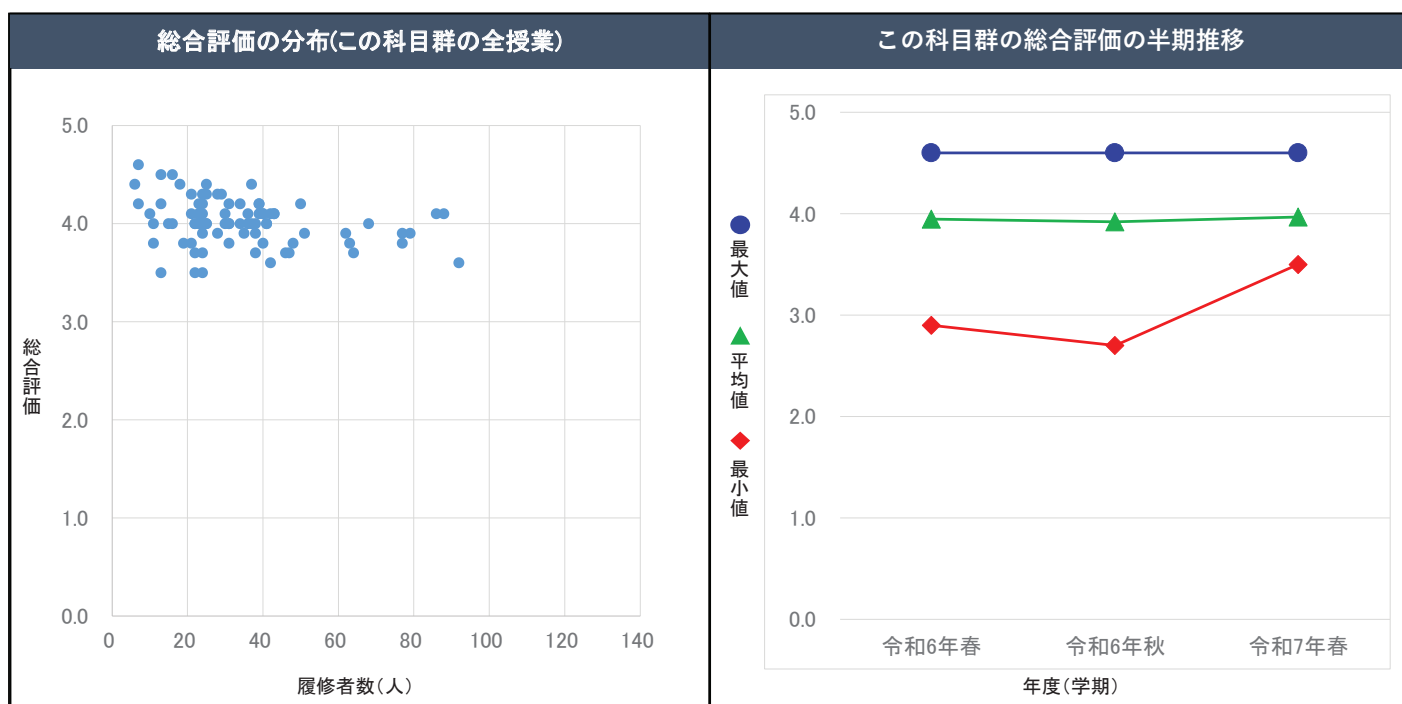
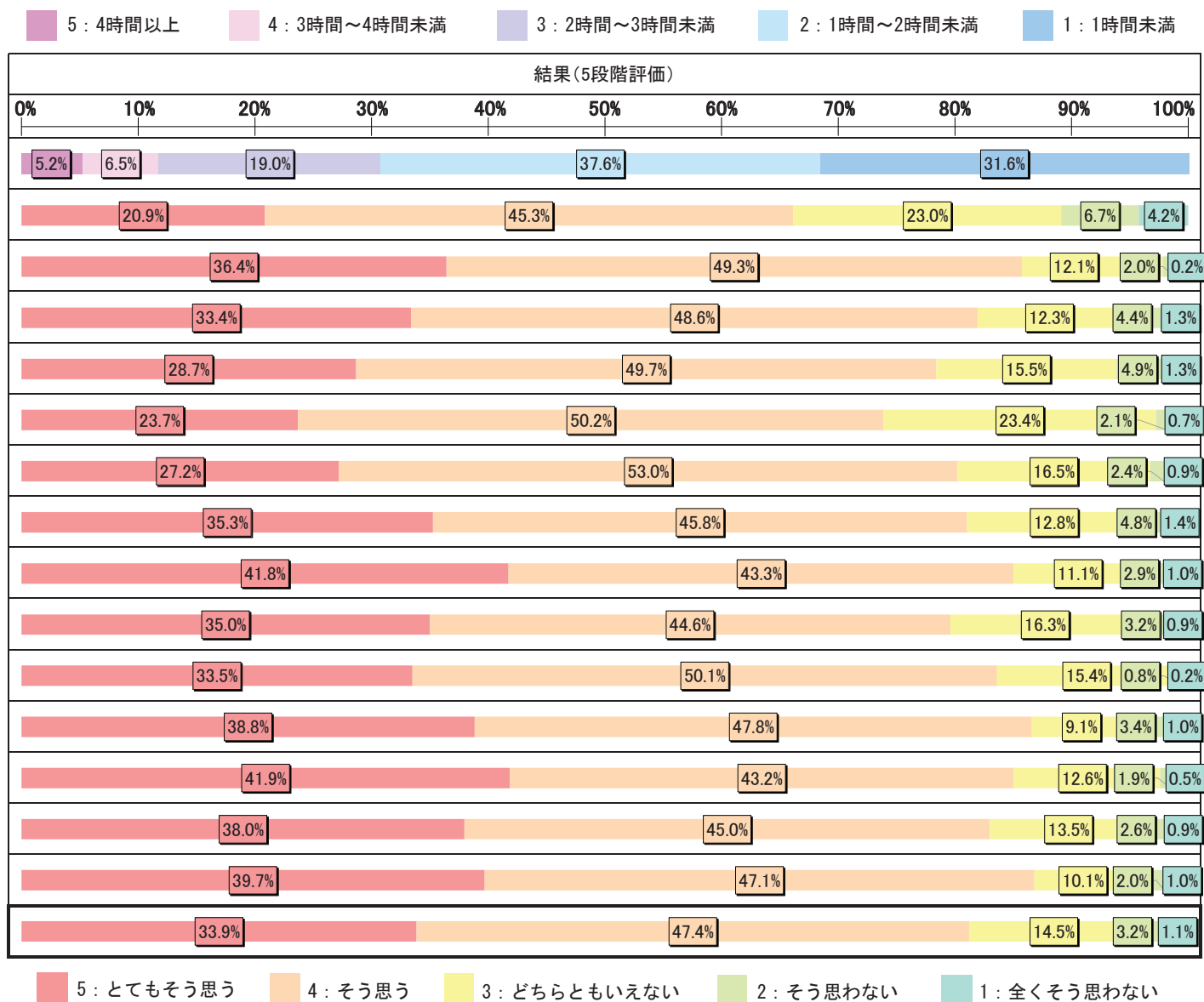
回答者数：1,746名

回答率：61.2%

設問				科目群 平均	US科目 全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	2.2	1.9
	2	シラバス	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.7	3.6
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.2	4.3
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.1	4.2
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.0	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.9	4.0
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.1	4.2
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.2	4.2
	10	教材	教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.1	4.2
	11	授業計画	授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.2	4.2
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.2	4.3
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.2	4.3
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.2	4.3
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.2	4.4
総合評価				4.0	4.0

平均値＝（「5」回答数×5＋「4」回答数×4＋「3」回答数×3＋「2」回答数×2＋「1」回答数×1）／回答数（小数点第2位を四捨五入）





US科目 学際科目群

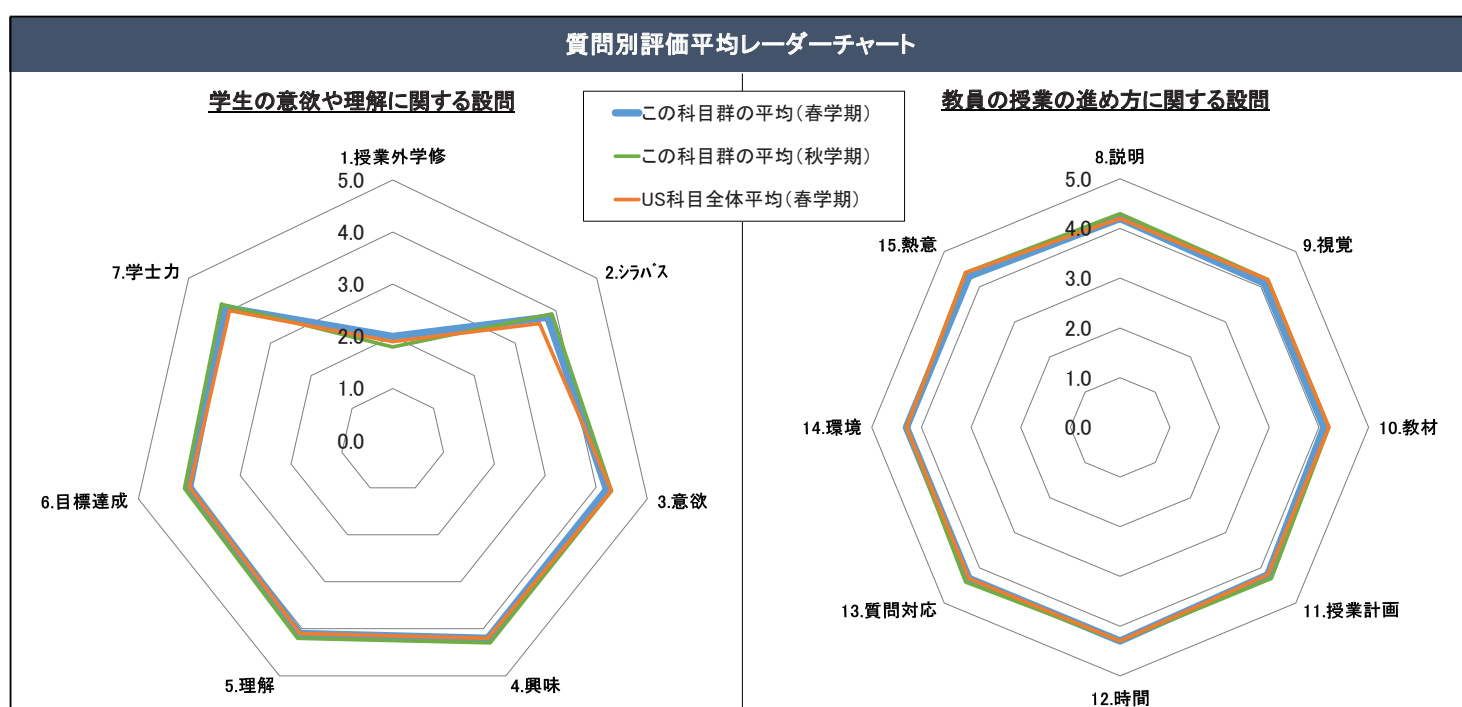
履修者数：1,978名

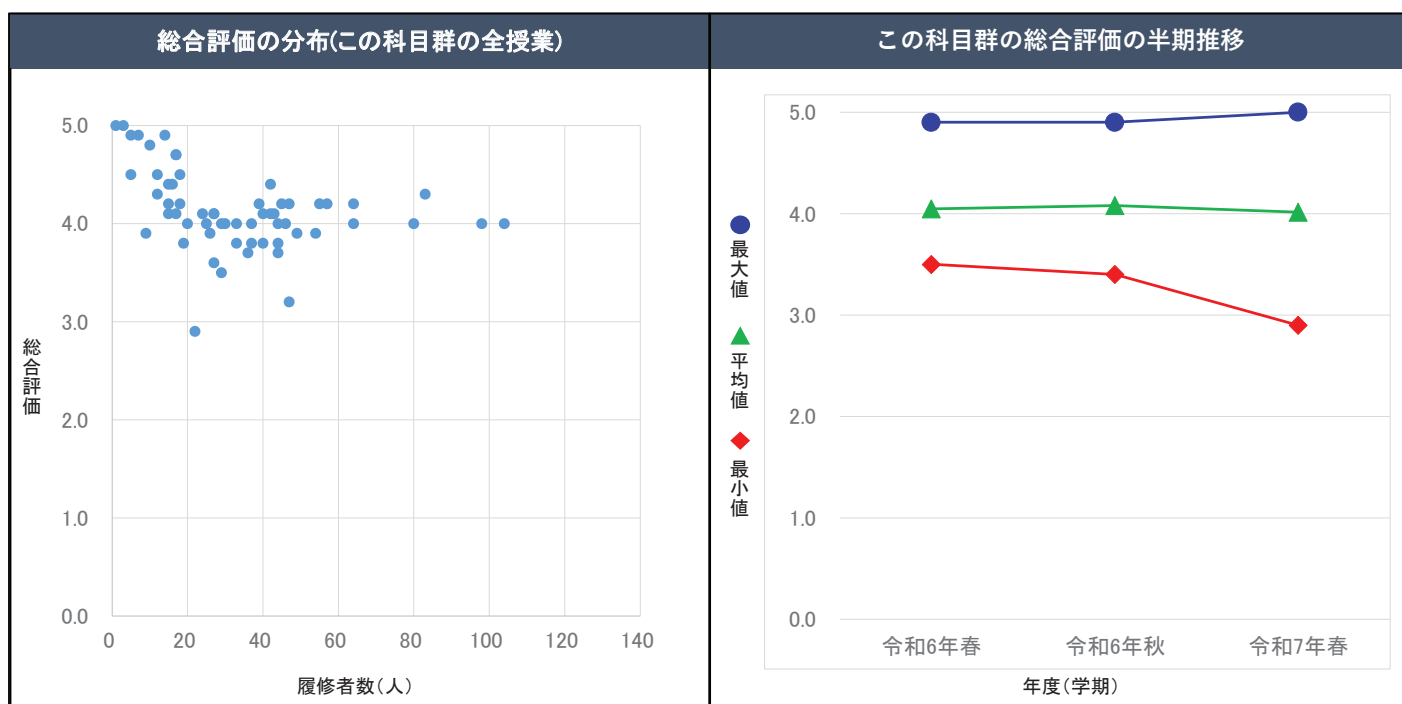
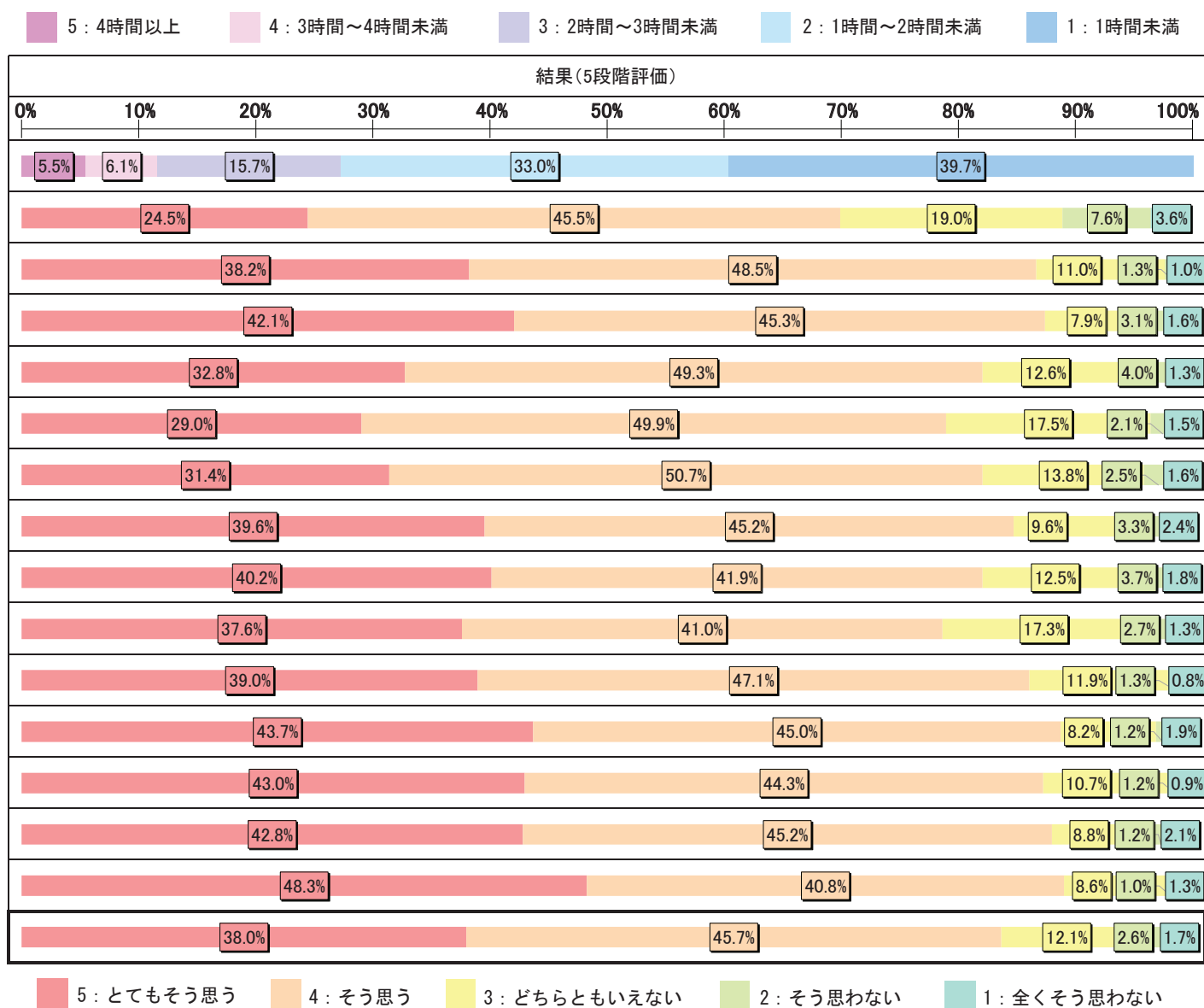
回答者数：675名

回答率：34.1%

設問				科目群 平均	US科目 全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	2.0	1.9
	2	シラバス	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.8	3.6
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.2	4.3
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.2	4.2
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.1	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.0	4.0
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.1	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.2	4.2
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.1	4.2
	10	教材	教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.1	4.2
	11	授業計画	授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.2	4.2
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.3	4.3
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.3	4.3
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.3	4.3
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.3	4.4
総合評価				4.0	4.0

平均値＝（「5」回答数×5＋「4」回答数×4＋「3」回答数×3＋「2」回答数×2＋「1」回答数×1）／回答数(小数点第2位を四捨五入)





US科目 言語表現科目群

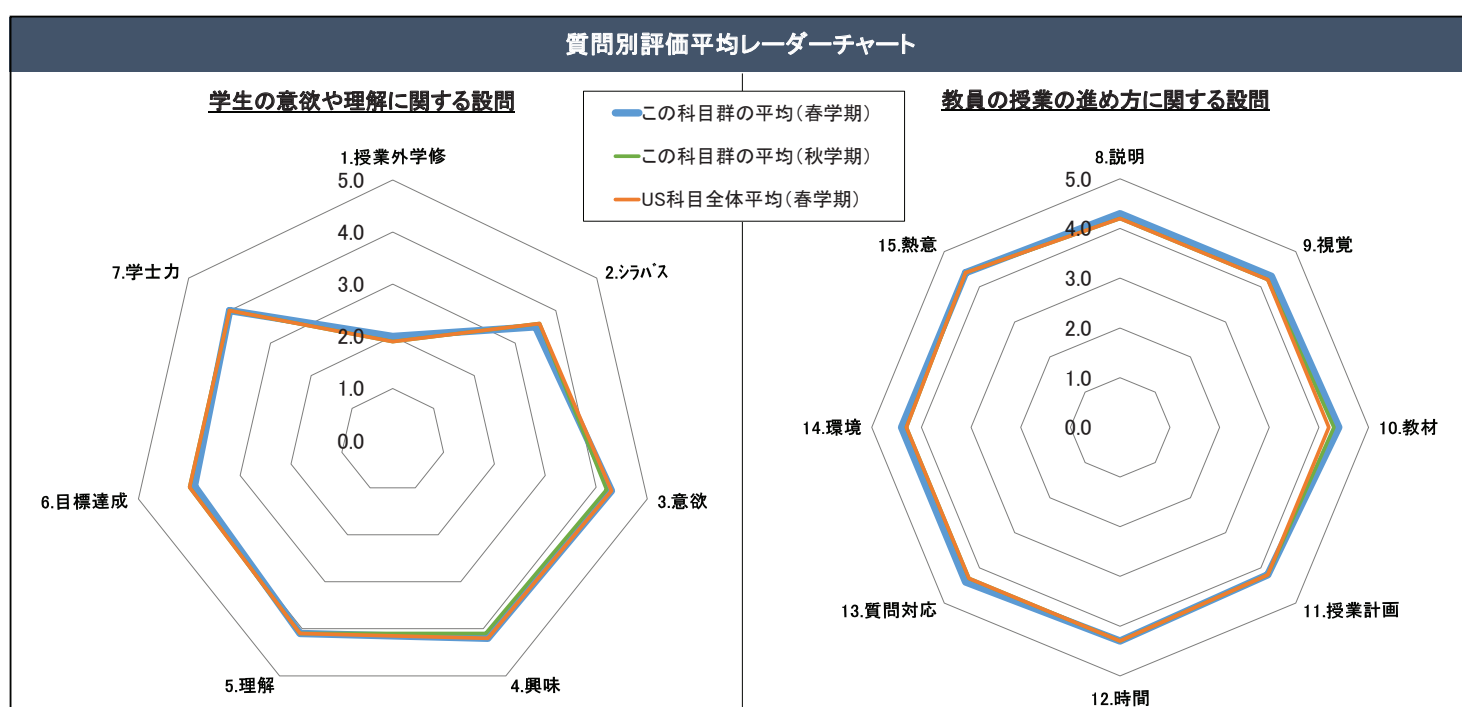
履修者数：3,244名

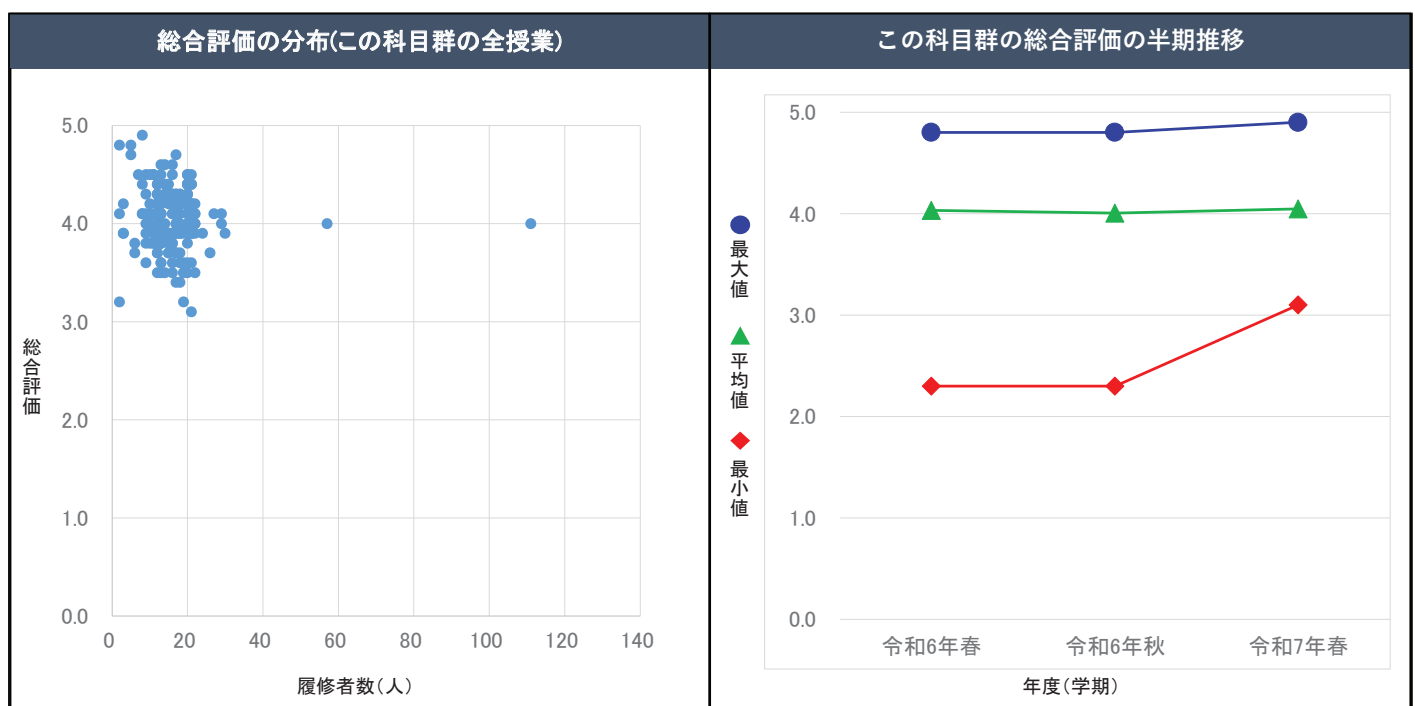
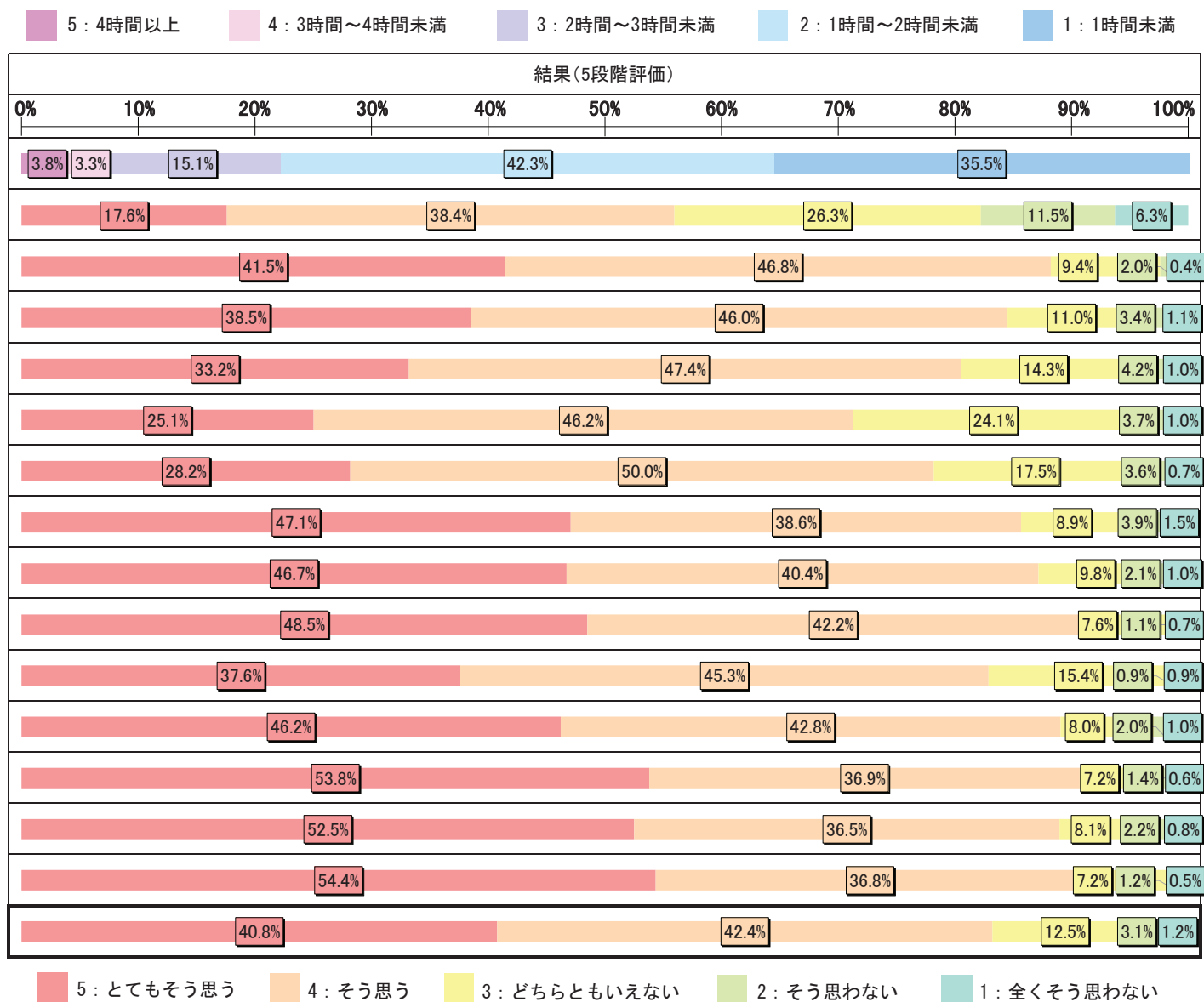
回答者数：2,228名

回答率：68.7%

設問				科目群 平均	US科目 全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	2.0	1.9
	2	シラバス	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.5	3.6
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.3	4.3
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.2	4.2
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.1	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.9	4.0
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.3	4.2
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.3	4.2
	10	教材	教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.4	4.2
	11	授業計画	授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.2	4.2
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.3	4.3
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.4	4.3
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.4	4.3
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.4	4.4
総合評価				4.0	4.0

平均値＝（「5」回答数×5＋「4」回答数×4＋「3」回答数×3＋「2」回答数×2＋「1」回答数×1）／回答数(小数点第2位を四捨五入)





US科目 教職関連科目群

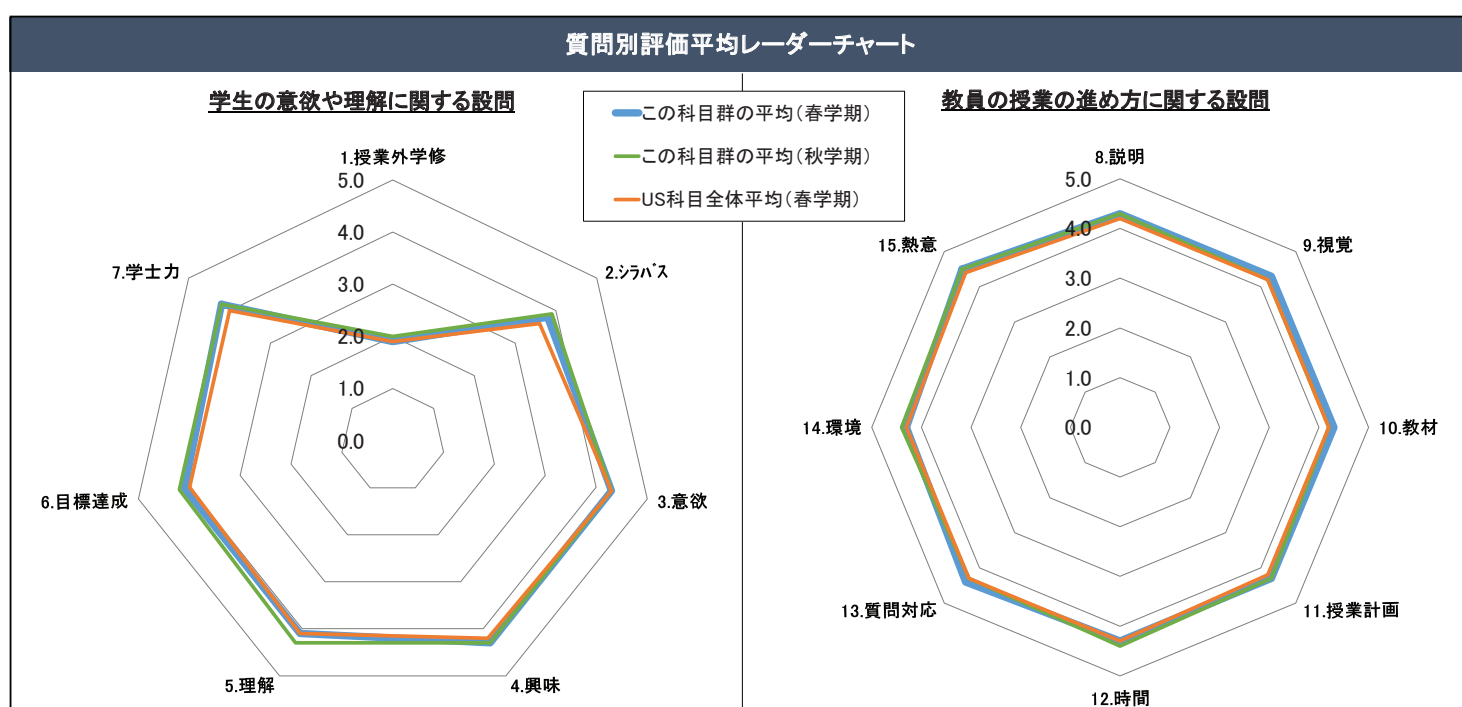
履修者数：2,475名

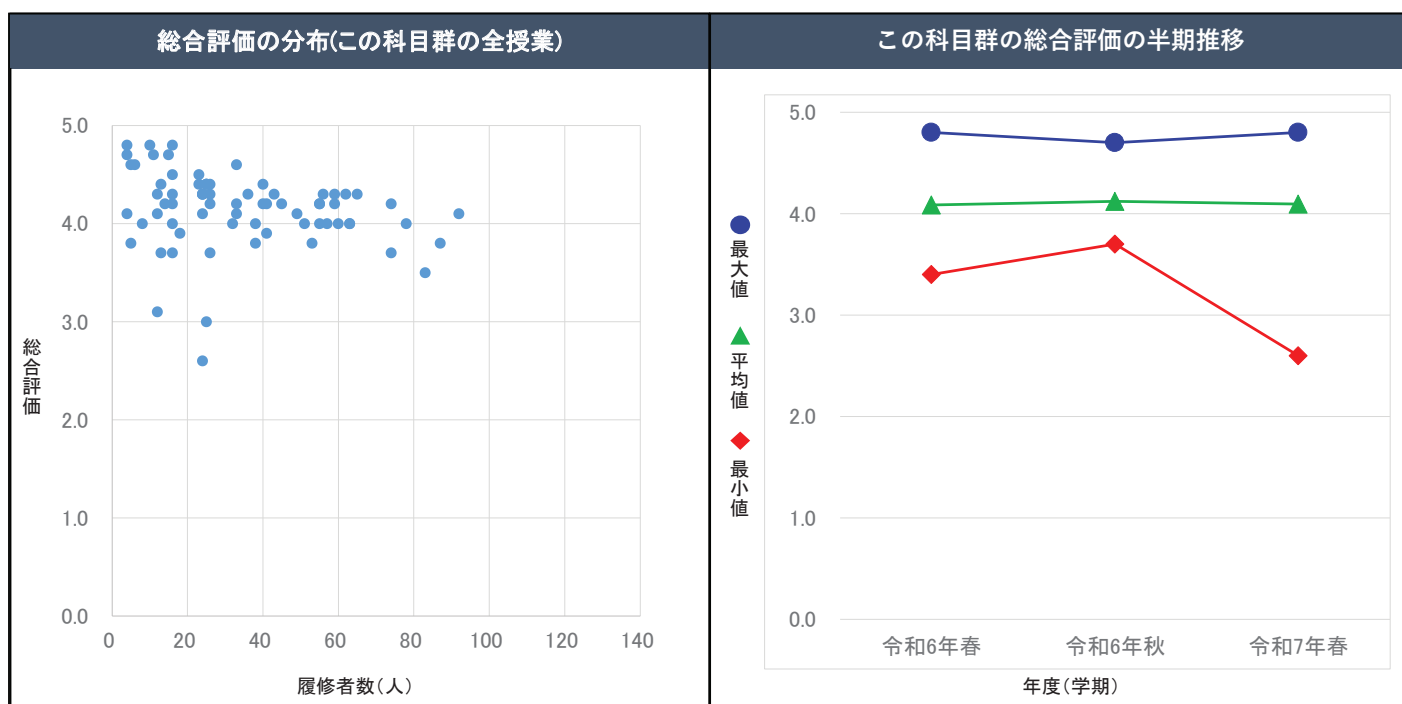
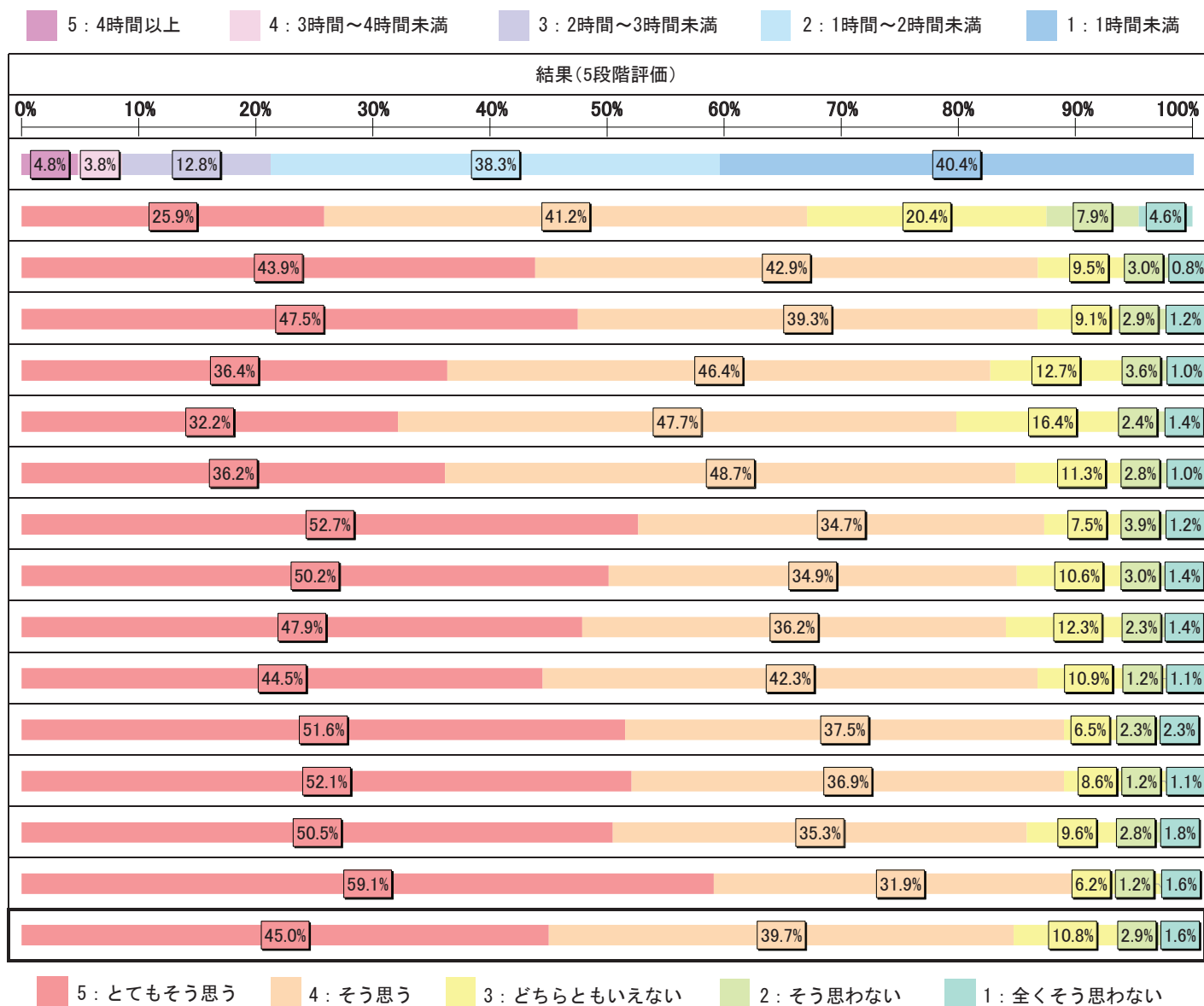
回答者数：1,067名

回答率：43.1%

設問				科目群 平均	US科目 全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	1.9	1.9
	2	シラバス	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.8	3.6
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.3	4.3
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.3	4.2
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.1	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.1	4.0
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.2	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.3	4.2
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.3	4.2
	10	教材	教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.3	4.2
	11	授業計画	授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.3	4.2
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.3	4.3
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.4	4.3
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.3	4.3
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.5	4.4
総合評価				4.1	4.0

平均値＝（「5」回答数×5＋「4」回答数×4＋「3」回答数×3＋「2」回答数×2＋「1」回答数×1）／回答数（小数点第2位を四捨五入）





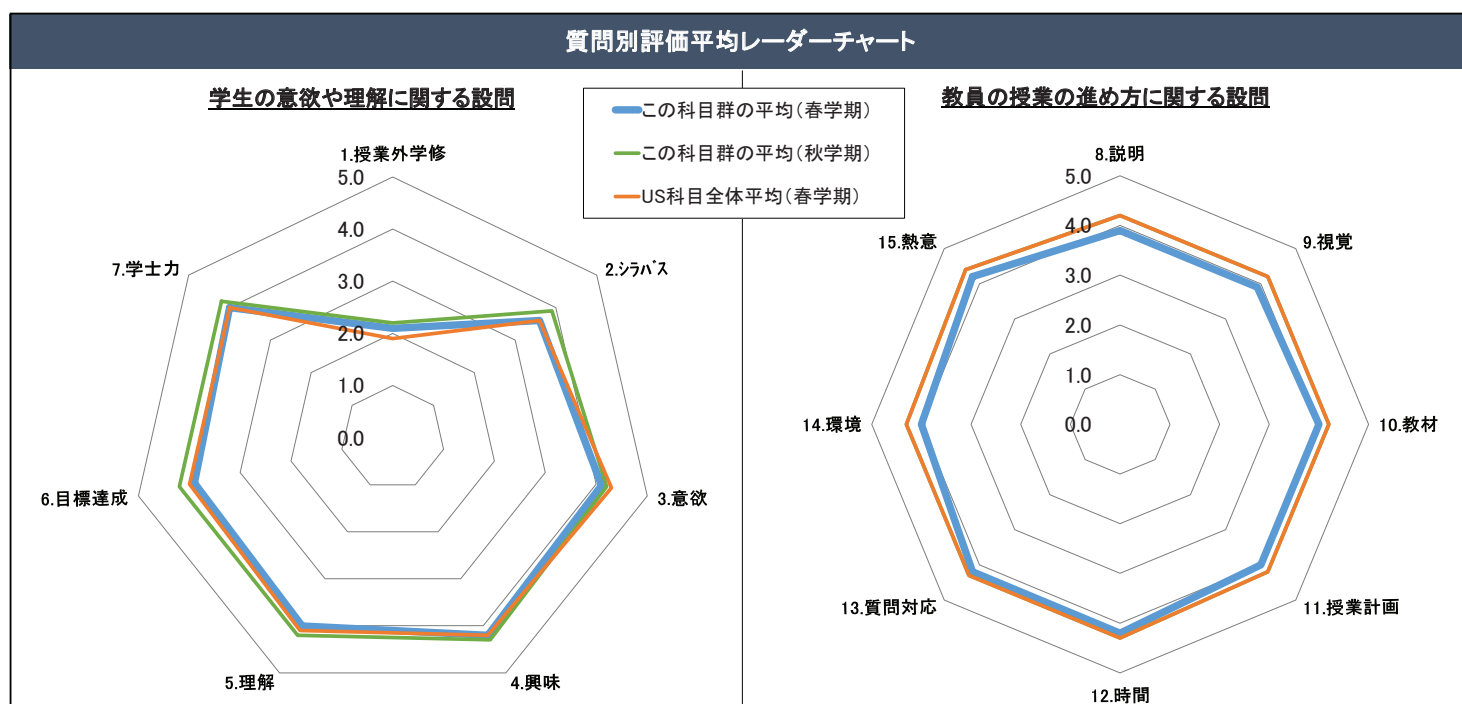
US科目 資格関連科目群

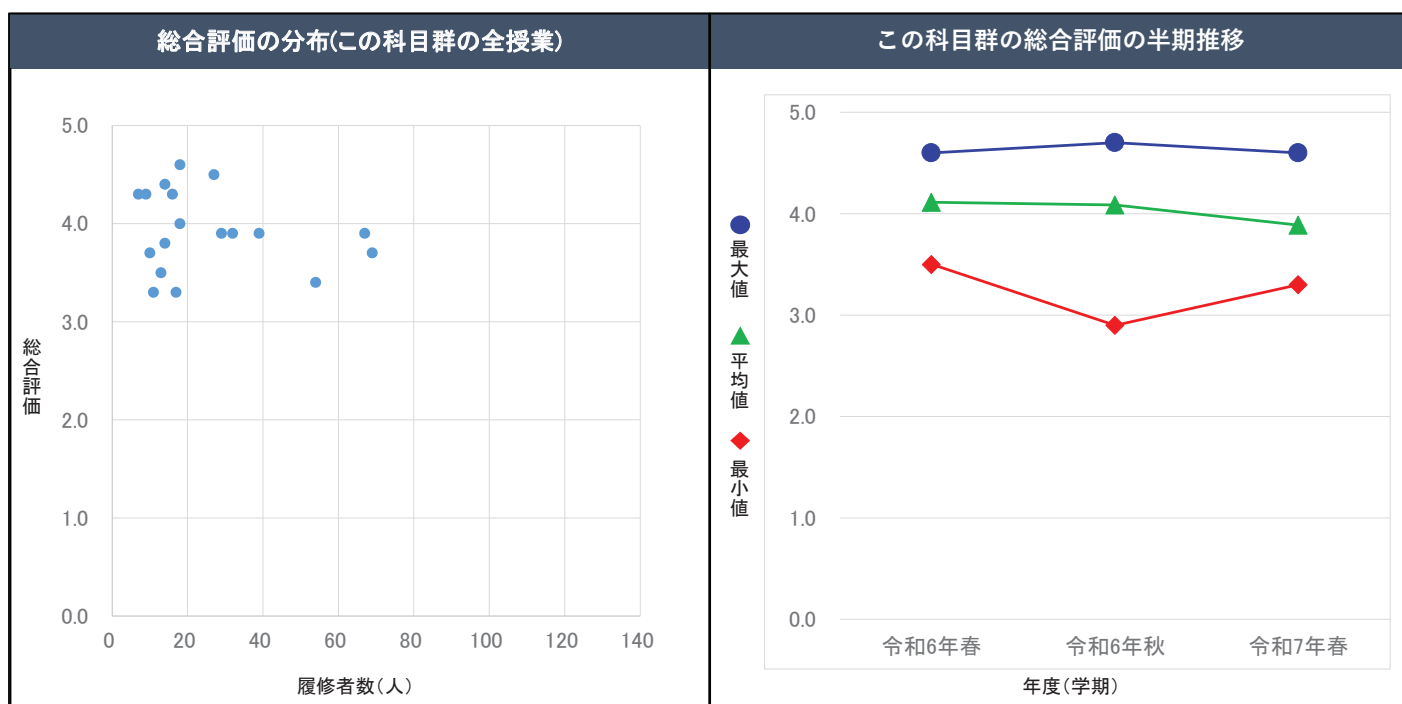
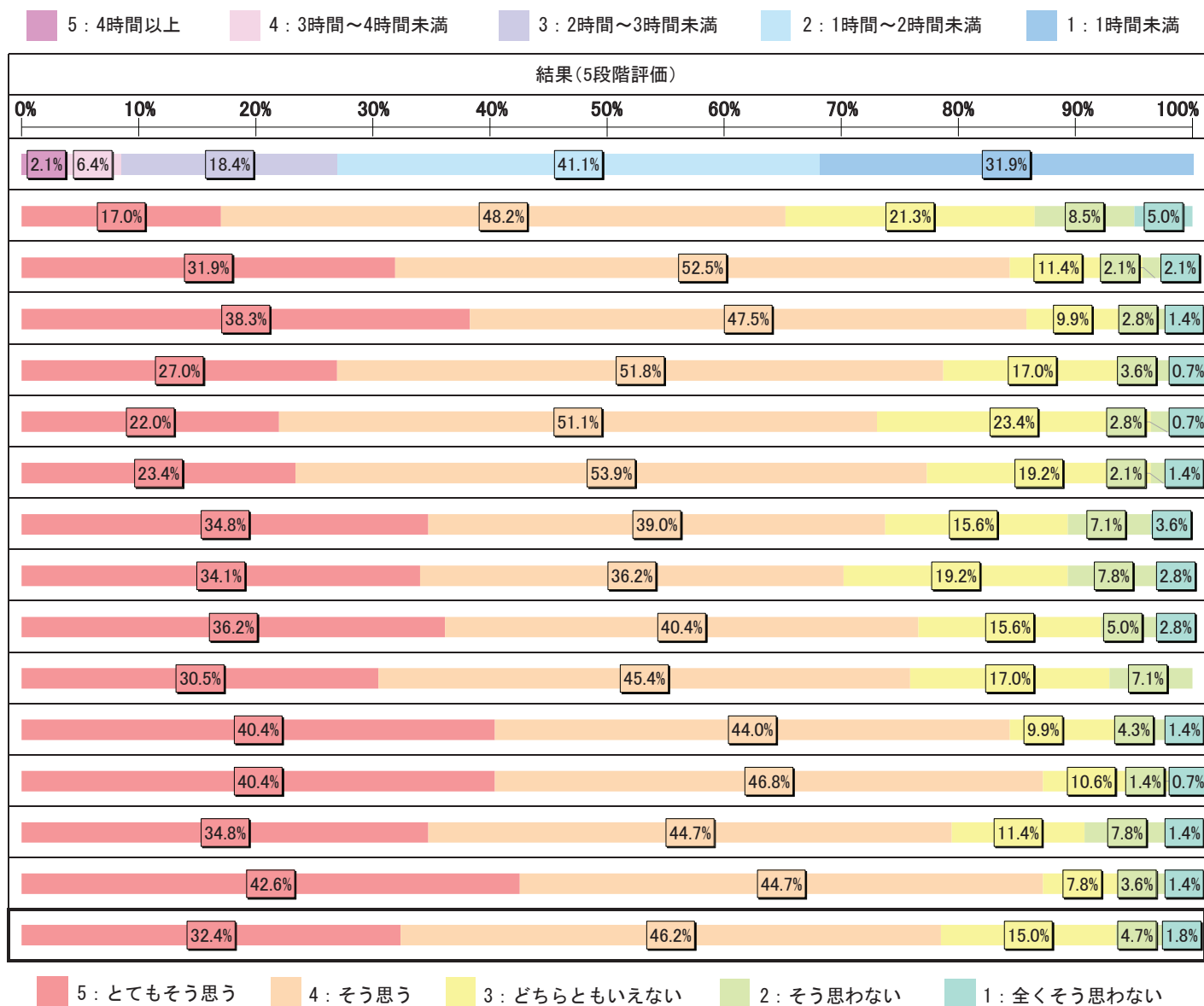
履修者数： 464 名

回答者数： 141 名

回答率： 30.4 %

設問				科目群 平均	US科目 全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	2.1	1.9
	2	シラバス	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.6	3.6
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.1	4.3
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.2	4.2
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.0	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.9	4.0
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	3.9	4.2
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	3.9	4.2
	10	教材	教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.0	4.2
	11	授業計画	授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.0	4.2
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.2	4.3
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.2	4.3
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.0	4.3
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.2	4.4
総合評価				3.9	4.0

$$\text{平均値} = (「5」\text{回答数} \times 5 + 「4」\text{回答数} \times 4 + 「3」\text{回答数} \times 3 + 「2」\text{回答数} \times 2 + 「1」\text{回答数} \times 1) / \text{回答数 (小数点第2位を四捨五入)}$$




US科目全体

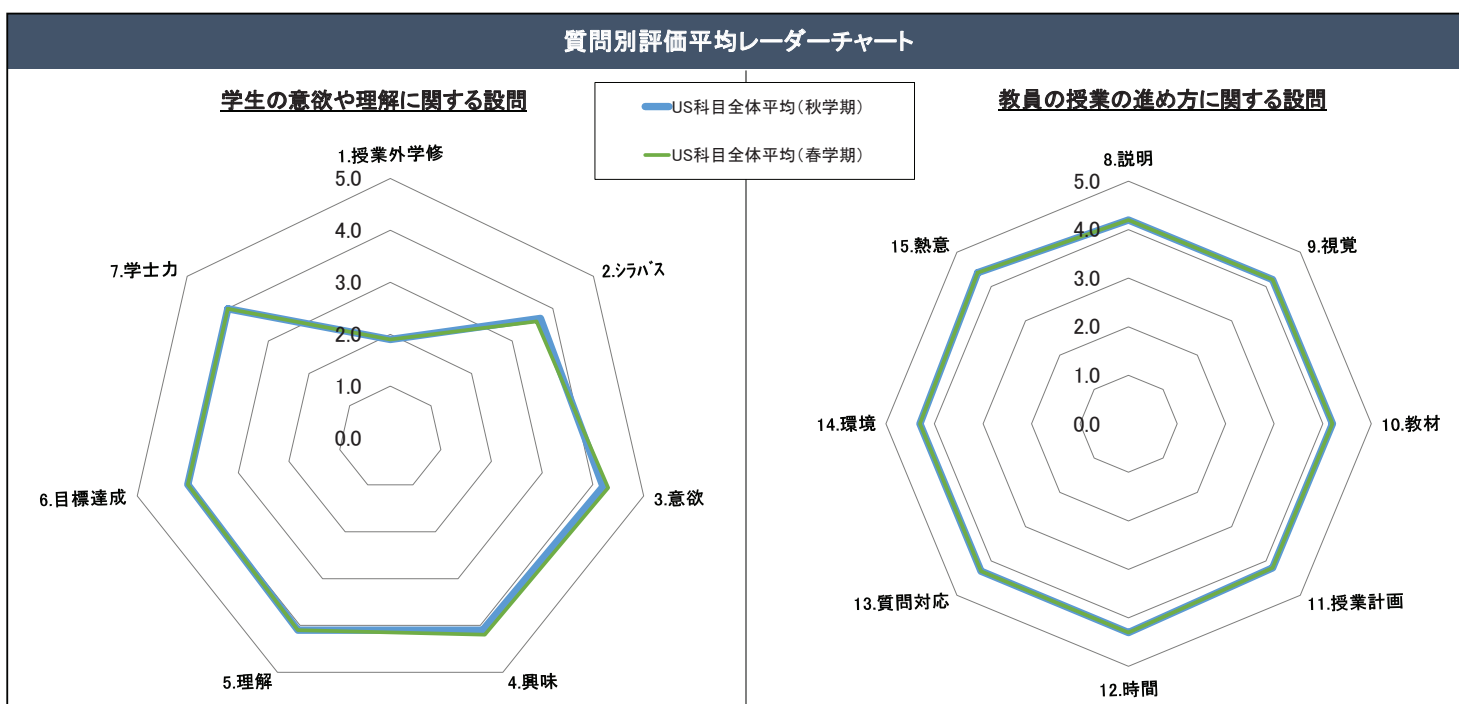
履修者数：17,857名

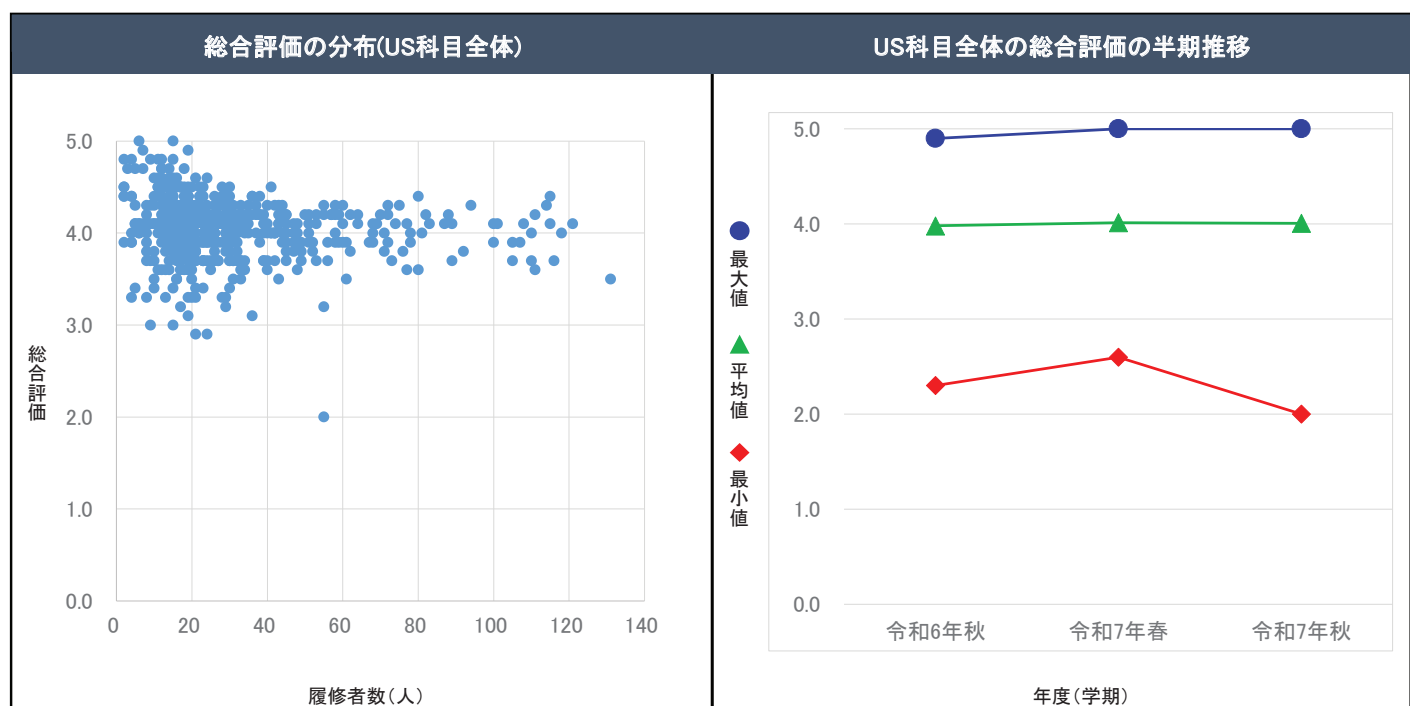
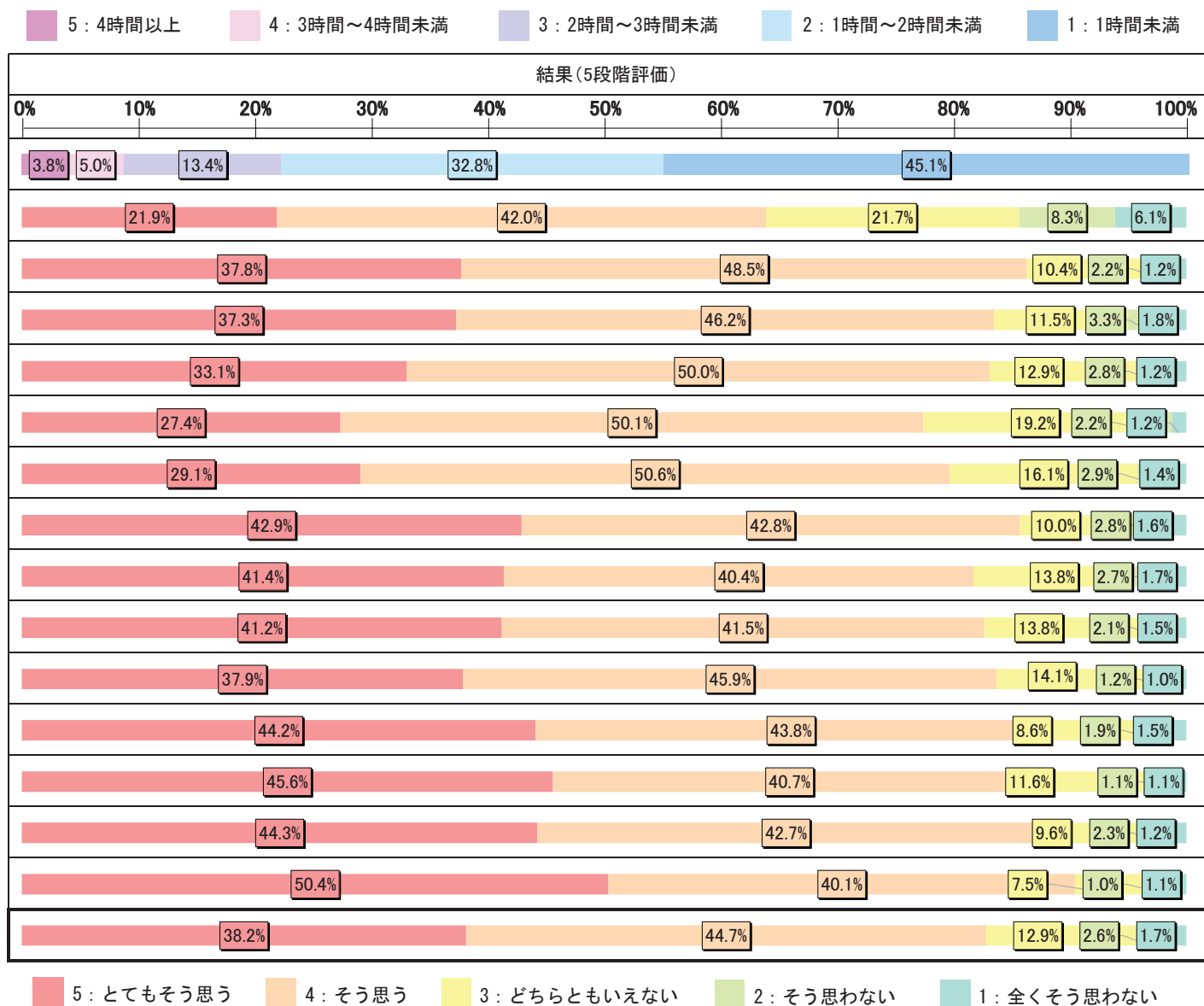
回答者数：7,983名

回答率：44.7%

設問				US科目 全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	1.9
	2	シラバス	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.7
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.0
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.2
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.2
	10	教材	教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.2
	11	授業計画	授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.2
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.3
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.3
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.3
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.4
総合評価				4.0

平均値 = (「5」回答数×5 + 「4」回答数×4 + 「3」回答数×3 + 「2」回答数×2 + 「1」回答数×1) / 回答数(小数点第2位を四捨五入)





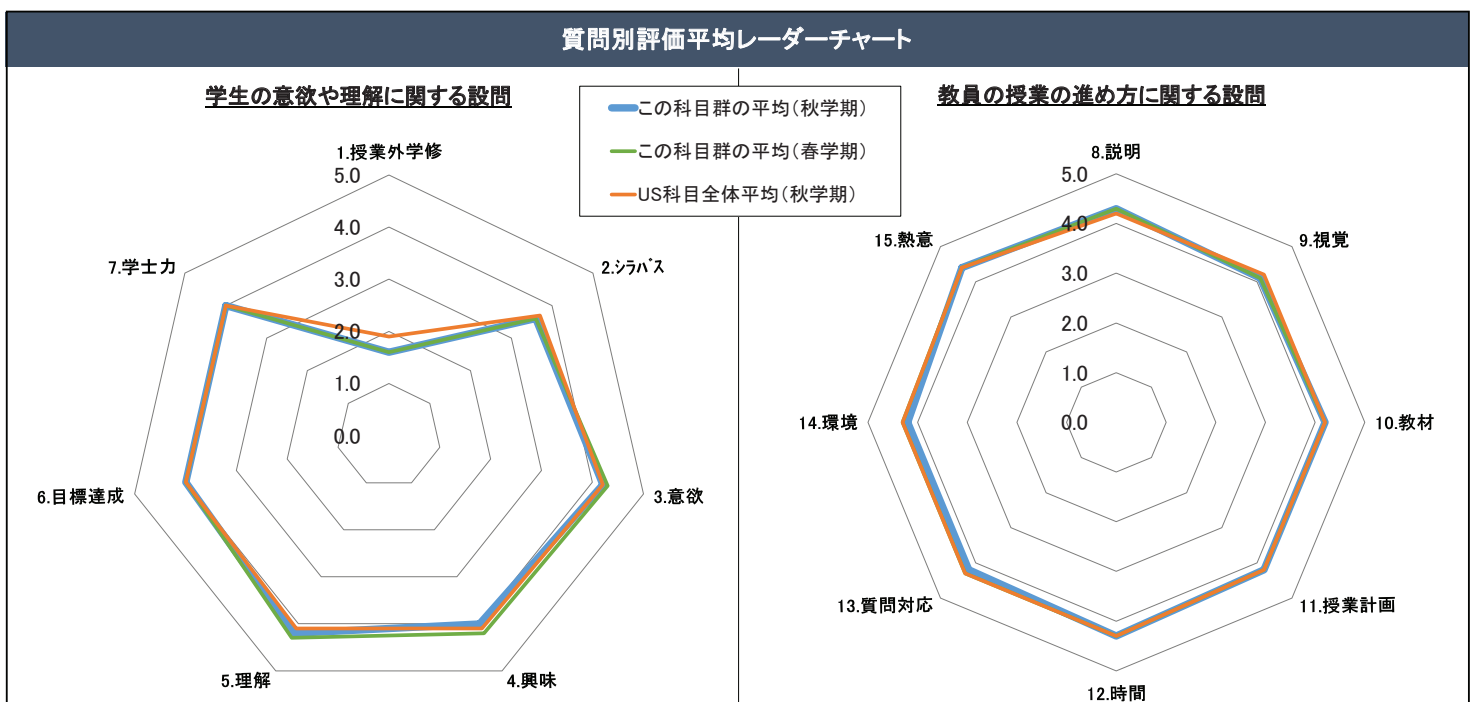
US科目 玉川教育・FYE科目群

履修者数：4,765名

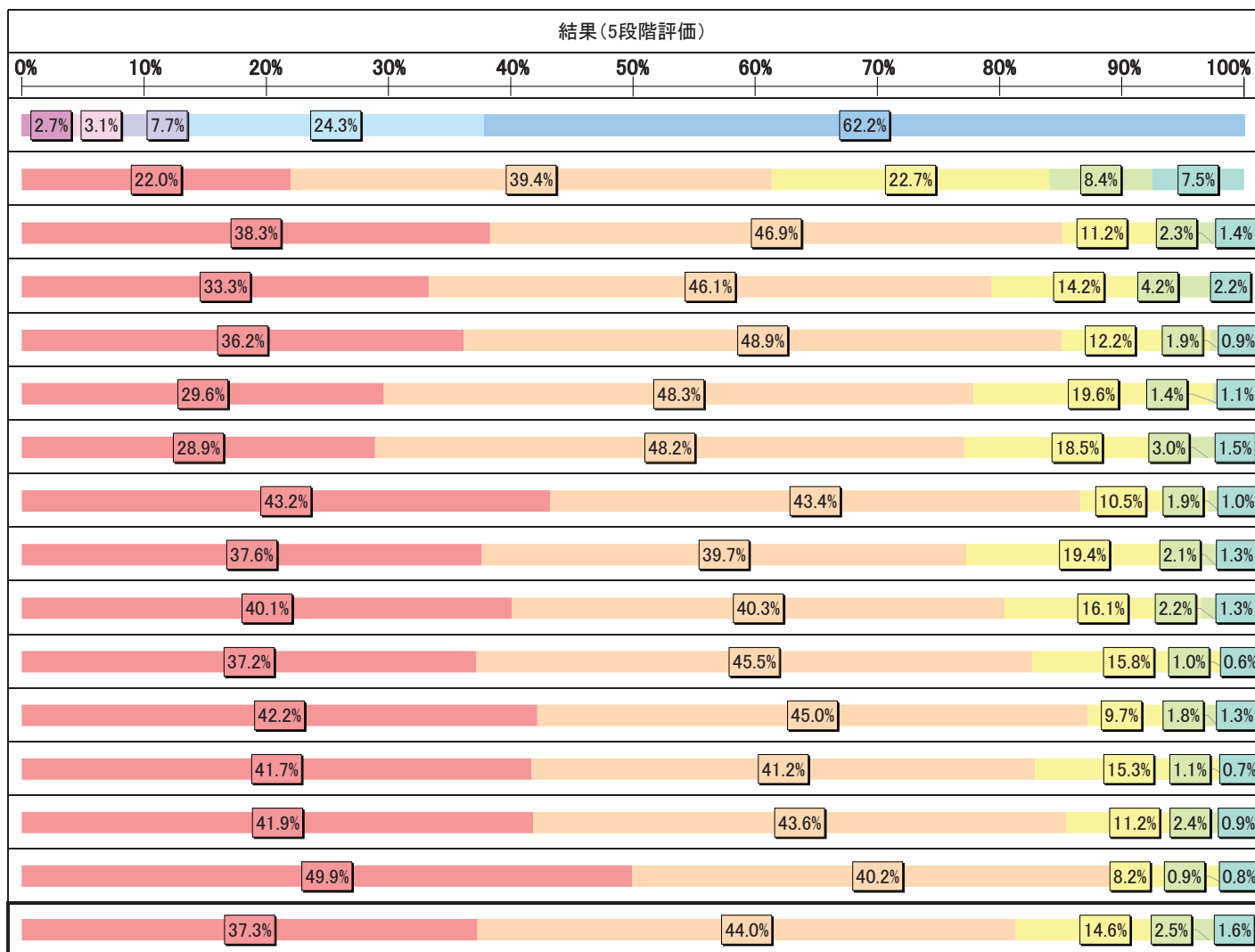
回答者数：2,487名

回答率：52.2%

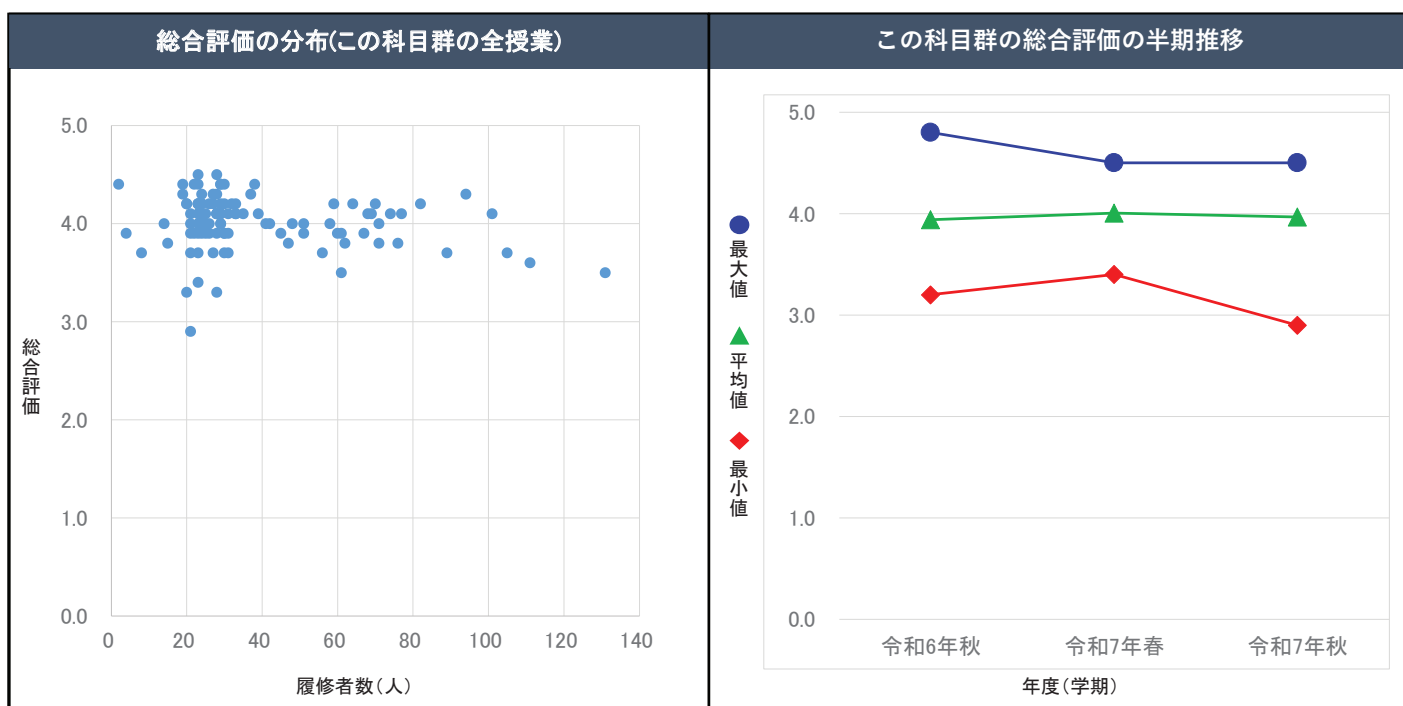
設問				科目群 平均	US科目 全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	1.6	1.9
	2	シラバス	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.6	3.7
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.2	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.0	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.2	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.0	4.0
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.3	4.2
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.1	4.2
	10	教材	教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.2	4.2
	11	授業計画	授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.2	4.2
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.3	4.3
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.2	4.3
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.2	4.3
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.4	4.4
総合評価				4.0	4.0

$$\text{平均値} = (「5」\text{回答数} \times 5 + 「4」\text{回答数} \times 4 + 「3」\text{回答数} \times 3 + 「2」\text{回答数} \times 2 + 「1」\text{回答数} \times 1) / \text{回答数 (小数点第2位を四捨五入)}$$


5 : 4時間以上 4 : 3時間～4時間未満 3 : 2時間～3時間未満 2 : 1時間～2時間未満 1 : 1時間未満



5 : とてもそう思う 4 : そう思う 3 : どちらともいえない 2 : そう思わない 1 : 全くそう思わない



US科目 人文科学科目群

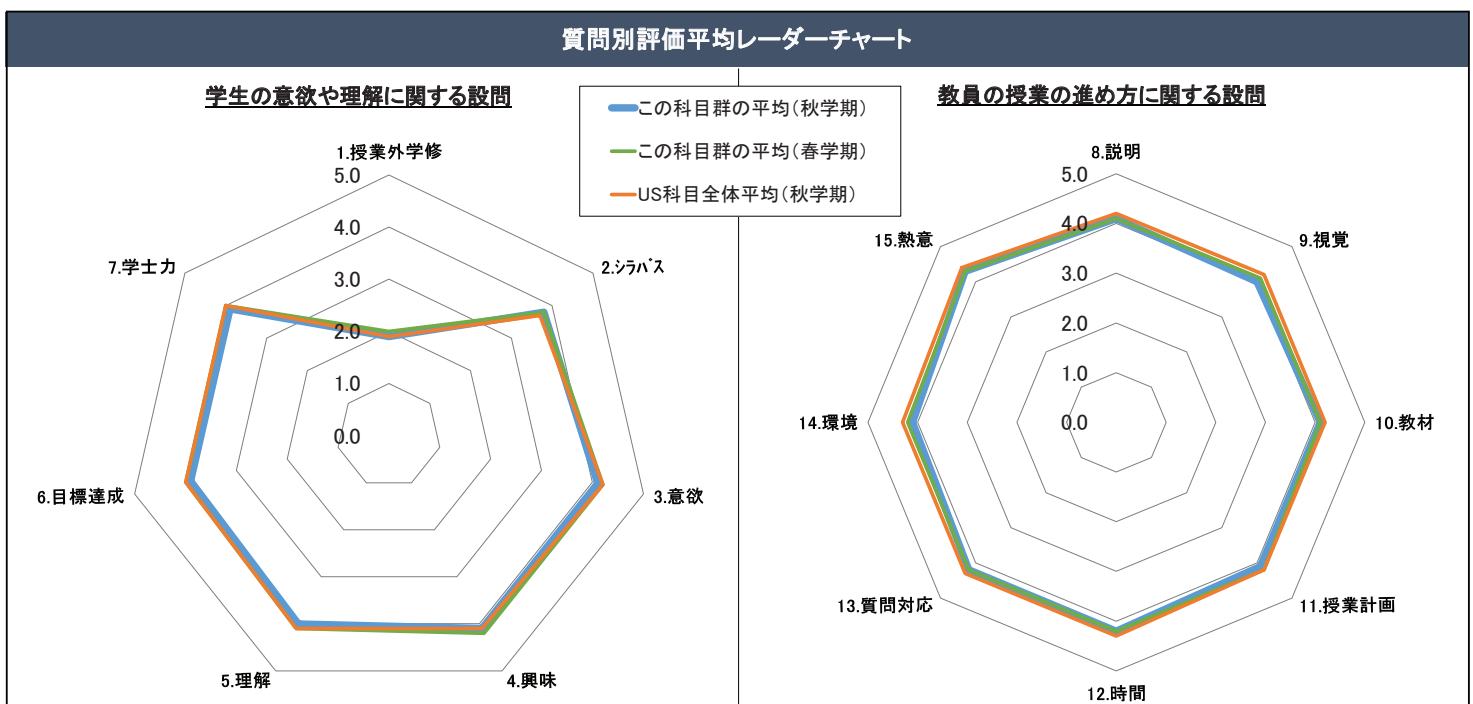
履修者数：2,240名

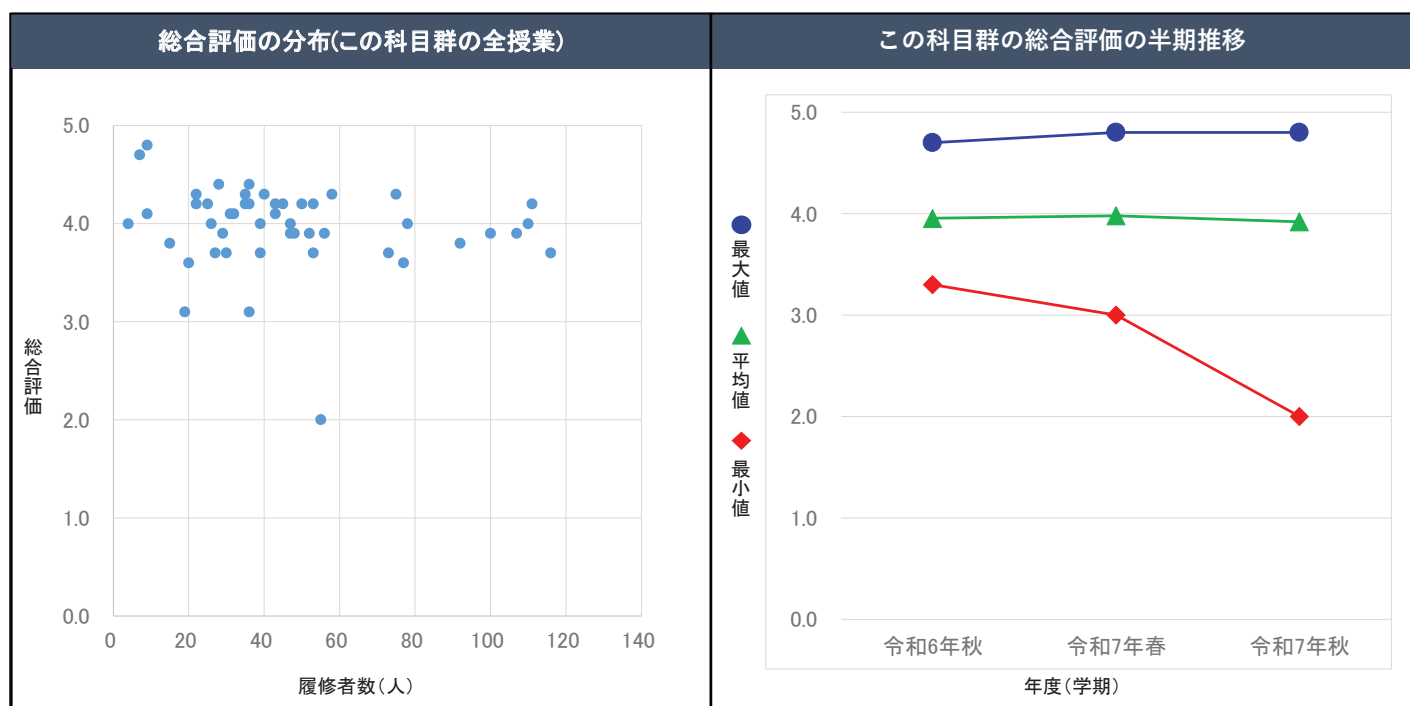
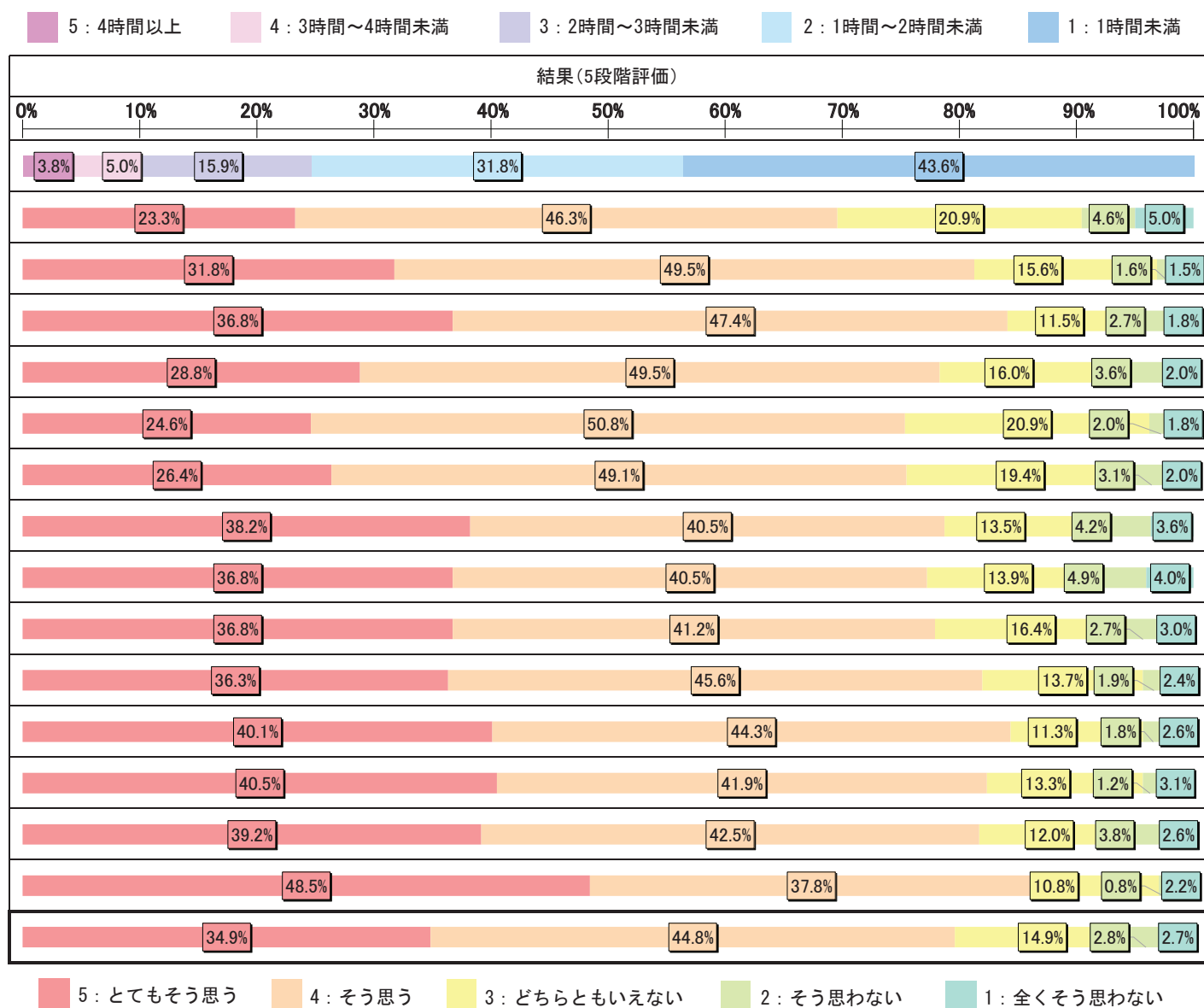
回答者数：743名

回答率：33.2%

設問				科目群 平均	US科目 全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	1.9	1.9
	2	シラバス	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.8	3.7
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.1	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.1	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.0	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.9	4.0
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	3.9	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.1	4.2
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.0	4.2
	10	教材	教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.1	4.2
	11	授業計画	授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.1	4.2
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.2	4.3
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.2	4.3
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.1	4.3
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.3	4.4
総合評価				3.9	4.0

平均値＝（「5」回答数×5＋「4」回答数×4＋「3」回答数×3＋「2」回答数×2＋「1」回答数×1）／回答数（小数点第2位を四捨五入）





US科目 社会科学科目群

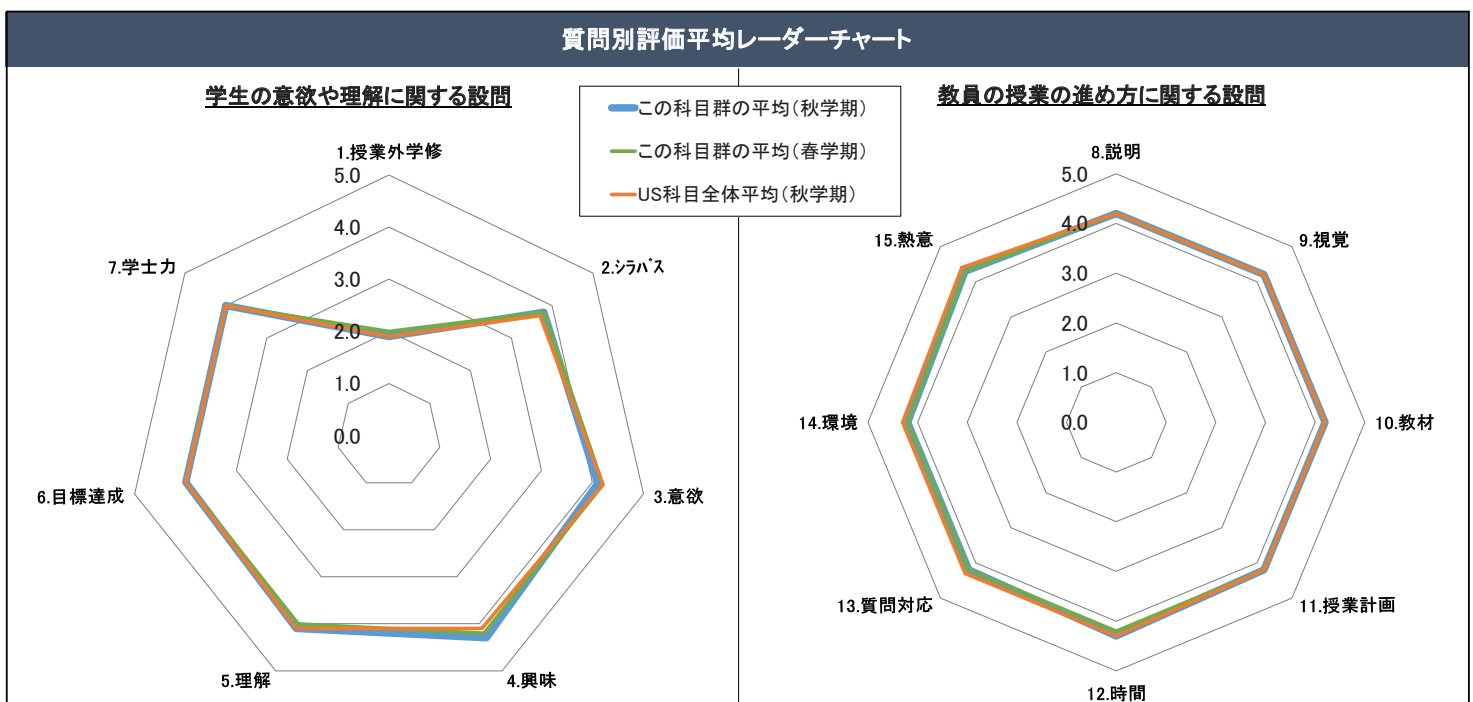
履修者数：1,739名

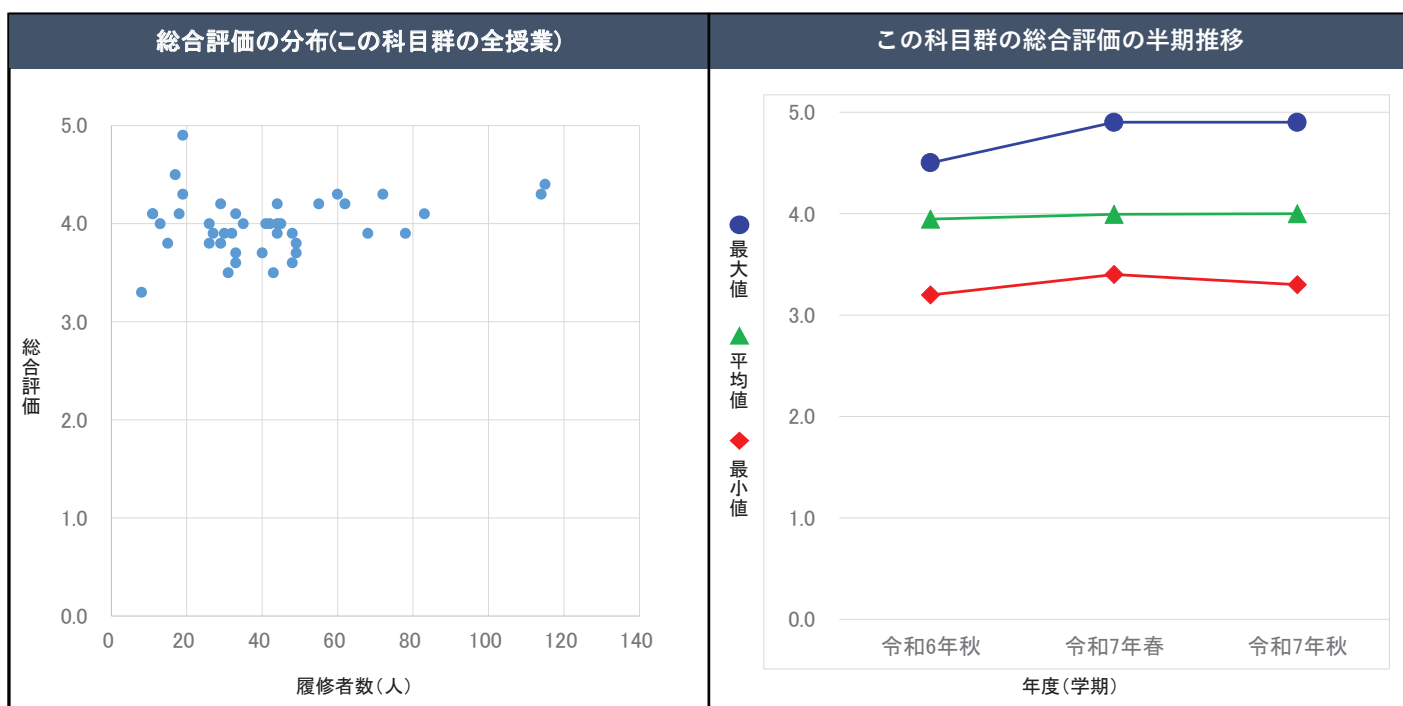
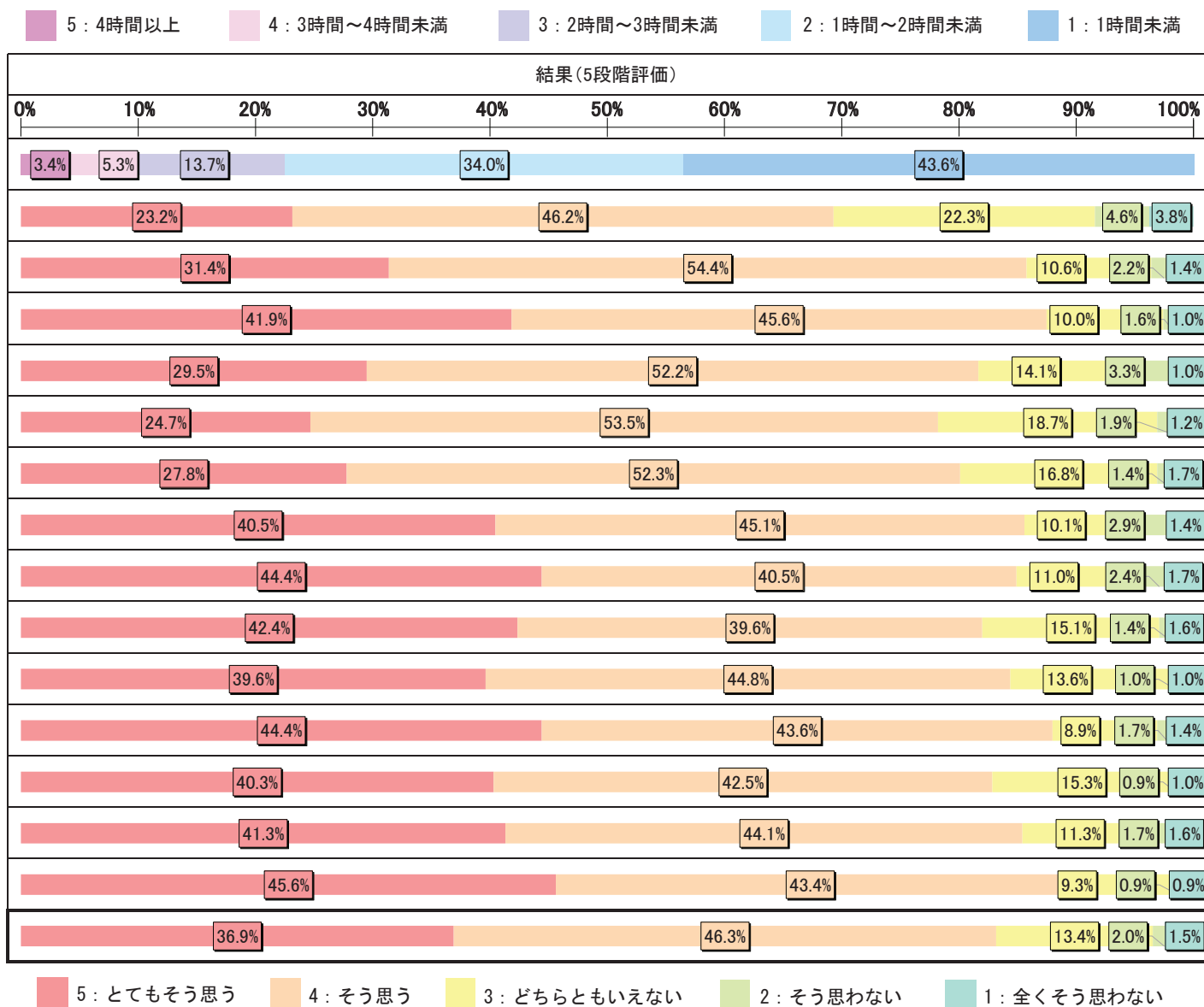
回答者数：583名

回答率：33.5%

設問				科目群 平均	US科目 全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	1.9	1.9
	2	シラバス	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.8	3.7
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.1	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.3	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.1	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.0	4.0
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.2	4.2
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.2	4.2
	10	教材	教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.2	4.2
	11	授業計画	授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.2	4.2
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.3	4.3
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.2	4.3
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.2	4.3
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.3	4.4
総合評価				4.0	4.0

平均値＝（「5」回答数×5＋「4」回答数×4＋「3」回答数×3＋「2」回答数×2＋「1」回答数×1）／回答数(小数点第2位を四捨五入)





US科目 自然科学科目群

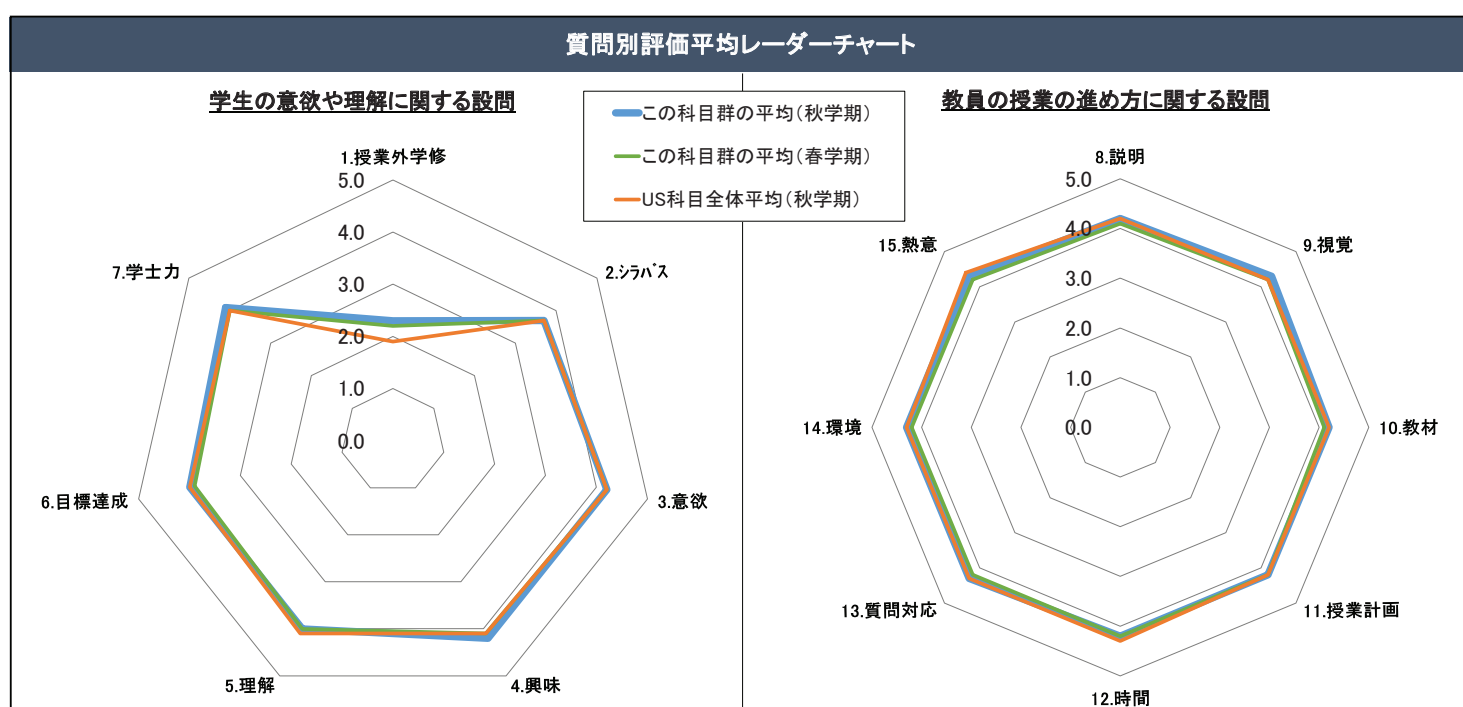
履修者数：1,678名

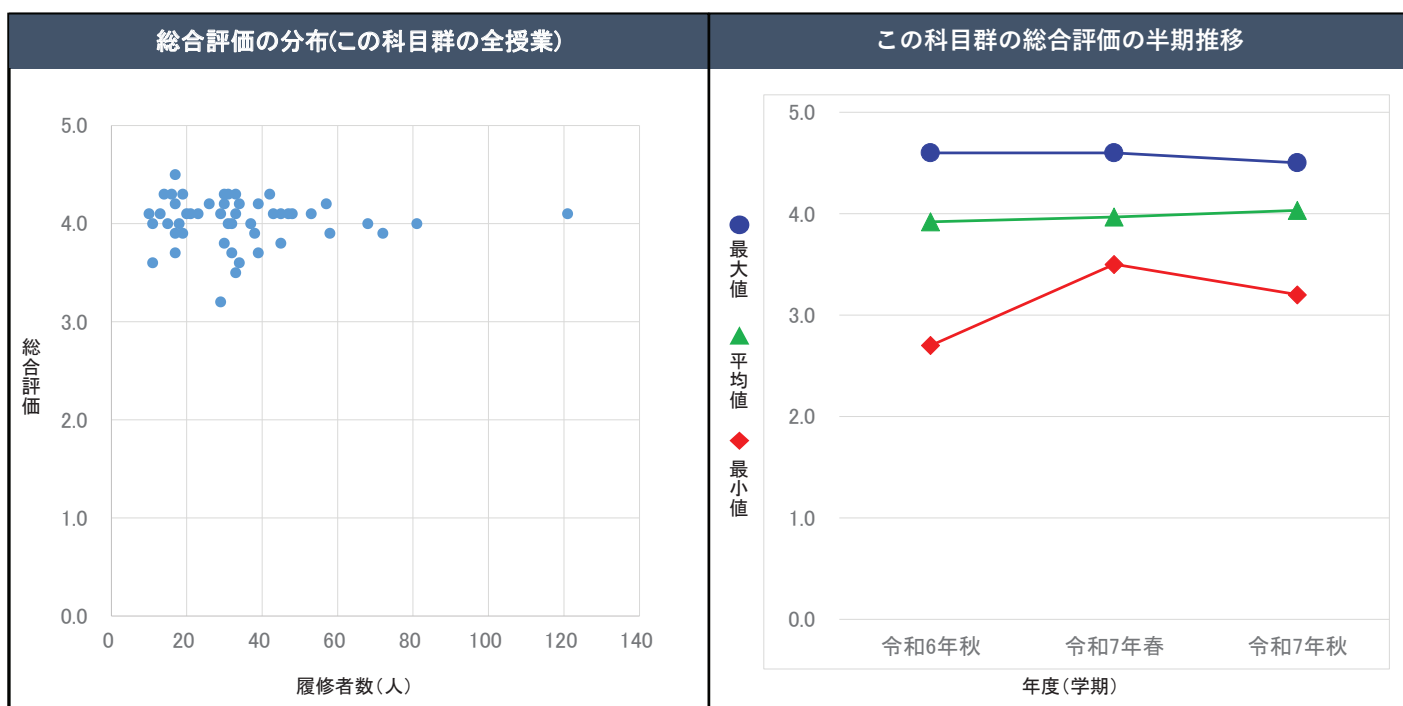
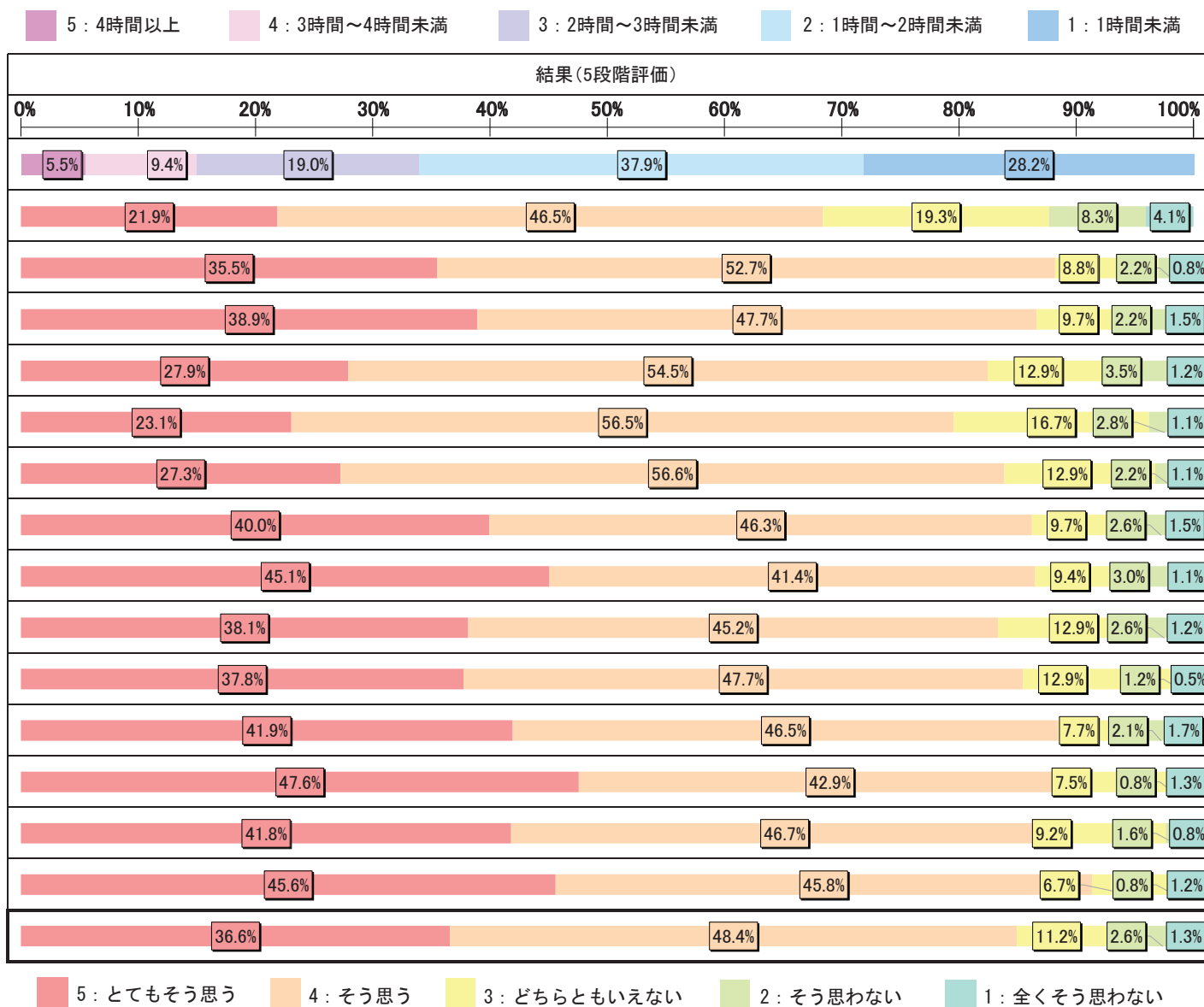
回答者数：763名

回答率：45.5%

設問				科目群 平均	US科目 全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	2.3	1.9
	2	シラバス	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.7	3.7
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.2	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.2	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.0	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.0	4.0
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.1	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.2	4.2
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.3	4.2
	10	教材	教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.2	4.2
	11	授業計画	授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.2	4.2
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.2	4.3
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.3	4.3
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.3	4.3
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.3	4.4
総合評価				4.0	4.0

平均値＝（「5」回答数×5＋「4」回答数×4＋「3」回答数×3＋「2」回答数×2＋「1」回答数×1）／回答数（小数点第2位を四捨五入）





US科目 学際科目群

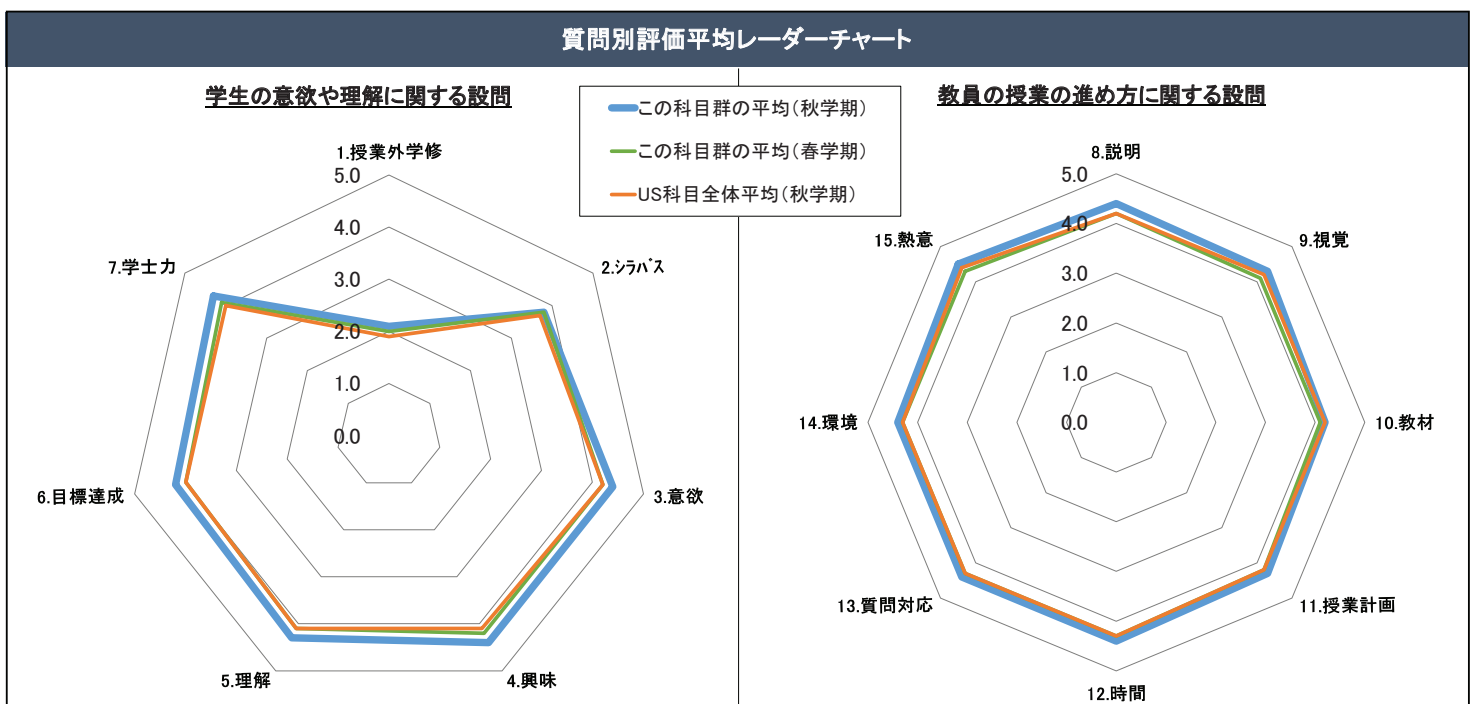
履修者数：1,967名

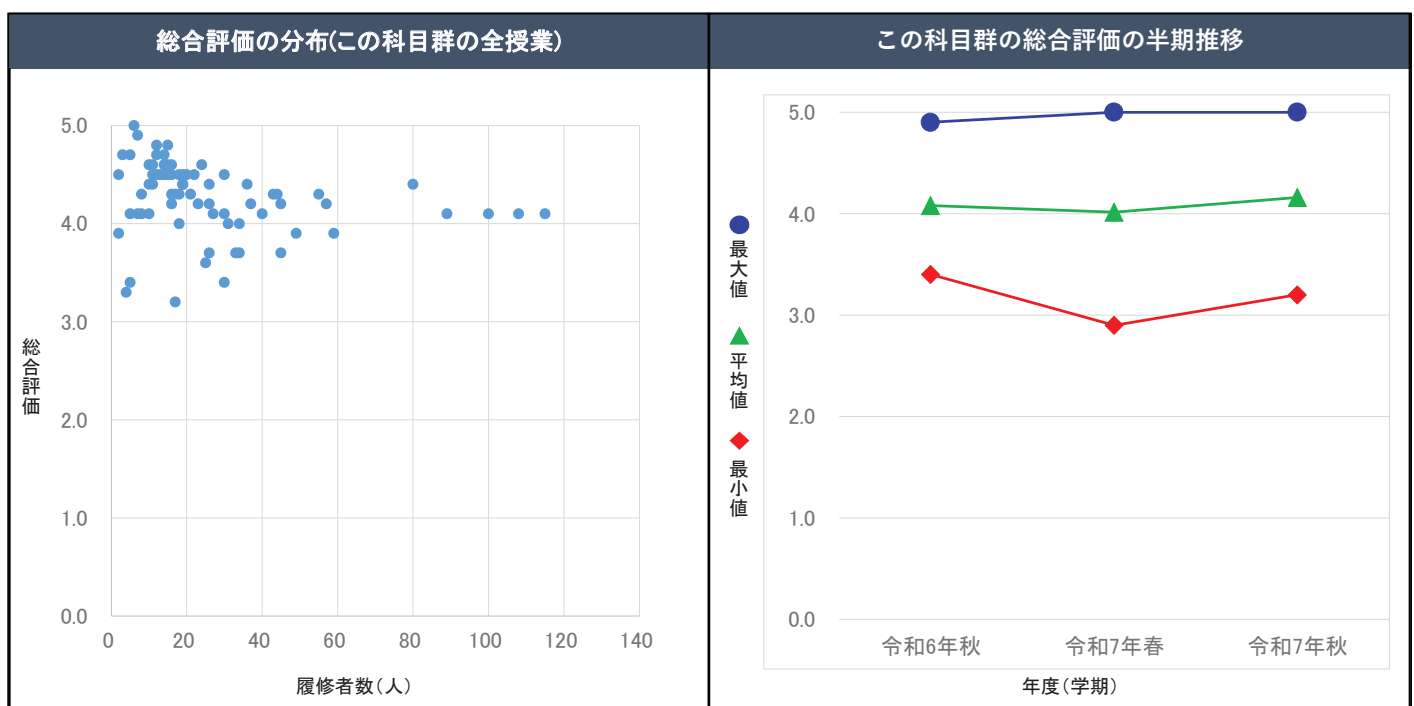
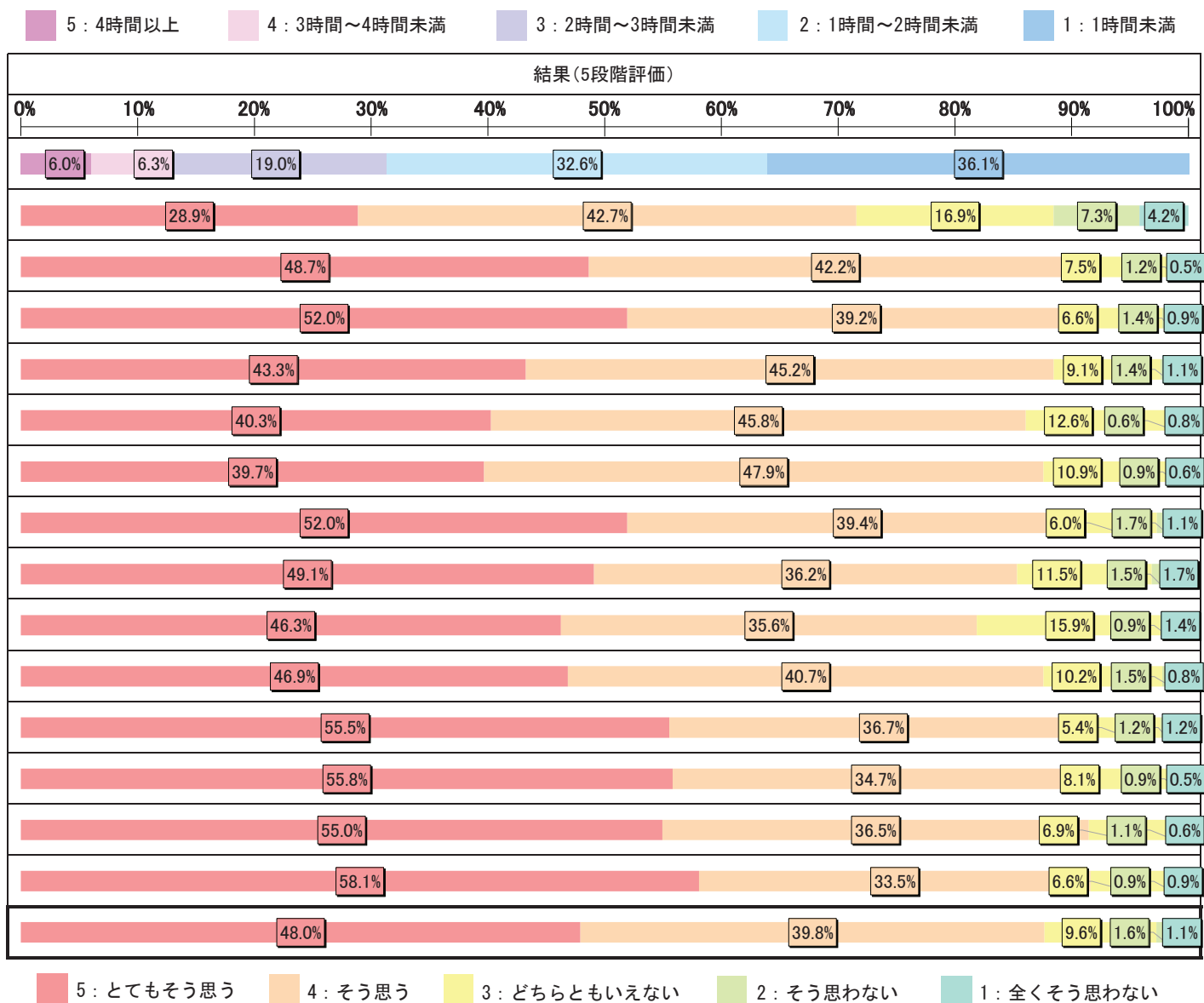
回答者数：668名

回答率：34.0%

設問				科目群 平均	US科目 全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	2.1	1.9
	2	シラバス	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.8	3.7
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.4	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.4	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.3	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.2	4.0
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.3	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.4	4.2
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.3	4.2
	10	教材	教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.2	4.2
	11	授業計画	授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.3	4.2
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.4	4.3
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.4	4.3
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.4	4.3
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.5	4.4
総合評価				4.2	4.0

平均値＝（「5」回答数×5＋「4」回答数×4＋「3」回答数×3＋「2」回答数×2＋「1」回答数×1）／回答数（小数点第2位を四捨五入）





US科目 言語表現科目群

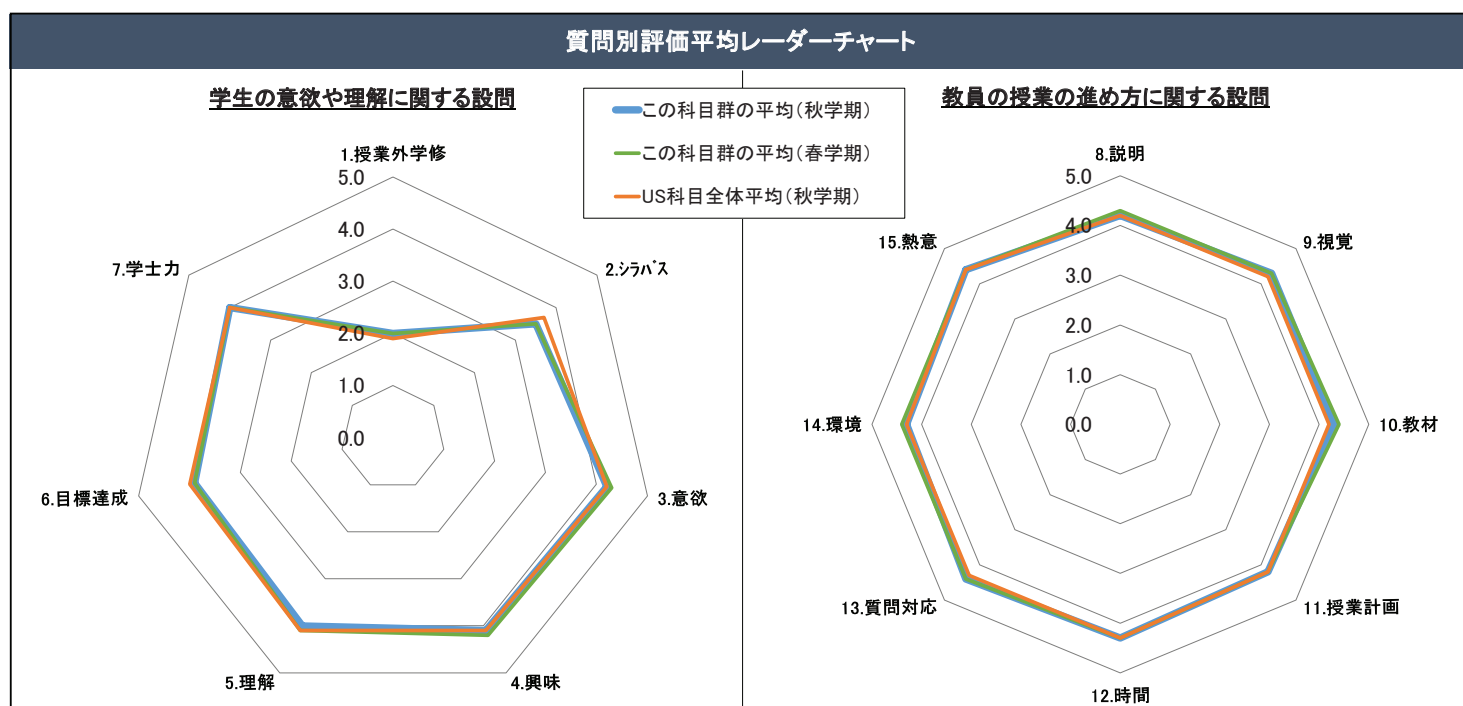
履修者数：2,900名

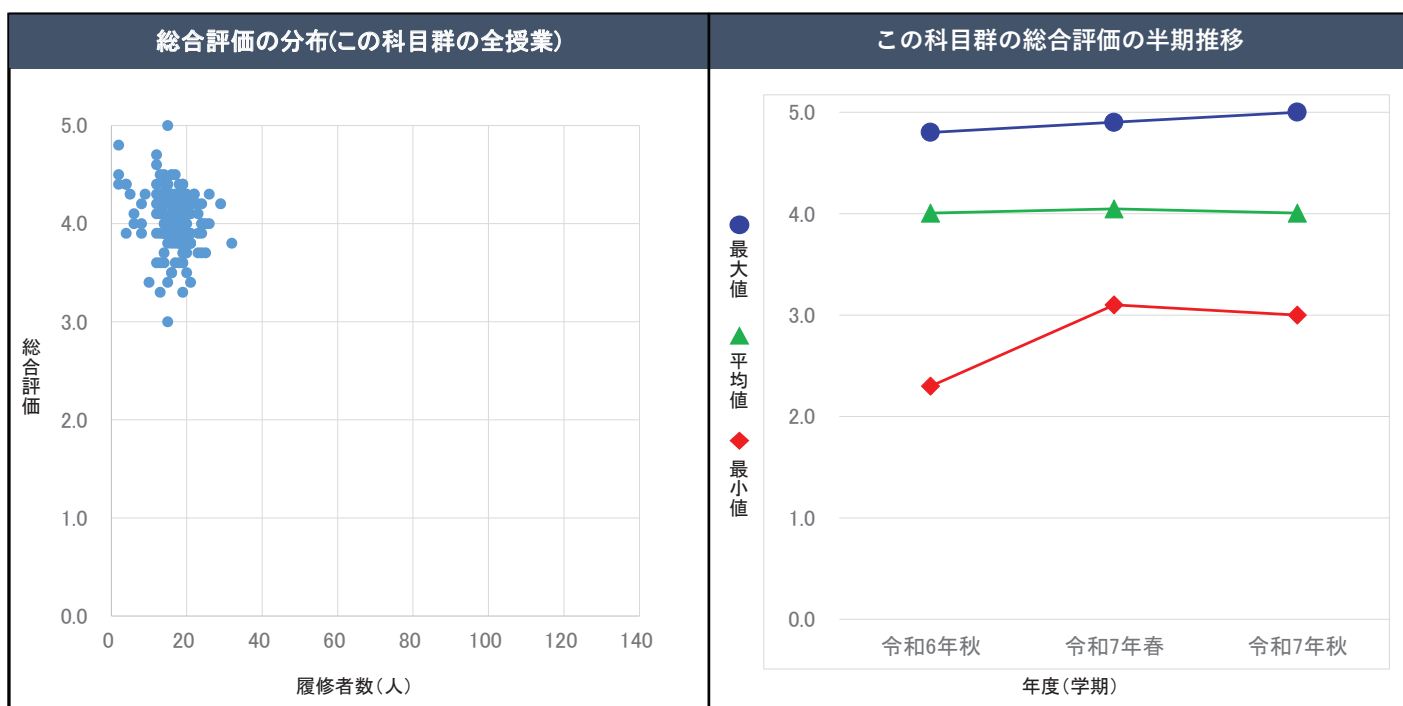
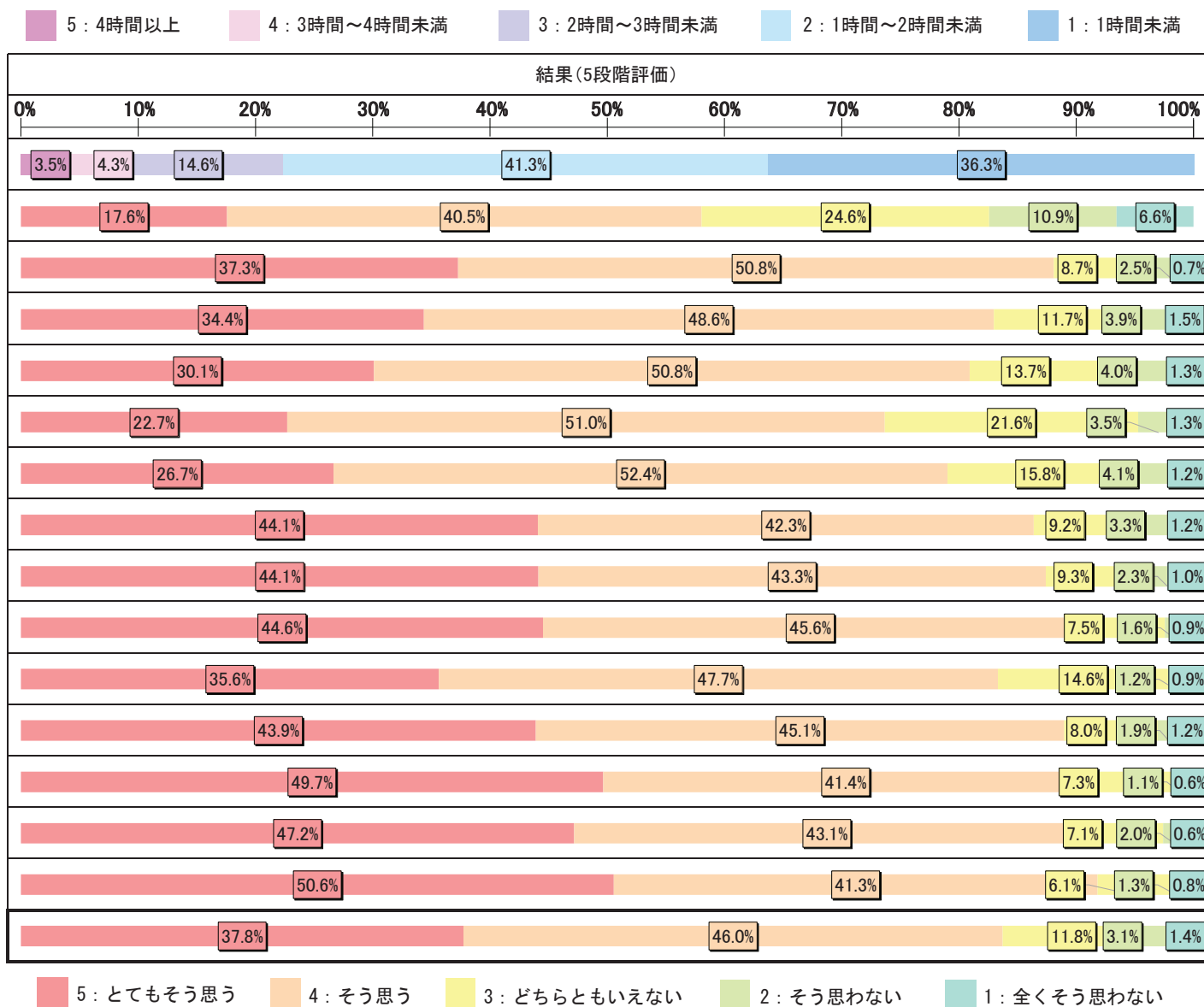
回答者数：1,740名

回答率：60.0%

設問				科目群 平均	US科目 全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	2.0	1.9
	2	シラバス	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.5	3.7
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.2	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.1	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.0	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	3.9	4.0
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか *各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.0	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.2	4.2
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.3	4.2
	10	教材	教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.3	4.2
	11	授業計画	授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.2	4.2
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.3	4.3
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.4	4.3
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.3	4.3
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.4	4.4
総合評価				4.0	4.0

平均値＝（「5」回答数×5＋「4」回答数×4＋「3」回答数×3＋「2」回答数×2＋「1」回答数×1）／回答数（小数点第2位を四捨五入）





US科目 教職関連科目群

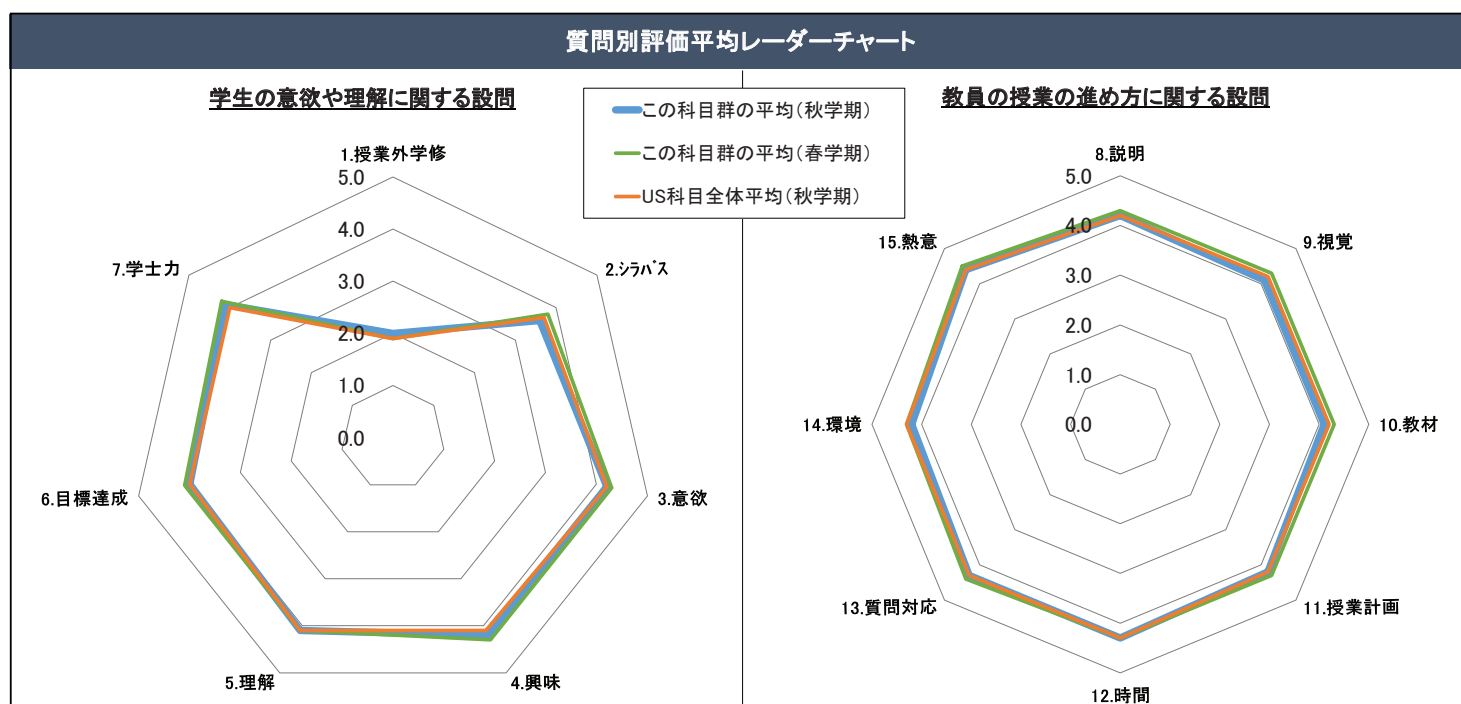
履修者数： 2,093 名

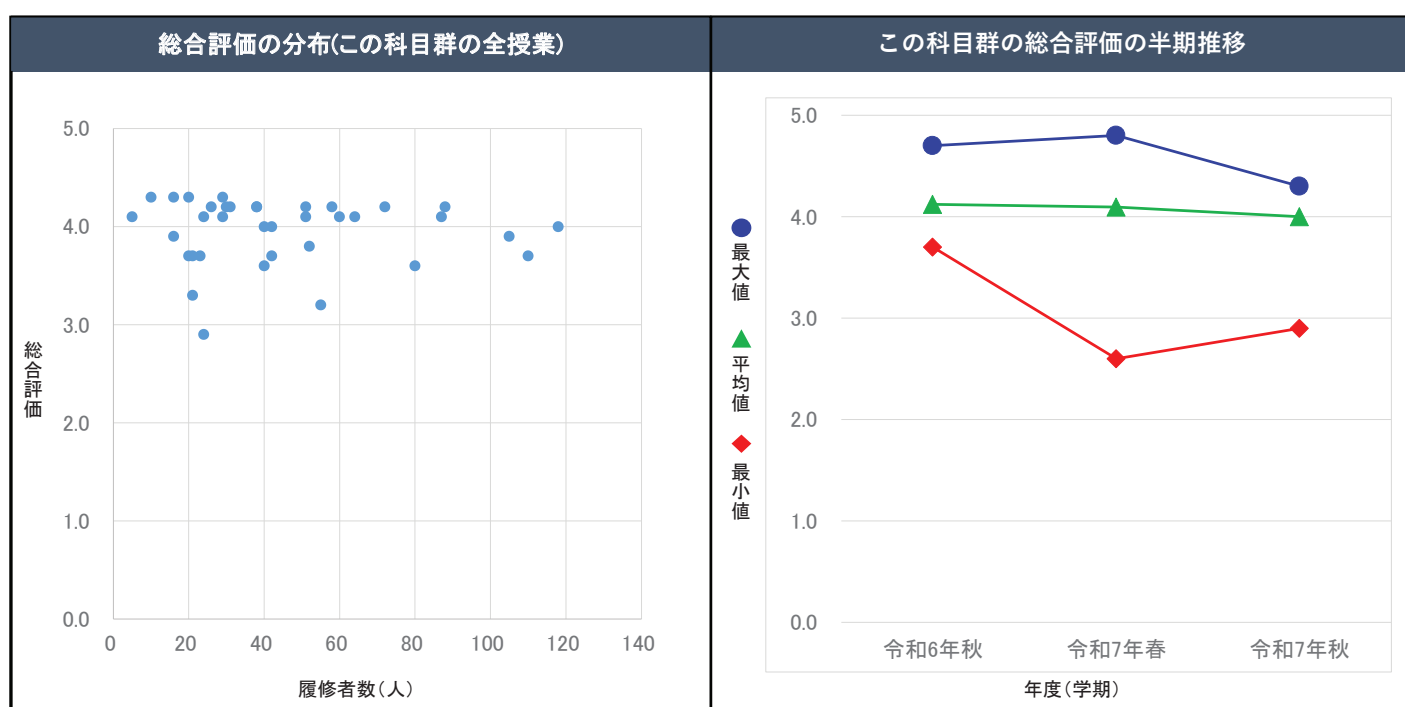
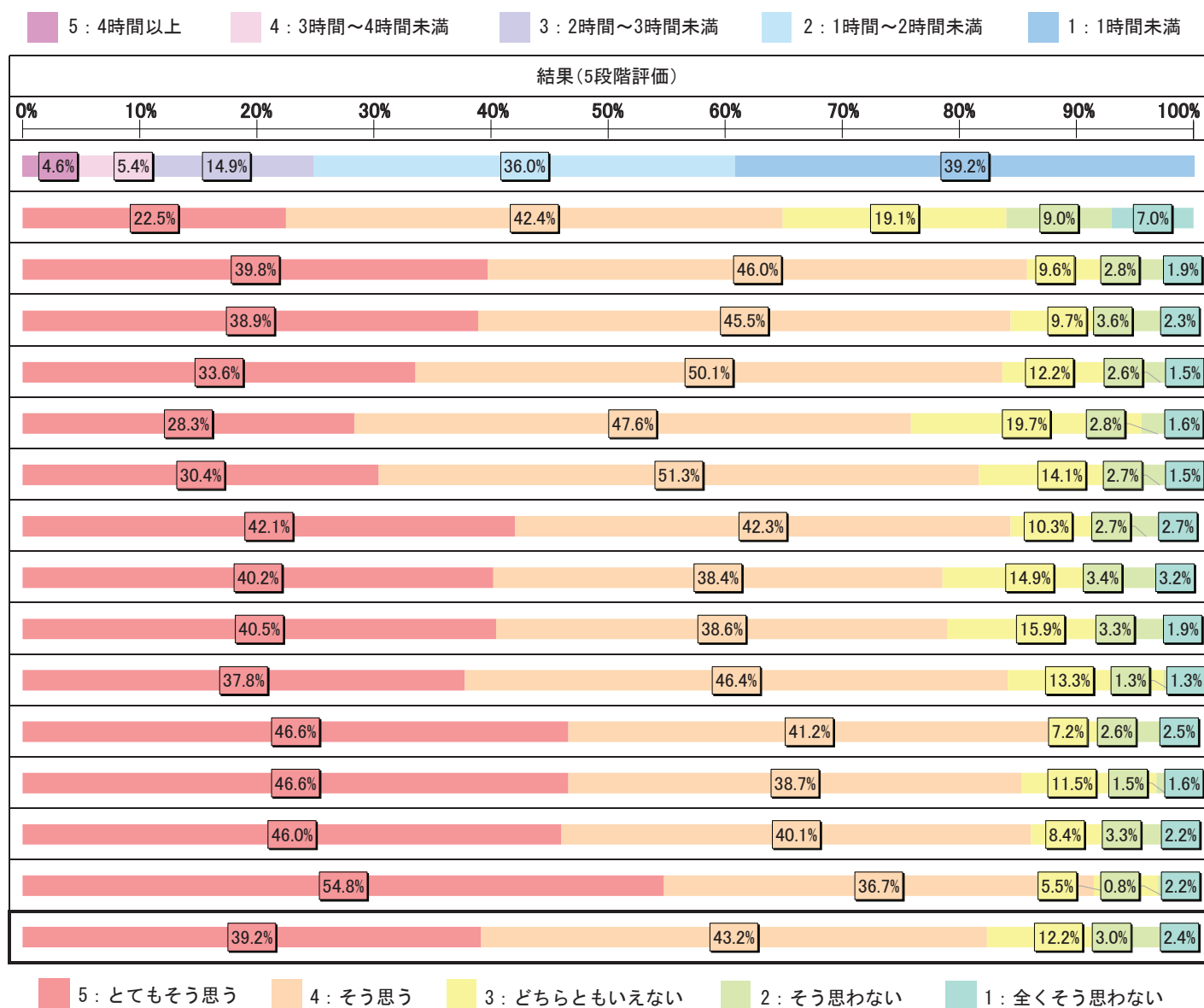
回答者数： 858 名

回答率： 41.0 %

設問				科目群 平均	US科目 全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	2.0	1.9
	2	シラバス	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.6	3.7
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.2	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.2	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.1	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.0	4.0
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか * 各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.1	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.2	4.2
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.1	4.2
	10	教材	教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.1	4.2
	11	授業計画	授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.2	4.2
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.3	4.3
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.3	4.3
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.2	4.3
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.4	4.4
総合評価				4.0	4.0

平均値＝（「5」回答数×5＋「4」回答数×4＋「3」回答数×3＋「2」回答数×2＋「1」回答数×1）／回答数(小数点第2位を四捨五入)





US科目 資格関連科目群

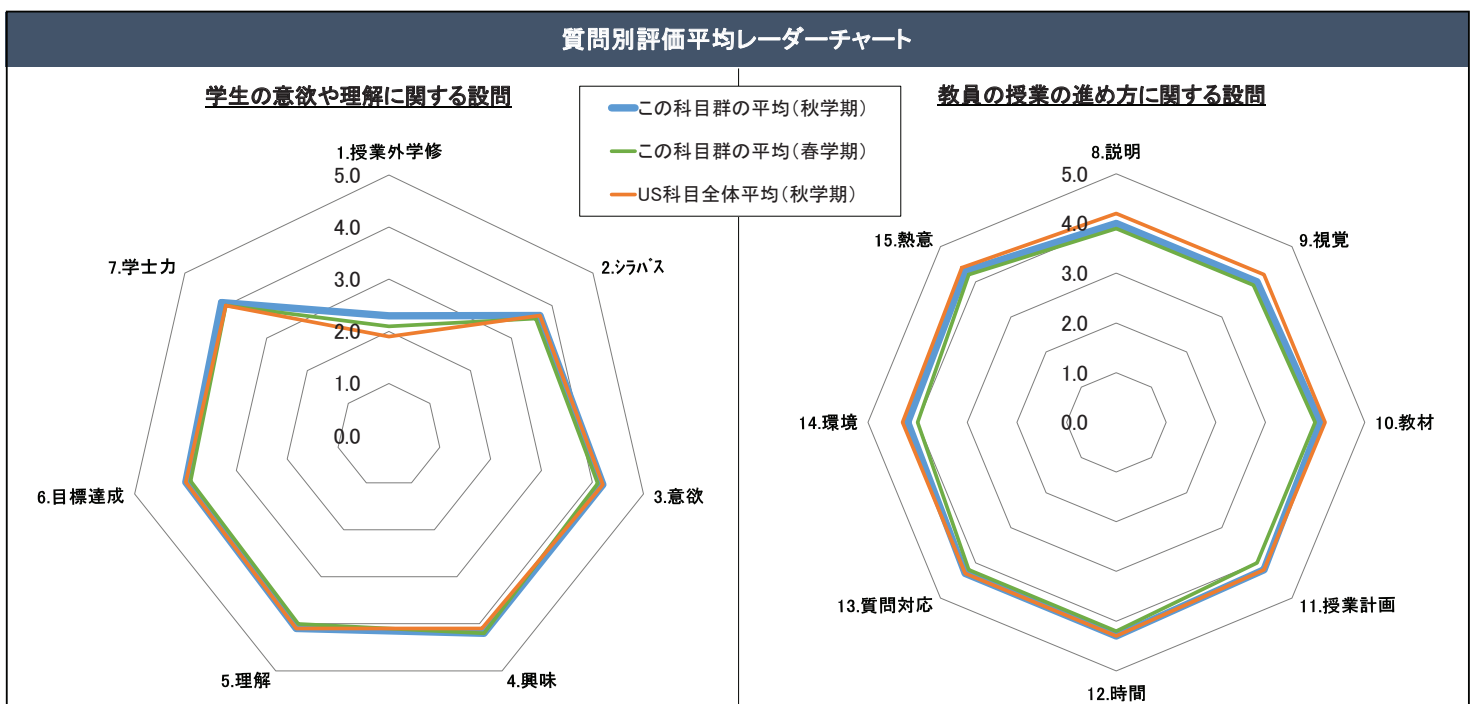
履修者数： 475 名

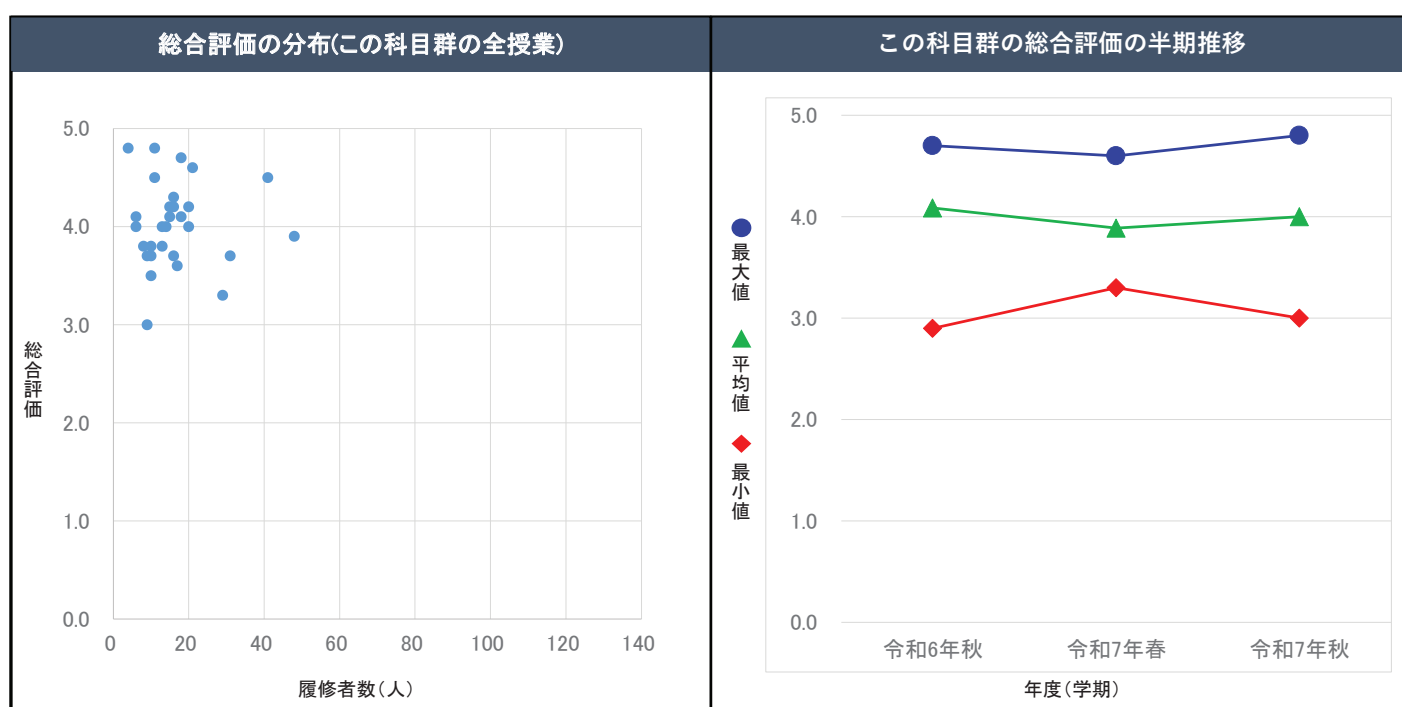
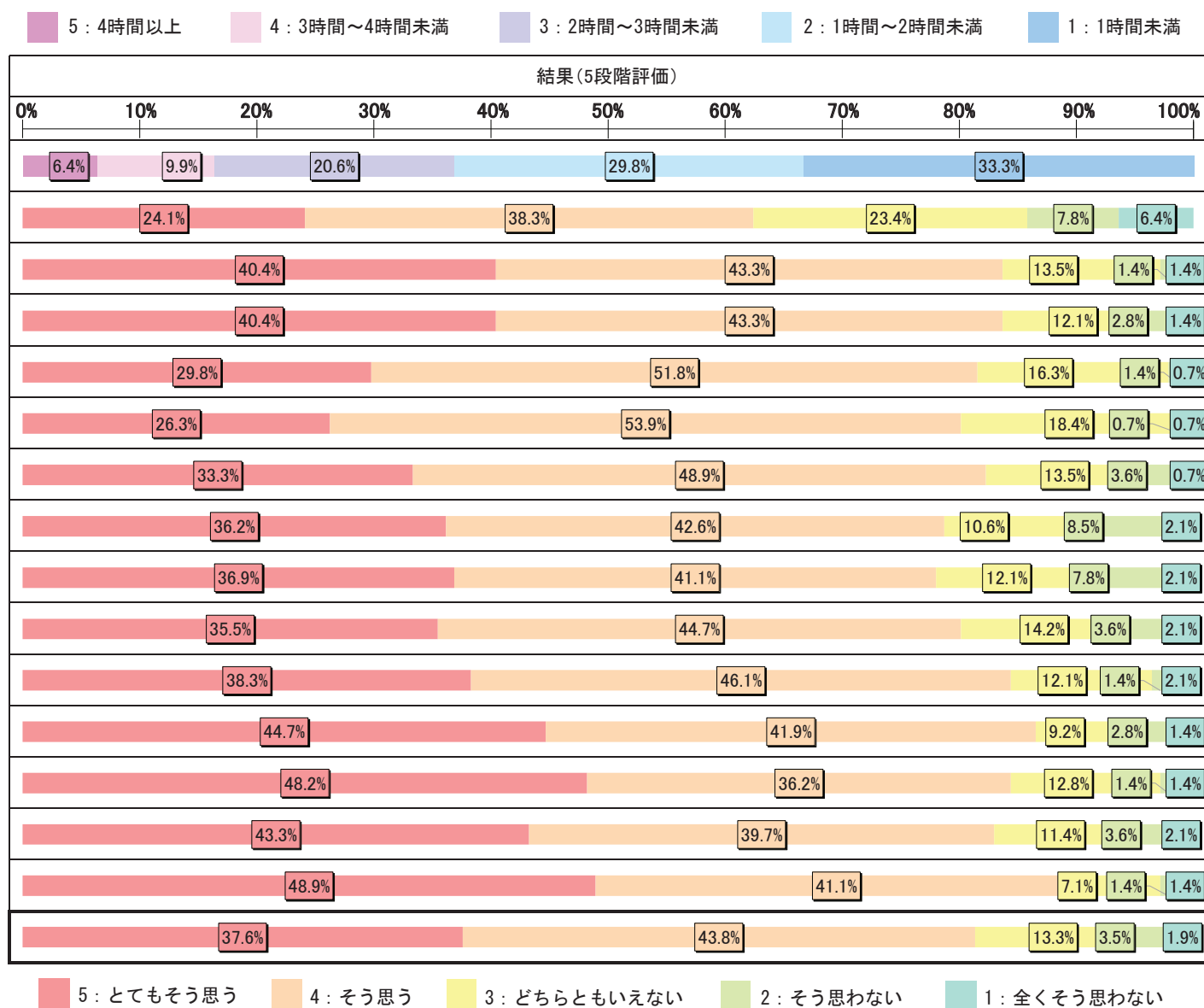
回答者数： 141 名

回答率： 29.7 %

設問				科目群 平均	US科目 全体平均
学生の意欲や理解に関する設問	1	授業外学修	授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか	2.3	1.9
	2	シラバス	学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか	3.7	3.7
	3	意欲	授業に意欲的に取り組みましたか	4.2	4.2
	4	興味	授業の内容に興味は持てましたか	4.2	4.1
	5	理解	授業の内容を十分に理解できましたか	4.1	4.1
	6	目標達成	シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか	4.0	4.0
	7	学士力	総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか * 各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載	4.1	4.0
教員の授業の進め方に関する設問	8	説明	話し方や説明は分かりやすかったですか	4.0	4.2
	9	視覚	板書やパワーポイントなどは見やすかったですか	4.0	4.2
	10	教材	教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか	4.1	4.2
	11	授業計画	授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか	4.2	4.2
	12	時間	授業時間を有効に使っていましたか	4.3	4.3
	13	質問対応	質問に適切に対応してくれましたか	4.3	4.3
	14	環境	授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか	4.2	4.3
	15	熱意	授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか	4.3	4.4
総合評価				4.0	4.0

平均値＝（「5」回答数×5＋「4」回答数×4＋「3」回答数×3＋「2」回答数×2＋「1」回答数×1）／回答数(小数点第2位を四捨五入)





Ⅱ 大学院 FD 活動報告

<文学研究科>

■講演会・研修会・ワークショップなど

カリキュラムや学生の研究指導などに関して、教員が集まって実践や意見を交換し合う懇談会「文学研究科のカリキュラムおよび指導体制等について」を行った。今年度は、研究科拡大懇談会とし、文学研究科教員に加えて、文学部長の了解を得た上で文学部専任教員に声をかけて、令和 7 年 9 月 18 日に開催した。研究科長から、研究科のこれまでの経緯と現状のカリキュラムについて説明し、現在の人間学専攻に代わり文学部国語教育学科を基礎とする専攻を置く方針を示したのち、出席者 12 名が自由に意見を交換した。

研究科教員からは、修士論文指導には多大なエネルギーを要するものの、教員・研究者としてやりがいがあるという発言があった。国語教育学科教員からは、教職志望者の現状、哲学・思想系の科目を開講する国語教育学科カリキュラムの独自性と魅力を活かした大学院専攻への期待等が語られた。国語教育学科の教育課程と教員養成について理解を共有する機会となった。文系大学院の厳しい現状を認識しつつ、今後令和 10 年度からの新しい専攻（国語教育専攻）スタートを目指す方向性を確認した。

これを踏まえて改組ワーキンググループを設置し、国語教育学科を中心としながら、2 月 20 日、3 月 6 日、3 月 26 日にミーティングを行った。これらの話し合いの中で確認した課題等を次年度以降に引き続き検討し、解決していく予定である。

■調査・研究など

(1) FD 活動計画のとおり、文学研究科の過年度修了生に対して、「大学院での学修はどのように役に立っているか」と題したインタビュー調査を行い、文学研究科のカリキュラム等の改善のための資料を得ることを試みた。

人間学専攻の過年度修了生 1 名に対しては、3 月 3 日に対面でインタビューを実施し、主として以下の質問を行った。

- ・修士課程在籍中には何を学んだと感じているか。
- ・現在の職業において修士課程での学びが役立っている点はあるか。
- ・修士課程在籍中に、これは学んでおきたかったという点はあるか。
- ・修士課程在籍中に、学び以外の点で、この点をサポートしてほしかった、という点はあるか。
あるいはサポートがあってよかったという点はあるか。
- ・職業生活以外で、修士課程での学びが役立っている点はあるか。

人間学専攻の教員はインタビューに参加、または、後日録画動画を視聴した後に、「今後の大学院の授業で、新しく取り組みたいことや、より意識していきたいこと」について、

各自がレポートを提出した。提出されたレポートは以下の通りである。

- ・今後の大学院の授業において、受講生の興味関心に合わせた内容および自分の専門領域に特化した内容を取り上げていきたい。意識していきたいこととしては、受講生の問題関心に即した指導をすると同時に、今後の生き方や考え方、コミュニケーション能力に資するように心がけることである。
- ・私の場合、学生の技能と興味関心に即して学生指導を行なうことを意識して参りました。そのためには機会あるごとに学生と意思の疎通をよく図り、学生が求めていることと学生に身に付けてもらいたいことが何であるのかを明確にして授業での指導に活かすというサイクルが欠かせません。受講生数は決して多くありませんでしたが、その分受講生には毎回思考トレーニングのための濃密な時間が与えられていました。本研究科が今後どのようなテーマを取り上げていくにせよ、学生が自ら考えて学生間や学生と授業担当者との間で議論できる時間を確保することで、学生が学部生時代に培ったものの見方や考え方を、続く大学院時代により一層広げたり、深めたり、豊かなものにしたりすることができるということを、今回の修了生インタビューでも改めて確認させていただきました。受講人数の多い少ないにかかわらず、本学における本研究科の存在理由を改めて問い直し、授業に取り組んで参りたいと思います。
- ・文学研究科在籍時における人間学を追求するというアカデミックな営みが、修了後もなお、生きる意味や他者との関係のあり方といったものごとを捉える枠組みとして、視点として生きていることが分かった。人文科学は何か仕事に直接的に「役立つ」学問ではないかもしれないが、生き方の根本を常に問い直し続ける視点といった人間としての土台を作るという強みを再確認することができた。今後の授業においては、その場だけの表層的な理解を求めようとせず、長期的な視点で院生と授業を作り上げていきたいと考える。
- ・修了生へのインタビューでは、ご本人の大学院での学びと終了後の生活との繋がりなどについて聴くことができ、人文学の意義について改めて考えることができた。今後の授業のみならず、研究テーマの選択指導においても、人文学の意義や院生個々人のリアルな人生における関心という視点から指導するよう、より意識していきたい。

英語教育専攻では、年度初めの4月・5月に、令和6年度末に実施した過年度修了生インタビュー（公立学校教員）の動画を視聴し以下の点を共有した。

- ・大学院時代に得られた知識・スキルおよび多角的な視点をういながら授業に当たることができている。大学院での研究・学修は教師としての仕事に役立っている。
- ・文学研究科のカリキュラムでは、不足している科目があったという記憶はない。基本的に学びたい科目は学べていた。
- ・ただし、授業としては英語を話す機会があまりなかったのも、もう少し英語を使用する機会があるとよかった。
- ・テストや評価については、授業の中の1・2回という程度の扱いではあったが、それをもとに現場で役立てることができた。現在は「言語評価・テスト論研究」という科目があるとのことだが、科目として学べるのであれば、より理想的だと思う。

- ・大学院時代の研究・学習を通して英語力を向上させることができ、教育現場に出てからも自信を持って授業を行うことができた。
- ・今後、現役の教員として大学院で科目単位の受講をするような機会があるのであれば、内容としては現場での実践を裏付けられるような理論について関心がある。実施時期としては、学期中の平日は難しく、土日のほうがよい。あるいは、夏休み中、特に 8 月前半がよいものと思われる。
- ・コロナ禍以降 ICT が急速に教育現場に入ってきているので、ICT についてしっかりと学べるとよいと思う。時代の変化に伴う教育現場の変化に応じた内容を学べるとよい。

これに対し、教員からは以下のようなフィードバックが得られた。

- ・英語科主任としてしっかりと人に当たられている印象を受けた。大学院修了者は就職定着率が学部卒業者よりも高いのではないかとと思われる。学部卒業後の大学院での 2 年間でアカデミックな面だけでなく人間的にも成長・安定するのではないかと、また職業的目標が明確化されるのではないかと、インタビューをきっかけに考えた。
- ・公立学校では、専修免許は待遇という面ではあまり大きくものを言わないことを実感した。
- ・ELTama に大学院修了者が積極的に繋がるよう気を配る必要があると感じる。
- ・大学院時代に研究したことや学んだことが教育現場で実際に活かされていると聞き、カリキュラムの改訂にあたっては、時代の流れに伴う教育環境の変化に対応できるような内容が科目単位でも必要なのではないかとと思われる。
- ・現職教員が大学院で学ぶ際、現場での教育実践の裏付けとなるような理論的な内容を扱うことも重要であると改めて思った。教育現場と大学院での研究・教育の関係を考えるよい機会となった。

全体的には当時の文学研究科での研究・学修について過年度修了生から肯定的な回答が得られた。また、その後に行ってきたカリキュラム改善についても、方向性が妥当であることが確認できた。一方、英語使用の機会の向上、ICT 関係の科目の可能性、現役教員対象のプログラムの在り方についてさらに検討が必要であることが分かった。

これに続き、令和 7 年度に実施した過年度修了生インタビューとして 3 月 25 日に研究科長・同専攻教務担当により、オンラインでインタビューを行った。対象者は英語と美術の 2 教科の一種免許を持った平成 27 年度修了者で、現在 2 校の私立中高一貫校で非常勤講師として週 5 日勤務しておられる。主として以下のような質問をした。

- ・現在の担当授業と今後のキャリアビジョン
- ・大学院時代を振り返って、自分の学びとカリキュラム（当時）をどう捉えているか
- ・現在の仕事において、大学院時代の学びや経験はどのように活かしているか
- ・二つの教科の免許を所持していることについて（どちらが主軸か、など）
- ・私立学校に勤務するうえで、専修免許を持っていることの利点
- ・学部生に文学研究科を薦めるとしたら、どのような点か

インタビュー対象者は、大学院で CLIL 教育を研究して修士論文を執筆し、現在は一般の美術科の授業担当に加え、「国際学級」と位置付けられたプログラムにおいて美術科の授業を英語で行っている。大学院での研究と現在の仕事はまさに「地続き」であり、研究があったからこそ、自らカリキュラム設計を行うことができているという実感が述べられた。「教員になってから評価・テストについての学びが不足していたと気づいた」という発言があったが、現行のカリキュラムにはそれが含まれており、本専攻のカリキュラムが修了後の教職をより実践的に支える方向で改訂されたことが裏付けられた。仕事についてからの学び直しの可能性については、私学の中学・高校は土曜日に授業を行うことも多く、夏休みに集中して行う形のプログラムであれば参加可能性が最も高いとのことであった。

インタビュー実施が本報告提出直前となったため、専攻の教員の視聴および視聴しての見解報告は、新年度に入ってから行う。

なお、両専攻のインタビューは Microsoft Teams で全教員が視聴できるようにする予定である。

（２）学会発表の成果の検証

今年度は、学生の学会参加が活発に行われた。在籍する 3 名のうち 1 名が「大学院学生学会発表・参加報告および旅費助成申請書」を提出して、助成制度の適用を受けた。また 2 名が学友会の助成を受けた。8 月に JASELE（全国英語教育学会）に 2 名が参加、同月 JACET（大学英語教育学会）に 2 名が参加、11 月に International Joint Conference of APLX, ETA 34, and TESPA 2025（会場：台湾台北市 GIS Taipei Tec）で 1 名が研究発表、2 月に 1 名が第 45 回大学生英語教育論文合同発表会（ICET2026）で修士論文の報告発表を行った。全員ではないが、積極的に学会に参加し、特に国際学会での発表は大きな成果であった。こうした活動を、学部学生に伝える機会を設ける必要がある。

■学生による授業アンケート、修了時アンケート

FD 活動計画のとおり、学生による授業アンケートを行った。対象となった授業は文学研究科が提供しているすべての授業であった。全授業において、おおむね評価が高かった。その中で、あえていえば、「2. この授業で学修したことを、自分の研究課題に関連付けることができた。」「3. この授業を通して、自分の研究を遂行するための論理的思考力が高まった。」「4. この授業を通して、自分の研究を遂行するために必要な知識やスキルを身に付けることができた。」の項目について、平均値が他の項目と比べてやや低くなっている。しかし、履修するすべての科目が各学生の研究課題と直接関係するわけではないことから、特に改善を要する点があると捉える必要はないと考えられる。これらの平均値が高くない科目についても、「5. この授業を通して、自分の研究課題に関する新たな視点を発見することができた。」については一定以上の値が示されており、受講した学生が視野を広げることができたと考えられる。履修者が少ない授業、特に履修者が 1 名の授業においては、回答した学生の匿名性が確保されないが、学生からは特にその点の指摘がなかったことから、今後も、すべての科目で同様のアンケートを実施する予定である。

令和 7 年度は、回答と集計の容易さを求めて、Google フォームによるアンケートの実施を試みた。秋学期は未回答者が 1 名いたものの、春学期は全員の回答があった。令和 8 年度も引き続き、

Google フォームを活用して実施したい。

授業ごとの結果は以下の表のとおりだが、各授業における数値は、以下の 4 段階の尺度の平均値（小数点第 2 位を四捨五入）である。

- 4 とても当てはまる 3 やや当てはまる
2 あまり当てはまらない 1 まったく当てはまらない

<u>春学期</u>		英語教育研究	認知意味論研究	英語教材論研究	研究指導 (英語教育専攻) I
回答者数		1	3	2	3
1.	この授業の専門分野に関する知識やスキルが高まった。	4.0	3.7	3.5	3.7
2.	この授業で学修したことを、自分の研究課題に関連付けることができた。	4.0	4.0	3.0	4.0
3.	この授業を通して、自分の研究を遂行するための論理的思考力が高まった。	4.0	3.3	3.0	3.7
4.	この授業を通して、自分の研究を遂行するために必要な知識やスキルを身に付けることができた。	4.0	4.0	3.0	3.7
5.	この授業を通して、自分の研究課題に関する新たな視点を発見することができた。	4.0	3.7	3.5	3.7

	<u>秋学期</u>	英語科アクション・リサーチ研究	言語教育政策研究	言語評価・テスト論研究	研究指導 (英語教育専攻) II
	回答者数	1	1	1	2
1.	この授業の専門分野に関する知識やスキルが高まった。	4.0	4.0	4.0	4.0
2.	この授業で学修したことを、自分の研究課題に関連付けることができた。	4.0	4.0	4.0	4.0

3.	この授業を通して、自分の研究を遂行するための論理的思考力が高まった。	4.0	4.0	4.0	4.0
4.	この授業を通して、自分の研究を遂行するために必要な知識やスキルを身に付けることができた。	4.0	4.0	4.0	4.0
5.	この授業を通して、自分の研究課題に関する新たな視点を発見することができた。	4.0	4.0	4.0	4.0

また、英語教育専攻では、令和7年度修了生2名に対して、修了時アンケートを行った。その結果、受講したい科目は受講できた、研究指導は充実していたなどの教育指導体制が十分であったとの回答がある一方、英語教育にかかわる諸問題を解決する上で身に付けられなかった力もある、研究旅費助成の申請での手間が多いという回答もあった。引き続き、個々の大学院生の特質を見極めながら教育指導を進めていく予定である。

■その他

(1) 院生に対する研究倫理教育の実施

例年と同じく、文学研究科の全学生に eL CoRE(研究倫理 e ラーニングコース)の受講を義務づけた。年度初めの4月中旬に全学生が受講を終え、受講証明書を提出した。

また、学生自身が実際にデータ収集を行う際に適切なプロセスを踏んでいるかどうかを確認するため、eL・CoREの学習内容、および関連学会の研究倫理ガイドラインを参考にしながら作成した研究倫理チェックリストを学生に配付した。2年生は、修士論文の提出の際に、チェックを入れたものを一緒に提出した。提出したリストを教員が確認したところ、修士論文を提出したすべての学生が適切な手順で研究を行っていた。今後は、研究倫理チェックリストを必要があれば改良し、引き続き、学生に配付した上で、研究を行う際に活用していく予定である。

(2) 学外セミナーへの教員派遣

研究科長が、京都大学コンソーシアム第31回FD・SDフォーラムに2月28日に参加し、第1分科会「大学における教育評価の在り方再考—新学習指導要領導入後の教育評価—」と第5分科会「つなぐ広報、ひらく大学」に出席した。第1分科会は「2025年度は、新学習指導要領のもとで評価を受けてきた学年が大学に入学する初年度」という視点で企画されたものであった。学部教育向けの内容ではあったが、一つひとつの評価法の役割を正しく把握したうえで、異なるタイプを組み合わせることの意義は、大学院教育でも意識されるべきであると考えられた。第5分科会は、特色ある広報活動で成果をあげている3大学の広報担当者の発表で、大学の規模や専門性による違いはあるものの、広報は教職協働がカギであるとの感想を得た。

<農学研究科>

活動計画

- (1) 研修会（研究談話会）の開催
- (2) 研修会（大学院研究セミナー）の開催
- (3) 研究成果についての検証および満足度調査

活動計画（1）研究談話会の開催

大学院教育は教員の研究活動が教育の質に直結するため、教員の研究レベルの向上が FD 活動には不可欠である。高い評価を受けている研究や最先端の技術を取り込んだ研究の紹介は教員にとって大いに参考になり、研究に対する動機付けも高まる。農学研究科では「研究談話会」を企画して、そのような機会を教員や大学院生に提供している。

令和 7 年度は「調理品のおいしさ評価～タマゴを中心として～」（講師：先端食農学科 小泉昌子講師 6 月 16 日開催）、「有用水産魚種における完全養殖技術の高度化と先端育種の展開」（講師：先端食農学科 大賀浩史講師 8 月 20 日開催）、および「衛星リモートセンシングによる稲の収穫適期予測に向けた試み」（講師：環境農学科 小林祥子教授 11 月 18 日開催）という 3 演題で講演をしていただいた。前者 2 名は、昨年度および今年度の新採用教員で、前任の職場で培ってきた新たな知見を提供してくださった。すべての回において、農学研究科教員をはじめ、大学院生、および学部生から 10～20 名程度の参加があり、活発な質疑応答が行われた。昨年度に比べ開始時期を 2 ヶ月早めに設定したことが奏功したと思われる。

活動計画（2）大学院研究セミナーの開催

「Cognition under pressure: honeybees in agricultural environments」という演題でブエノスアイレス大学の Walter Farina 教授に講演をいただいた（6 月 20 日開催）。本講演はミツバチ科学研究センターとの共同開催であった。多くの参加者を迎え、非常に興味深い内容の講演で質問も大変多くあり充実したセミナーとなった。農学研究科所属の学生は、近年、国際会議等の場に参加し発表を行うことが多くみられるようになっているので、海外の研究者による講演は非常に刺激になり有用であったと思われる。

活動計画（3）研究成果についての検証および満足度調査

農学研究科所属の大学院生には、積極的に自身の研究成果を学会で発表するように促している。学会発表では、研究成果の発表および質疑応答を通して研究内容の充実を図ることやより発展的なアイデアの創造が可能であるが、それだけに留まらず他の研究者の発表を聴講することで視野が広がることも期待できる。指導教員としては、参加学生からこれらの「成果」を聞き出すことで、研究指導上の改善点などを抽出することが重要となる。

今年度は成果報告が 11 件あり、すべてにおいて、学会に参加し自身の研究を発表することで得るものが多かったという報告を得た。とくに自身の研究の意義や成果を再確認できたことや、研究における新たな問題点などが浮き彫りになったこと、また研究者間のつながりを得たという意見などがみられた。国際会議への参加も 9 件あり大学院生の積極的な姿勢は評価に値する。国際的な視点をもつことができたこと、英語での発表および質疑応答の経験は非常に有意義であった

という声が聞かれた。農学研究科のカリキュラムにある「科学英語表現」および「ELF501」の履修による効果が表れたものと考えている。一方で、自分の研究成果を十分に伝えきれなかったという反省の声もあったが、そういう点に気づけたことも大きな収穫であると考えられる。学会に参加し発表することは、指導教員とは異なる視点を持つ他の研究者の意見を聞くことができる貴重な場であり、今後も積極的に参加するように促していきたい。

アセスメント・ポリシーに関わる「満足度調査」結果からは概ね良好な回答を得ている。ただし、「期待通りの内容を学修できなかった」という回答が1件のみであるが出された。「研究指導について満足しているか」に対して全員が「満足している」と回答しているが、大学施設に対する満足度では「施設（6号館）を使用可能な時間が自由にならない」という意見が出された。この件についてはセキュリティ面や教員の勤務時間などの点から対応は難しいと考えられるが、何らかの対策を講じるための検討は必要かもしれない。「学修研究活動全般に対する意見・要望」では、学外、とくに野外における研究をしている学生から「レンタカーの利用」について意見が出された。遠隔地におけるベースと調査地の移動に制限が生じるためという理由で、この件は難しい問題かと思われるが可能性を探ってみる必要はあるように思われる。また、昨年度と同様に学会発表等に対する旅費助成金額の増額を希望する声が多く出た。今年度も国際会議で発表をする学生が多くおり、積極的な国際舞台での発表活動をより活性化させる意味でも助成額の検討は必要かもしれない。

＜工学研究科＞

工学研究科では、令和 7 年度 FD 活動を、既報の計画に基づき、以下の観点から実施した。

- ・実習実験系科目における実践的技術力指導の改善
- ・中間発表および研究業績精査による研究指導の改善
- ・授業アンケートおよび修了生アンケートによる教育指導改善
- ・アセスメント・ポリシーに基づく点検情報の共有

下記にそれぞれに関する結果と課題等について報告する。

（１）「機械工学演習 A および電子情報工学演習 A」の実施と効果分析による実践的技術力指導の改善

工学研究科専門演習・実験科目「機械工学演習 A および電子情報工学演習 A」は、修士課程 1 年の学生を対象に、工学的基礎知識および実践的技術力を学士課程以上に習得するために、各々の学生の研究分野に関係する基本的な装置等を製作・解析し、その結果を技術発表会で工学研究科関係者（教員とともに学生を含む）に技術発表するものである。また、技術発表内容は工学研究科関係者によって評価され、優秀者が表彰される。

本項目が FD として有効と考えられるのは、技術発表会後に教員および聴講学生向けのアンケートシートを用意し、各教員から各学生の技術発表内容に関する質疑応答を発表会日時以外に実施する点にある。各学生の自分に発せられたそのすべての質問に回答することにより、時間をかけた文章による全員指導体制が構築されているわけである。発表のその場での質疑応答も、一般的コミュニケーション能力の涵養が期待され、効果的な教育方法であるが、その後の推敲された文章による書簡交換のような、科学技術を客観的に指導する方法は、大学院生指導教授法の新たな一面であると考えられる。

今年度の技術発表会実施概要について図 1 に示す。発表学生のうち 2 名は、学会参加などにより Zoom によるオンラインでの発表となった。発表の様子は録画され、すべての工学研究科関係者が視聴できる。会場において、各発表に対する質問やコメントを記載する教員向けシート（図 2）を工学研究科関係者に配付し、発表会後の回収を経て、これは発表学生へと引き渡された。記載された質問について、後日、一括して回答を行う方法を過去 2 年と同様に実施した。また、評価上位 3 名には、後日、大学院技術賞が授与された。技術発表会の結果等の詳細については、令和 7 年度第 8 回工学研究科会（令和 7 年 10 月 30 日（木））にて工学研究科全教員へ報告された。ここで報告された事項は以下の通りである。

- ・各教員による質問（図 2）と学生による回答
- ・学生の自己評価アンケート

本科目のプロセスである、企画書・途中経過・報告書・発表準備・発表当日のそれぞれに対応した学生の反応

- ・今年度に使用された技術の一覧

本項目による指導法の責任と推進、および学生の能力向上は、研究や開発を通じた実践的、且つ科学的であり、工学研究科関係者にとって非常に有効であると考えられる。一方、令和 8 年度修士課程 1 年生は 20 名程度となることが確定しているため、今年度の指導法では負担が増加する可能性があり、継続的にこのまま実施できるか否かが課題である。

令和7年度 工学研究科 工学演習A 技術発表会				
日時： 令和7年9月18日(木) 14:20～				
会場： STREAM Hall 2019 313AB				
教室発表時間等： 発表7分（予鈴5分・本鈴7分）/質疑応答3分				
機械工学専攻				
順	時間	氏名	タイトル	研究指導担当
1	14:20-14:30	佐藤 小夜子	不眠症改善のための明滅・1/f ゆらぎをもつ照明の開発	三林 洋介
2	14:30-14:40	関 智衣	夜間照明傘アタッチメントの検討	三林 洋介
3	14:40-14:50	浜本 裕史	負特性(NTC)サーミスタを用いたArduinoによる電動ネッククーラーの温度制御	川森 重弘
電子情報工学専攻				
順	時間	氏名	タイトル	研究指導担当
4	14:50-15:00	鈴木 勇吾	音楽解析装置	相馬 正宜
5	15:00-15:10	大倉 泰基	匂いセンサシステムの作成と機械学習による匂いの識別	森 文彦
休憩				
6	15:20-15:30	大崎 聖悟	物体検出を用いた自動追尾防犯カメラの開発	大竹 敢
7	15:30-15:40	熊谷 彩耶	研究室滞在管理システム	佐藤 雅俊
8	15:40-15:50	簀田 紋野	快適な学習空間構築のための扇風機制御システム	青野 修一

図1 令和7年度 工学研究科 工学演習A 技術発表会

令和7年度（2025年度） 工学研究科 技術発表会 審査票（教員用）

・匿名審査をお願いします。
 ・審査コメントは発表者にフィードバックします。それぞれの発表者へのコメントの記入は任意ですが、1位～3位候補者に対しては是非ともご記入ください。

佐藤 小夜子（サトウ サヨコ）（教員からのコメント）

図2 各発表に対する質問やコメントを記載するシートの一部

(2) 「学位論文中間発表会」を通じた研究指導法の改善

修了年度ではない大学院生には、学位論文の内容に関する中間発表の実施を例年3月に義務としている。工学研究科の定める学位論文に係る評価基準（玉川大学2025大学院要覧p168）を基に、修業の中間時点での進捗の程度、修了時点での評価基準到達見込の有無を研究科所属全教員間で共有し、研究指導法の改善可能箇所を議論するものである。

今年度の学位論文中間発表会【修士・博士】実施概要について図3に示す。研究内容に関して、専門非専門に関わらず、教員および学生による活発な議論が行われた。

このFD実施での大きな効果を以下に示す。研究指導担当教員だけでなく、その他の工学研究科所属教員の意見が加わることで、学生にとっては学位論文に係る評価基準の、より具体的な指導を受ける機会となる。また、研究指導担当教員にとっては、内容が非専門である教員による多くの視点を考慮した研究指導法の獲得の機会となる。さらに、研究科長と教務担当にとっては、学位論文に係る評価基準の見直しの機会となることである。

また(1)の項目で実施したように、各発表に対する質問やコメントを記載するシート(図2と同様)を工学研究科関係者に配布し、発表会後の回収を経て、これを発表学生へと引き渡した。発表学生は、Microsoft Formsに質問やコメントに対する応答を記入し、質問者へフィードバックされた。(1)の項目でも示したように、後日、推敲された文章によって指導担当教員以外からも科学技術を客観的に指導する方法は、大学院生指導教授法の新たな一面であると考えられる。令和8年度第1回工学研究科会(令和8年4月1日(水))にて工学研究科所属全教員へ報告される予定である。

令和7年度 工学研究科 学位論文 中間発表会【修士・博士】				
日 時	令和8年3月5日(木) 9:00～			
会 場	STREAM Hall 2019 313AB教室			
発表時間	発表 10分(予鈴 8分)／質疑応答 5分			
機械工学専攻				
順	時間	学生氏名	研究題目	研究指導
1	9:00～9:15	佐藤 小夜子	医薬品名称類似のヒューマンエラーに関する基礎的研究	三林 洋介
2	9:15～9:30	関 智衣	グレアから見た夜間自動車運転時の視認性に関する研究	三林 洋介
3	9:30～9:45	浜本 裕史	鉄-高炭素合金メカニカルアロイイング粉末を用いた純鉄および鉄鋼材料の表面改質の試み	川森 重弘
電子情報工学専攻				
順	時間	学生氏名	研究題目	研究指導
4	9:45～10:00	鈴木 勇吾	量子ガウス受信機を持つ光通信路の情報量	相馬 正宜
5	10:00～10:15	大倉 泰基	海馬歯状回における2人力連合のモデルシミュレーション	森 文彦
休憩10分				
6	10:25～10:40	大崎 聖悟	Adaptive Channel Attentionを導入した拡張Swin Transformerに関する研究	大竹 敢
7	10:40～10:55	熊谷 彩耶	Graph Cutに基づく画像セグメンテーションにおけるシード生成のためのデュープラーニングモデルの評価	佐藤 雅俊
8	10:55～11:10	飯田 紋野	Evaluation of Chaotic Time-Series Prediction Using Bidirectional LSTMNet	青野 修一
システム科学専攻				
順	時間	学生氏名	研究題目	研究指導
9	11:10～11:25	鈴木 裕太	量子LiDARの応用に向けた2モードスクイズド光の霧空間における伝搬特性の評価	二見 史生
司会:各教務担当				

図3 令和7年度 工学研究科 学位論文中間発表会【修士・博士】

（３）学生による授業アンケート

春学期および秋学期において大学院生による授業アンケートを実施した。対象科目は、工学研究科の大学院生が受講している全科目である。アンケートは Microsoft 365 を用いて作成し、全面的に実施した。大学院生は PC やスマートフォンを用いてオンラインで回答を入力し、その回答は匿名性を確保した上で収集した。

各科目の授業アンケートの結果は、教務担当者会で各科目の結果および全体の集計結果について議論したのち、全体の集計結果は工学研究科会で全教員に報告した。また、授業改善への活用を目的に、アンケート項目に関する詳細な結果についても授業担当教員にフィードバックした。なお、春学期の集計結果については、令和 7 年度第 6 回工学研究科会（令和 7 年 8 月 15 日（金））で報告し、秋学期の集計結果については、令和 5 年度第 12 回工学研究科会（令和 7 年 2 月 17 日（月））で報告した。

この活動の成果として、授業アンケートの実施から評価、公表、改善への活用までの一連のプロセスを実施することができた。アンケートの回答率は、春学期が 100%（前年度 65%）、秋学期が 91%（前年度 85%）と、大幅な向上が見られた。これは、前年度に引き続き、アンケート回答開始時期の前倒しや Blackboard でのアナウンス、授業担当教員への協力の呼びかけを複数回にわたり実施した結果と考えられる。集計結果から、回答があった授業科目においては特に問題は見出されず、良好であることが確認された。設問に対するポイントは平均で春学期が 4.55 ポイント、秋学期が 4.57 ポイント（最大 5 ポイント、高いほどポジティブな回答）と、昨年度と同等に常に高かったことが確認された。また、授業外学修時間の項目に関しては、1 回の授業あたりの平均が 3.31（春学期 3.04、秋学期 3.61）ポイント（5：4 時間以上、4：4 時間未満 3 時間以上、3：3 時間未満 2 時間以上、2：2 時間未満 1 時間以上、1：1 時間未満）と、前年度（2.98）と比較して改善が見られた。しかし、この授業外学修時間はまだ十分とは言えず、授業外学修に取り組むための課題など、更なる検討が必要と考えられる。次年度も授業アンケートを実施し、授業の改善活動を継続していく予定である。

（４）修了生アンケート

令和 6 年度修了予定者を対象として、令和 7 年（令和 6 年度）2 月に「修了予定者を対象としたアンケート」を匿名で実施した。対象者は修士課程の機械工学専攻および電子情報工学専攻の 10 名で、回答は 11 件であった。匿名アンケートであるため、重複回答の有無を特定することはできなかった。

本アンケートは、工学研究科アセスメント・ポリシーで定める「修了時の学生へのアンケート」に基づき実施されたものであり、ディプロマ・ポリシーの評価にも資するものである。質問項目は前年と同様で、工学研究科が教育研究活動を通じて育成を目指す人物像との整合性を評価するために設計されている。

回答内容はまず教務担当者会で検討され、その分析結果は令和 6 年度第 13 回工学研究科会（令和 7 年 3 月 21 日（金））で報告された。また、令和 7 年度第 3 回工学研究科会（令和 7 年 5 月 29 日（木））では、アセスメント・ポリシーに基づく研究教育活動の点検結果と併せて、本アンケートの基本統計も改めて報告された。なお、初回の報告は令和 6 年度中に行われているが、アセス

メント・ポリシーに基づく研究教育活動の点検まで含めた活用事例が完結するのは令和 7 年度であるため、本年度の FD 計画および本報告に含めている。

回答からは、工学研究科の提供するカリキュラムへの高い評価、研究指導教員への信頼、今後の生活への意欲など、多くの修了生が満足感をもって玉川大学大学院を修了していることが確認された。

一方で、研究指導に関する質問（質問 2～3）、学修成果の自己評価（質問 4、7～9）、就職活動関連（質問 12）には否定的な回答も見られた。特に質問 2（研究指導に対する評価）では、全体傾向とは逆に、すべての項目で強く否定的な回答を示した修了生が 1 名確認された。研究科会では、研究指導担当資格を有する教員に対し、工学研究科が策定している「研究指導計画」「修士論文に係る評価基準」等の再確認を行うとともに、学生との接し方を見直す意識共有を行った。

そのほか、研究活動における他者・他機関との交流に関する弱含みの回答、図書館利用回数の低さ、外部発表のない学生の割合の高さが目立った。AI をはじめとするデジタル技術の利用には慣れている一方、他者への質問や議論といった高度な交流が不足し、書籍に基づく裏付けや深い理解を伴う学修場面が減少している状況を反映している可能性がある。この点を踏まえ、工学研究科の特別講義「研究・発表・論文」や「研究倫理講習」では、議論の意義や書籍との向き合い方に関する内容を、例年よりも丁寧に扱うこととした。

令和 7 年度の修了生アンケートは令和 8 年 2 月 6 日（金）から回収をしている。これに基づく令和 7 年度についての分析は、アセスメント・ポリシーに基づく点検調査の一部として令和 8 年度の工学研究科会において報告される予定である。

（5）アセスメント・ポリシーに基づく点検情報の共有

令和 7 年度第 3 回工学研究科会（令和 7 年 5 月 29 日（木））において、令和 6 年度の工学研究科の活動に対する点検結果を報告した。昨年度に引き続き、点検結果の各項目について、ディプロマ・ポリシーに記載された 3 項目 10 要素のどれに対応するかを明示する形式とし、就職先情報も掲載した。また、TOEIC スコアの分析も行った。令和 6 年度中に実施した学生の研究業績の集計は、令和 6 年度第 12 回工学研究科会（令和 7 年 2 月 18 日（火））で改訂した分類方法に基づいて行っている。

アセスメントの全体的な傾向として、研究発表や論文数など研究活動に関わる学修成果は、昨年度に引き続き良好な結果を示している。就職率も 100% を維持し、博士課程後期への進学者も 2 名（本学および他大学院）いた。令和 6 年度修了生アンケートの分析結果（前掲）によれば、カリキュラムや研究指導の質的側面についても、多くの学生が自身の成長につながったと認識している。これらの点を全教員で共有した。

学生の英語力については、TOEIC700 点超を毎回記録する学生が 2 名いる一方、全体としては極めて低調であることが報告された。点検後、大学院生の英語力向上を目的として、令和 8 年度から英語勉強会を再開することとなった。参加条件に工夫を施し、継続的な英語力向上を図る仕組みとしている。

令和 7 年度は玉川大学が大学基準協会の審査を受ける年度であったため、令和 6 年度には大学の取扱局に対し、工学研究科としてさまざまな回答を行った。実際の回答内容は令和 6 年度第 7

回工学研究科会で報告されていることを再確認した。次回審査（令和 14 年度〔2032 年度〕予定）に向け、今回の回答作成に用いた資料の保全等が必要であることも確認した。

（6）学生の研究業績報告

本項目は新設であるため、前年度から経緯を詳細に記載する。

工学研究科では、学生による論文投稿や学会発表が頻繁に行われている。こうした研究活動を把握するため、学生から業績報告を提出してもらう仕組みは以前から存在した。アセスメント・ポリシー策定にあたり、この業績報告を点検項目に組み込み、提出フォーマットを改めた。

令和 6 年度 1 月に提出書類のフォーマットを改訂し、「工学研究科の学生業績報告への記入の手引き」を新たに作成した。令和 6 年度第 12 回工学研究科会（令和 7 年 2 月 18 日（火））で全教員と共有した。手引きでは、本学の研究者情報検索サービスや外部のデータベース型研究者総覧等への掲載にも対応するように成果物（論文・発表）の分類を示している。これは、学生であっても研究に携わる部分においては一人の研究者として扱うという意識に基づくものである。

学生への手引き配布、令和 6 年度に関する提出書類の回収、集計は令和 7 年 2 月中に完了した。集計結果は、研究科が顕著な業績を挙げた学生を表彰する制度の根拠資料となるとともに、令和 7 年度第 3 回工学研究科会（令和 7 年 5 月 29 日（木））におけるアセスメント・ポリシーに基づく点検調査の一部として報告した。論文数・発表件数ともに良好であり、学会から表彰を受けた学生もいた。

令和 7 年度の研究業績報告については令和 8 年 1 月から作業を開始した。前年度では集計に際して分類を誤解する学生がいたこと、また業績数は在学期間中の通算表示を求めていたため、年度ごとの集計は担当教員が行う手間があった。これらを改善するため、フォーマットと手引きを改訂し、令和 7 年度第 11 回工学研究科会（令和 8 年 1 月 29 日（木））でそれらを報告している。

令和 8 年 1 月 30 日（金）から 2 月 19 日（木）まで提出期間を設けて回収をした結果、在学生 14 名中 13 名から提出を受けた。これに基づく令和 7 年度についての分析は、アセスメント・ポリシーに基づく点検調査の一部として令和 8 年度の工学研究科会において報告される予定である。

＜マネジメント研究科＞

（１）FD 会の実施

【報告】

例年、修士論文・課題研究中間報告会の後、学生と教員の参加による FD 会を実施している。グローバル・マーケティング研究コースおよび会計学研究コースの学生とは、修士論文の執筆を今後どのように進めるべきかについて議論を交わした。また、社会人学生であるスクール・マネジメント研究コースの学生からは、業務と並行しての研究活動への取り組みの難しさなどを聴取した。

【成果・課題】

各コースに共通して、学生の理解度に合わせた指導が必要であることを確認した。また、修士論文および課題研究報告書の執筆指導に関する方針について、教員間で情報共有を行った。今後は、指導方針のさらなる明確化を図るとともに、研究の進捗状況の継続的な把握とフィードバックの充実に努めていくことを確認した。

スクール・マネジメント研究コースにおいては、学生が社会人としての職務と研究活動を両立しながら課題研究を進めるという特性がある。こうした状況を踏まえ、研究の進捗管理を適切に行うことが特に重要であるとの認識を、担当教員間で共有した。

（２）コースのカリキュラムや授業改善に関する検証

【報告】

各年度の修了生を対象に、コースのカリキュラムや授業内容に関する総合的なアンケートを実施し、研究科として改善すべき点を抽出している。

【成果・課題】

令和 7 年度修了生からは、履修科目選択の自由度の拡大や、研究科内での意見交換の場の設定の要望があった。これらも踏まえながら、コースのカリキュラムの見直しを進めていく。本アンケートは次年度以降も実施する予定である。

（３）学生による授業アンケートの実施

【報告】

春学期および秋学期終了後に授業に対する記述式アンケートを実施した。回収したアンケートは授業改善のための資料として担当教員へフィードバックしている。

【成果・課題】

全体として、学生は授業に対して大きな不満を抱えていることはなく、基本的には問題がないことを確認した。授業アンケートについては次年度も継続して実施し、学生からの要望を定期的に把握したい。

<教育学研究科>

(1) 【活動計画】 研修会 (FD 委員会) の開催

- ・教育学研究科会後に FD 委員会を 7 回開催 (4/23,5/28,6/25,10/22,11/26,12/17,2/17)

【成果・課題】

- ・授業開講期間中、上記の日程で「授業および研究指導体制の改善について」の研修会 (FD 委員会) を行うことで授業改善の意識を教員全体で共有することができた。
- ・気になる院生の情報共有などをして、早期に研究指導体制の見直しや改善を討論することができた。
- ・大学院 HP のニュースやコラムの内容および執筆者について討論を行い、院生や入学検討者に伝えたいことを伝えることができた。

(2) 【活動計画】 研修会「こども家庭庁を中心とした乳幼児期の育ちの政策についてー『はじめ

の 100 か月の育ちビジョン』を通してー」(講師：教育学部乳幼児発達学科教授 大豆生田啓友氏 令和 7 年 7 月 23 日 (水) の開催) ※教育学部と合同実施。

- ・文部科学省とこども家庭庁が合同実施した幼児教育の有識者会議における議論の内容をベースとして、近年の乳幼児に関する政策動向や政策の趣旨、教員養成課程・保育士養成課程で必要となる取り組みについて理解を深めた。

【成果・課題】

- ・教育学研究科の教員が、教員各自の教育研究活動分野に関わらず、乳幼児期から成人期に至るまで切れ目なくこどもに関わるための基本的な知識について、近年の取り組み事例等をもとに、幅広く学ぶことができた。

(3) 【活動計画】 研修会「OBOG フォローアップ研修」(令和 8 年 2 月 7 日 (土) 開催)

講師：玉川大学名誉教授・元教育学研究科長 石橋哲成氏

「玉川大学大学院教育学研究科の成り立ちと発展」

研究発表 1 植村宏文さん (教育学研究専攻 2019 年修了)

「私の近況発表ーこたえは出すが、真偽が定かではない仕事に悩む毎日ー」

研究発表 2 大崎志保さん (乳幼児教育研究専攻 2018 年修了)

「現在地の可視化からの未来構想ー現場のチカラを加速するための視点ー」

- ・大学院 (教育学研究科) の成り立ちについて研究科創設者である石橋氏にご講演いただくとともに、修了生 2 名より、それぞれの修了後の研究状況についての発表がなされた。今後の教育学研究コースの継続と更なる発展について考える機会となった。

【成果・課題】

- ・今後の教育学研究科の継続と更なる発展について、教員だけでなく歴代の修了生を含め共通意識をもつことができた。教育学研究科についての理解も深めることができた。

(4) 【活動計画】 研修会「生成 AI 時代、GIGA スクール時代の学習指導要領改訂の方向性：検

討の背景・方向性をおさえ「明日の改善」に繋げたい」(講師：文部科学省初等中等教育局教育課程課長 武藤久慶氏 令和 8 年 2 月 17 日 (火) より動画配信) ※教育学部、

教職大学院と合同実施。講演者の業務都合によりオンデマンド配信。

- ・令和 7 年度の教育政策の動向や答申等について振り返り、最新の教育政策の動向や今後の展望を理解して、教員養成課程や保育士養成課程のあり方についての知識を深めることができた。

【成果・課題】

- ・令和 7 年度の教育政策の動向と答申等について情報の整理を図るとともに、今後の教育政策の展望についての理解を深めることができた。日常の教育研究活動にどのように生かすことができるかについて、各自考えることができた。

(5) 【活動計画】 調査「M1 対象の入学 1 ヶ月の学習及び生活調査」(期間：令和 7 年 5 月)

- ・研究科に入学して 1 ヶ月経過した頃に、学習への取り組み及び生活状況についてのアンケートを行い、学生の状況を理解する。学習についての意見は授業改善に役立てる。生活についての意見は困っていることの改善を手伝う。

【成果・課題】

- ・結果は全ての教員に配付し、研究科全体で討論をした。今後の大学院生としての生活が円滑に進むよう、全体及び個人の意見を抽出し、生活の改善点および授業改善など初期に討論をすることができた。
- ・夜間コースの院生の学習と仕事の両立の状況を把握した。遠方の院生から旅費申請等手続き上の要望があり、研究科長の下、改善することができた。

(6) 【活動計画】 学期終了後の授業アンケートの実施及び分析

- ・全開講科目を対象。春学期末、秋学期末の実施及び分析。

【成果・課題】

- ・集計の結果は全ての教員に配付し、研究科全体として授業改善に取り組み、院生にも必要な部分はフィードバックをした。院生の意見から、全体及び個人の意見を抽出し、授業改善について討論することができた。
- ・アンケート内容を「授業方法に関する意見・要望」と「大学に関する意見・要望」に分けて分析し、希望があるものについては迅速に改善を試み、学習環境の改善をすることができた。
- ・授業への要望については、教員間で話し合いを行い、改善につながるよう討議した。

(7) 【活動計画】 研修会「WebClass の操作を一から学ぶためのハンズオン講座」(講師：ICT 教育研究センター課長 磯田裕美氏 令和 8 年 3 月 25 日(水)の開催)※教育学部と合同実施。

- ・令和 8 年度より学内のシステム変更に伴い、WebClass を使用することが決定していることから、急遽その使用法についての研修を計画し、実施した。

【成果・課題】

- ・教育学研究科の教員それぞれが、新年度からの WebClass 活用に向けて、実践を通して見識を深めることができた。

<教職大学院>

(1) 教職大学院 OBOG フォローアップ研修について

本年度は、対面で6月21日(土)、11月29日(土)の2回の日程で実施した。

また、令和8年2月14日(土)に玉川大学教職大学院セミナーを実施した。

さらに、2月17日(火)に教育学部との共同開催で「令和7年度 of 教育政策の動向と答申等のまとめ」についてのFD研修会を実施した。

◆令和7年6月21日(土) 参加者49名

今井勉教授による研究報告

教職大学院 OBOG による実践報告

報告者：現職13期 小塚祐爾氏

SM12期 近松邦彦氏

◆令和7年11月29日(土) 参加者49名

伊藤美紀教授による研究報告

教職大学院 OBOG による実践報告

報告者：現職15期 山崎克洋氏

SM10期 関野早慧華氏

◆令和8年2月14日(土) 参加者30名 玉川大学教職大学院セミナー

教職大学院生による課題研究発表 現職院生3名 SM2年次院生5名

◆令和8年2月17日(火) FD研修会「令和7年度 of 教育政策の動向と答申等のまとめ」(教育学部との共同開催)

文部科学省初等中等教育局教育課程課長 武藤久慶氏による講演を録画にて視聴

1) 成果

・6月21日(土)に第1回フォローアップ研修を対面で開催した。

修了生プレゼンテーションでは、SM12期の近松邦彦氏からは、「教職経験5年間で培った仕事術」をテーマに、現在勤務されている学校で導入されている教科担任制や生徒指導にあたって工夫している点等について実践報告があった。現職13期の小塚祐爾氏からは、「誰が学校を変えられるのか？」をテーマに教育現場から課題解決に向けてどのように行政に働きかけたかについて実践報告があった。

グループディスカッションでは、教授、修了生、現職教員、現役生がグループに分かれ、それぞれの現状の課題や経験などについて意見交換を行った。

最後に、今井勉教授から「教職大学院の使命ー求められる教員の姿ー」についての研究報告があり、「教職大学院で何を学ぶのか」を改めて確認する機会となった。

本フォローアップ研修については教職大学院のHPでも紹介している。

https://www.tamagawa.jp/graduate/teaching_pro/voice/detail_24979.html

・11月29日(土)に第2回フォローアップ研修を対面で開催した。

修了生プレゼンテーションでは、SM10期の関野早慧華氏から「5年間を振り返って」をテ

マに、初任 1 年目の苦勞から現在に至るまでの歩みと授業準備に追われ思い通りにいかない日々の中で、大学院の横のつながりがとても力になったとの実践報告があった。現職 15 期の山崎克洋氏から「学ぶ文化」というテーマで、学びを“ゆたかさ”として捉える視点から子どもだけでなく、教員自身が学び続ける姿勢が学校全体の活力となり、その文化が子どもたちの学びにも広がっていくという実践報告があった。

グループディスカッションでは、修了生・現職教員・現役院生が立場を越えて意見交換を行い、教員の未来、実習での悩みや現場の課題、教職大学院で身につけていくべき力などについて意見交換を行った。

最後に、伊藤美紀教授から「家庭科教育 一家庭科で育む力」についての研究報告があり、生活に根ざした力を育てる教科として、これからの社会を生きる子どもたちに欠かせない学びであることを再認識する機会となった。

本フォローアップ研修については教職大学院の HP でも紹介している。

https://www.tamagawa.jp/graduate/teaching_pro/voice/detail_25535.html

・令和 8 年 2 月 14 日（土）玉川大学教職大学院セミナーを対面と一部オンラインで行った。

本年度からの試みとして、課題研究発表を学内外へ公開する形をとった。「学校課題研究発表」の題目は次の通りである。

- ☐ 小学校低学年音楽における身体を使った拍子感の育成
- ☐ 中学校数学科における「数学的な表現や処理」の力を高める指導について
 - 中学校「等式の変形」の批判的に考察する活動を通して —
- ☐ 小学校 3 年生における他者参照の活用とその学習効果の検討
 - 学習者主体の関係構築と学び合いの質的変容に着目して —
- ☐ 中学校音楽科における ICT を活用した創作活動の効果検証
 - Song Maker を用いた実践をもとに —
- ☐ 批判的思考の育成を目指した地歴連携の授業デザイン
 - 中学校 2 年生歴史的分野「近世の日本」の単元開発 —
- ☐ 「永続的理解」を明確にしたパフォーマンス課題の開発に向けたワークについて
- ☐ 「象徴」に着目した文学教材の対話的な学習デザイン
 - 高等学校第一学年「鏡」を題材として —
- ☐ エンカレッジスクールに勤務する教員の教育実践に関する調査研究

発表後は「ラウンドテーブル」を設定し、研究発表に対する質疑に加え、参加者それぞれの立場で話題を出し合い交流している。SM1 年次院生にとっては、自身の学校課題研究の見通しをもつ機会となった。外部参加者には、学校課題研究発表から「理論と実践の往還」を目指した学修の一端を知ってもらうことができた。また、次年度入学予定者にも参加を呼び掛けたことで、入学してからの様子や玉川大学教職大学院での学びを実感してもらう機会ともなった。

・令和 8 年 2 月 17 日（火）FD 研修会「令和 7 年度 of 教育政策の動向と答申等のまとめ」（教育学部との共同開催）を録画視聴で行った。

文部科学省初等中等教育局教育課程課長（GIGA StuDX 推進チーム統括ディレクター） 武藤

久慶氏による「[生成 AI 時代、GIGA スクール時代の学習指導要領改訂の方向性：検討の背景・方向性をおさえ「明日の改善」に繋げたい（玉川大学教育学部 FD 研修 文部科学省初等中等局教育課程課長 武藤久慶氏）](#)」の講演を 2 月 17 日（火）から 3 月 25 日（水）まで配信し各自が視聴した。

新学習指導要領が目指している方向とその根拠、現場での具体的な取り組みへの示唆まで、非常に役に立つ内容を改めて学ぶことができた。学習方略の指導、学習語彙の獲得、探究的な「要素」の段階的導入、デジタル学習基盤の日常的な実装、教科書の構造の指導、知識の統合的理解等、今後の追究の指針にすることができると感じ大変参考になった。

・これまで、OB・OG の参加者がやや少ない点が課題となっていたが、解決に向けて Google ドメインによるメール連絡網を構築し、有用リソースを修了生がアクセスできる Classroom に整備するなどの工夫を行った。

2) 課題

・特に大きな課題はない。参加者からグループディスカッションの時間が足りないとの意見があったため、スケジュールの調整を検討したい。

（2）FD 授業研究について

11 月 6 日（木）（西田太郎教授）、12 月 18 日（木）（久保田善彦教授、梅田比奈子教授、西田太郎准教授）の 2 回の授業研究を実施した。

1) 成果

◆令和 7 年 11 月 6 日（木）15:00～16:40（担当：西田太郎准教授）

「授業デザインの研究と実践（現職）」

学習活動に対する社会文化的アプローチ（分析・考察）

- ・現職院生がそれぞれの理解から授業の視点を探る姿から理論と実践をつなごうとする学びが感じられた。
- ・検討の例が、現職院生の所属する中学校・高等学校ではなく、小学校のものであったことは、やや気になった。
- ・生徒の社会的な経験の差が、課題に向き合う時点で顕在化しているように思われる。

◆令和 7 年 12 月 18 日（木）9:00～10:40（担当：久保田善彦教授、梅田比奈子教授、西田太郎准教授）

「授業デザインの研究と実践」

子どもと教師のズレから授業改善を検討する

・ALACT モデルを援用し、授業における子どもと教師の認識のズレを「8 つの窓」を用いて整理する。整理の過程で生成 AI との対話結果をもとに、ズレの要因や授業改善の手法を検討した。その後、より本質的な気づきと行為の選択肢の拡大を目指し、SM と現職院生で構成したグループ

で討議を行った。

- ・学習指導案に生かす授業ツールとして AI を活用しているが、これは教師自身の学びの伴走者としても有効であると考えられる。生成 AI による助言がすべてではないが、少なくとも自分以外による客観的な助言の一部として、生成 AI を活用する意義は大きい。
- ・生成 AI が返してくる回答が正しいという保証はないが、実習生や初任者にとって、授業の見方の一部についてヒントを得られるという点で大変有意義だった。
- ・SM の授業に対して、互いの気づきを交流するとともに、現職院生の立場での授業の見方や改善のためのアドバイスをし合うことが、SM にとっては新しい見解を得る機会に、現職にとってはこれまでの教職経験で培ったものを改めて確認し、活用していく方策を意識する機会となっていた。

例年通り、協議会においては、①「理論と実践の往還」のための授業づくりや教材開発の具体的な方策について、②SM の実践経験不足を補う指導法について、③現職院生の実践経験を活用した指導法、等々についての議論が活発になされた。

本授業研究については教職大学院の HP でも紹介している。

https://www.tamagawa.jp/graduate/teaching_pro/info/detail_25795.html

2) 成果と課題

- ・教員が毎年、授業の研鑽に努めていることが、院生たちに良い印象を与えている。
- ・対面での授業が実施できて良かった。今後も定期的に継続していく予定である。

(3) 各教員に対する調査について

- ・FD の一環として、SM や現職院生の学修理解等に関して、各教員に対する所感を調査した。調査結果は教職大学院会で公表され、データをもとに議論がなされた。

(4) FD 委員会における情報交換

- ・毎月の教職大学院会終了後に FD 委員会を開催し、院生に関する諸問題と指導方針、教員間の連携、カリキュラムや組織のあり方について検討している。

1) 成果

例年、課題をかかえている院生への教員の対応、学校課題研究の進捗状況やその適切な指導のあり方、院生が学修しやすい環境の構築、課題の出し方についての基本的な考え方の確認等々についての情報交換がなされ、それぞれの場面での方策についてよりよいあり方を検討することができている。

2) 課題

特に大きな課題はない。今後も定期的に継続していく予定である。

<脳科学研究科>

(1) 玉川大学脳科学ワークショップの開催

令和8年2月8日から10日にかけて、小田原市の天成園小田原駅別館において、「玉川大学脳科学ワークショップ2025」を開催した。脳科学研究科および関連研究科の教員20名、脳科学研究科の大学院生9名、脳科学研究所の研究員14名、技術支援員1名、その他2名、外部講師2名の計48名が参加した。

ワークショップは8日午後に開始し、まず教員による研究室紹介を1人5分程度で行った。その後、大学院生および研究員によるポスター発表に向けたフラッシュトークが行われた。夕食後には、会場にて28件のポスター発表が実施され、参加者全員で研究内容について活発な議論を行った。

2日目の午前中には、大学院生による口頭発表（発表15分、質疑15分）が行われ、研究の進捗状況の確認と研究内容に関する議論がなされた。午後には、坂上雅道先生による最終講義「ニューロンは嘘をつきません」が行われ、坂上先生がこれまで玉川大学で進めてこられた研究について講演された。加えて、松元健二先生がPMを務めるムーンショット型研究開発事業・目標9「脳指標の個人間比較に基づく福祉と主体性の最大化」に関する講演会が、松元まどか先生（京都大学）および稲邑哲也教授により行われ、本プロジェクトの成果が報告された。

3日目の午前中には、下田真吾先生（名古屋大学）による講演「なぜ人は気づいた瞬間に変わるのか—無意識下処理と意識化を結ぶ神経メカニズム—」が行われた。本講演では、「気づき」は無意識の処理と意識的な行動制御をつなぎ、人の行動や身体の使用方の変化を生み出す重要な機能的プロセスであることが示された。

ワークショップの最後には、大学院生および研究員を対象とした表彰式が行われ、優秀な発表を行った者を表彰した。本ワークショップは、大学院生の研究の進捗状況を確認する場として非常に重要であるとともに、相互のピアレビューを通じて研究内容への理解を深める教育的効果も期待できる。

(2) ピアレビューの実施

令和7年度に実施した「玉川大学脳科学ワークショップ2025」（令和8年2月8日～10日）および令和7年8月12日に実施した中間発表における大学院生の研究発表をもとに、擬似ピアレビューを実施した。本レビューでは、各大学院生の発表内容に対して、脳科学研究科の教員1名をエディターとして割り当て、個別に対応した。レビューは以下の手順で進めた。まず、大学院生自身が中間発表およびワークショップ発表時に寄せられた質問を整理し、それに対する回答を文章として作成する。次に、担当エディターがその内容を確認し、必要に応じて追加の質問を行うことで、研究内容に対する理解をさらに深めるよう促した。本年度のピアレビューは、令和8年6月中の完了を予定している。

この取り組みにより、ワークショップや中間発表における質疑応答を記録として残し、時間をかけて再考する機会を設けることができた点は、大学院生の研究理解を深めるうえで有意義であった。また、ワークショップや中間発表を一過性の発表機会にとどめることなく、継続的な教育的効果につなげる取り組みとしても重要である。さらに、ピアレビューの内容は研究科会において共有されるため、他の教員の指導力向上にも資するものと考えられる。加えて、本取り組みは、

大学院生が自身の研究内容を文章として整理し、他者からの質問に論理的に応答する力を養う機会としても有効である。今後も実施方法の改善を図りつつ、継続的に運用していく予定である。

（３）研究環境整備に関する需要の調査と整備

研究センター棟および Human Brain Science Hall における大学院生の研究環境について、現状の確認と要望の把握を行い、必要な環境整備を進めた。あわせて、大学院生から寄せられた意見や要望を整理し、今後の環境整備計画に反映するための基礎資料とした。研究活動を円滑に進めるためには、設備面および学修面の両面から継続的に環境を見直すことが重要であり、本取り組みはそのための基盤整備として意義がある。

（４）研究科評価アンケート

研究科全体に対する研究科評価アンケートを実施した。アンケートを通じて、教育・研究指導体制、研究環境、学生支援等に関する大学院生の意見や要望を把握し、今後の研究科運営および改善に活用することを目的とした。研究科として継続的に教育の質向上を図るうえで、大学院生の声を組織的に収集し、改善につなげることは重要である。

Ⅲ 教員研修

新任教員研修会

令和8年度採用の新任教員（助教以上）16名に対し、大学FD委員会の主催により、関係各部の協力・連携のもと研修会を実施した。この研修会は、今年度で24回目の開催となった。

日 時：令和8年3月16日（月）10：00～16：20

場 所：大学教育棟 2014 501教室

対 象：令和8年度採用教員

研修目的：玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・目的を理解する。

専任教員としての業務に必要な知識を得る。

到達目標：玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・目的を他者に説明することができるようになる。

専任教員としての業務を理解し、遂行することができるようになる。

（１）研修プログラム内容

10:00	開始／研修説明	教学部教務課
10:05	新任教員自己紹介	新任教員
10:20	学長挨拶	小原 一仁 学長
	講演「玉川大学の教育理念」	小田 眞幸 高等教育担当常任理事
11:10	休憩	
11:25	大学教員の勤務について	人事部人事課
11:45	教学事項について	教学部教務課・学務課・授業運営課
12:30	昼食	
13:30	学生支援について	学生支援センター
13:50	本学の ICT を活用した教育	ICT 教育研究センター
14:20	玉川学園ポータルの活用	総務部情報基盤システム課
14:50	休憩	
15:00	講演「これからの大学教員に必要なこと」	伊従 記章 教学部長
15:50	質疑応答	
16:00	各種事務手続き	教学部教務課
	①写真撮影（キャンパスカード用）	人事部人事課
	②契約内容の説明等（講師および助教の方のみ）	
16:20	研修会終了	

- 【動画視聴】 教学システム（UNITAMA）について 教学部 授業運営課・教務課
 個人情報保護方針 総務部 総務課
 ハラスメント防止研修 人事部 人事課（顧問弁護士）
 コンプライアンスについて 監査室
 研究公正の取組とお願い 研究推進事業部
- 【任意研修】 キャンパス・ツアー 3月26日（木）13：00～15：45

（２）配付資料・参考資料

資料	担当
令和８年度新任教員研修会＜研修プログラム＞	教学部 教務課
令和８年度新任教員研修会 名簿	
玉川大学の教育理念	小田 眞幸 高等教育担当常任理事
大学教員の勤務について Web 勤怠管理システム(TimePro—VG)初回ログインマ ニュアル 私学共済制度 新規加入者向けリーフレット	人事部 人事課
令和８年度教学事項について 学校法人玉川学園組織機構図(令和８年４月１日施行) 教学部の役割(学校法人玉川学園組織事務分掌細則) 教員ハンドブック『学部運営組織』抜粋資料 令和８年度 年間授業計画	教学部 教務課
令和８年度 新任教員研修会 教務事項 「授業を通して修得できる力」のコモン・ループリック 高等教育機関所属教員対象 ４月１日教授会・研究科会 教員ハンドブック(令和８年度版)	教学部 授業運営課
ご着任にあたって 研究室・内線番号 各種事務手続きについて 令和８年度 個人研究費説明会について	教学部 学務課
学生支援について 合理的配慮の提供に関する資料集	学生支援センター
玉川大学の ICT を活用した教育 本日のポイント	ICT 教育研究センター
玉川学園ポータルの活用	総務部 情報基盤システム課
これからの大学教員に必要なこと Tamagawa Brand Guidelines	伊従 記章 教学部長
Document-Tech Station(DTS)について DTS プリント&デザイン	DTS

(3) 実施の成果

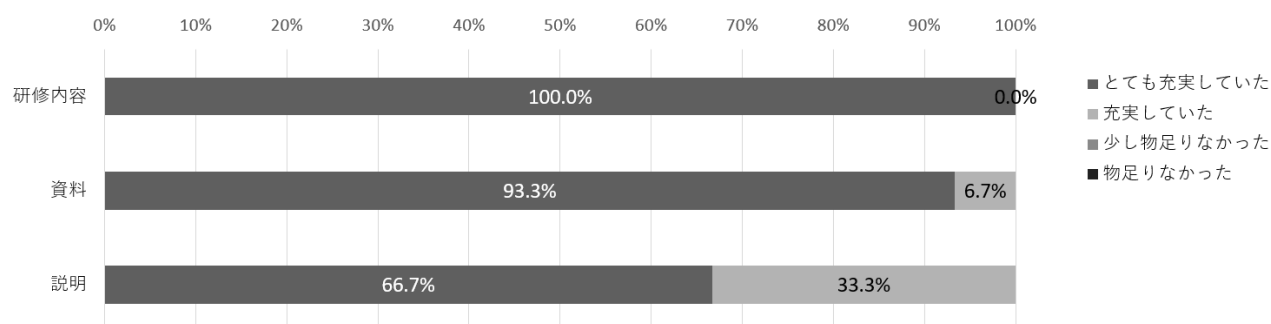
本学における教育について参加者に理解を促すため、2つの講演「玉川大学の教育理念」、「これからの大学教員に必要なこと」を実施した。これにより、専任教員としての業務に必要な教学事項や学生指導だけではなく、大学で働く教員に期待されていること、本学で求められる教育が何かを伝えることができた。

また、大学教員の勤務や教学事項、学生支援、ICT等について担当部署より説明し、勤務や業務について採用後に必要となる知識を提供することができた。今年度より教学システム（UNITAMA）については、オンデマンド型に変更し、必要に応じて繰り返し確認できるようにした。また、「個人情報保護」、「ハラスメント防止研修」「研究公正の取組とお願い」についても動画視聴による研修を実施し、教育・研究機関に勤務する教職員としての自覚を促すことができた。

キャンパス・ツアーについては、任意参加の研修であったため、16名中5名のみの参加であった。約2時間半をかけて、大学教育棟2014のラーニング・コモンズ、教育情報図書館、Future Sci Tech Lab、Human Brain Science Hall、DTS（ドキュメントテクステーション）などを巡り、本学の理念や教育に関わる施設への理解を深めた。

受講者から提出された研修受講報告書では、以下のとおり研修内容、資料、説明の肯定回答は100%であり、参加者のニーズに沿う充実した内容の研修を実施することができたと考えている。

＜研修受講報告書(対面研修) —内容、資料、説明について—＞



「本研修について、受講して良かった点がありましたら、ご記入ください」という受講報告書での質問に対しては、以下の回答があった。

- ・書類だけではわかりにくいことを説明していただき、役にたった。また、他学科の先生方とお会いできて良かった。
- ・玉川大学の概要がわかった。
- ・小原先生のエピソードも含めて、玉川大学の価値観や理念がよくわかった。
- ・全ての内容について詳細な資料を準備していただき、研修後に再確認する際に大変助かった。説明資料には記載されていない、例えば講演を担当して下さった先生の体験談や学生支援における実際の具体例等は大変興味深く拝聴し記憶に残った。
- ・資料を非常に細やかにご用意くださっており、後から確認ができる点が大変たすかった。

- ・玉川大学のシステムについて再確認できた。
- ・教育理念の理解が進められたと思う。大学として向かおうとしていること、取り組みについてもわかりやすい説明をしていただけたと考えている。何よりも、お話ししていただいた皆様の熱量を感じられたのが良かったと思う。
- ・大学の教育理念や各種制度について体系的に知ることができ、着任に向けた準備の参考になった。
- ・小原國芳先生と全人教育への理解が深まった。WebNotes と玉川ポータルの使い方が少し理解できた。
- ・玉川大学の教育理念のお話は共感できてとても良かった。教育信条についてはウェブサイトでも事前に学習していたが、労作については本研修で良く理解できた。「百聞は一労作に如かず」は私の長い社会人経験で実施してきたことだった。勤務や教務事項についてのお話を聞き、着任後がだいぶイメージできるようになった。
- ・大学の置かれている状況について知ることができたのは非常に良かった。
- ・いくつもあるが、特に教学面で、学生の授業外学習の短さを課題としていることがよく分かった。20 年前とは違って、インターネットの普及、動画等の教学ツールの充実によって、今はいつでも、どこでもやる気さえあれば学修できる環境にある。そのため、知識のインプットは授業外時間で、知識のアウトプット（討論や発表）は授業内時間で行えば、この課題を解決する糸口になるのではないかと考えている。教室での授業において、教員と学生が同じ時間に同じ空間にいること自体がとても貴重な時間であることを、コロナ禍で痛感した。4 月からの授業については準備が間に合わないが、恒常的に「オンデマンド+対面授業」を行うことで、授業外学習の時間を伸ばすことができるよう、努めたいと思う。
- ・大学の教育理念をはじめ、様々な手続きに至るまで丁寧にご説明いただき理解することができた。新しい職への不安が軽減された。困ったときの相談先の周知や、同期の専任教員の皆様との交流など、御配慮に感謝する。

受講報告書の回答結果からも本研修会の目的・到達目標は、達成できたと評価できる。次年度に向けて、より本研修会の質が向上するよう改善に努める。

参 考 資 料

参考資料 1. 大学 FD 委員会の議事内容

第 1 回大学 FD 委員会

- 日 時 : 令和 7 年 5 月 8 日 (木) 17 : 00～17 : 39
- 場 所 : 大学研究室棟 B101 会議室
- 議 案 : (1) 年間開催日程に関する件
(2) FD 研修会等計画に関する件
(3) 令和 8 年度 授業アンケートの見直しに関する件
- 報 告 : (1) FD 活動計画の提出について
(2) 令和 6 年度 特別学期 (ウィンターセッション) の授業アンケート結果について
(3) 学生による授業アンケート (春学期) の実施について
(4) 「令和 6 年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書」の配付について

第 2 回大学 FD 委員会

- 日 時 : 令和 7 年 7 月 15 日 (火) 13 : 30～15 : 02
- 場 所 : 大学教育棟 2014 793 会議室
- 議 案 : (1) 各学部 FD 研修会等計画に関する件
(2) 令和 8 年度 授業アンケート実施 (案) に関する件
- 報 告 : (1) 令和 6 年度 大学教育力研修受講アンケート
(今後研修会で取り上げてほしいテーマ) 回答について

第 3 回大学 FD 委員会

- 日 時 : 令和 7 年 9 月 17 日 (水) 15 : 30～16 : 08
- 場 所 : 大学研究室棟 B101 会議室
- 議 案 : (1) 春学期授業アンケート結果ならびに授業改善の取組みに関する件
(2) 令和 8 年度 授業アンケート実施 (案) に関する件
- 報 告 : (1) 春学期授業アンケートの集計結果レポート (授業別) の全学部配付について

第4回大学FD委員会

- 日 時 : 令和7年11月26日(水) 9:45～10:45
- 場 所 : 大学教育棟 2014 793 会議室
- 議 案 : (1) 大学教育力研修実施計画に関する件
(2) 令和8年度 授業アンケート実施(案)に関する件
- 報 告 : (1) 大学FD研修会「非常勤教員対象研修会」の実施について
(2) 秋学期授業アンケートの実施について
(3) 令和7年度「ループリック・ワークショップ」の実施報告について

第5回大学FD委員会

- 日 時 : 令和8年1月28日(水) 9:45～10:37
- 場 所 : 大学教育棟 2014 793 会議室
- 議 案 : (1) 新任教員研修会実施計画に関する件
(2) 令和8年度 授業アンケート実施(案)に関する件
- 報 告 : (1) 大学教育力研修実施計画について
(2) 令和7年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書作成スケジュールについて

第6回大学FD委員会

- 日 時 : 令和8年3月23日(月) 9:57～10:55
- 場 所 : 大学教育棟 2014 793 会議室
- 議 案 : なし
- 報 告 : (1) 令和7年度 各学部FD活動報告について
(2) 令和7年度 秋学期授業アンケートの実施結果について
(3) 令和7年度 大学FD研修会「非常勤教員対象研修会」の実施報告について
(4) 令和7年度 大学教育力研修(2月20日)実施報告について
(5) 令和8年度 春学期授業アンケート実施スケジュールについて

参考資料 2. 大学院 FD 委員会の議事内容

第 1 回大学院 FD 委員会

- 日 時 : 令和 7 年 5 月 21 日 (水) 17:00~17:15
場 所 : オンライン (Microsoft Teams)
議 案 : (1) 年間会議開催日程に関する件
(2) FD 研修会等計画に関する件
報 告 : (1) 各研究科 FD 活動計画の提出について
(2) 「令和6年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書」の配付について

第 2 回大学院 FD 委員会

- 日 時 : 令和 7 年 7 月 2 日 (水) 17:00~17:24
場 所 : オンライン (Microsoft Teams)
議 案 : (1) 各研究科 FD 研修会等計画に関する件
報 告 : (1) 令和6年度 大学教育力研修受講アンケート
(今後研修会で取り上げてほしいテーマ) 回答について

第 3 回大学院 FD 委員会

- 日 時 : 令和 7 年 12 月 12 日 (金) 17:00~17:37
場 所 : オンライン (Microsoft Teams)
議 案 : (1) 各研究科 FD 研修会等計画の中間報告に関する件
(2) 大学教育力研修実施計画に関する件
報 告 : (1) 大学 FD 研修会「非常勤教員対象研修会」の実施について
(2) 令和7年度 「ループリック・ワークショップ」の実施報告について
(3) 令和7年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書作成スケジュールについて

第 4 回大学院 FD 委員会

- 日 時 : 令和 8 年 3 月 17 日 (火) 10:40~11:16
場 所 : オンライン (Microsoft Teams)
議 案 : なし
報 告 : (1) 令和7年度 各研究科 FD 活動報告について
(2) 令和8年度 大学院研究科交流会 (大学院生の集い) の実施について
(3) 令和7年度 大学 FD 研修会「非常勤教員対象研修会」の実施報告について
(4) 令和7年度 大学教育力研修 (2月20日) 実施報告について

参考資料 3. ユニバーシティ・スタンダード科目「授業アンケート」様式

123456789 科目A(教員B)

授業アンケート

このアンケート調査は、学生の皆さんの視点から授業の状況を確認し、授業の改善に結びつけることを目的として実施するものです。入力にあたっては、この授業を振り返り、責任ある回答をしてください。

なお、このアンケートの回答は匿名化して処理するため、教員が回答から個人を特定することはできません。また、回答内容は授業改善のみに活用し、成績評価等には一切影響しませんので、率直に回答してください。

あなたの意欲や理解について

1. 授業1回に対し授業外の学修(予習、復習、課題など)を何時間しましたか (必須)
☐ 4時間以上 ☐ 3時間～4時間未満 ☐ 2時間～3時間未満 ☐ 1時間～2時間未満 ☐ 1時間未満
2. 学修を進めるにあたり、学期を通じてシラバスを参考にしましたか (必須)
☐ とてもそう思う ☐ そう思う ☐ どちらともいえない ☐ そう思わない ☐ 全くそう思わない
3. 授業に意欲的に取り組みましたか (必須)
☐ とてもそう思う ☐ そう思う ☐ どちらともいえない ☐ そう思わない ☐ 全くそう思わない
4. 授業の内容に興味は持てましたか (必須)
☐ とてもそう思う ☐ そう思う ☐ どちらともいえない ☐ そう思わない ☐ 全くそう思わない
5. 授業の内容を十分に理解できましたか (必須)
☐ とてもそう思う ☐ そう思う ☐ どちらともいえない ☐ そう思わない ☐ 全くそう思わない
6. シラバスに示されている到達目標が達成できたと思いますか (必須)
☐ とてもそう思う ☐ そう思う ☐ どちらともいえない ☐ そう思わない ☐ 全くそう思わない
7. 総合的にみてこの授業で学士力がつきましたか
* 各授業の学士力(授業を通して修得できる力)はシラバスに記載 (必須)
☐ とてもそう思う ☐ そう思う ☐ どちらともいえない ☐ そう思わない ☐ 全くそう思わない

教員の授業の進め方について

8. 話し方や説明は分かりやすかったですか (必須)
☐ とてもそう思う ☐ そう思う ☐ どちらともいえない ☐ そう思わない ☐ 全くそう思わない
9. 板書やパワーポイントなどは見やすかったですか (必須)
☐ とてもそう思う ☐ そう思う ☐ どちらともいえない ☐ そう思わない ☐ 全くそう思わない
10. 教材(教科書、プリントなど)の使い方は適切でしたか (必須)
☐ とてもそう思う ☐ そう思う ☐ どちらともいえない ☐ そう思わない ☐ 全くそう思わない
11. 授業計画(シラバス)に沿って授業が展開されましたか (必須)
☐ とてもそう思う ☐ そう思う ☐ どちらともいえない ☐ そう思わない ☐ 全くそう思わない
12. 授業時間を有効に使っていましたか (必須)
☐ とてもそう思う ☐ そう思う ☐ どちらともいえない ☐ そう思わない ☐ 全くそう思わない

13. 質問に適切に対応してくれましたか (必須)

☐ とてもそう思う ☐ そう思う ☐ どちらともいえない ☐ そう思わない ☐ 全くそう思わない

14. 授業に集中しやすい雰囲気づくりや環境づくりをしていましたか (必須)

☐ とてもそう思う ☐ そう思う ☐ どちらともいえない ☐ そう思わない ☐ 全くそう思わない

15. 授業を通して教員の授業や教育に対する熱意は感じられましたか (必須)

☐ とてもそう思う ☐ そう思う ☐ どちらともいえない ☐ そう思わない ☐ 全くそう思わない

自由記述欄

その他、意見、感想等を記述してください【200字以内】

授業改善につながる建設的な意見をお願いします。授業と直接関連しない意見は控えてください。
特に、教員個人への誹謗中傷や差別的な記述は絶対にしないでください。

アンケートは以上です。最後に右下の「回答」ボタンをクリックしてください。

なお、回答期間中は修正して再提出が可能です。

ご協力ありがとうございました。

回答

参考資料 4. 玉川大学 FD 委員会規程

(平成 15 年 4 月 1 日 制定)

(平成 21 年 4 月 1 日 改正)

(平成 31 年 4 月 1 日 改正)

(目的)

第 1 条 玉川大学（以下「本大学」という。）教員の教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的として、大学 F D（ファカルティ・ディベロップメント）（以下「F D」という。）委員会（以下「本委員会」という。）を置く。

(組織)

第 2 条 本委員会は、委員長、委員、事務担当をもって構成する。

- 2 前項の委員長は教学部長とする。
- 3 委員は、各学部の F D 担当があたる。
- 4 委員等は、毎年度当初、学長がこれを委嘱する。
- 5 委員長が必要と認めたときは副委員長を置くことができる。
- 6 本委員会には学部ごとの分科会を設けることができる。
- 7 前項による分科会のまとめ役及び委員は学部長が選任する。

(任期)

第 3 条 委員の任期は 1 か年とする。ただし、再任を妨げない。

(運営)

第 4 条 本委員会は、委員長が招集・開会し、議長となる。

- 2 委員長が必要と認めた場合は、委員以外の教職員の出席を求め、意見を聴取することができる。

(審議事項)

第 5 条 本委員会は、次の事項を審議する。

- (1) 教育研究活動改善の方策に関する事項
- (2) 初任者及び現任者の研修計画の立案・実施に関する事項
- (3) 学生による授業評価の実施、結果分析及びフィードバックに関する事項
- (4) F D に関する教員への各種コンサルティングに関する事項
- (5) 教員の F D 活動の指針に関する冊子及び F D 活動報告書の刊行
- (6) 部会からの報告・審議に関する事項
- (7) その他 F D に関連する事項

(分科会)

第 6 条 各分科会は、F D 担当が取りまとめ、本委員会に検討・実施事項を報告しなければならない。

2 各分科会にはFD活動を円滑に進めるため、FDer（ファカルティ・ディベロッパー）（以下、「FDer」）を置く。FDerはFD担当が兼ねることができる。
（答申）

第7条 委員長は、本委員会の審議結果を学長に答申しなければならない。
（実施事項の決定）

第8条 前条の答申内容の実施については、大学部長会の議を経て学長が決定する。
（実施事項の運用）

第9条 前条により決定した実施事項に関する実際の運用に関しては、教務委員会及び教育研究活動等点検調査委員会との調整を図りながら検討、実施するものとする。
（事務主管）

第10条 本委員会に係る事務主管は、教学部が行う。

附 則
この規程は、平成 15 年 4 月 1 日から施行する。

附 則
この規程は、平成 21 年 4 月 1 日から施行する。

附 則
この規程は、平成 31 年 4 月 1 日から施行する。

参考資料 5. 玉川大学大学院 FD 委員会規程

(平成 19 年 4 月 1 日 制定)

(平成 29 年 4 月 1 日 改正)

(令和 4 年 4 月 1 日 改正)

(目的)

第 1 条 玉川大学大学院（以下「本大学院」という。）教員の研究教育活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的として大学院 F D（ファカルティ・ディベロップメント）（以下「F D」という。）委員会（以下「本委員会」という。）を置く。

(組織)

第 2 条 本委員会は、委員長、委員、事務担当をもって構成する。

2 前項の委員長は教学部長とする。

3 委員は、各研究科の F D 担当があたる。

4 委員は、毎年度当初、学長がこれを委嘱する。

5 委員長が必要と認めたときは副委員長を置くことができる。

6 本委員会には研究科（専門職学位課程は専攻）ごとの分科会を設けることができる。

7 前項による分科会のまとめ役及び委員は研究科長（教職大学院科長含む）が選任する。

(任期)

第 3 条 委員の任期は 1 か年とする。ただし、再任を妨げない。

(運営)

第 4 条 本委員会は、委員長が招集・開会し、議長となる。

2 委員長が必要と認めた場合は、委員以外の教職員の出席を求め、意見を聴取することができる。

(審議事項)

第 5 条 本委員会は、次の事項を審議する。

(1) 教育研究活動改善の方策に関する事項

(2) 初任者及び現任者の研修計画の立案・実施に関する事項

(3) 学生による授業評価の実施、結果分析及びフィードバックに関する事項

(4) F D に関する教員への各種コンサルティングに関する事項

(5) 教員の F D 活動の指針に関する冊子及び F D 活動報告書の刊行

(6) 分科会からの報告・審議に関する事項

(7) その他 F D に関連する事項

(分科会)

第 6 条 各分科会は、本委員会に検討・実施事項を報告しなければならない。

(答申)

第 7 条 委員長は、本委員会の審議結果を学長に答申しなければならない。

(実施事項の決定)

第8条 前条の答申内容の実施については、大学院研究科長会の議を経て学長が決定する。

（実施事項の運用）

第9条 前条により決定した実施事項に関する実際の運用に関しては、研究科会及び教育研究活動等点検調査委員会との調整を図りながら検討、実施するものとする。

（事務主管）

第10条 本委員会に係る事務主管は、教学部が行う。

附 則

この規程は、平成19年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成29年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、令和4年4月1日から施行する。

令和 7 年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書

玉川大学 大学 FD 委員会・大学院 FD 委員会

令和 8 年 6 月 発行

〒194-8610 東京都町田市玉川学園 6-1-1